松江市文化財調査報告書　第99集

田和山遺跡群発掘調査報告 2

A・B 遺跡

平成17(2005)年3月

松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第99集

田和山遺跡群発掘調査報告2

A・B遺跡

平成17(2005)年3月

松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人松江市教育文化振興事業団

目　　次

第１章　発掘調査の概要 ……（瀬古）　1

１．本書の内容 …… 1

２．調査区の設定と調査経過 …… 1

第２章　B遺跡の調査 ……（瀬古・落合）　5

１．検出した遺構 …… 5

２．遺構外の出土遺物 …… 13

３．小結 …… 14

第３章　A遺跡の調査 ……（瀬古・廣濱・落合）　19

１．谷部北斜面の遺構と出土遺物 …… 20

２．自然流水路の調査 …… 50

３．北側尾根上の遺構 …… 84

４．小結 …… 85

第４章　W区の調査 ……（瀬古・廣濱・落合）　87

第５章　まとめ ……（落合）　91

挿　図　目　次

第１図　田和山遺跡群全体図（調査区配置図）…２
第２図　A遺跡・B遺跡・W区　遺構分布図 ……３
第３図　B遺跡　遺構分布図 ……４
第４図　SB－31　平面図・断面図 ……５
第５図　SB－32・33　平面図・断面図 ……６
第６図　SB－31・32・33　出土土器 ……７
第７図　加工段２・SD－01・SB－35
　　平面図・断面図……８
第８図　加工段２・SD－01・SB－35
　　出土土器……９
第９図　SB－34
　　平面図・断面図・土層断面図……10
第10図　SB－34－１　出土土器 ……11
第11図　SB－36・37　出土土器 ……11
第12図　SB－36　平面図・断面図 ……12
第13図　SB－37
　　平面図・断面図・土層断面図……13
第14図　加工段３　出土土器……14
第15図　B遺跡　遺構外出土遺物（１）……15
第16図　B遺跡　遺構外出土遺物（２）……16
第17図　B遺跡　遺構外出土遺物（３）……17
第18図　A遺跡　遺構分布図……18
第19図　SK－02・03　平面図・土層断面図 ……19
第20図　SB－38－１・38－２・39・SK－04
　　西側ピット列　平面図・断面図……20
第21図　SB－38－１・38－２・39・SK－04
　　平面図・断面図・土層断面図……21
第22図　SB－38－１　出土土器 ……22
第23図　SB－40－１・40－２・SD－02
　　平面図・断面図……22
第24図　SB－40－１　出土土器 ……23
第25図　SD－02　出土土器 ……23
第26図　SB－41　平面図・断面図・土層断面図　24
第27図　SB－42・43　平面図・断面図 ……25
第28図　SB－44－１・44－２　平面図・断面図　26
第29図　SB－45・46
　　平面図・断面図・土層断面図……27
第30図　SB－45　出土土器 ……28
第31図　SB－46（SK01）出土土器 ……28
第32図　SB－47～51・焼土坑１・２　平面図 …29
第33図　SB－47～51　断面図・土層断面図 ……30
第34図　SB－47・48　出土土器 ……31
第35図　SB－50・51・北側斜面　出土遺物 ……32
第36図　焼土坑付近～下側斜面　出土遺物……33
第37図　SB－52　平面図・断面図 ……34
第38図　SI－14（玉作工房跡）平面図・断面図…36
第39図　SI－14　遺物出土状況図……37
第40図　SI－14・SK－01　遺物出土状況図 ……38
第41図　SI－14　出土土器……39
第42図　SI－14　出土石器・玉製品・未製品……40
第43図　SD－03・04　平面図・土層断面図 ……41
第44図　土器溜り１　出土土器……43
第45図　土器溜り２　出土土器……43
第46図　SB－53・54
　　平面図・断面図・土層断面図……44
第47図　SB－53　出土土器・鉄製品 ……45
第48図　SB－55－２　出土土器・石器 ……45
第49図　SB－55－１・55－２
　　平面図・断面図・土層断面図……46
第50図　SB－56　平面図・断面図・土層断面図　47
第52図　溝状遺構　土層断面図……48
第51図　SB－56　出土土器 ……48
第53図　溝状遺構　出土遺物……49
第54図　自然流水路２南側緩斜面・自然流水路１
　　土層断面図……50
第55図　自然流水路２南側緩斜面　出土石器……51
第56図　自然流水路２南側緩斜面　出土土器……52
第57図　自然流水路１（12～23層）出土土器……54
第58図　自然流水路１（24～28層）
　　出土土器（１）……55
第59図　自然流水路１（24～28層）
　　出土遺物（２）……56
第60図　自然流水路１（谷底部）出土土器（１）…57
第61図　自然流水路１（谷底部）出土土器（２）…58

第62図　自然流水路１（谷底部）出土土器（３）…59
第63図　自然流水路１（谷底部）出土土器（４）…60
第64図　自然流水路１（谷底部）出土土器（５）…61
第65図　自然流水路１（谷底部）出土土器（６）…62
第66図　自然流水路１（谷底部）出土土器（７）…63
第67図　自然流水路１（谷底部）
出土土製品（８）……63
第68図　自然流水路１（谷底部）出土土器（９）…65
第69図　自然流水路１（谷底部）出土土器（10）…66
第70図　自然流水路１（谷底部）出土土器（11）…67
第71図　自然流水路１（谷底部）出土土器（12）…68
第72図　自然流水路１（谷底部）出土土器（13）…68
第73図　自然流水路１（谷底部）出土石器（１）…69
第74図　自然流水路１（谷底部）出土石器（２）…71
第75図　自然流水路１（谷底部）出土鉄製品……71
第76図　自然流水路１（谷底部）
出土瑪瑙製勾玉未製品……73
第77図　自然流水路１（谷底部）
出土瑪瑙製石核・剥片・原石……74
第78図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製管玉未製品（１）……74
第79図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製管玉未製品（２）……75
第80図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製勾玉未製品（１）……76
第81図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製勾玉未製品（２）……77
第82図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製勾玉未製品（３）……78
第83図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製平玉未製品……79
第84図　自然流水路１（谷底部）
出土碧玉製平玉未製品・原石……80
第85図　自然流水路１（谷底部）
出土水晶製平玉未製品……81
第86図　自然流水路１（谷底部）
出土水晶製勾玉未製品……81
第87図　自然流水路１（谷底部）
出土水晶製石核・原石……82
第88図　自然流水路１（谷底部）
出土水晶製叩き石……82
第89図　自然流水路１（谷底部）出土玉砥石……83
第90図　石棺墓　平面図・土層断面図……84
第91図　W区　遺構分布図……88
第92図　SB－57・58　出土土器……89
第93図　SB－60　平面図・断面図……89
第94図　SB－60　出土土器……90

図　版　目　次

図版１　田和山遺跡群全景（南東上空より）
A・B遺跡調査前全景（遠景・東より）
図版２　B遺跡調査前北西側斜面
北側斜面調査後
南側斜面調査後
図版３　SB－31（南より）
SB－32（北より）
SB－33（南西より）
図版４　SD－01（南西より）
SB－35（東より）
SB－34（西より）
図版５　SB－36（東より）
SB－37（北西より）
加工段３（東より）
図版６　A遺跡調査前（西より）
A遺跡調査後（南より）
図版７　北側斜面調査後
SK－02完掘後（東より）
SK－03土層断面（南西より）
図版８　SB－38－１（南より）
SB－38－２（南西より）
SB－39（西より）
図版９　SB－38・39西側柱穴列（南より）
SB－40－１・40－２（西より）
SB－41（南西より）
図版10　SB－43（西より）
SB－44（東より）
SB－45・46（南西より）
図版11　SB－47～51（南西より）
SB－47～51（北東より）
図版12　南側斜面全景（北より）※平成14年度
流水路南側斜面平坦面（北東より）
SD－52（西より）
図版13　A遺跡南側斜面調査後（北西より）
※平成９年度
A遺跡SI－14調査後（北より）
図版14　SD－03（南西より）
SD－04（北東より）
土器溜り１（東より）
図版15　土器溜り２（北より）
SB－53（東より）
SB－54（東より）
図版16　SB－55－１・55－２（東より）
東側斜面平坦面調査前（北より）
東側斜面平坦面調査後（北東より）
図版17　溝状遺構（北東より）
溝状遺構土層断面（北西より）
自然流水路１・２（東より）
図版18　自然流水路１（東より）
自然流水路２（東より）
自然流水路１土層断面（東より）
図版19　自然流水路２南側平坦面土層断面
（北東より）
自然流水路１下部遺物出土状況（東より）
石棺墓（西より）
図版20　W区調査前全景（北より）
SB－57・58・59（北西より）
SB－60・SK－05（北より）

第１章　発掘調査の概要

１．本書の内容

本書は、田和山遺跡群のうち国指定史跡田和山遺跡を除くA遺跡・B遺跡・W区について発掘調査の概要を報告するものである。

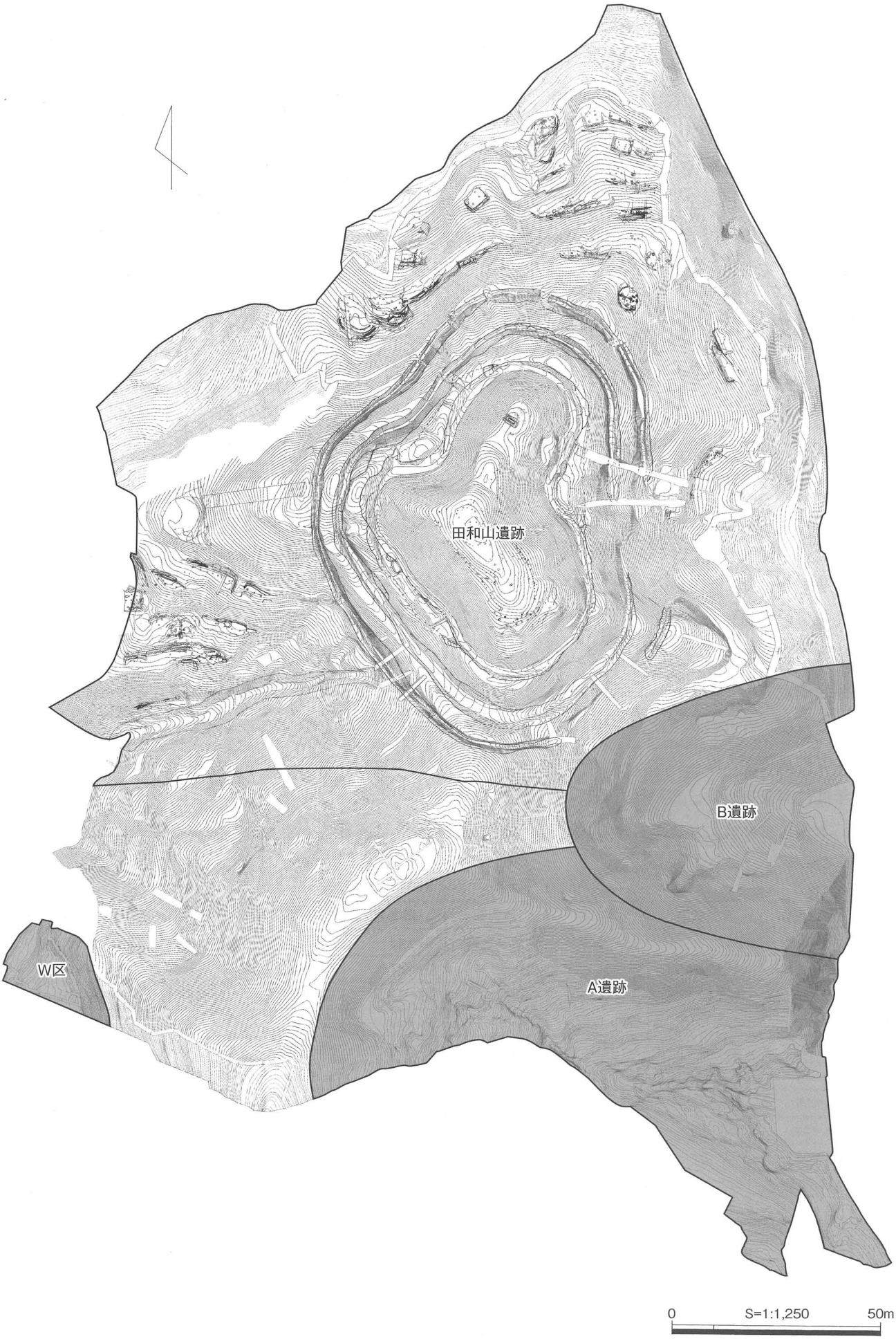
２．調査区の設定と調査経過

A遺跡は、田和山山頂部から環壕を隔てて、南に連なる丘陵上より東に派生した支尾根の南側の谷部に所在し、B遺跡は北側の谷部に所在する。現況はいずれも山林であった。A遺跡は、住居跡推定地として平成９年10月より谷底部から南側緩斜面を調査し、古墳時代中期の玉作工房跡と、古墳時代～中世にかけての遺物包含層を検出した。B遺跡は11月より調査を開始し、谷底部から西斜面にかけて、古墳時代中期の建物跡や加工段と平安時代後期頃のピットを伴う加工段を検出し、弥生時代以降の各種の遺物が出土した。両遺跡とも平成10年の８月に調査は一旦終了したが、田和山遺跡群の様相が明らかになるとともに調査範囲も拡大し、平成12年にはA遺跡北斜面上部、B遺跡斜面上部全域が調査対象となった。B遺跡では、やはり古墳時代中期～平安時代後期頃の加工段や建物跡を検出した。この年度ですべての調査を終了したが、A遺跡ではこれ以後平成14年度まで、開発予定範囲との兼ね合いで断続的に追加調査が行われた。検出した遺構は古墳時代中・後期～近世に及び、谷部自然流水路を中心に、弥生時代前期～平安時代後期までの土器類、石器、玉作関係などの遺物が大量に出土した。W区は南丘陵西斜面の下部に位置し、現況は畑地であった。平成13年度に調査を行い、古墳時代後期の建物跡や遺物を検出した。

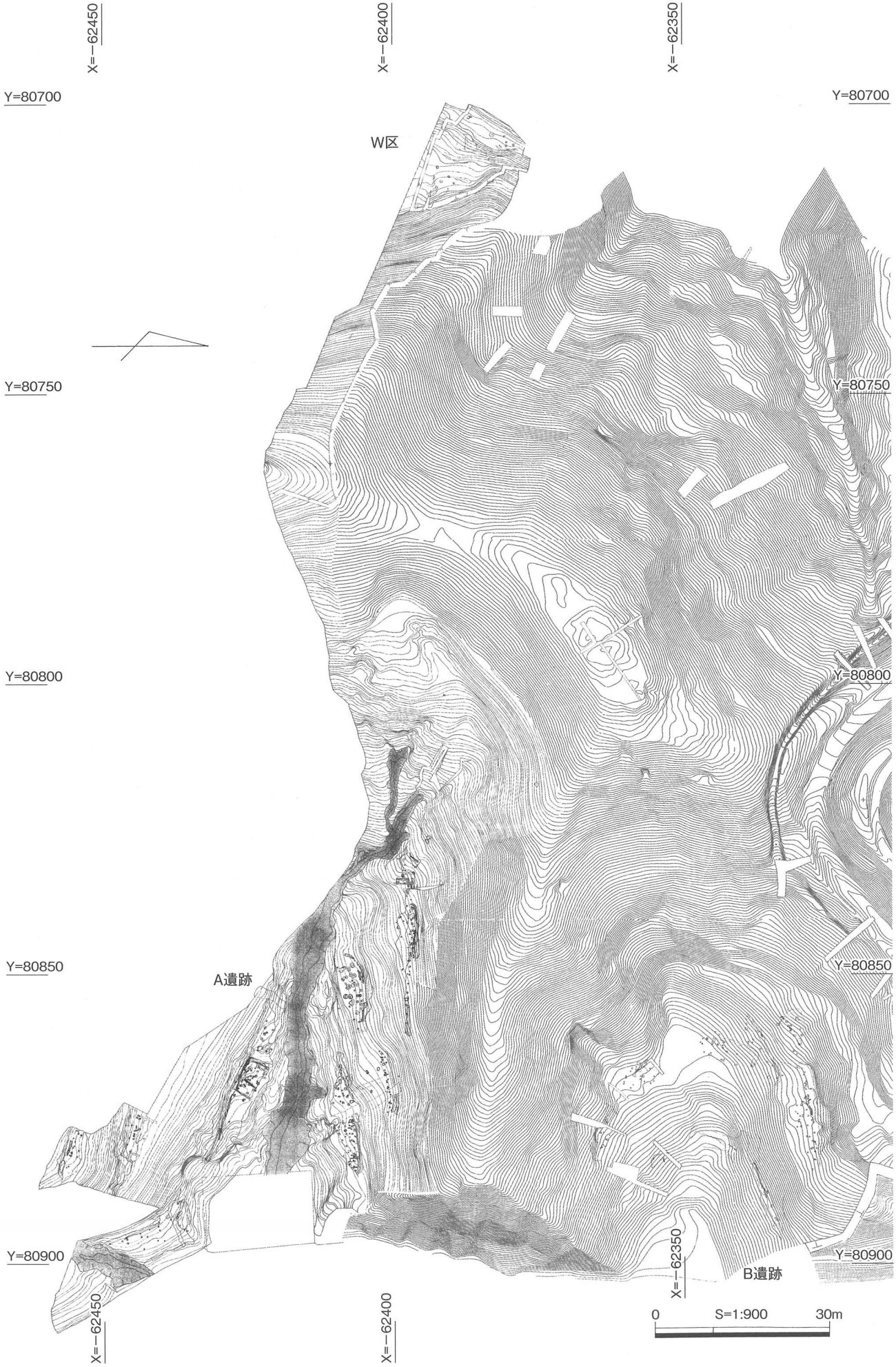
本報告書作成にあたり、概要報告他で使用した遺構名称を変更したため、対照表を次に示す。

A遺跡・B遺跡・W区新旧遺構名対照表

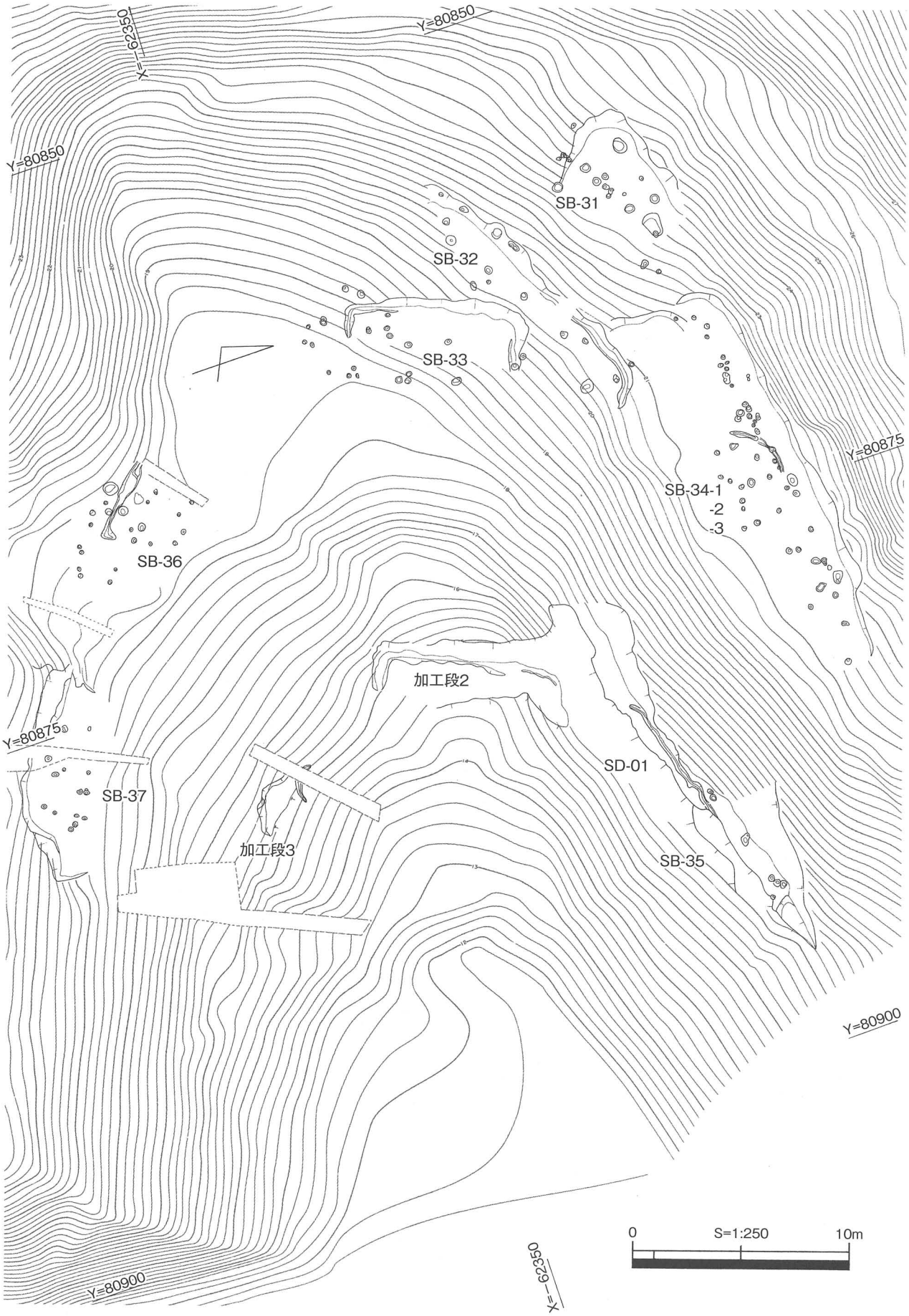
新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称
B遺跡		SK－03	こ炭焼き跡	SB－44	SB－30	SB－54	建物跡３
SB－31	加工段１	SB－38－１	SB－40	SB－47	SB－32	SB－55－１	建物跡４
SB－32	加工段２	SB－38－２	SB－39	SB－48	SB－31	SB－55－２	建物跡５
SB－33	加工段３	SB－39	SB－37	SB－49	SB－29	SB－56	建物跡６
加工段２	加工段４	SK－04	SK－02	SB－50	SB－28	W区	
SD－01	加工段５	SD－02	SD－01	SB－51	SB－26	SB－57	W－SB－01
SB－35	加工段６	SB－40－１	SB－24	焼土坑１	焼土跡１	SB－58	W－SB－02
SB－34	SB－22	SB－40－２	SB－33	焼土坑２	焼土跡２	SB－59	W－SB－03
SB－36	SB－23	SB－41	SB－34	SB－52	建物跡１	SB－60	W－SB－04
加工段３	M３下加工段	SB－42	SB－36	SI－14	玉作工房跡	加工段４	テラス状遺構
SB－37	SB－27	SB－43	SB－35	SD－03	SD－01	SK－05	SK－01
A遺跡		SB－45	SB－25	SD－04	SD－02		
SK－02	SK－01	SB－46	SB－38	SB－53	建物跡２		



第１図　田和山遺跡群全体図（調査区配置図）



第２図　A遺跡・B遺跡・W区　遺構分布図



第３図　B遺跡　遺構分布図

第２章　B遺跡の調査

B遺跡は、田和山遺跡から南東に下る谷の北・西・南斜面と谷底部に所在する。地滑りや水穴の痕跡が見られる崩壊の激しい谷で、遺構の多くは谷側が流失しており残存状況は決して良いと言えなかったが、古墳時代中期・後期・平安時代後期のピットを伴う加工段や掘立柱建物跡、ピットがない加工段などの遺構を検出し、弥生時代～平安時代にかけての遺物が多量に出土した。

１．検出した遺構（第３図）

SB－31（第４図）

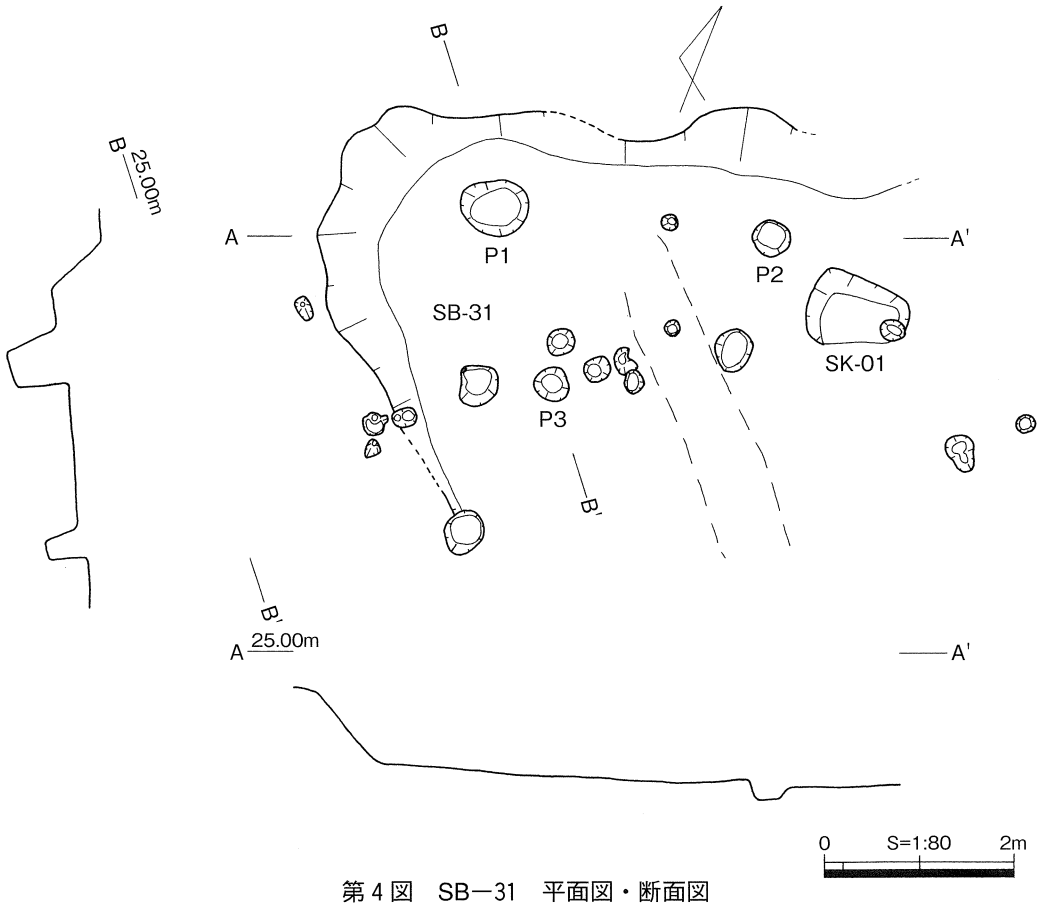
位置・形態・規模　西斜面上部の標高24m付近に位置し、６×４ｍの範囲が段状に加工されている。床面は流失して傾斜し、上下で50cmの比高差がある。壁最大高は80cmを測る。

基盤・覆土　加工段は西半部が褐色土の地山、東半部が黄白色の岩盤を基盤に作られ、覆土は暗褐色土であった。

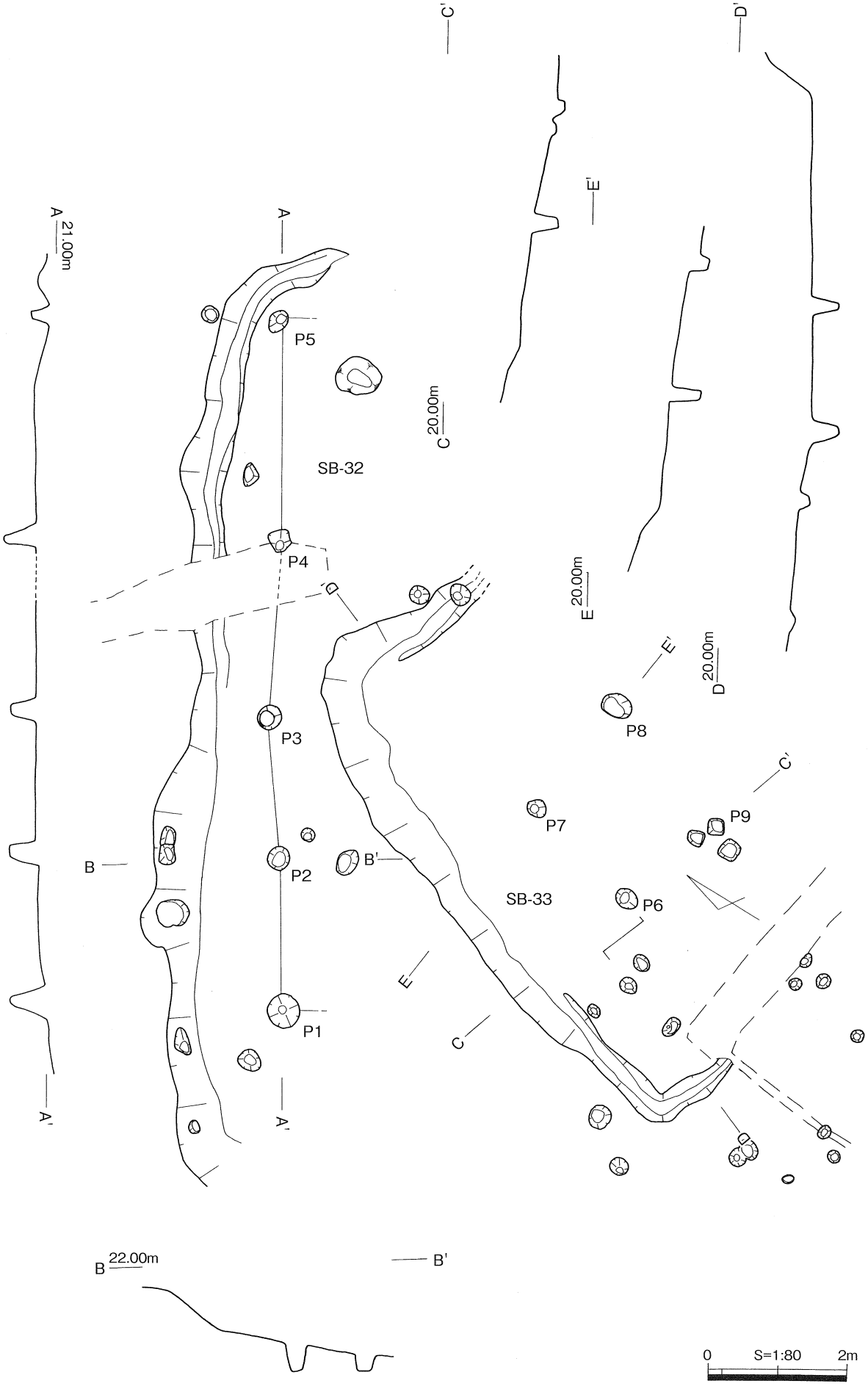
床面の遺構　ピット11穴と土坑（SK01）を検出した。ピットは規模・位置関係とも不揃いなものである。SK01は96×60×20cm大の長方形土坑で、埋土中から土師器の甕１が出土した。

出土遺物（第６図）　１は土師器の甕で口縁部は強く外反し、外面に炭化物が一面に付着している。

時期　出土した土師器の形態や焼成の特徴から、平安時代後期頃と考えられる。



第４図　SB－31　平面図・断面図



第５図　SB－32・33　平面図・断面図

SB－32（第５・６図）

位置・形態・規模　西斜面の標高21m付近に位置する。長さ12m以上が段状に加工され、幅２mが残存しており、床面は流れて傾斜している。床面から検出したピット８穴のうちP１～５の４間が桁行の柱だった可能性があるが、梁間のピットは残っていなかったため正確な規模は不明である。

基盤・覆土　褐色土の地山とSB－33埋土の茶褐色土を基盤にしている。覆土は炭と土器片混じりの暗褐色土で、同層から土師器小片２・３が出土した。２は退化した二重口縁の甕である。

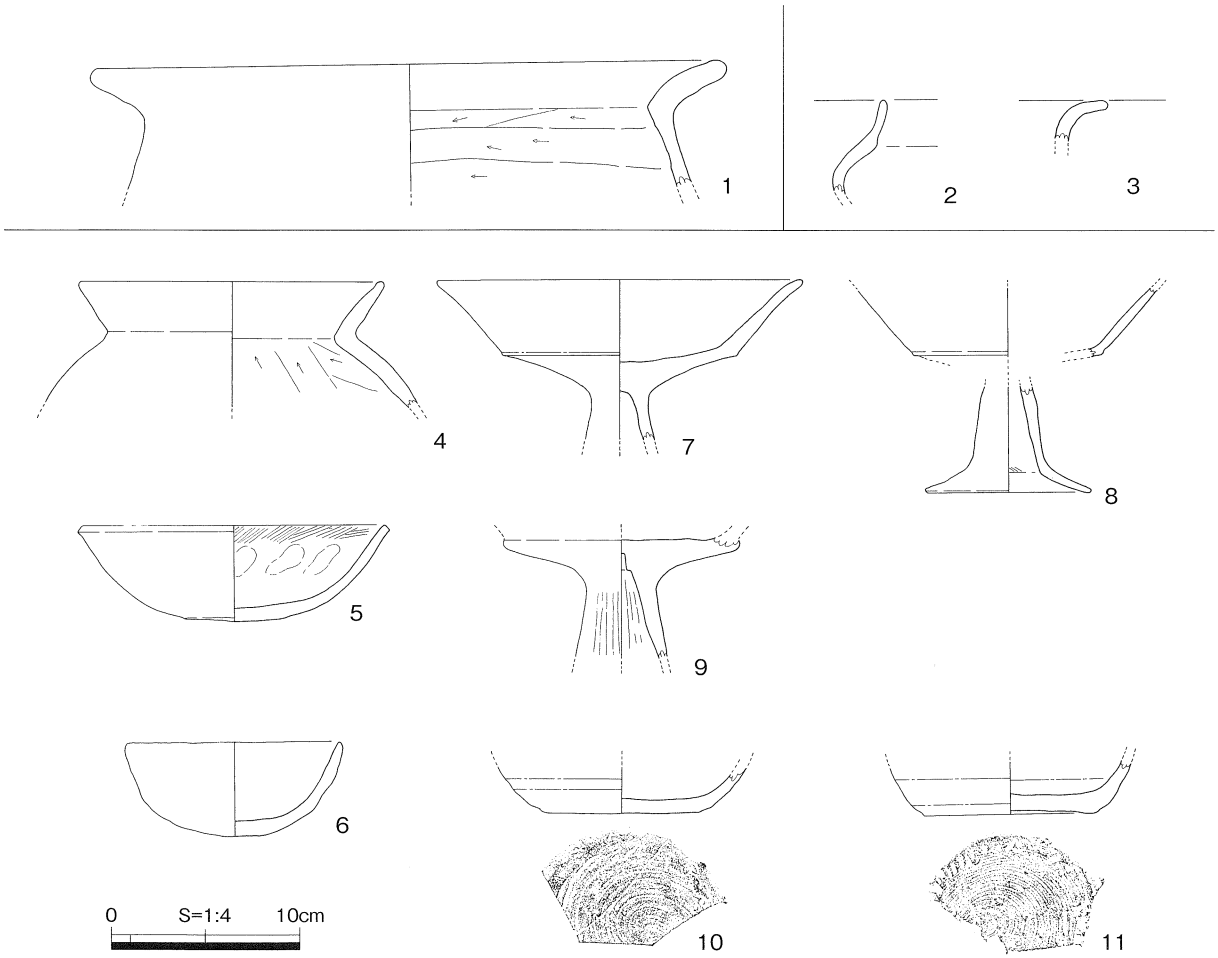
時期　床面出土遺物がなく時期不明であるが、SB－33より後の造成である。

SB－33（第５図）

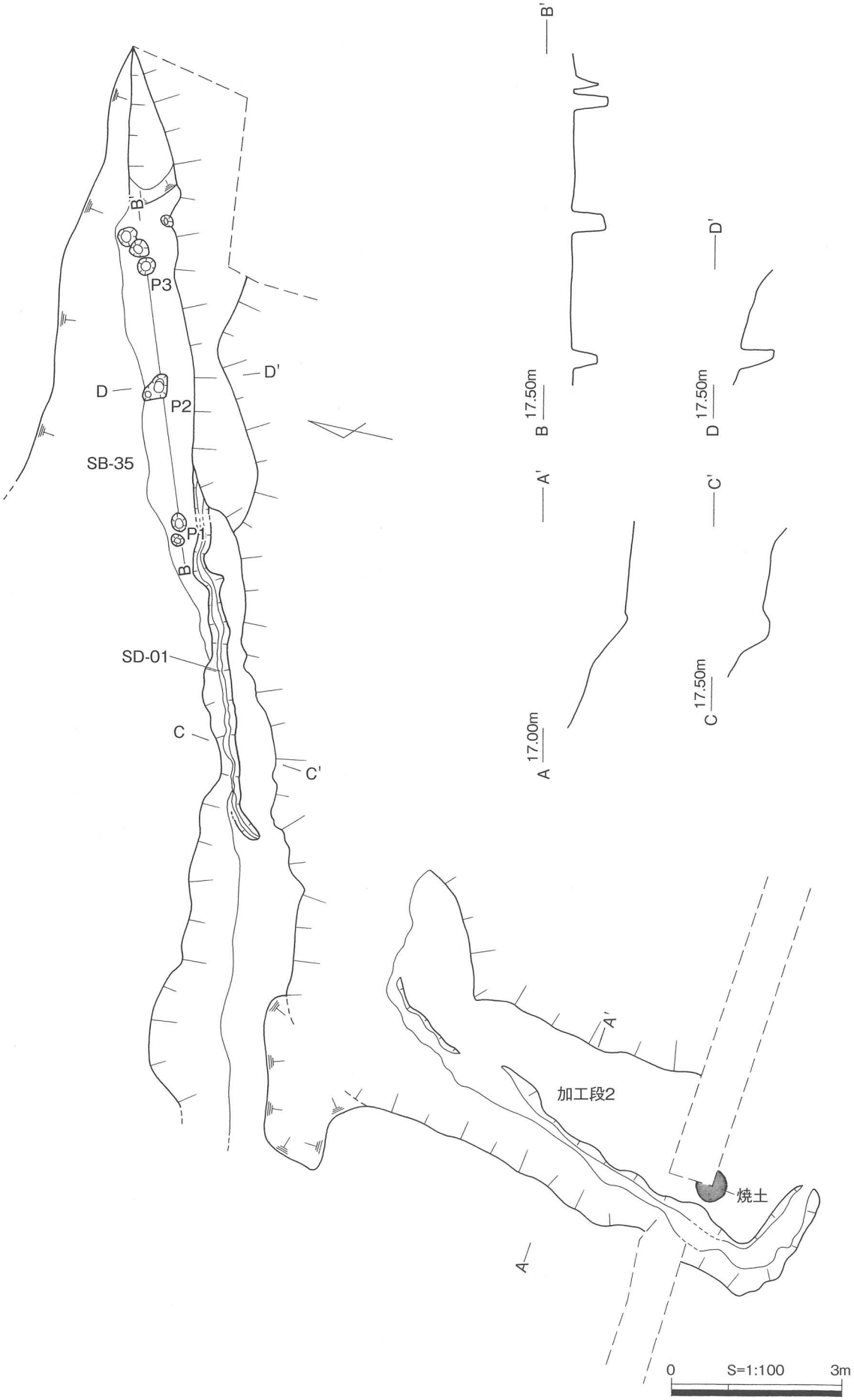
位置　西斜面SB－32の下方、標高20m付近に位置する。

形態・規模　南北長8.4m、東西幅１m前後の範囲が段状に加工され、壁最大高は70cmである。南西隅部付近の壁下と北壁下に幅30cm前後、深さ約５cmの壁体溝が見られる。床面は若干の傾斜はあるものの、おおむね東西４mが残存する。床面で検出した10穴のピットのうち、P６～９はしっかりしたピットで底面のレベルもほぼ一定であり、この４本で建物になるかもしれない。南北の規模が大きいのが気になるが、竪穴住居の可能性も捨て切れない。

遺物出土状況と出土遺物（第６図）　床面より土師器の高坏７、壁体溝上より甕４、埋土中より坏５・６、高坏８・９が出土している。高坏はすべて有段のもの、甕は口頸部が「く」の字に屈曲し



第６図　SB－31・32・33　出土土器



第７図　加工段２・SD－01・SB－35　平面図・断面図

口縁端部内面が肥厚する。10・11は埋土上層から出土した須恵器の坏で、後代の混入物である。

時期　出土遺物から松山Ⅱ期[1]（古墳時代中期）と考えられる。

加工段２（第７図）

位置・形態・規模　谷底中部の標高15.5m付近に位置する。南北長10m、東西幅2.5mの加工段である。西北隅は水穴により撹乱を受けている。壁高は65cm、壁下に一部を除き幅20～50cm、深さ５cm前後の壁体溝が廻る。床面にピットは見られなかった。南西隅部寄りで径70cm大の焼土が検出された。

遺物出土状況と出土遺物（第８図）　南西隅部の壁体溝埋土上で、土師器の甕12や高坏15、焼土付近で甕13、小型丸底壺14、高坏16などが出土している。甕は二重口縁の退化したもの、高坏は有段のものである。

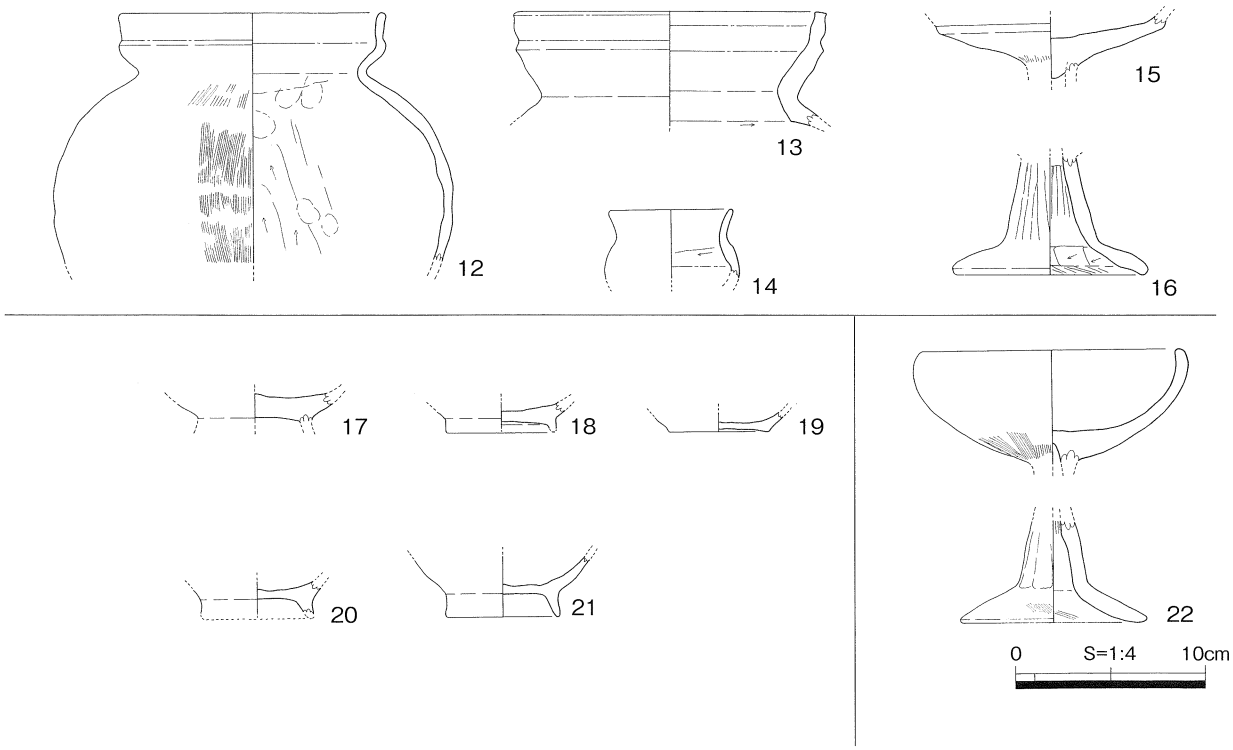
時期　出土遺物から松山Ⅱ期（古墳時代中期）と考えられる。

SD－01（第７図）

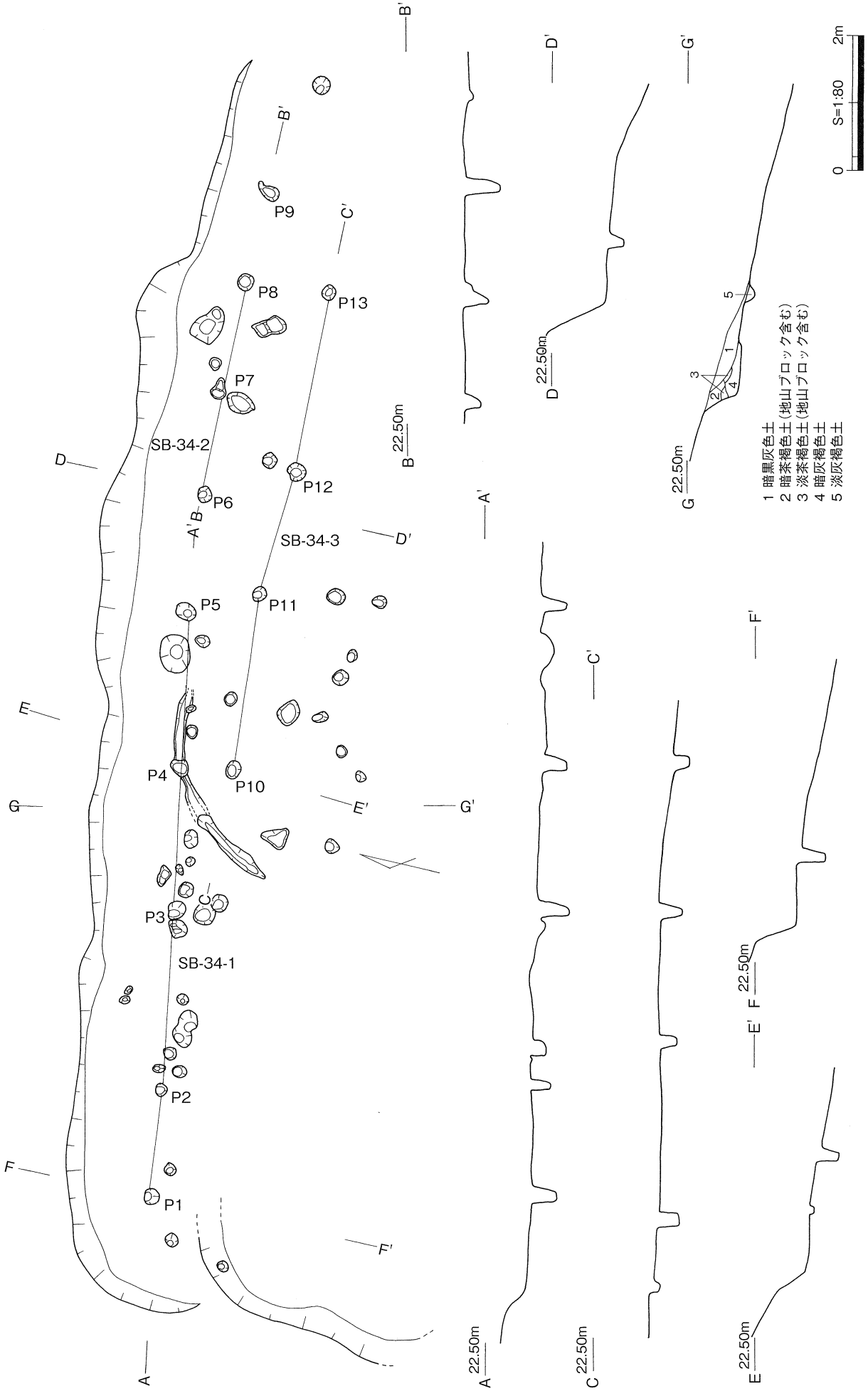
位置・形態・規模　SD－01はSB－35の西端を切って東西に伸びる残存長12m、幅１～２mの加工段上東寄りに掘り込まれた検出長6.5m、幅10～30cm、深さ５cm前後の溝である。溝に囲まれた平坦面は残存幅が狭く、ピット等は見られなかった。

覆土・遺物出土状況　基盤は黄白～橙色の岩盤で、炭を含む暗～黒褐色土が加工段上を覆っていた。遺物は土師質土器17～21が、SD－01上の覆土中に集中して出土した。

出土遺物・時期（第８図）　17・18・20・21は土師質土器の高台付坏で、底径５～６cm大、おおむね直立気味で低めの高台を持つ。19は無高台の坏で底部は回転糸切りがなされている。これらは平

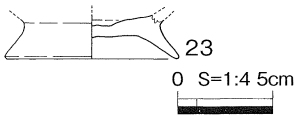


第８図　加工段２・SD－01・SB－35　出土土器



第9図　SB－34　平面図・断面図・土層断面図

安時代後期の10世紀頃のものと考えられる。（八峠1998）[2]



第10図　SB－34－1
出土土器

SB－35（第７図）

位置・形態・規模　北斜面の標高17m付近に位置する東西に長い加工段で、長さ８m、幅１mの平坦面が残存していた。平坦面上には２間分（P１～３）のピットが見られ、建替えがあった模様であるが、谷側は流失し建物の詳細は不明である。

出土遺物・時期（第８図）　平坦面から出土した土師器の高坏22は、坏部が内湾するタイプのもので松山Ⅲ期に相当することから、古墳時代中期後半（初期須恵器併行期）の遺構と考えられる。

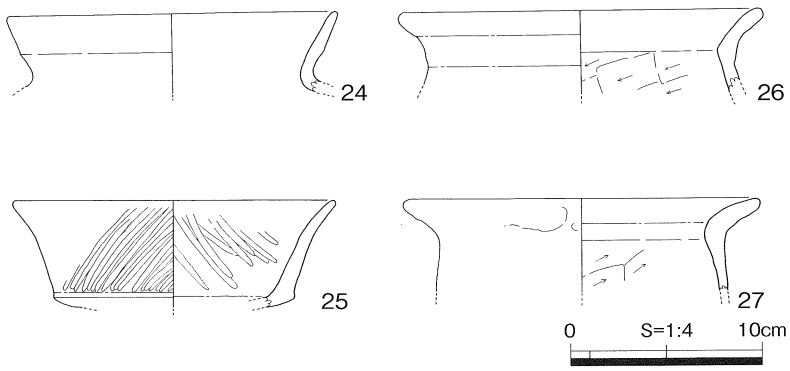
SB－34（第９図）

位置・形態・規模　北斜面上部の標高21.7m付近に位置する。東西長9.3m、南北残存幅３mの段状遺構面にピットを多数検出し、３棟の掘立柱建物跡を想定したが、いずれも山側柱列だけの検出にとどまった。SB－34－１はP１～６の４間、SB－34－２はP６～８の２間ないしはP９までの３間、SB－34－３はP10～13の３間である。SB－34－２のP９は位置的には良いが浅すぎるため、建物の一部とするには問題があるかもしれない。覆土から見た前後関係はG－G'ラインの１層がSB－34－３の覆土、５層がSB－34－３に伴う溝の埋土であり、２～４層がSB－34－１の堆積土であることからSB－34－１が古く、SB－34－３が新しいと言える。SB－34－２は加工段上の配置から見て、SB－34－１と同時期か前後してもSB－34－３までは下らないものと言えよう。

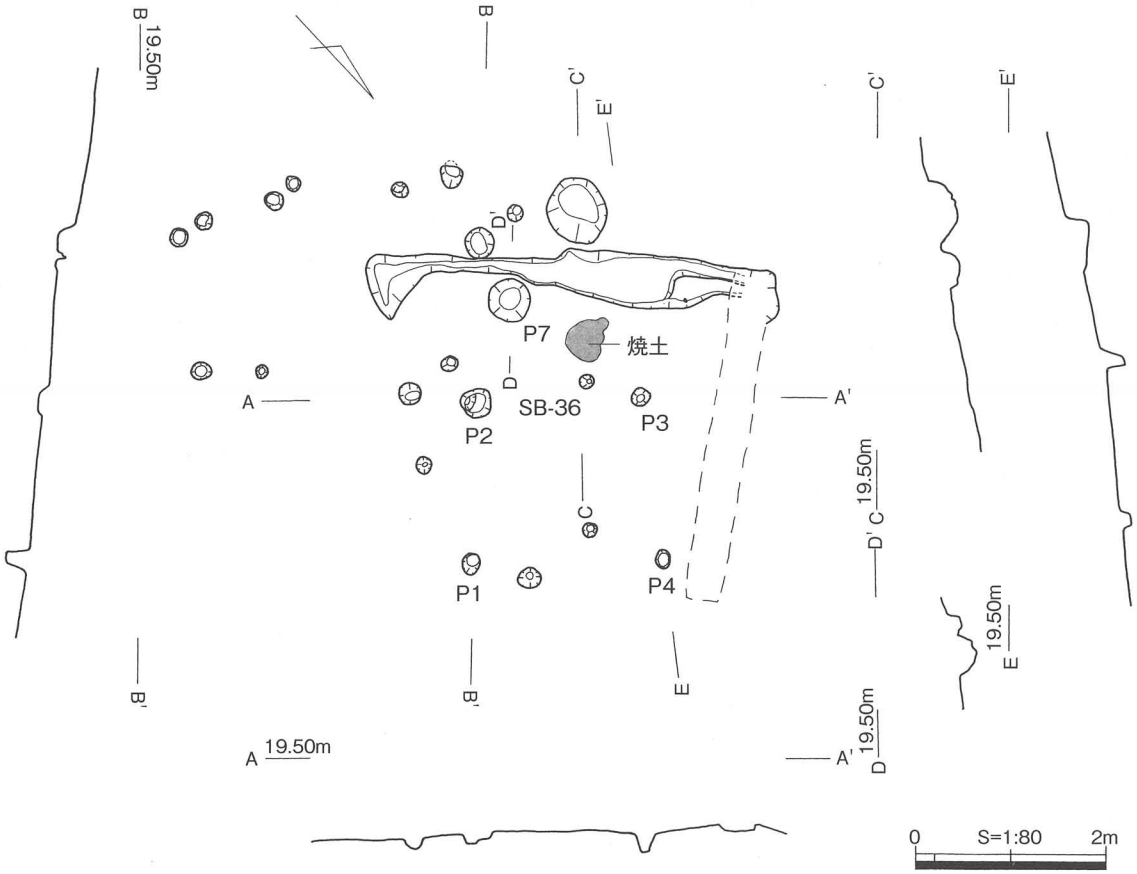
出土遺物・時期（第10図）　SB－34－１のP３付近から土師質土器の底部23が出土した。23は「ハ」の字状に開く脚部（高台）を持つ坏で古代末～中世初頃のものと考えられる（八峠2000）[3]。この建物群もこの時期のものであろう。

SB－36（第12図）

位置・形態・規模　谷部南斜面の標高18.7m付近に位置する。山側に東西長4.6m、南北残存長0.6mの壁体溝が設けられ、その下方に緩傾斜面が４m幅残存する。壁最大高は21cmである。壁体溝より内側に大小11穴のピットと焼土、外側に大小５穴のピットを検出した。建物跡を構成するのはP１～４と推定され、１間×１間の掘立柱建物となるが、溝と焼土の位置も含めて考えると竪穴住



第11図　SB－36・37　出土土器



第12図　SB－36　平面図・断面図

居であった可能性が高い。

出土遺物・時期（第11図）　24は覆土中から出土した二重口縁を痕跡的に残す甕、25は壁体溝の内側肩部から出土した有段の高坏で、口縁部は外反して長く伸びる。これらの土師器が松山Ⅲ期に相当することから、この建物跡は古墳時代中期後半に比定できよう。

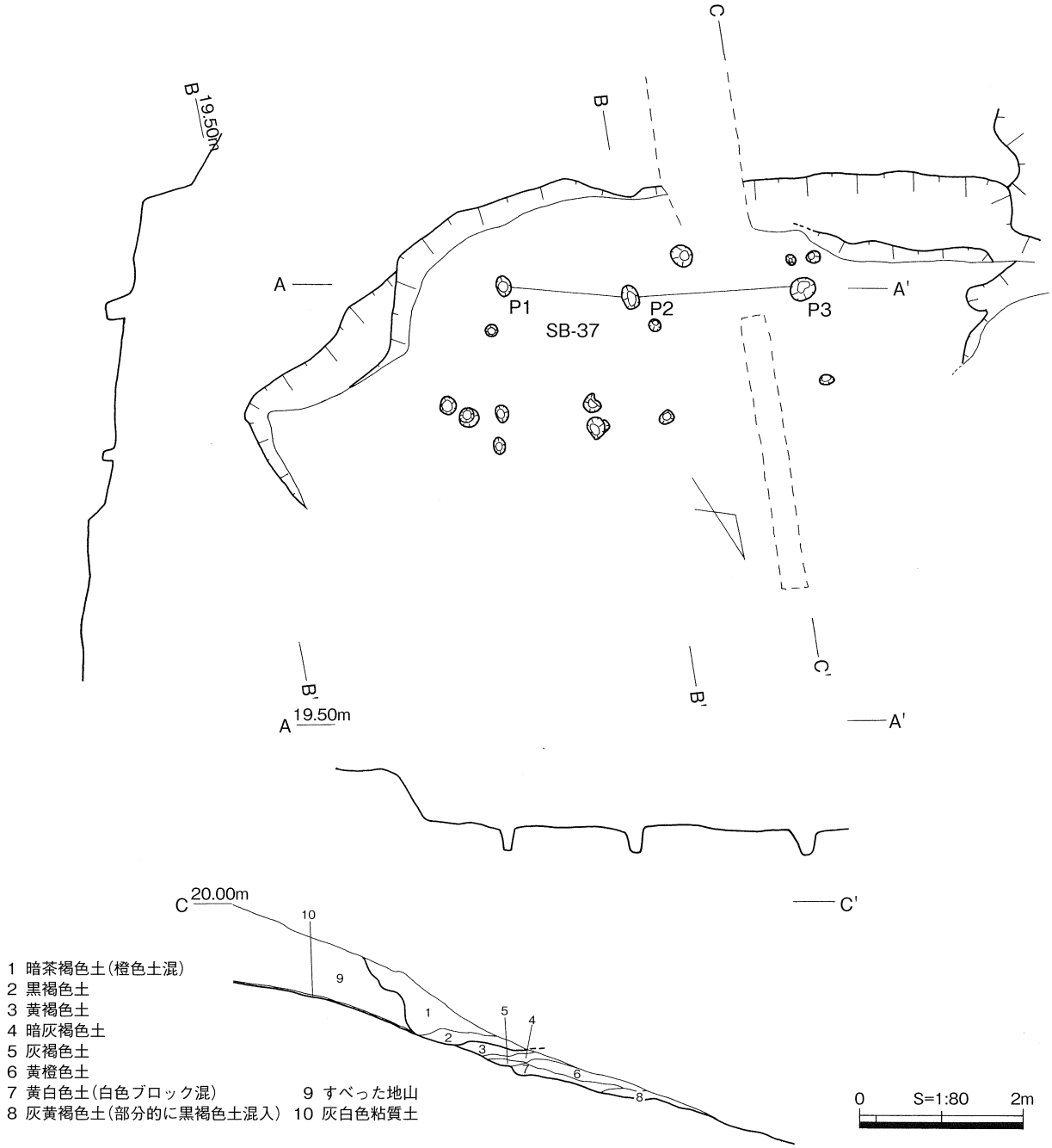
SB－37（第13図）

位置・形態・規模・覆土　南斜面SB－36の東、標高18.5m付近に位置する。東西10mにわたって段状の地形を呈している。その内部の緩斜面黄褐色土上でピットを16穴検出した。P１～３は比較的しっかりしたものであるが、他は根穴の可能性がある。断ち割りトレンチの断面図C－C'によれば、上方に地山の滑り面が観察される。段状地形が人為的な結果によるものとして、１・２層が加工段の覆土とすれば３層以下は地滑り時の堆積層ではないかと思われる。

出土遺物・時期（第11図）　２層黒褐色土中より26の土師器甕や外面平行叩き、内面同心円当具痕を施す須恵器の甕片が出土している。27は加工段周辺からの出土品である。土師器、須恵器ともに古墳時代後期以降に通有のものであり、この加工段もこの頃と考えられる。

加工段３（第３図）

位置・形態・規模　南斜面SB－37下方の標高15m付近に位置する。加工段の南西隅部だけが残っていたものと思われ、東西長2.6m、南北幅1.3m、壁最大高50cmを測る。また残存床面の西端を切る円弧状の溝が見られた。



第13図　SB－37　平面図・断面図・土層断面図

遺物出土状況（第14図）　加工段平坦面上より甑31が、円弧状の溝から須恵器坏身28・29が出土した。

出土遺物・時期（第14図）　28・29の坏身は口縁部の立ち上がりが内傾して比較的高く伸びるもので、体部は浅めである。大谷1994[4] の出雲Ⅳ期に相当する。よってこの加工段は古墳時代後期のものと思われる。

2．遺構外の出土遺物（第15～17図）

谷底部の包含層を中心に弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器などの土器類、分銅形土製品、打製石斧・石鏃・叩き石などの石器類、玉作関係遺物として瑪瑙製勾玉未製品や碧玉・水晶などの素材剥片、古銭（寛永通宝）などが出土している。

弥生土器　谷底東端部の遺物包含層から出土している。包含層は各時代の遺物が混在して出土した。32～36は壺、37～40は底部である。個々の詳細は観察表を参照していただくとして、時期的なものを見ると前期末のⅠ－４様式[5]のものは少なく（32・33）、ほとんどが中期後半のⅢ－２～Ⅳ－１様式のものである。

土師器　大部分が谷底の遺物包含層から出土した。谷底東端部はやや少なく、中央～西端部の出土が多かった。器種は甕41～44、高坏45～47、甑48、小型丸底壺49、手捏ね土器50、竈基底部51・52などが見られる。甕は二重口縁の退化したもの41～43のほか、単純口縁でも胴の張るもの44があり、古墳時代中期を中心としている。

須恵器　古墳時代後期の蓋坏類53～55・57・58、奈良・平安時代の蓋56、坏59～62・64、皿63・65・66、などがあり、時期は限定しづらいが甕片もかなりある。

分銅形土製品　67は谷底東端部の包含層で出土したもので、縁部に刺突列点文が施された小型のものである。

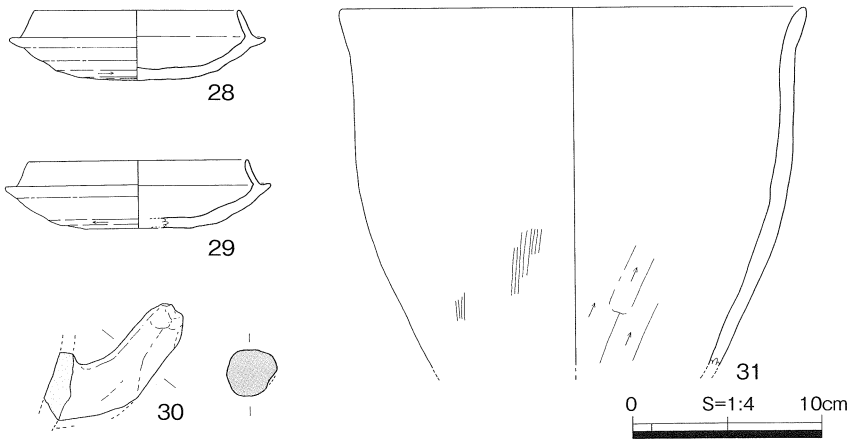
古銭　68は寛永通宝（新寛永）である。

石器　69は頁岩製の打製石斧（石鍬）と思われるもので、刃部を欠損しているが撥形に広がると推定される。70は花崗岩製の磨石で川原石の側面に敲打痕も見られる。71～75は石鏃で76はその未製品である。これらのうち71～73は黒曜石製で凹基式のもの、74は安山岩製で凸基式のもの、75は安山岩製で平基式のものである。出土場所は69・70が谷底中央部、石鏃は谷底東端部から出土している。

玉作関係遺物　77は瑪瑙製の勾玉の調整剥片である。正面・裏面には比較的大きな剥離が見られるが、左側面には小さな剥離が施されて背部に、右側面の中程にも調整が行われて腹部になっている。他に瑪瑙・碧玉・水晶製の勾玉・管玉素材剥片や石核、原石が出土している。

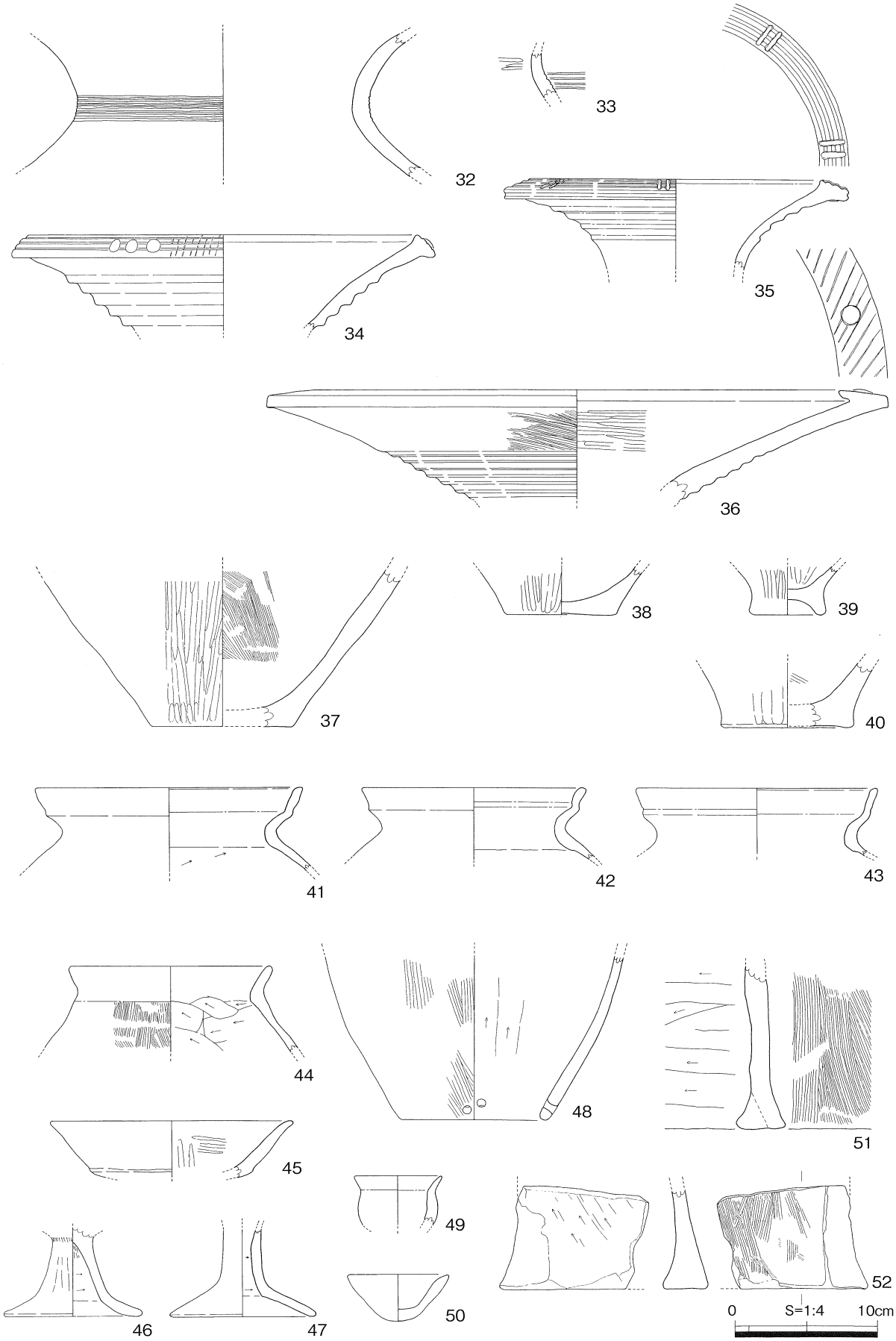
３．小結

検出した遺構は、古墳時代中期の建物跡と加工段４ヶ所（SB－33・加工段２・SB－35・36）、古墳時代後期の段状遺構１ヶ所（加工段３）、古墳時代後期～奈良時代頃のピットを伴う段状遺構１ヶ所（SB－37）、平安時代後期以降のピットを伴う段状遺構３ヶ所（SB－31・SD－01・SB－34）であった。SB－32については床面遺物がなく時期が不確定であるが、土層の切り合いや覆土中の出土土器からSB－33より多少下った時期であろう。

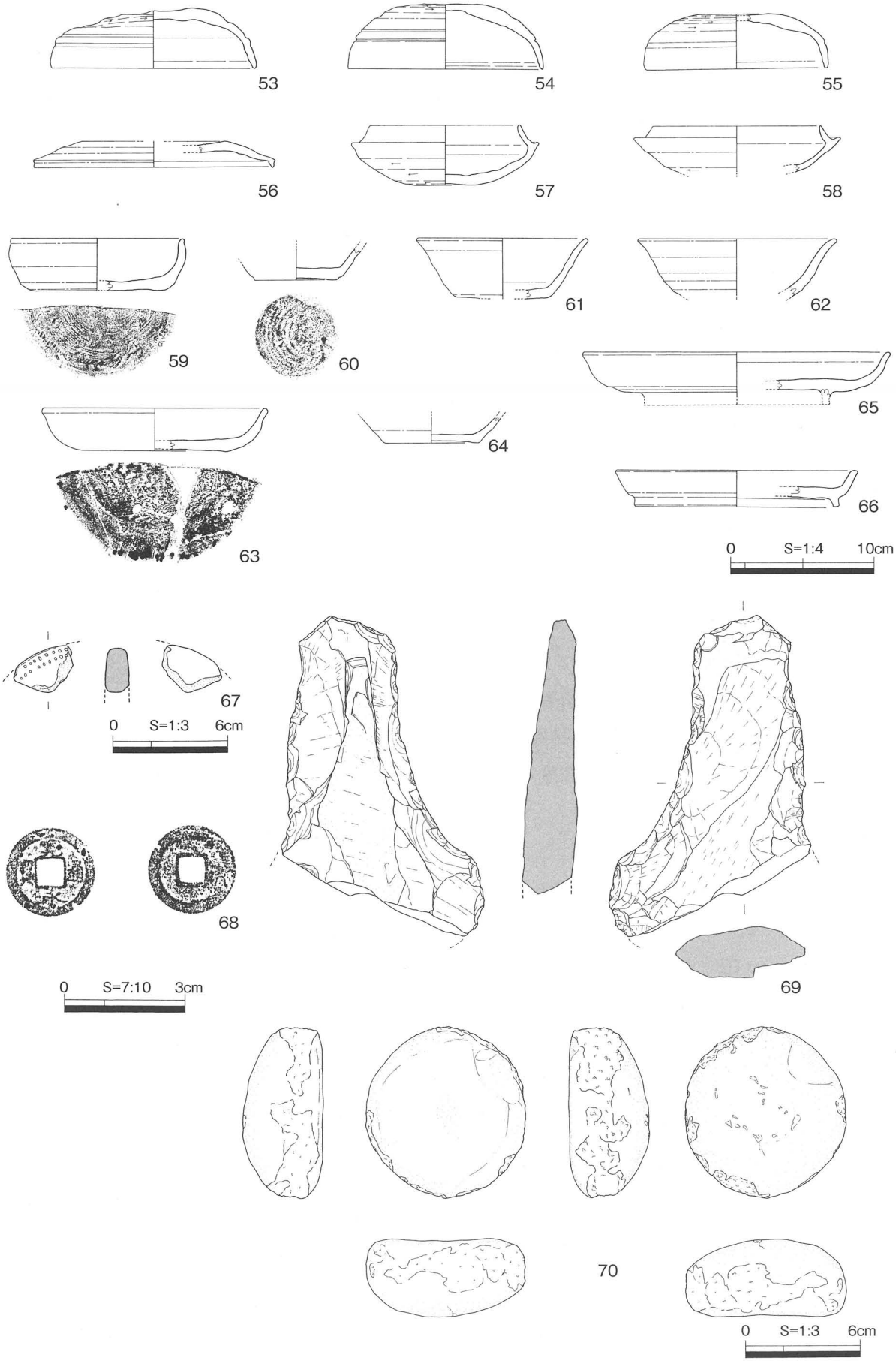


第14図　加工段３　出土土器

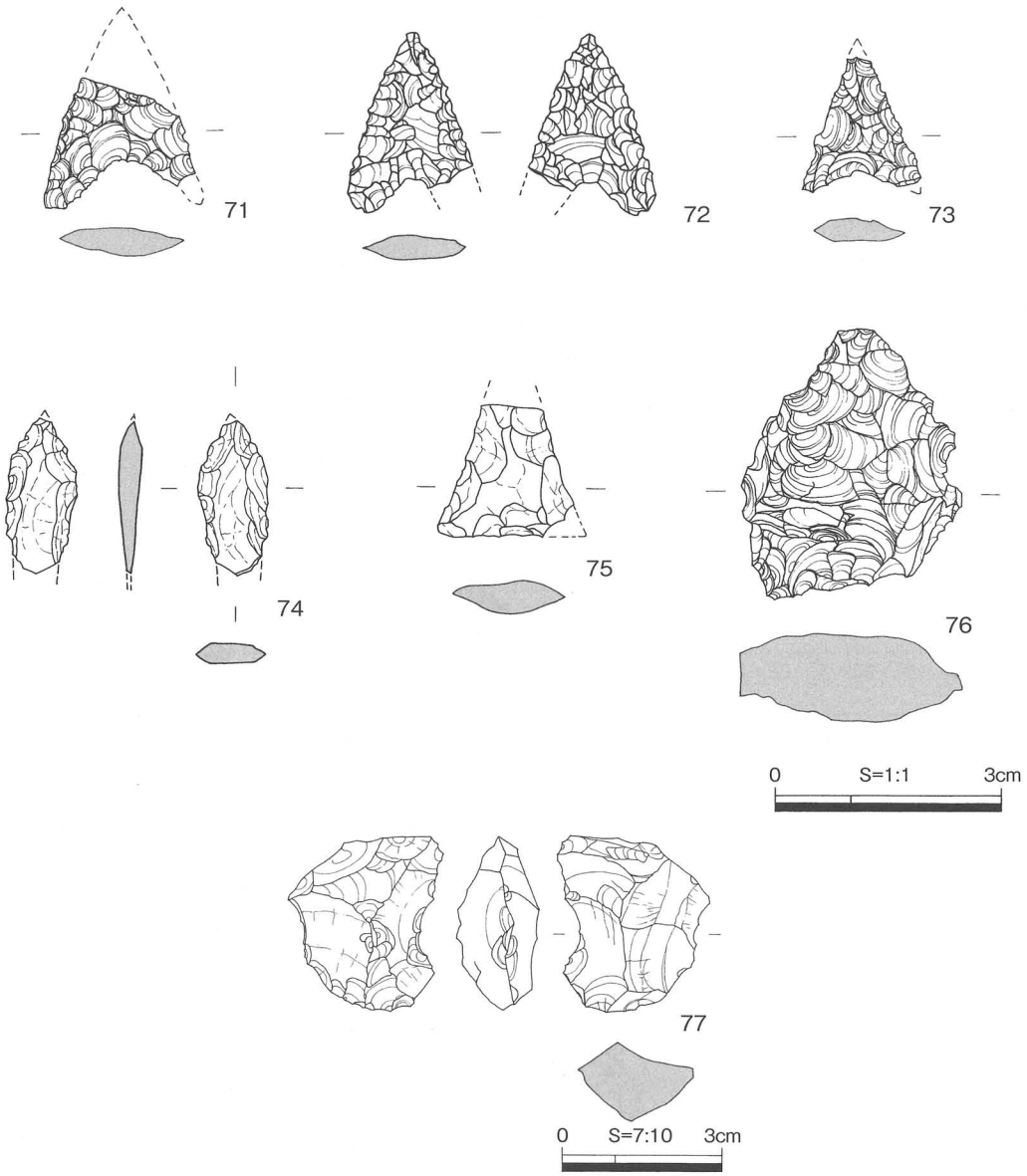
遺構の集中する時期は古墳時代中期と平安時代後期である。古墳時代中期は遺構とともに出土遺



第15図　B遺跡　遺構外出土遺物（1）



第16図　B遺跡　遺構外出土遺物（2）



第17図　B遺跡　遺構外出土遺物（3）

物も比率が高く、玉作関係遺物も周辺遺跡の例から見て、この時期に属するものではないかと推測する。平安時代後期の遺構は山側柱列が想定できるものもあるが、上屋の構造は総じてイメージしにくい。

なお田和山遺跡と同じ弥生時代の遺構は検出できなかったが、谷底東端部の遺物包含層では同時期の土器類や石鏃他の石器類が若干出土している。

註

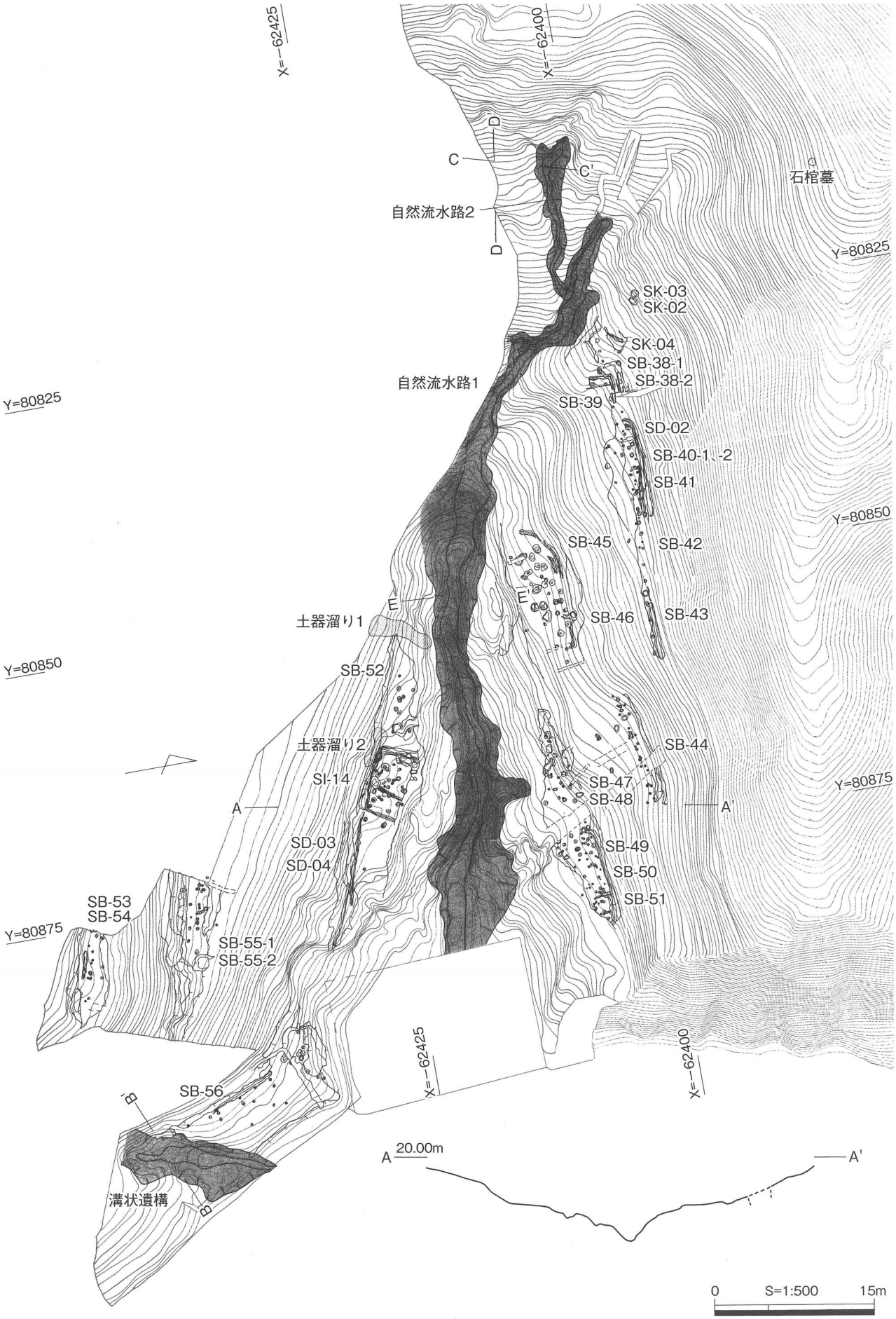
（1）松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌第８集』1991　島根考古学会

（2）八峠　興「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究XIII』1998　日本中世土器研究会

（3）八峠　興「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究XV』2000　日本中世土器研究会

（4）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994.3　島根考古学会

（5）松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』1992　木耳社



第18図　A遺跡　遺構分布図

第３章　A遺跡の調査

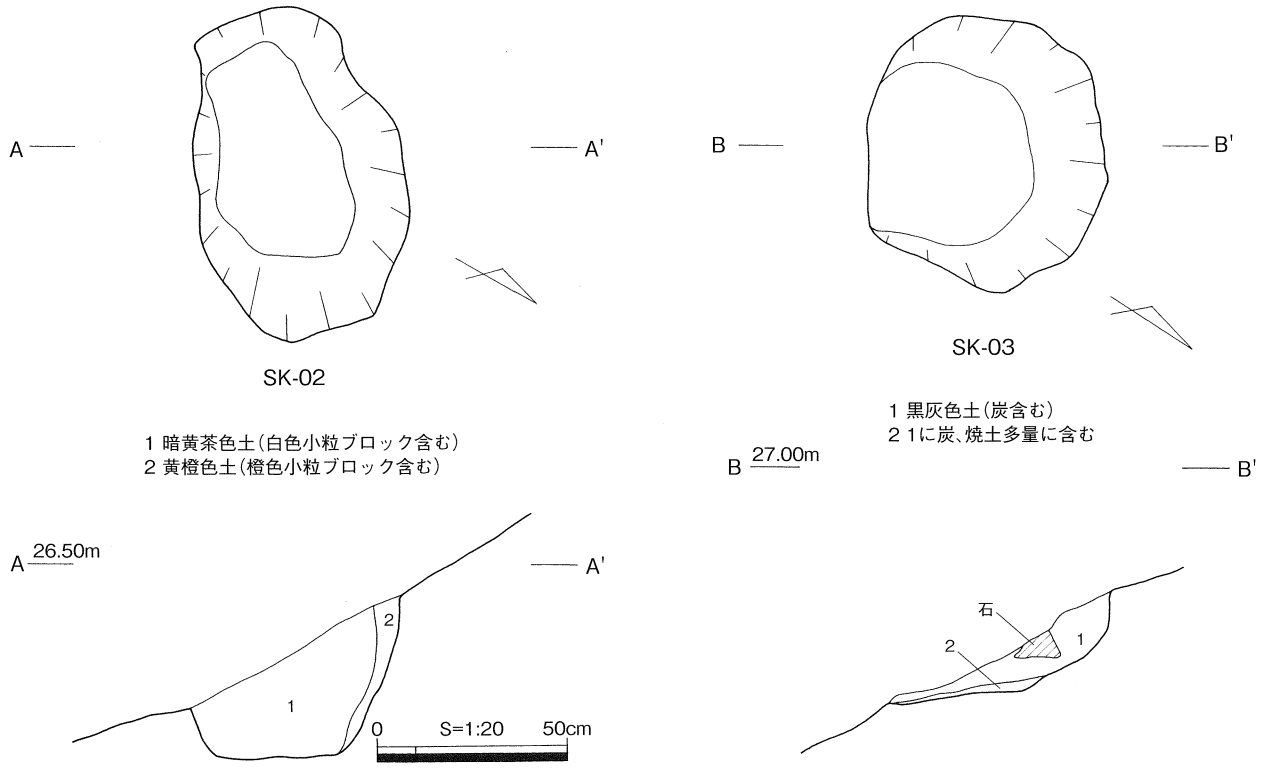
A遺跡は田和山南丘陵東裾の谷部に所在する。谷の東端は、田和山学習の森が整備された際の駐車場設置のための事前調査で古墳時代～中世の遺物包含層が検出されており、今回開発予定範囲に谷部全域がかかったことから、住居跡などの遺構を想定して調査を実施したものである。

現地調査は平成９年10月に開始し、平成14年７月まで断続的に行われた。各年度の調査期間と調査区域、主な調査成果は次の通りである。

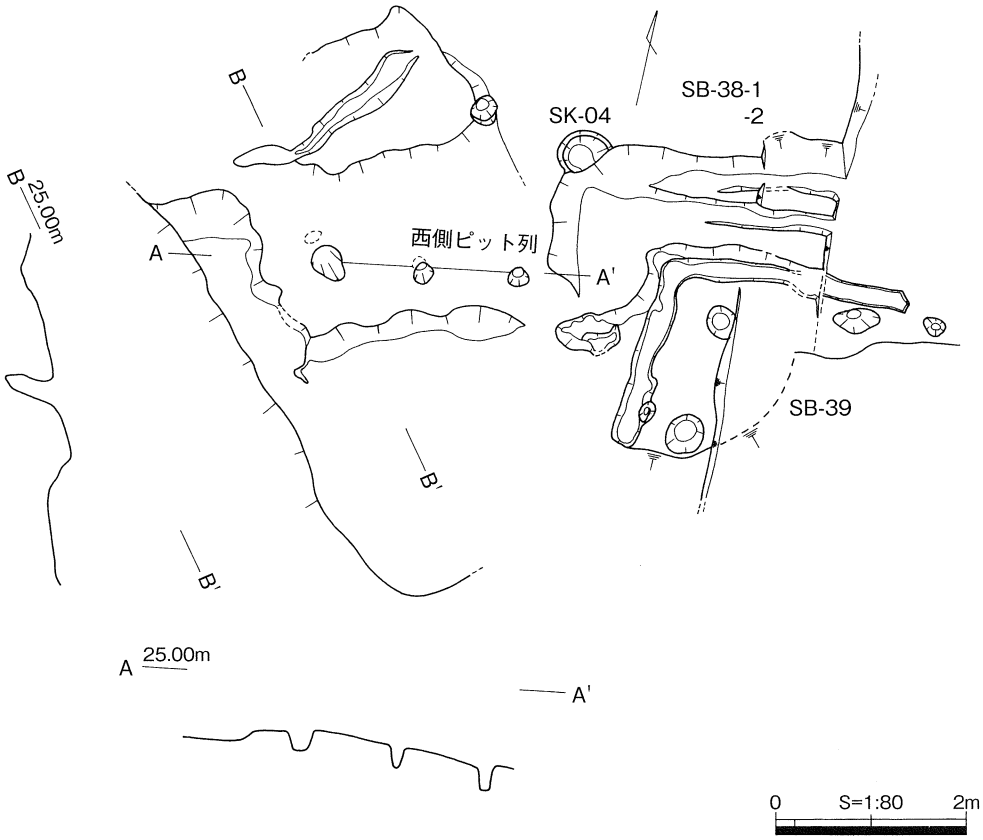
年度	調　査　区　域	主　な　調　査　成　果
H９	谷底南側～南斜面下部	玉作工房跡（SI－14）、古墳前期～中世の遺物
H11	北斜面中部～下部東側	掘立柱建物跡７棟（SB－44－１・44－２・47～51）
H12	北斜面上部～中部西側	掘立柱建物跡７棟（SB40－１・40－２・41～43・45・46）、溝状遺構（SD－02）
H13	北斜面谷奥部、谷底上部、北尾根	掘立柱建物跡３棟（SB－38－１・38－２・39）、SK－02・03、自然流水路跡、石棺墓
H14	谷底下部、南斜面、東斜面下部	流水路跡、掘立柱建物跡６棟（52～54・55－１・55－２・56）、溝状遺構（SD－03・04・溝状遺構）

検出した遺構は、竪穴住居跡１棟、掘立柱建物跡23棟、土坑５基、溝状遺構４条、自然流水路跡２条、石棺墓１基を数え、出土した遺物はコンテナ約200箱にのぼった。

調査の概要は、谷部北斜面、谷部南斜面、東側斜面下平坦面、自然流水路跡、北側尾根石棺墓の順に記述する。



第19図　SK－02・03　平面図・土層断面図



第20図　SB－38－1・38－2・39・SK－04・西側ピット列　平面図・断面図

1．谷部北斜面の遺構と出土遺物

SK－02・03（第19図）

位置　北西側斜面上部の標高26.4～26.7m付近に位置する。

SK－02　現状の規模88×55cmの楕円形土坑で、最深部は40cmを測る。埋土は暗黄茶色土・黄橙色土で遺物は出土していない。SK－03の一部と重複しており、SK－03以降に作られたものである。

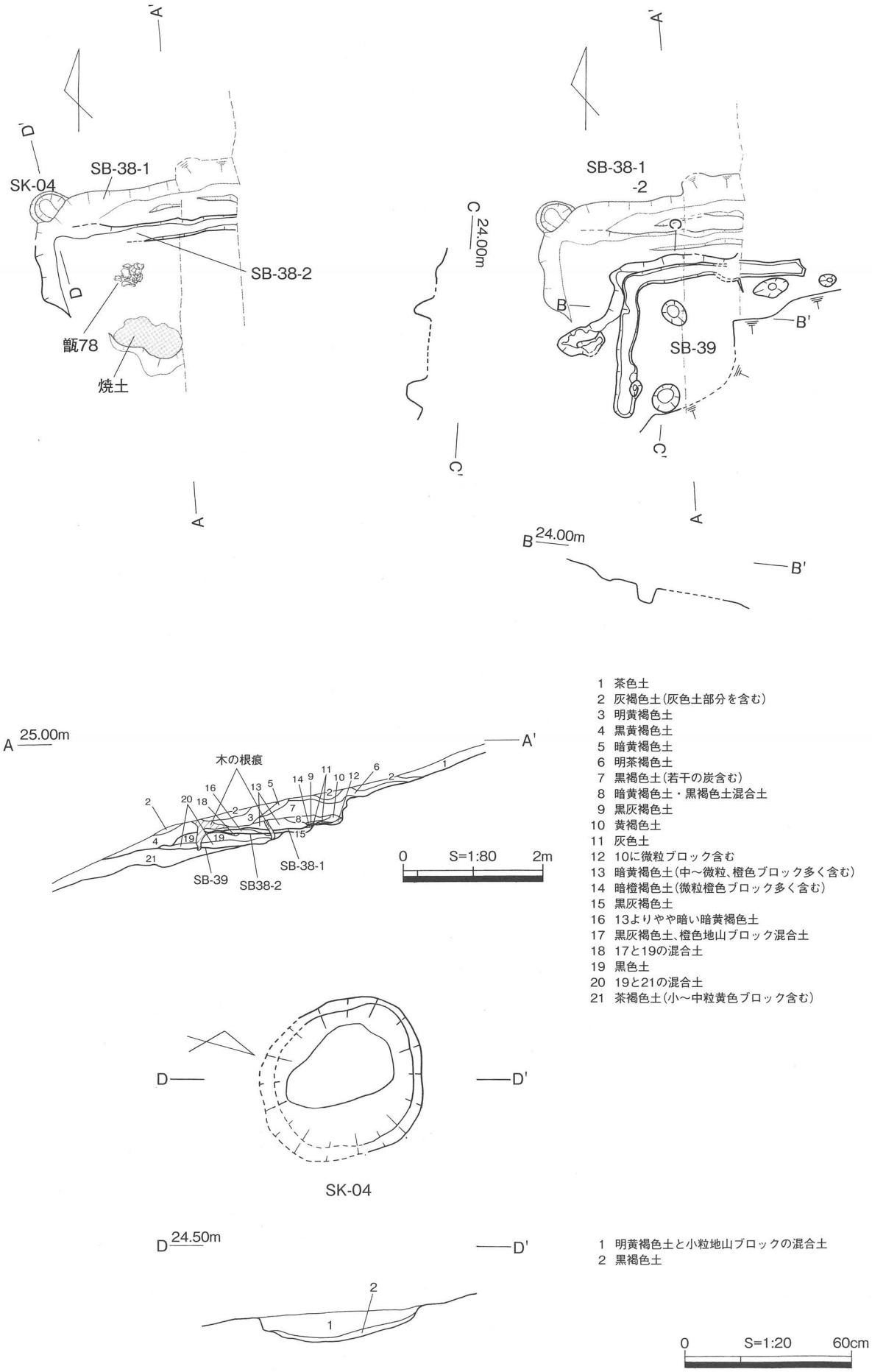
SK－03　SK－02を切って掘り込まれた60×70cm大、深さ30cmの不整円形土坑である。埋土は炭を含む黒灰色土で、底面上では多量の焼土と炭を検出しており、自家消費用の炭を焼いたいわゆる「こ炭焼き跡」とされるものである。出土遺物はなく、時期は不明である。

SB－38－1・38－2・39・SK－04・西側ピット列（第20・21図）

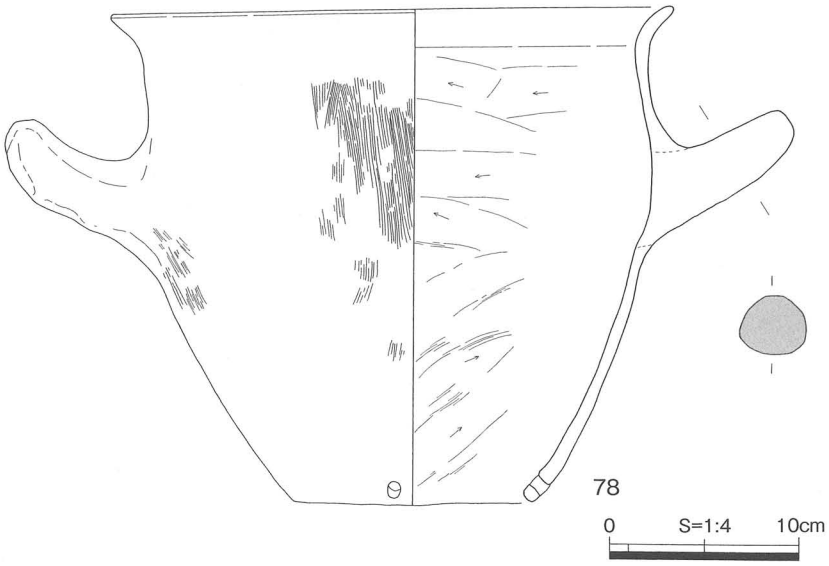
位置　北西側斜面上部の23.8m付近に重複して建てられた建物群である。

遺構の新旧関係　土層断面図（第21図）によれば、古い方からSB－39→38－2→38－1の順に作られていることがわかる。SK－04はSB－38－1以前であるが、他の遺構との前後関係は不明である。西側ピット列についても他遺構との前後関係はわからない。

SB－38－1（第21図）　壁体溝を伴う建物跡である。東側は地滑りのため消滅している。溝はごく浅いもので、壁の最大高は35cmである。床面に焼土が見られたが、ピットは検出できなかった。遺物は床面で土師器の甑（第22図78）が出土し、埋土中より古墳時代後期の須恵器坏蓋片・高坏片が出土した。



第21図　SB－38－1・38－2・39・SK－04　平面図・断面図・土層断面図



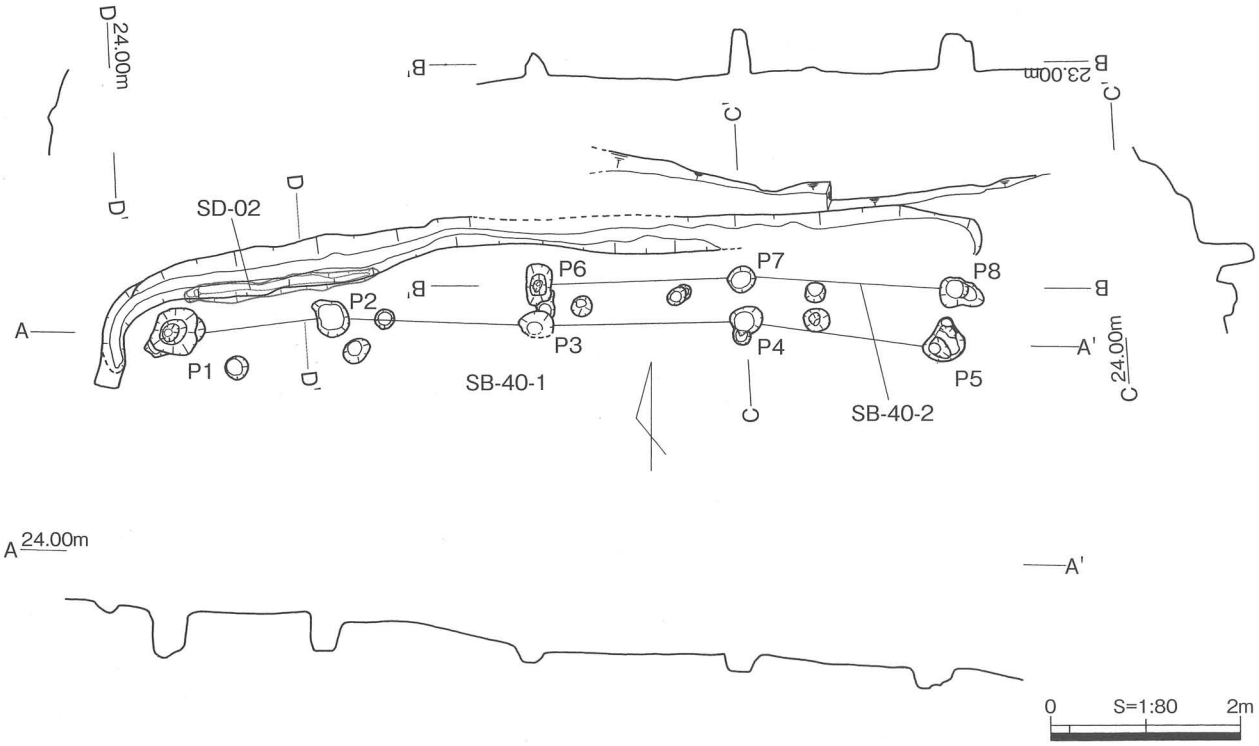
第22図　SB－38－１　出土土器

SB－38－２（第21図）　SB－38－１の壁体溝南側の下層から幅約20cm、深さ３～８cmの溝を検出した。この溝に伴う床面でもピットは検出できなかった。遺物は出土していない。

SB－39（第21図）　SB－38－２の下層で直角に曲がる幅25cm、深さ８cmの溝とピット２穴を検出した。ピットは上端径40cm、深さ20cmを測る。東側は地滑りにより失われている。

SK－04（第21図）　SB－38－１の壁上端西北隅から検出した円形の小土坑で、SB－38－１により切られている。直径55cm、深さ10cmを測る。

西側ピット列（第20図）　上記建物群の西側でピット５穴を検出。このうち３穴は直線状に並んでおり建物跡の柱穴とも考えられるが、西側の２穴は斜面上方に向かって斜めに掘り込まれているこ



第23図　SB－40－１・40－２・SD－02　平面図・断面図

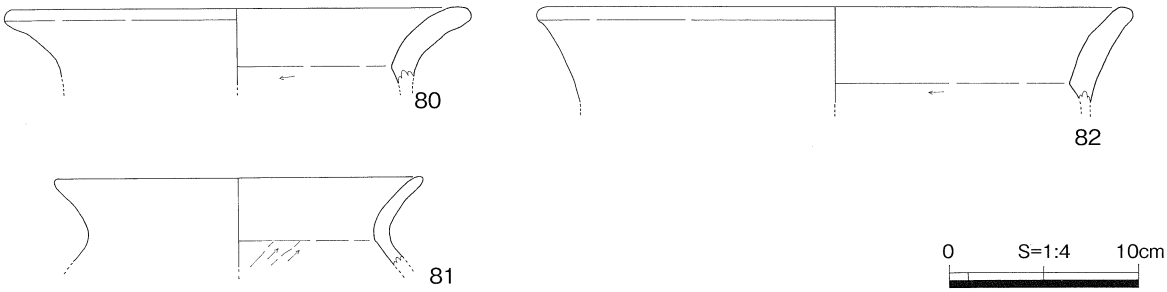
とから、遺構の性格を判断しかねるものであった。

SB－40－1・40－2・SD－02（第23図）

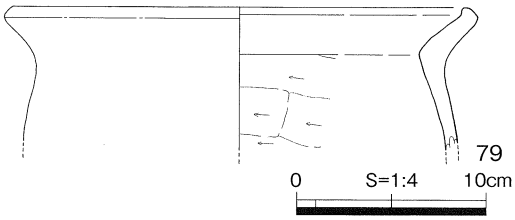
位置・形態・規模　SD－02は北斜面の標高23.4m、SB－40－1・40－2は23m付近に位置する。東西長9.4m、南北残存幅1.5m、壁最大高15cmの加工段上に、少なくとも2棟の建物が重複して建てられており、北西コーナーから東へ浅い壁体溝が6.2m残存している。

SB－40－1　北側に壁体溝を伴う桁行4間（8.2m）の建物跡が想定できる。梁間は谷側が流失し不明である。遺物はピットの埋土から土師器の甕片（第24図80～82）が出土している。いずれも単純口縁のものである。

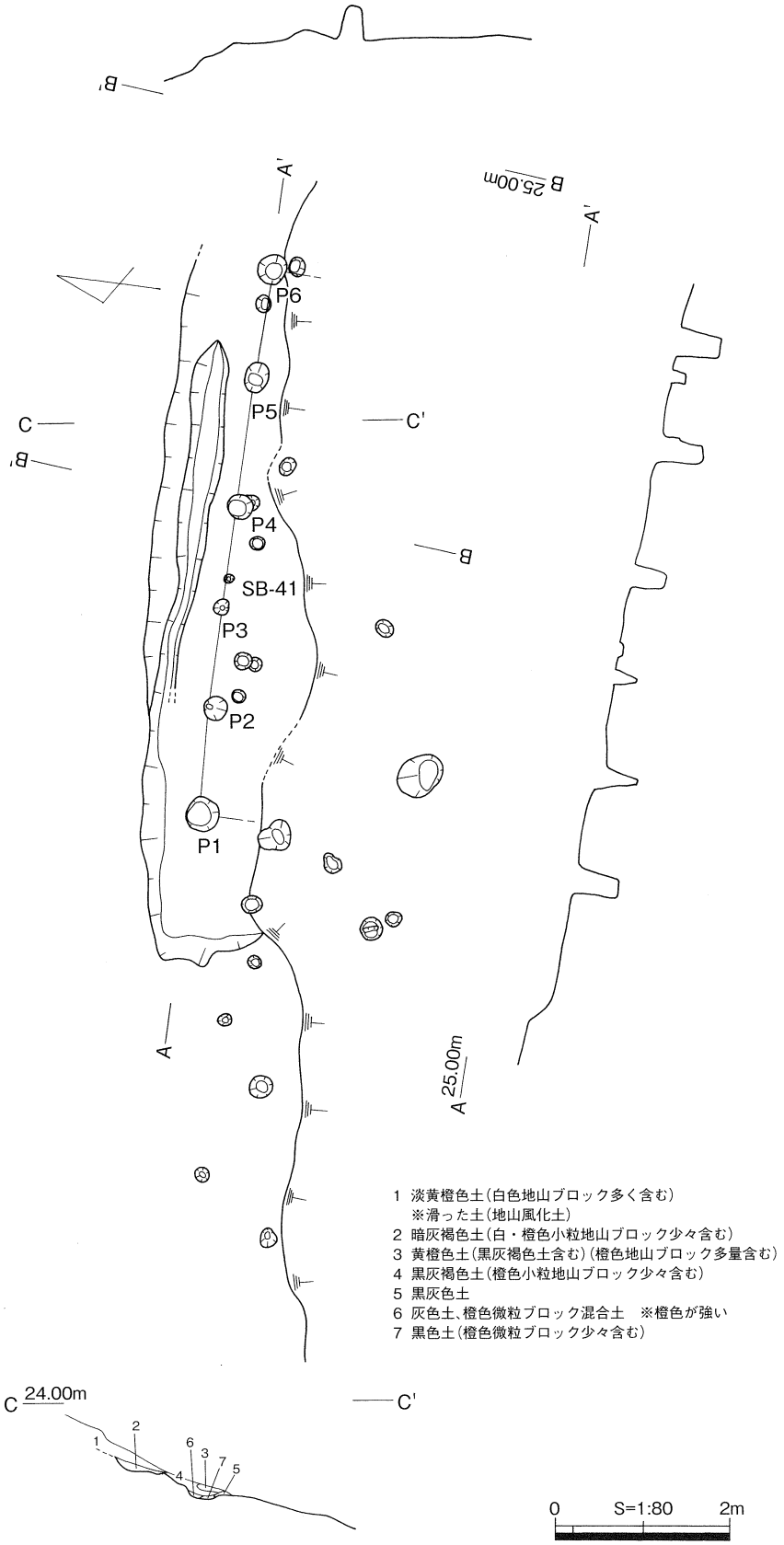
SB－40－2　40－1より壁体側に位置する桁行2間（4.4m）の建物跡である。P6・7はSB－41の壁体溝を切って掘り込まれており、SB－41より新しい遺構である。



第24図　SB－40－1　出土土器



第25図　SD－02　出土土器



第26図　SB－41　平面図・断面図・土層断面図

SD－02　SB－40－１の埋土を切って掘り込まれた溝で、残存長１m、幅11～22cm、深さ３～５cmを測る。埋土中から土師器の甕（第25図79）が出土した。古墳時代後期以降のものと考えられる。

SB－41（第26図）

位置・形態・規模　一部は北斜面SB－40－２の下層に位置し、標高は23m前後を測る。東西長８m、南北残存幅１～２mの加工段上に桁行５間（6.3m）の掘立柱建物跡を検出した。梁間のピットは流出したものと思われ現存していない。壁最大高は19cmを測り、浅い壁体溝が加工段東寄りに４mに渡って見られる。

堆積土層　１層（第26図）は、地山の土に似ているが加工段覆土にかぶさった地滑り土層である。３・４層が加工段本来の覆土であり、６・７層は壁体溝の埋土である。

出土遺物・時期　床面覆土より古墳時代後期の須恵器の坏身が出土した。

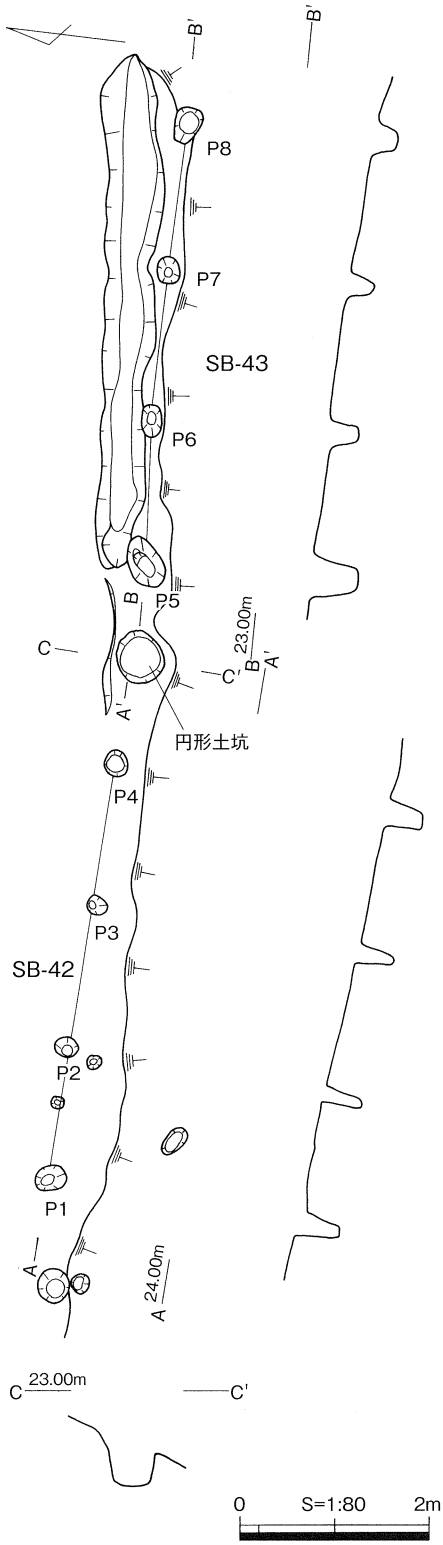
SB－42・43（第27図）

位置　SB－41の東に位置し、床面の標高はSB－42が22.6～22.8m、43が22.2～22.5mで、東に向かって次第に下がっている。SB－42と43の間には円形土坑が存在する。

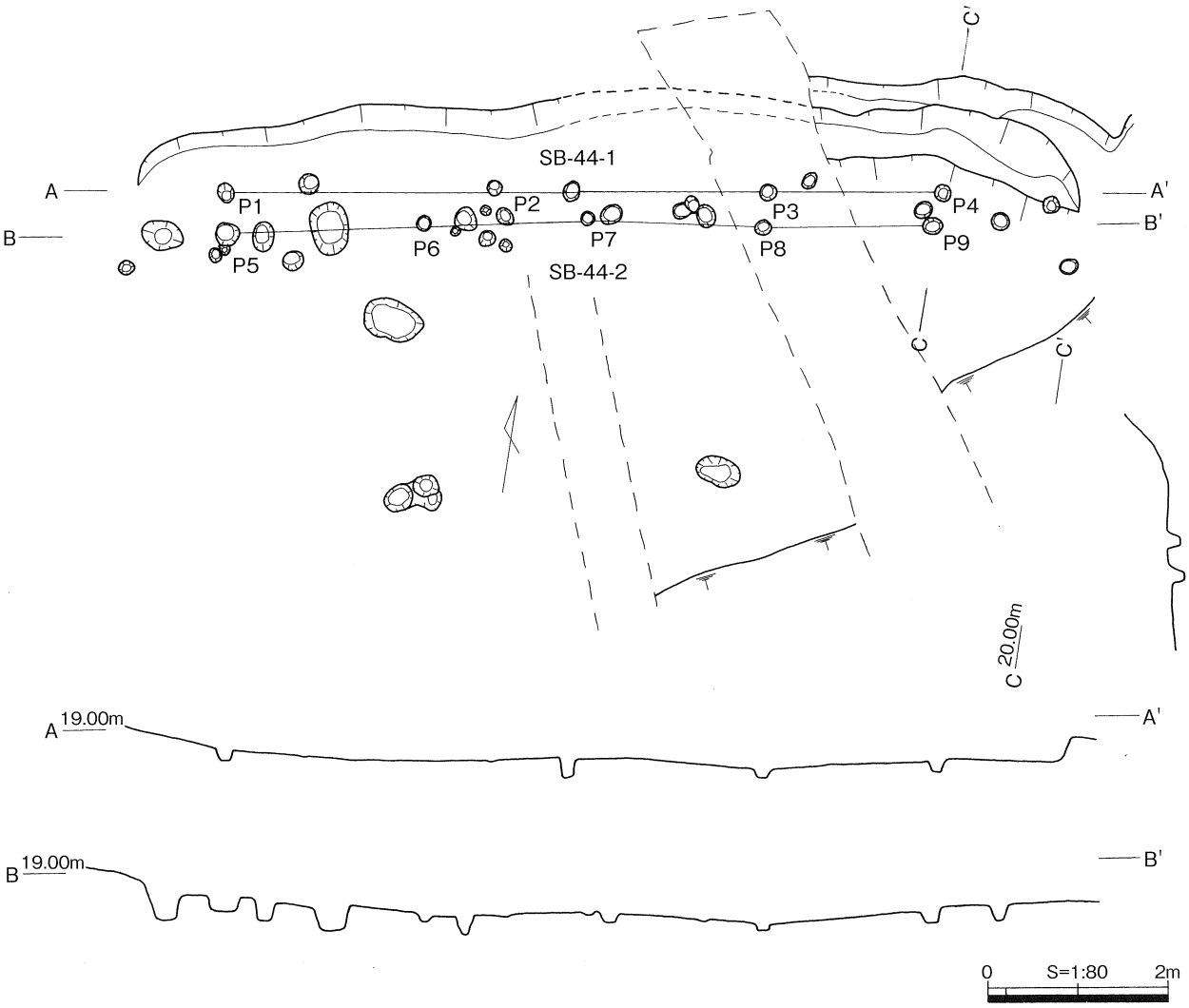
SB－42　奥行きの狭い段上に桁行３間分（4.4m）のピット列を検出した。ピットは上端径20～30cm、深さ40cmの比較的しっかりしたもので、掘立柱建物跡と思われるが、谷側は流失しており梁間の規模は不明である。出土遺物はなく時期は不明である。

円形土坑　上端径53×50cm、深さ39cmを測る。埋土上面に２個、底面に３個の角礫（10～20cm大）を検出した。周辺の土層にこうした礫はなく、埋土とともに人為的に入れられたものと思われるが、意図するところは不明である。遺物は出土しなかった。

SB－43　円形土坑の東に隣接する桁行３間（4.7m）の掘立柱建物跡と考えられるものである。ピットは直径25～50cm、深さ25～48cmを測る。ピット列の南側床面は流失して現存していない。北側には幅30～45cm、深さ５cmの壁体溝と思われる溝が平行して掘られている。出土遺物はなかった。



第27図　SB－42・43　平面図・断面図



第28図　SB－44－１・44－２　平面図・断面図

SB－44－１・44－２（第28図）

位置・形態・規模　谷部北斜面の標高18.5m付近に位置する。東西長10.6m、南北残存幅２m、壁最大高55cmの加工段上に大小のピットを30穴以上検出し、建替えによる２棟の掘立柱建物跡を想定した。

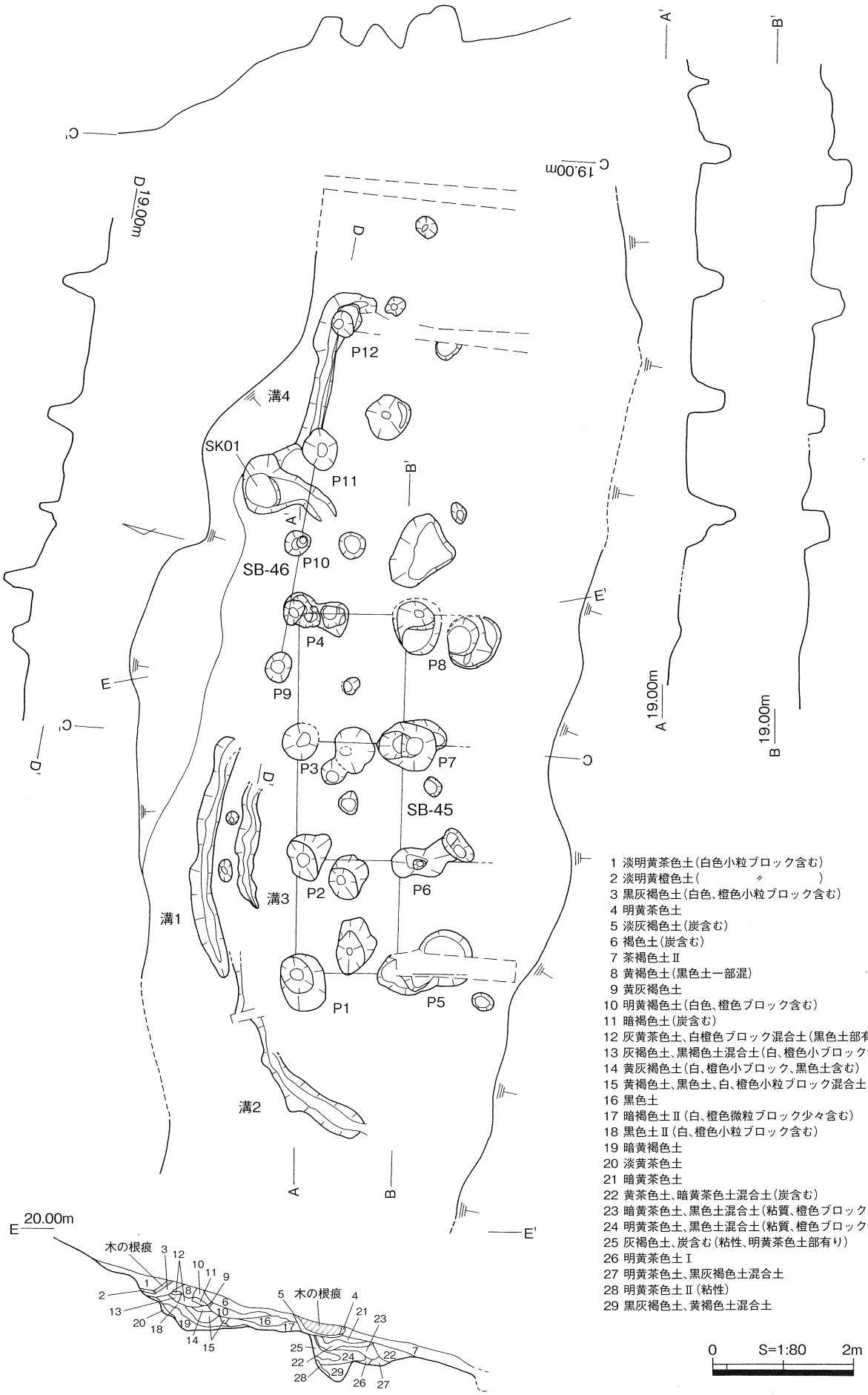
SB－44－１　Ｐ１～４の３間（7.9m）を桁行とする掘立柱建物跡と考えられるもので、梁間のピットは現存していない。ピットの直径は18cm前後、深さは10～20cmを測る。

SB－44－２　Ｐ５～９の４間（7.8m）を桁行とする掘立柱建物跡である。SB－44－１のピット列から約40cm南側に平行して作られている。ピットの直径は12～35cm、深さは10～22cmを測る。

出土遺物・時期　須恵器の甕片、土師器小片が出土しているが、詳細な時期については特定できていない。

SB－45・46（第29図）

位置　谷部北斜面の標高18.7m付近に位置する。東西長13m、南北残存幅５mの平坦面上に、重複する２棟の掘立柱建物跡を検出した。



第29図　SB－45・46　平面図・断面図・土層断面図

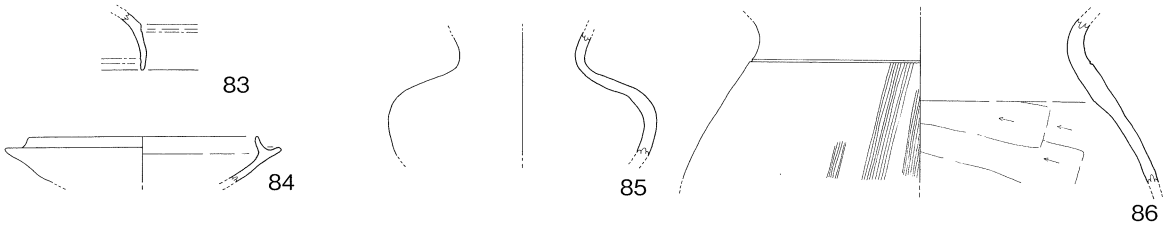
SB－45　P１～８で構成される建物跡である。現存する柱穴からは、桁行３間（5.2m）×梁間１間（1.4～1.6m）の掘立柱建物が考えられるが、P５～８の南側は流失している可能性が高いため、３間×２間以上の総柱建物であったとも考えられる。ピットは直径45～80cm、深さはP１～４が40～60cm、P５～８が20～40cmを測る。同規模の柱穴や重複する柱穴が周辺にあり、何度かの建替えがあったものと思われる。北西側には、建物跡に付随するとみられる３本の溝（溝１～３）を検出している。

SB－45の出土遺物（第30図）　P８付近から須恵器坏蓋83、坏身84、床面覆土19層から須恵器壺85が出土している。85は肩部に段を持ち、口縁端部内面に浅い沈線を施す。84は推定口径12.1cm、口縁部の立ち上がりは低く内傾する。86はP１付近の床面覆土から出土した土師器の甕で、肩上部に浅い沈線がめぐる。

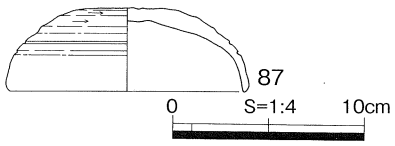
SB－45の時期　83の坏蓋、84の坏身は出雲Ⅳ期[1]に相当すると考えられることから、SB－45の存在期は古墳時代後期に当たると思われる。

SB－46　SB－45の北東側に検出した、桁行３間（５m）×梁間１間以上の掘立柱建物跡と考えられるもので、ピットの上端径は35～50cm、深さ23～45cmを測る。P11と12に沿って溝（溝４）が見られるが、この建物に伴うものかどうかは不明である。また、P10と11の奥にSK01が見られるが、この用途・性格についても同様に不明である。SK01の底面からは須恵器坏蓋87が出土している。肩部に２条の沈線をめぐらせ、天井部に回転ヘラ削りを施す出雲Ⅳ期のものである。

SB－46の時期　SB－45とは同一加工段上で検出しており、SB－45と46のピットの深さに極端な違いはないこと等から、前後関係は明確でないものの時期的な隔たりは少ないのではないかと考えられる。



第30図　SB－45　出土土器



第31図　SB－46（SK01）出土土器

SB－47～51・焼土坑１・２（第32・33図）

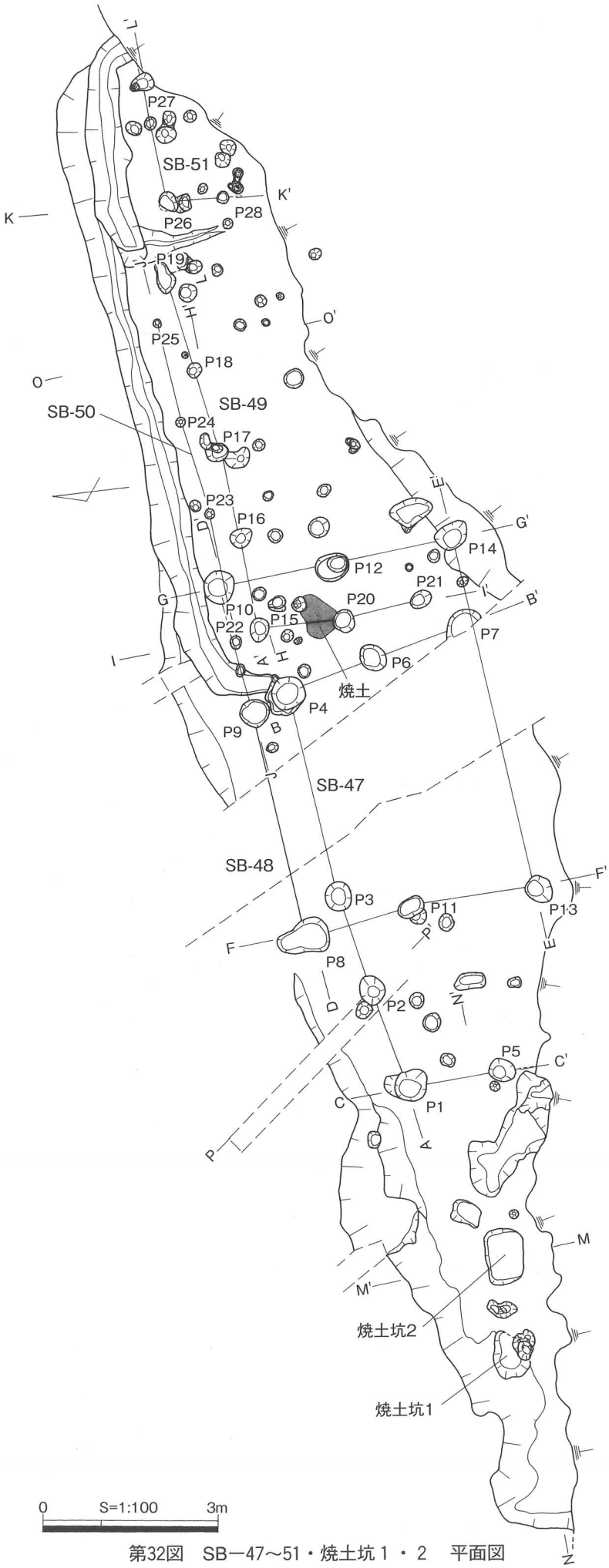
位置　SB－47～51は北斜面下部の標高15.5～16m付近に位置する東西長24m、南北残存幅２～６ｍの加工段上に重複する形で検出した建物跡群である。焼土坑は２基あり、加工段西端で検出している。

SB－47　桁行４間（6.9m）×梁間２間（3.3m）の掘立柱建物跡である（Ｐ１～７）。Ｐ３・Ｐ４間のトレンチ部分にもピットが存在したものと考えた。ピットの直径は50cm程度、深さ25～50cmを測る。

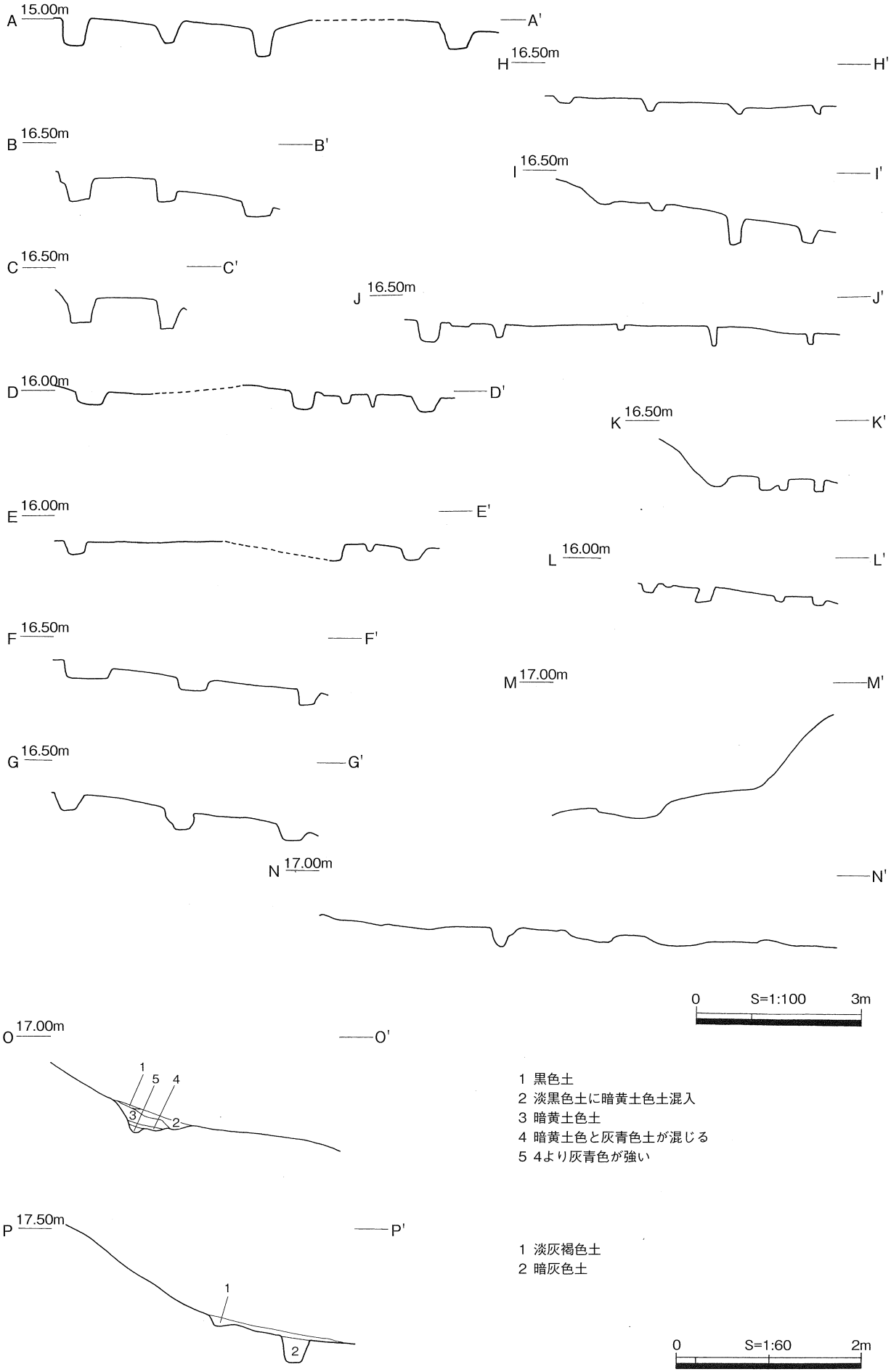
SB－47の出土遺物・時期（第34図）　Ｐ２内より坏蓋91が出土した。91は口径12.7cmを測り、肩部に僅かな段を持ち天井部を回転ヘラ削りするもので、出雲Ⅳ期に当たる。他に土師器甕の口縁92が出土している。これらの遺物によりこの建物の時期は古墳時代後期と考えられる。

SB－48　SB－47と西半部が重なる３間（6.1m）×２間（４ｍ）の掘立柱建物跡である（Ｐ８～14）。トレンチ部分にもピットが存在したものとして桁行３間と考えた。ピットの直径は30～50cm、深さは30cm程度である。P12の西側で焼土を検出した。位置的にこの建物跡に伴うものと考えられる。

SB－48の出土遺物・時期（第34図）　遺構面覆土から須恵器の坏蓋88・坏身89、P13から坏身90が



第32図　SB－47～51・焼土坑１・２　平面図



第33図　SB－47～51　断面図・土層断面図

出土した。88は口径12.4cmを測り、肩部に沈線１条による段を付けている。89は口径11.2cmを測り、口縁部の立ち上がりは比較的高く内傾している。90も坏身で口径10.6cmを測る。これらの須恵器はいずれも出雲Ⅳ期に相当することから、この建物の時期は古墳時代後期と考えられる。

SB－49　SB－48に西端部が重なる４間（6.2m）×２間（2.7m）の掘立柱建物跡である（P15～21）。ピットの直径は25～40cm、深さ20～30cmを測る。建物跡の50～70cm北側に壁体溝が設けられているが、東端部はSB－51の溝によって切られている。

SB－49の出土遺物・時期　ピット中から土師器小片が出土しているが時期は特定できない。SB－48に伴う焼土跡をこの建物のP20が切っていることから、SB－48より後出のものである。

SB－50　SB－49と壁体溝の間に存在する３間分（5.6m）のピット列である（P22～25）。ピットの直径は15～20cm、深さ10～30cmを測る。このピット列が建物になるのかどうかは微妙なところである。あるいはSB－49に付属する遺構の可能性を考えることもできる。覆土中より須恵器の高台付坏（第35図543）が出土していることから、壁体溝に囲まれた範囲の遺構（SB－49・50）は奈良・平安時代のものである可能性も考えられる。

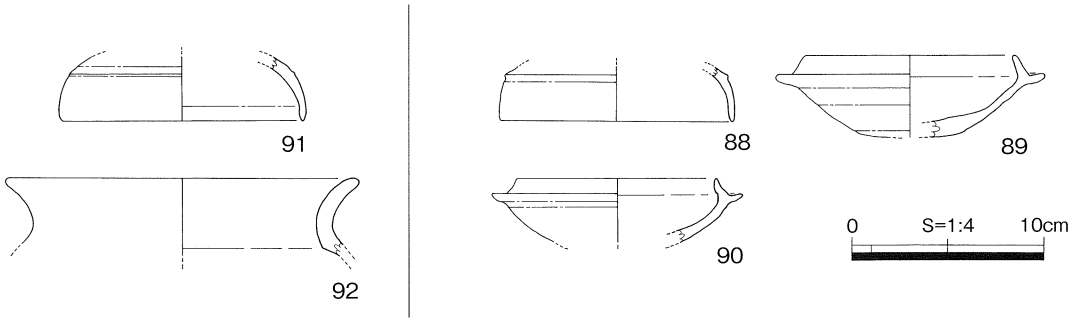
SB－51　最も谷の出口に近い箇所に位置する東西１間（２m）以上×南北１間（１m）以上の掘立柱建物跡である（P26～28）。南東側の床面は流失し現存していない。ピットの直径は20～30cm、深さ20cmを測る。この建物に伴う壁体溝がSB－50の壁体溝を切っており、SB－50より新しいものであると思われる。

SB－51の出土遺物・時期　覆土中より奈良・平安時代の須恵器壺片（第35図544）が出土していることから、この頃の建物跡と考えられる。

北側斜面出土遺物（第35図）　93はSB－44・46間の斜面で出土した柳葉式鉄鏃である。残存長8.1cm、鏃身幅1.6cmを測る。鏃身関部は不明瞭で、箆被部は短く、箆被はやや末広がりになり、茎部は欠損している。

焼土坑１（第32図）　加工段西端部で検出したいびつな楕円状の土坑で、東西85cm、南北66cm、深さ10cmを測る。地山面と地山上に堆積した暗黄褐色土を若干掘り込んで作られたものである。底面には炭の層があり、その上には炭や焼土を含む黄褐色土が堆積していた。出土遺物は埋土中の土師器の細片のみである。

焼土坑２（第32図）　焼土坑１の80cm程東で検出した長方形土坑で、東西97cm、南北65cm、深さ５～10cmを測る。地山面に掘り込まれ、焼土坑１の一部基盤土である暗黄褐色土を埋土とすることから、焼土坑１より古い段階のものである。遺物は土師器の細片が埋土中から出土している。



第34図　SB－47・48　出土土器

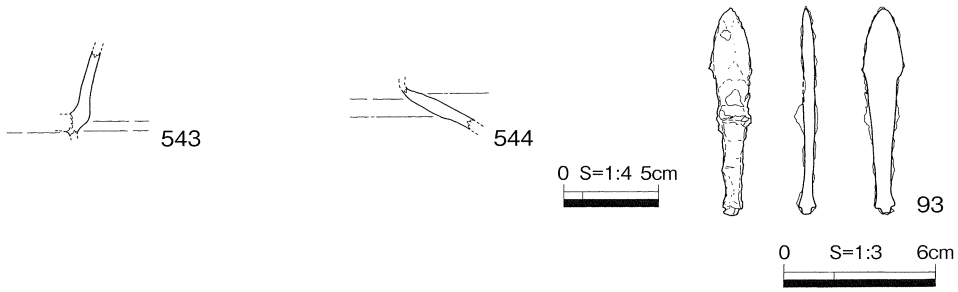
焼土坑付近～下側斜面の出土遺物（第36図）

土師器　94は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が外傾する面をなし内側に肥厚するもので、4世紀後半代の布留系の甕である。95～97・99は甕である。胴部の張りがない95、口縁部が外反する96・97、口縁部が強く屈曲する99などがあり、古墳時代後期～奈良・平安時代頃の時期幅がある。98は小型丸底壺で古墳時代中期頃のものである。100・102は高坏の脚部で、102は外面の中程に段を付ける。101は甑で、把手以下を欠損している。103は土製支脚で高さ18.4cmを測る。

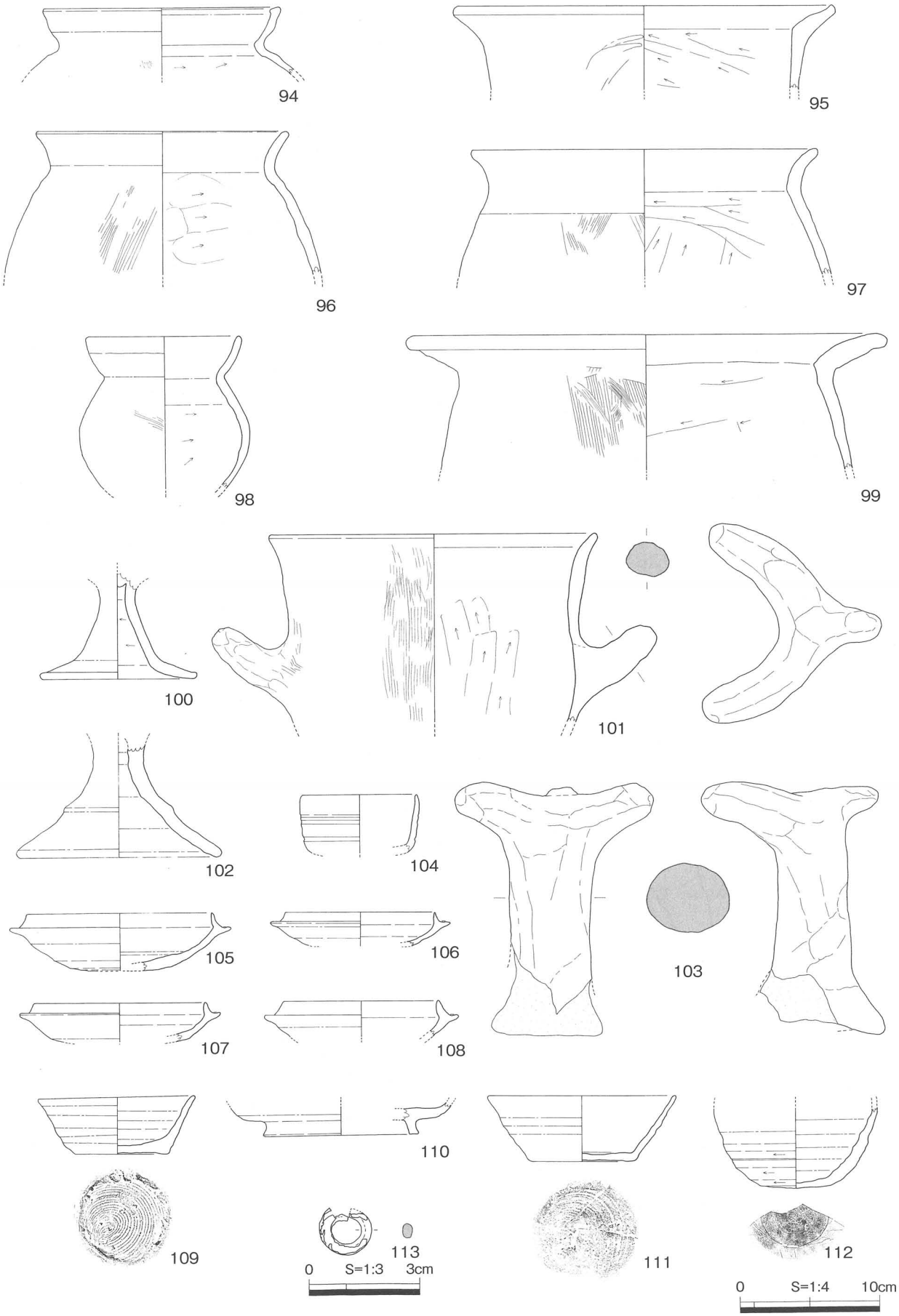
須恵器　104は長脚高坏の坏部で外面に3条の沈線を施す出雲Ⅴ期のもの、105～108は坏身で出雲Ⅳ～Ⅴ期のもの、109は底部を回転糸切りする9世紀前半代の坏、110は高台を底部端よりやや内側に付ける奈良時代の皿、112は壺で底部外面に回転ヘラ削りを施すものである。

土師質土器　111は底部を回転糸切りする坏で、平安時代のものと考えられる。

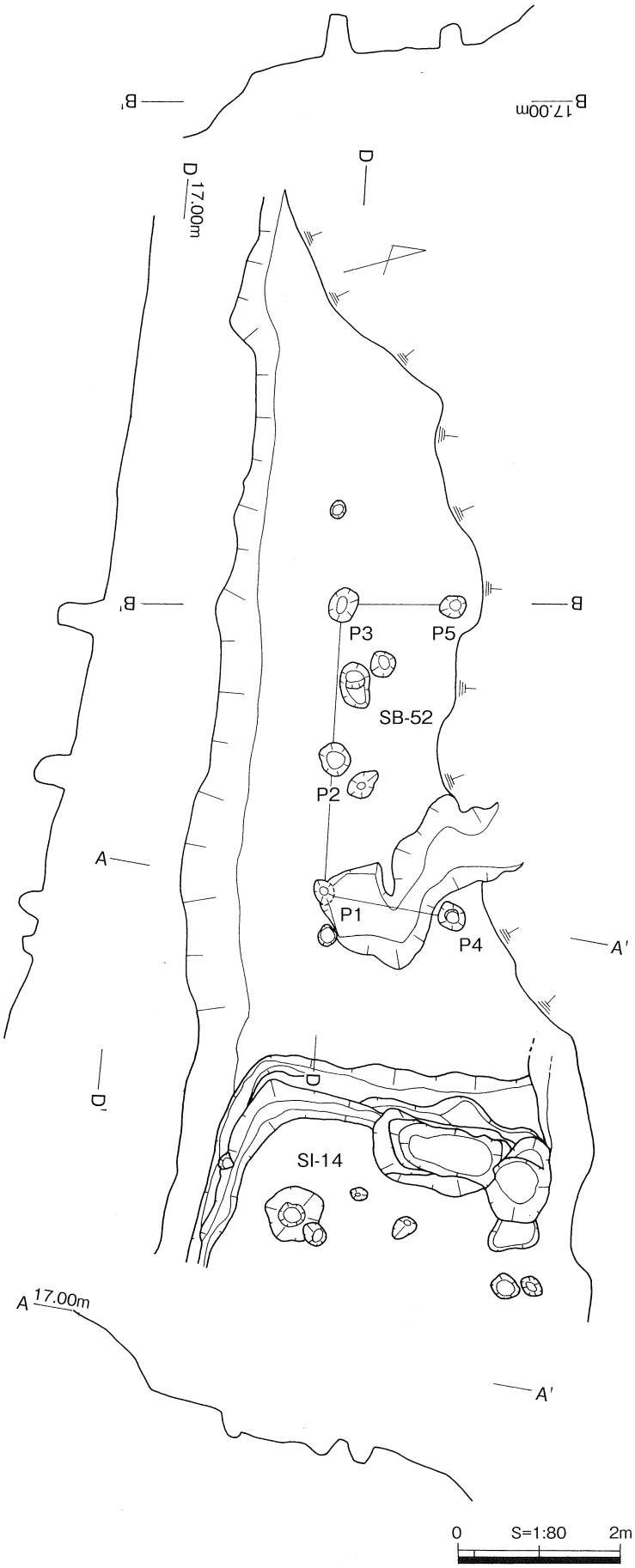
耳環　113は銅環を銀の薄板で包んだもので、外径2.8cm、厚さ0.55～0.75cmを測る。



第35図　SB－50・51・北側斜面　出土遺物



第36図　焼土坑付近～下側斜面　出土遺物



第37図　SB－52　平面図・断面図

SB－52（第37図）

位置・形態・規模　流水路南側斜面の東西方向にカットした平坦面上に、建物跡を検出した。SI－14（玉作工房跡）の北西側、床面標高は16.3mを測り、SI－14の床面より80cm程高い所に位置している。北側の遺構面が流失しているため詳細はわからないが、現状では桁行２間（3.5m）×梁間１間（1.3～1.6m）以上の掘立柱建物跡と考えられる。南側の壁は最大高80cmを測り、この壁と平行してＰ１～３の柱穴が認められる。柱穴の上端径は25～40cm、深さ25～50cmで、柱穴間は1.4～1.8mを測る。なお、Ｐ１・Ｐ４付近では幅0.9～１m、深さ20cmの溝を検出したが、時期・性格は不明である。

出土遺物・時期　遺物については、遺構面上から土師器片、須恵器片、柱穴から土師器の細片が出土しているが、明確な時期については不明である。

SI－14（玉作工房跡）（第38図）

位置・形態・規模　南斜面下部の標高16m付近で検出した方形の竪穴建物跡である。建物の北側部分は、自然流水路により削平を受け流失している。現存する床面は東西5.5m、南北3.3m、床面のレベルは15.65～15.55m、壁最大高は45cmを測る。

壁体溝　深さ５～10cmの溝が東南西の３方に廻り、南壁際に設けられた工作用ピット（SK01）の上端をかすめ、西壁際の長方形土坑（SK02）に繋がる。溝底のレベルは南西コーナー付近が一番高く、東から北に向かうに従い低くなっている。南西コーナーと長方形土坑は５cmの高低差があり、水があれば土坑に流れ込むようになっている。西壁と南壁西半の途中に幅10～30cmの段があり、南西コーナー付近に溝の痕跡が見られた。おそらくこのSI－14以前にほぼ同じ場所に竪穴があったものと思われ、その壁体溝と床面の一部が削り残されたものであろう。

柱穴　床面には多くのピットを検出したが、主柱穴はＰ１～４の４本と考えられる。直径25～35cm、深さ23～56cm、ピットの底面レベルは標高15.1mとほぼ一定である。Ｐ２底部には直径８cm、長さ10cmの柱根が残存していた。柱間距離は2.7～2.8mである。SI－14以前の竪穴に伴う柱穴は特定できなかった。

工作用ピット（SK01）と排水溝　南壁際に壁体溝と接するようにいびつな方形状の土坑が掘り込まれ、それに繋がる排水溝が床面を横切って谷側斜面に延びている。SK01は90×95cm、深さ40cmを測る。排水溝はSK01側の１m程が２条に分かれていたが、埋土に切り合いはなく同時に存在していたものと考えられる。SK01の埋土は上層が灰褐～淡灰褐色土（竪穴床面の覆土層と同一）、中層が灰色粘質土、下層が青灰～淡黄灰色砂質土である。土坑上端付近を中心に、手のひら大で厚み２～３cmの白色粘土層の分布が見られた。土坑底～堆積土中、土坑上端や排水溝一帯に碧玉や瑪瑙のチップが大量に出土しており、この土坑を中心に玉作りを行っていたようである。

焼土　SK01の北側と排水溝の東側から溝上端にかけての２ヶ所で検出した。

土坑（SK02・03）　２基とも住居跡の西壁際で検出し、SK03が02の堆積土を切って掘り込まれている。SK02は長軸155cm、短軸83cm、深さ70cmの隅丸長方形土坑、SK03は長径105cm、短径68cm、深さ40cmの楕円形土坑である。これらは壁体溝と繋がっていることから、水溜めであった可能性が高い。

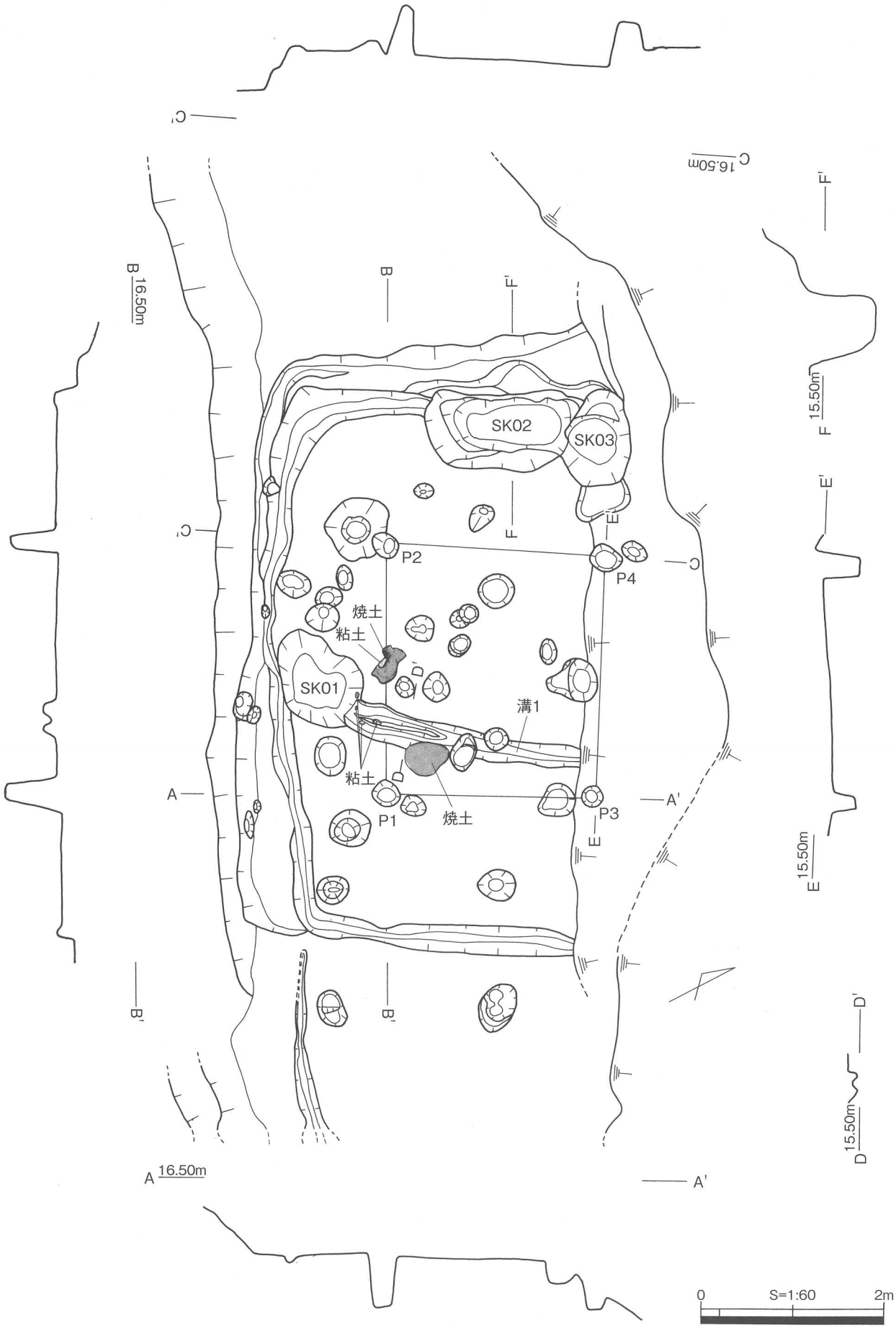
遺物出土状況（第39・40図）　床面覆土（灰褐色土）からは、退化した二重口縁の土師器甕115・130、壺129、高坏116・117、須恵器甕頸部119、甕肩部118などの土器類、ガラス小玉131、水晶製丸玉132、碧玉製管玉１次研磨品135、瑪瑙製勾玉１次研磨品136、水晶の勾玉か丸玉の調整剥片欠損品、碧玉・瑪瑙の各種玉調整剥片・素材剥片、多量のチップ、結晶片岩の玉砥石片、火山岩の叩き石139、水晶の叩き石などが出土した。

工作用ピットからは小型丸底壺126、碧玉の管玉の素材剥片、水晶の勾玉か丸玉を敲打して割れたもの、瑪瑙の叩き石、碧玉・瑪瑙のチップなどが多量に出土した。

SK02からは土師器甕120、滑石製臼玉２点133・134、水晶の勾玉素材剥片・石核・叩き石が出土した。

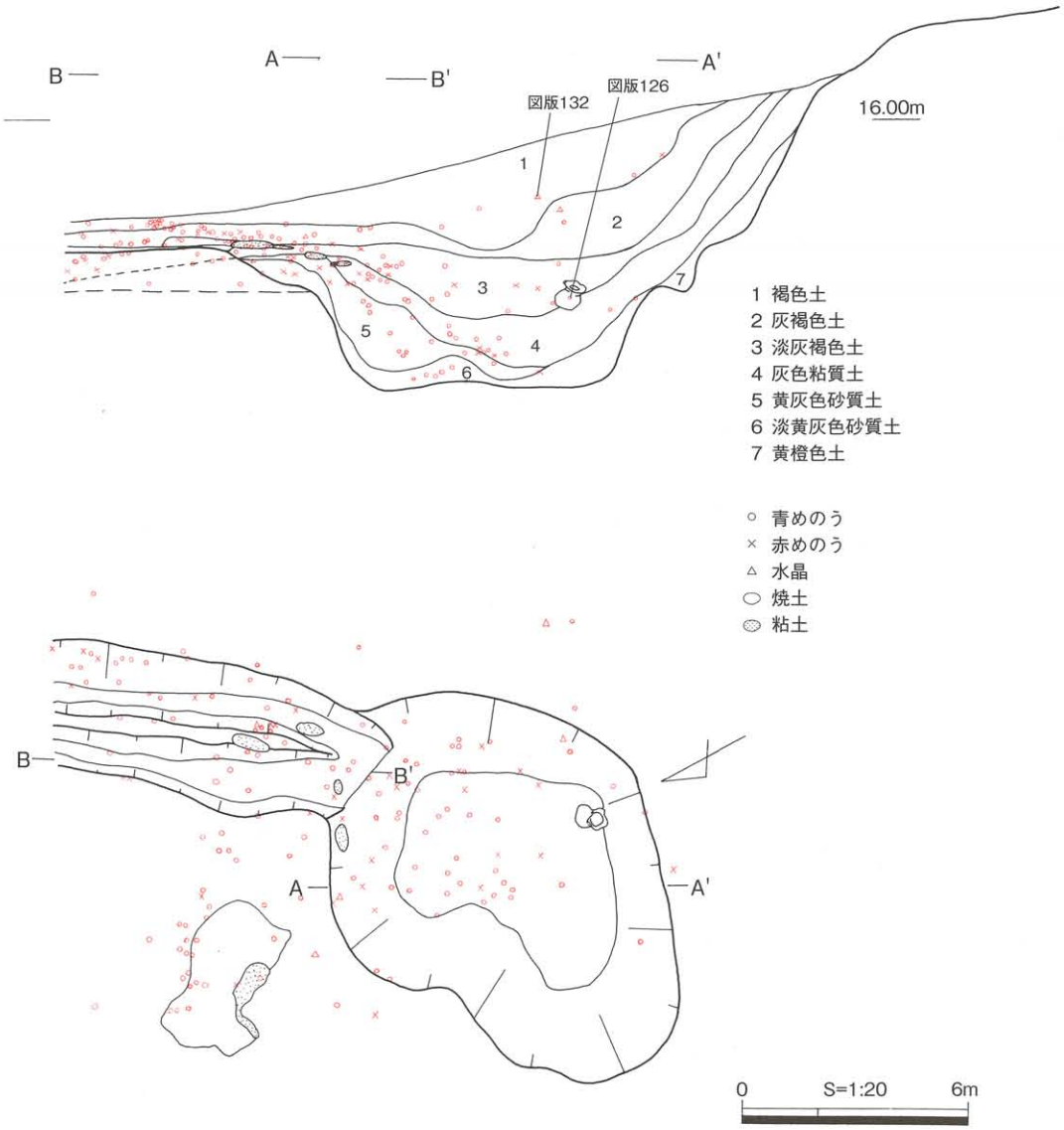
SK03からは土師器甕121～123、小型丸底壺124、高坏125などが出土した。

114の須恵器坏蓋はSK01の東隣のピットから出土し、127の小型丸底壺と128の高坏脚部は西南部



第38図　SI－14（玉作工房跡）平面図・断面図

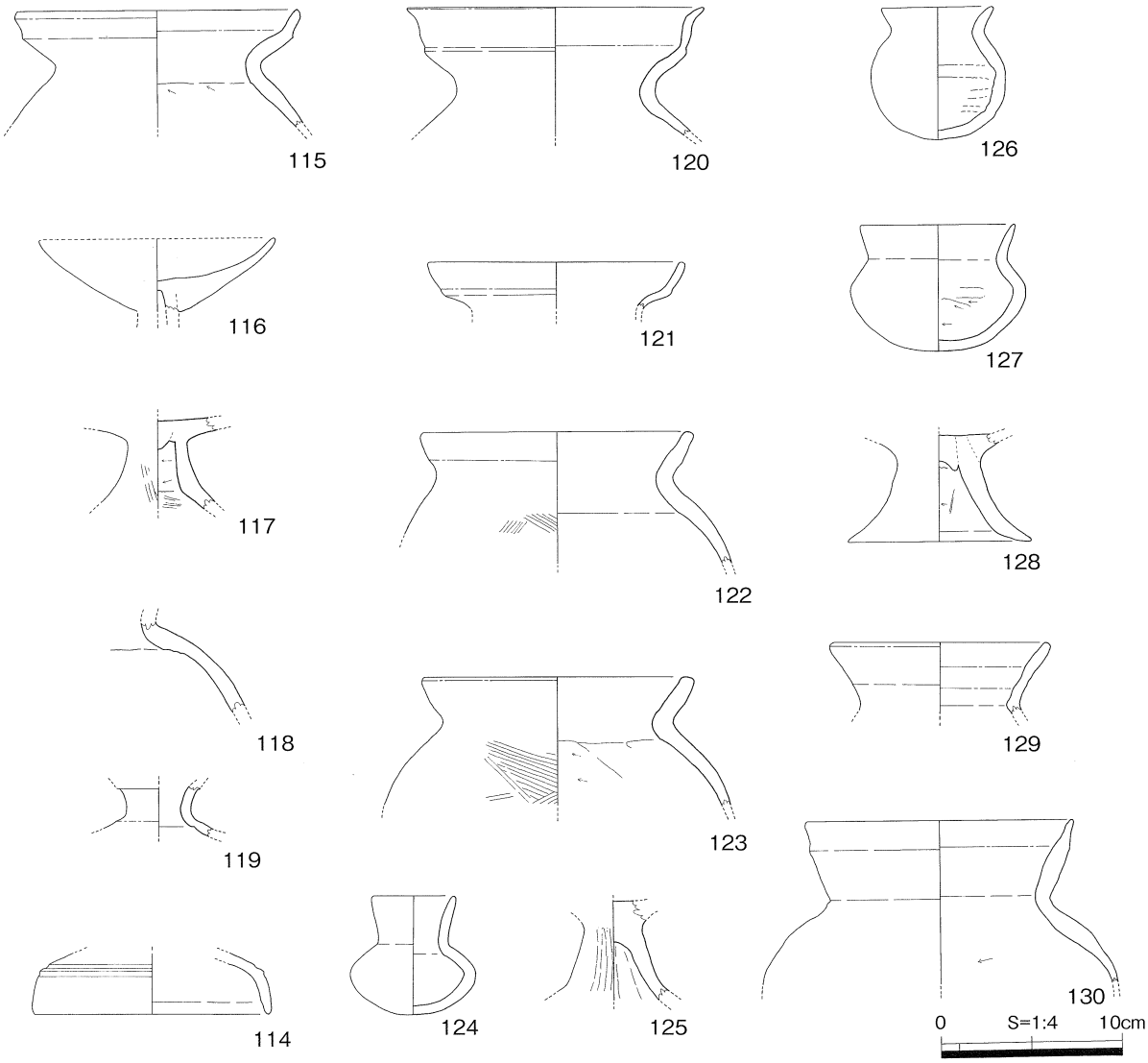
第39図　SI－14　遺物出土状況図



第40図　SI—14・SK01　遺物出土状況図

に残った段と溝の出土遺物である。

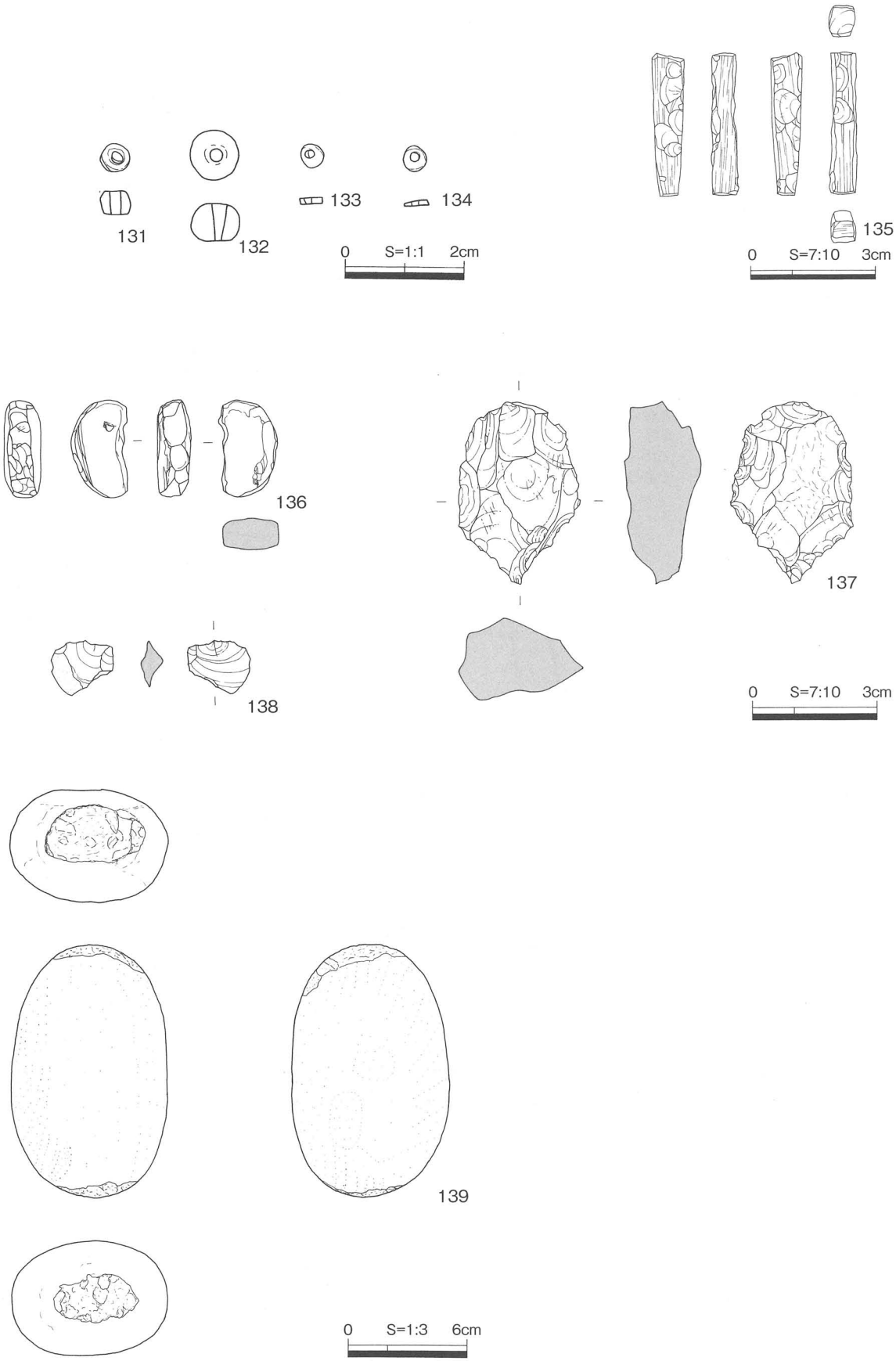
出土遺物（第41・42図）　115・120・121は退化した二重口縁の甕、122・123は口縁部が内湾気味に伸びる甕、130は二重口縁の特徴を痕跡的に残す甕で、いずれも松山Ⅱ～Ⅲ期頃[2]のものである。119の瓻頸部は、谷部包含層から出土した俵形瓻と同一個体と思われる初期須恵器である。124・126・127の小型丸底壺も松山Ⅱ～Ⅲ期頃のものである。114は須恵器の坏蓋で肩部に沈線による段を持ち、口縁端部内面に浅い沈線をめぐらす古墳時代後期のもので、竪穴廃絶後の混入物と考えられる。131のガラス小玉は直径5mmで透明な青色を呈するもの、132の水晶か石英の丸玉は直径8mmで不透明な白色を呈するもの、133・134の滑石製臼玉は直径4.5mm、厚み1mmと4mmのものである。135の碧玉製管玉未製品は7.5×6mm角、長さ3.45cmの1次研磨段階のもので、4側面と1端面を研磨しているが、剥離痕もかなり残している。136の赤瑪瑙製勾玉未製品も1次研磨段階のものである。半月形に調整剥離後、表裏に横と縦の研磨をしている。背部と腹部は部分的に研磨され、調整剥離痕が若干残っている。139の叩き石は火山岩製（安山岩か）で、長さ12.7cm、



第41図　SI－14　出土土器

幅7.9cm、厚み5.8cmを測り、両端に敲打痕が著しい。

SI－14の時期　出土土器から見ると松山Ⅲ期に廃絶したと考えられ、古墳時代中期後葉の建物跡である。



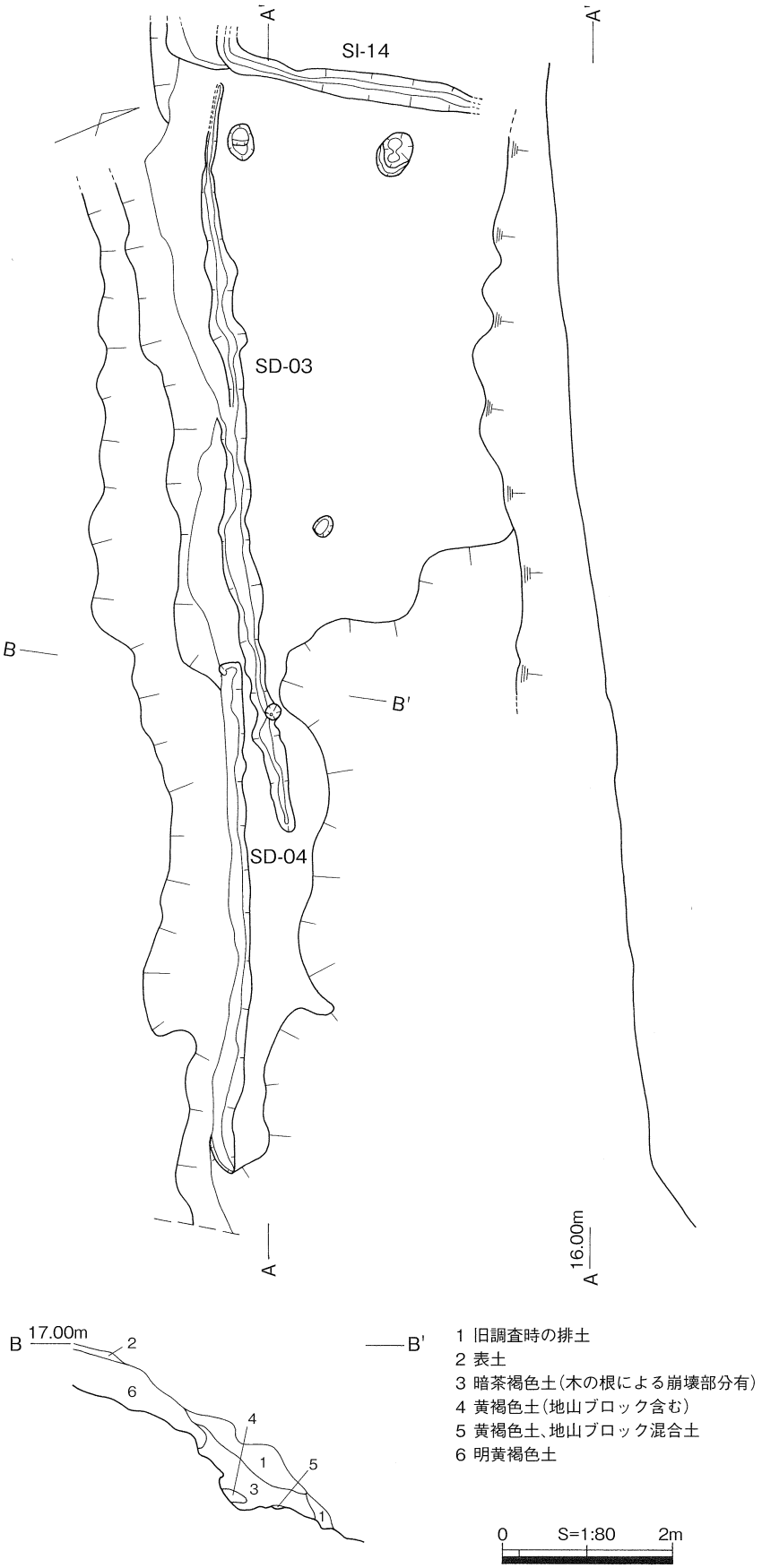
第42図　SI－14　出土石器・玉製品・未製品

SD－03・04（第43図）

位置・形態・規模　流水路南側斜面にて検出した２条の溝状遺構である。斜面を東西方向にカットした平坦面上に位置し、遺構面標高は約15.2mを測る。土層断面からは、SD－03の後にSD－04が作られたことが分かっている。

SD－03　SI－14の東側に隣接する溝で、長さ8.8m、幅20～40cm、深さ５～８cmを測る。SD－03が存在する遺構面は平坦に加工されていることから、建物跡が存在していたとも考えられるが、検出した柱穴に規則性が認められないため建物跡とは断定できず、隣接する玉作工房跡（SI－14）の作業スペース等の可能性も考えられる。遺物は埋土中から土師器の細片が出土しているが、詳細な時期については不明である。

SD－04　壁際に掘られた溝で、建物の壁体溝であった可能性が考えられるが、北東側の遺構面が流失しているため詳細は不明である。壁最大高は１m、溝の長さは６m、幅20～30cm、深さは３～５cmを測る。遺構面、埋土中からの遺物は出土していない。



第43図　SD－03・04　平面図・土層断面図

土器溜り１（第18図）

位置　SB－52の北西側斜面で検出された土器溜りで、標高16.6～17.2mを測る。

出土遺物・時期（第44図）　古墳時代前期～中期に限られ、須恵器は出土していない。140・141は二重口縁の壺である。140は口径15.2cmを測り口縁端部は外反する。器面調整は口縁部内外面は横ナデ、胴部内面はヘラ削りである。142は二重口縁の立ち上がりが低くなった段階の甕である。器壁は厚くなり、口縁先端が平坦面となる。143は布留系の甕である。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は内側でやや突起状に肥厚し丸くおさまっている。145・146は坏部が浅く、口縁が外反気味に開く高坏で、器面調整は風化のため不明である。148は坏部が浅い低脚坏で、口径13.4cmを測る。

土器溜り２（第18図）

位置　SI－14の検出面よりやや上方の南西側緩斜面で検出した土器溜りで、標高は16.5～16.6mを測る。包含層は灰褐色土で、SI－14の上層埋土と同様である。

出土遺物・時期（第45図）　土師器、須恵器が混在した状態で出土している。149～152は蓋坏類である。149は口径13cmを測る坏蓋で、器面調整は風化により不明である。150は口径12.2cmを測る坏蓋で、口縁端部を丸く仕上げ、天井部に回転ヘラ切り後ナデ調整を行う。153・154は須恵器の高坏である。153は底径10.6cmを測り、２方向透かしで脚端部に明瞭な面を持つ。154は底径11.8cmを測る。脚端部はわずかに外反し、２段２方向の透かしを施す。156は土師器の丸底鉢で口径13cm、器高10.1cmを測る。土器溜り２より出土した土器は須恵器等から、古墳時代後期後葉のものと思われる。

SB－53・54（第46図）

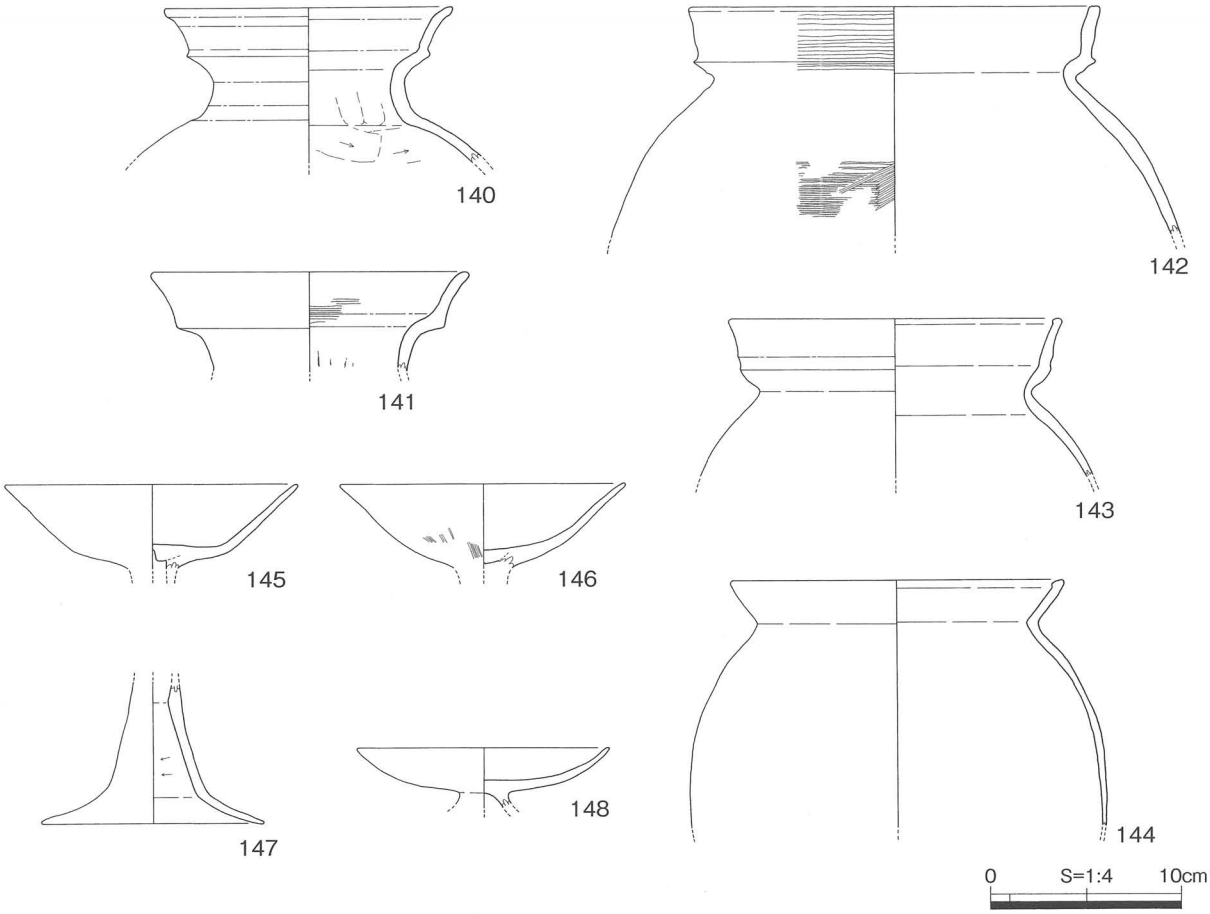
位置・形態・規模　谷の南側斜面の頂部、東西に延びる尾根の北向き斜面に位置し、標高24.5～24.6mを測る。重複する掘立柱建物跡で、土層断面の新旧関係からSB－53が新しいものと考えられる。

SB－53　SB－54の後に、壁際及び床面を若干盛土整形して作られた、溝を伴う加工段状の建物跡である。北側の遺構面は流失しているため詳細は不明であるが、桁行は現状で２間（3.6m）を測る。ピット（Ｐ１～３）は上端径20cm、深さ15～30cm、柱穴間は1.8～1.9mを測り、Ｐ３は他に比べ深い。

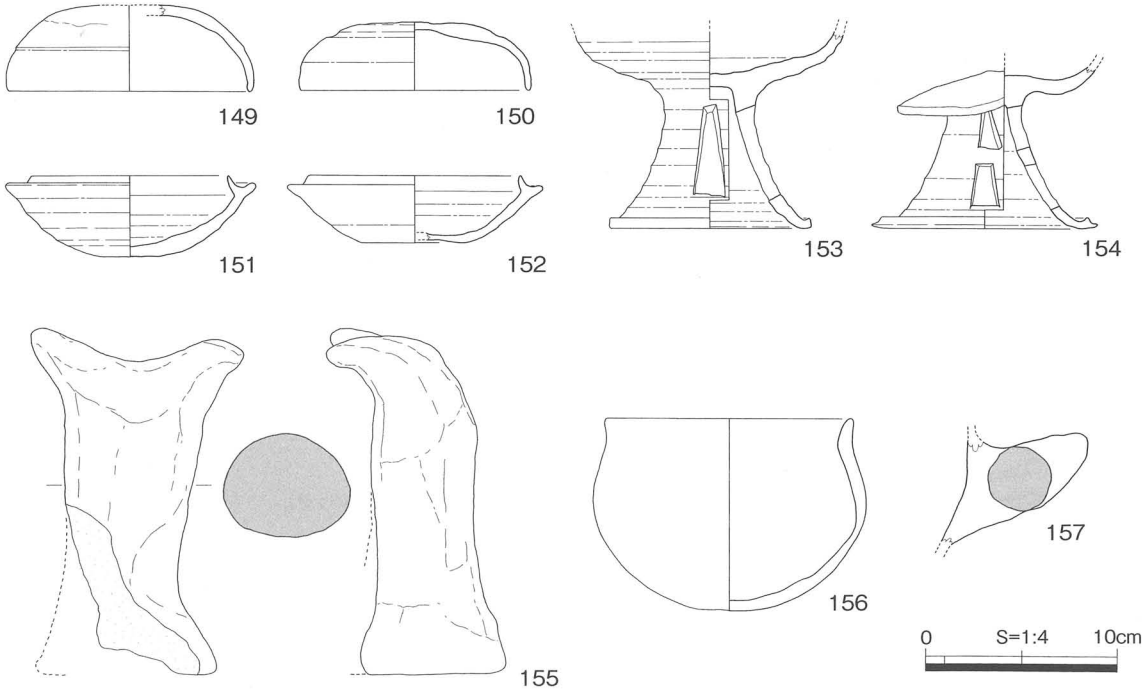
遺物出土状況　埋土中から古墳時代後期の須恵器の坏蓋158・高坏159が出土している。また上層の堆積土中からは、須恵器の高坏、陶磁器片、竿秤が出土している。

出土遺物・時期（第47図）　158は坏蓋で口径12.8cmを測る。天井部の最外周にわずかにヘラ削りの痕跡が見られ、出雲Ⅳ期末のものと思われる。159は高坏の坏部で口径15.2cmを測る。160は口径8.7cm、器高8.95cmを測る高坏で、坏部に３条の沈線をめぐらせ、脚部に切れ目状の透かしと円孔を１ヶ所ずつ施す。出雲Ⅳ期末～Ⅴ期のものと思われる。161は布志名焼の碗である。162は長さ７cmを測り、先端にかえりが見られないことから、竿秤の一部と思われる。

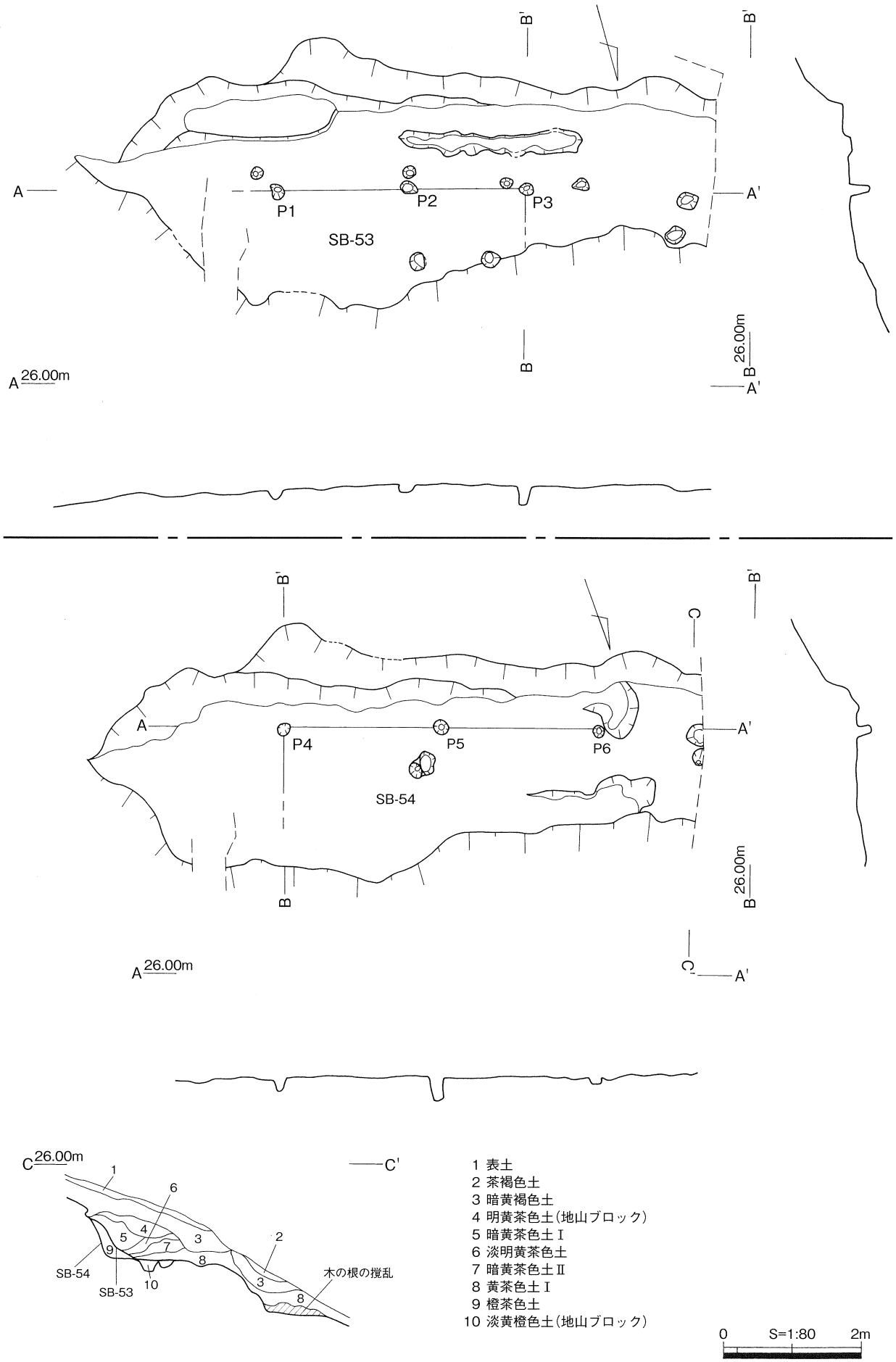
SB－54　SB－53以前に、地山面を平坦にカットして作られた加工段状の建物跡である。建物に伴う溝は確認できなかったが、53と同様、掘立柱建物跡が存在していたと推測される。桁行２間（4.5m）を測り、梁間の柱穴は検出していない。遺物は第９層から土師器の甕片が出土しているが、詳細な時期については不明である。



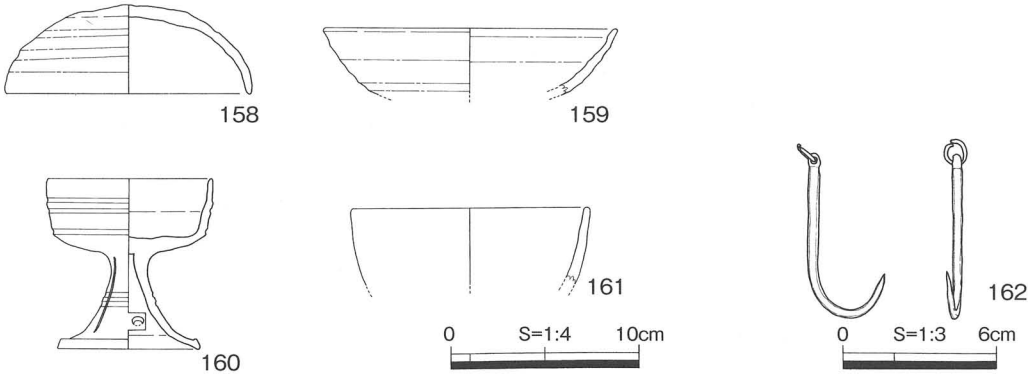
第44図　土器溜り１　出土土器



第45図　土器溜り２　出土土器



第46図　SB－53・54　平面図・断面図・土層断面図



第47図　SB－53　出土土器・鉄製品

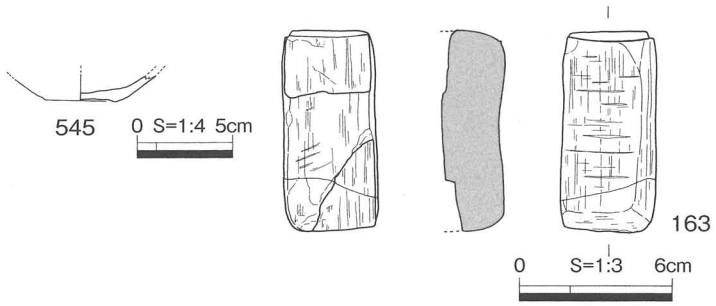
SB－55－1・55－2（第49図）

位置　SB－55－1・55－2はSB－53・54からやや下った斜面から検出した、重複する建物跡である。斜面を平坦に加工して作られた掘立柱建物跡で、床面標高は20.0mを測る。なお、この両者は同じ遺構面に存在するが、前後関係を明確にすることはできていない。

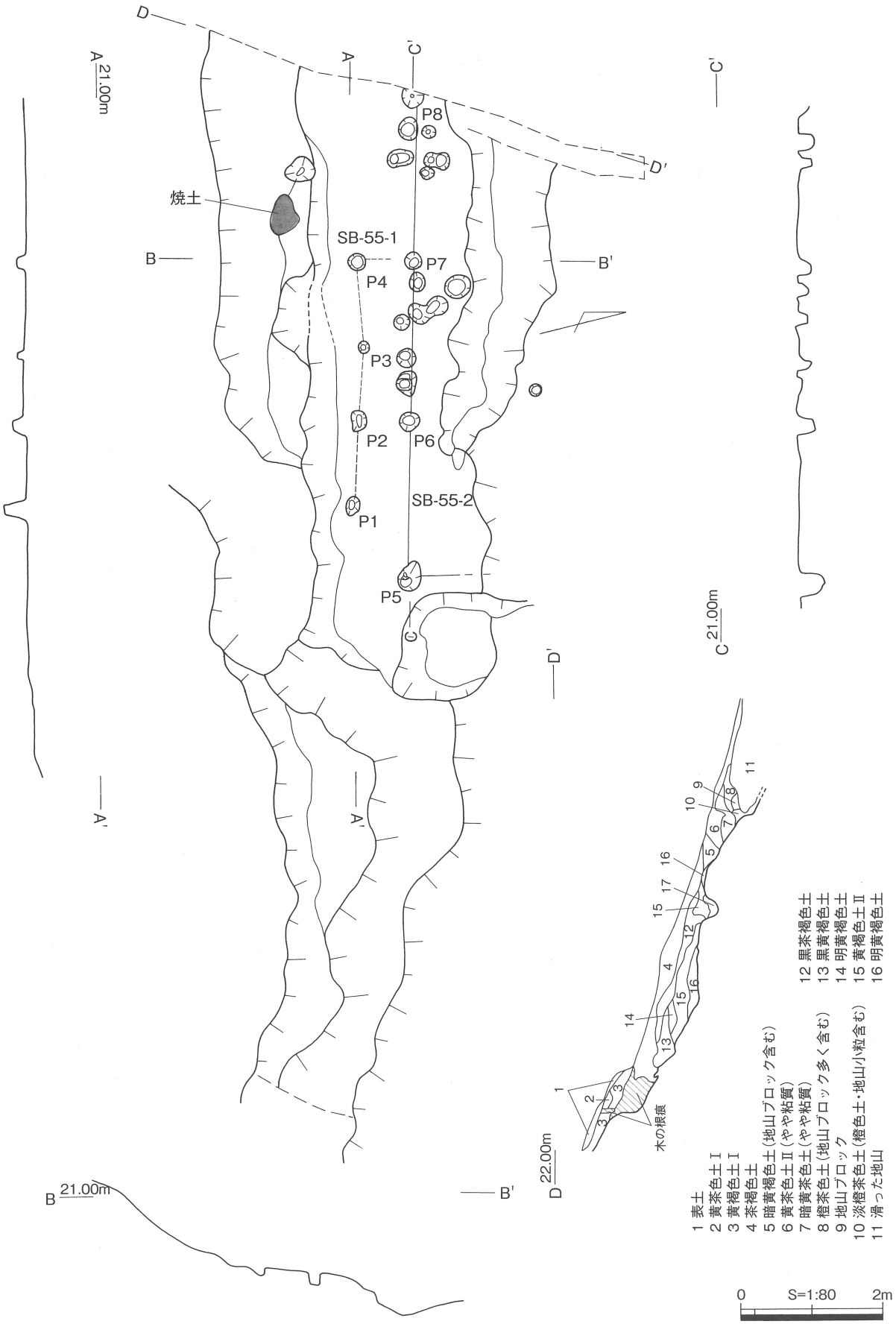
SB－55－1　直線上に並ぶピット4穴で構成される建物跡で、桁行は現状で3間（3.5m）を測る。検出したピットの深さは10～20cmと浅く、柱穴間距離は1.0～1.2mを測るものである。柱穴間距離が他の建物跡と比べ狭いことから、建物跡ではない可能性も否定できない。

SB－55－2　現状で桁行3間（6.8m）を測る建物跡である。梁間は流失のため検出できていない。ピット（P5～8）は上端径25～40cm、深さ20～25cm、柱穴間2.2～2.3mを測り、壁体溝は検出されなかった。また、南側の壁体付近に焼土を検出したが、遺構に伴うものかは不明である。

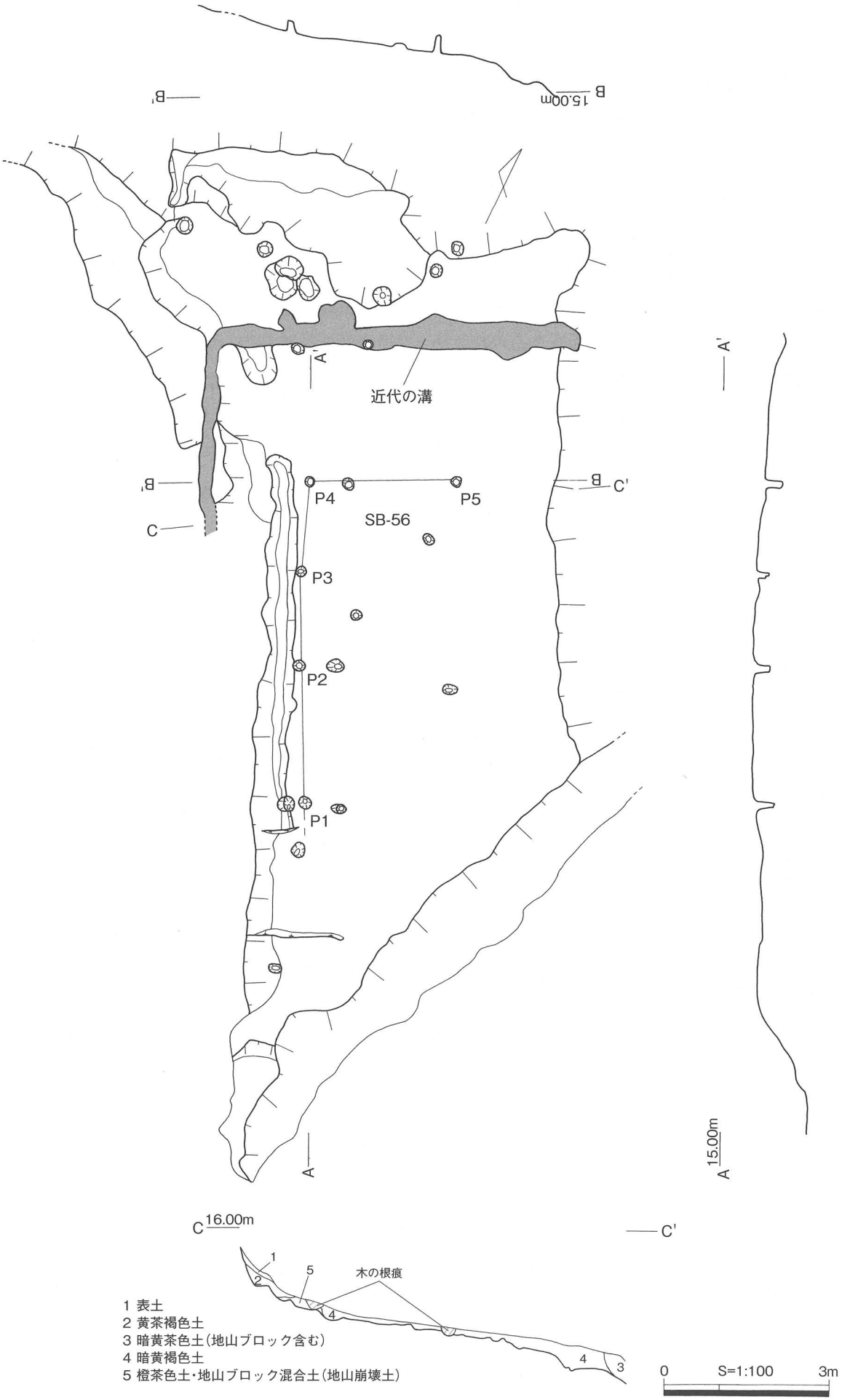
出土遺物・時期（第48図）　埋土中から7.9×3.8cmの珪化木の砥石163が出土している。その他、遺構面が流失している北側の斜面より、平安時代後期～中世の底部にわずかな回転糸切り痕を残す土師質土器の坏545が出土している。



第48図　SB－55－2　出土土器・石器



第49図　SB－55－1・55－2　平面図・断面図・土層断面図



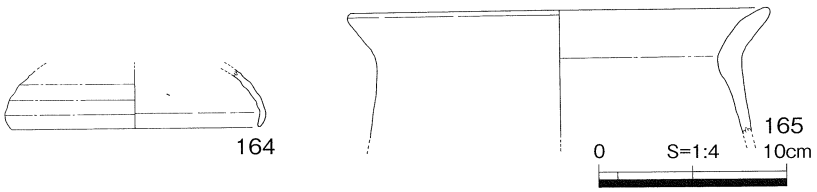
第50図　SB—56　平面図・断面図・土層断面図

SB－56（第50図）

位置・形態・規模　谷の南東側、東向きの斜面に位置し、標高14.3mを測る。地山面を平坦に加工して作られた掘立柱建物跡で、壁際に浅い溝が掘られている。桁行３間（5.8m）×梁間１間（2.6m～）以上を測り、ピット（Ｐ１～５）は上端径20cm、深さ20～30cm、柱穴間はＰ２～４が1.7m、Ｐ１～２・Ｐ４～５が2.6mを測る。

遺物出土状況（第51図）　溝内から奈良・平安時代の土師器甕片165、黒曜石片、遺構面上１層の暗黄褐色土から土師器片、須恵器坏蓋片164が出土している。また遺構面東側の斜面からは、平安時代の土師質土器も出土している。

他にSB－56の北西側において直角に延びる溝を確認したが、この溝は調査前の表土面からその形状が確認されており、近年の畑作等に伴うものと思われる。

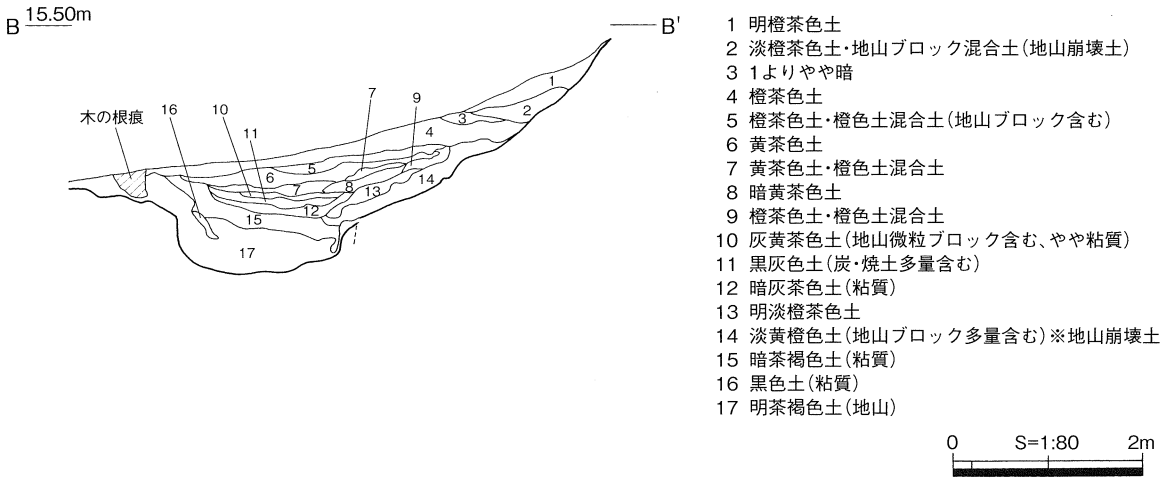


第51図　SB－56　出土土器

溝状遺構（第18・52図）

位置・形態　溝状遺構はSB－56の南東側に位置し、平坦面を東西に分断する形で南北方向に掘られた大形の溝である。断面形は緩い半円形を呈し、東側の急斜面で終息するものと推測される。また、溝状遺構内及びその南東側からの遺構は確認されていない。土層断面図15層下面が底面で、17層は地山である。11層は炭・焼土・礫を多く含む黒灰色土で、陶磁器や砥石が出土している。その他の土層からは、少量の陶磁器などが出土している。

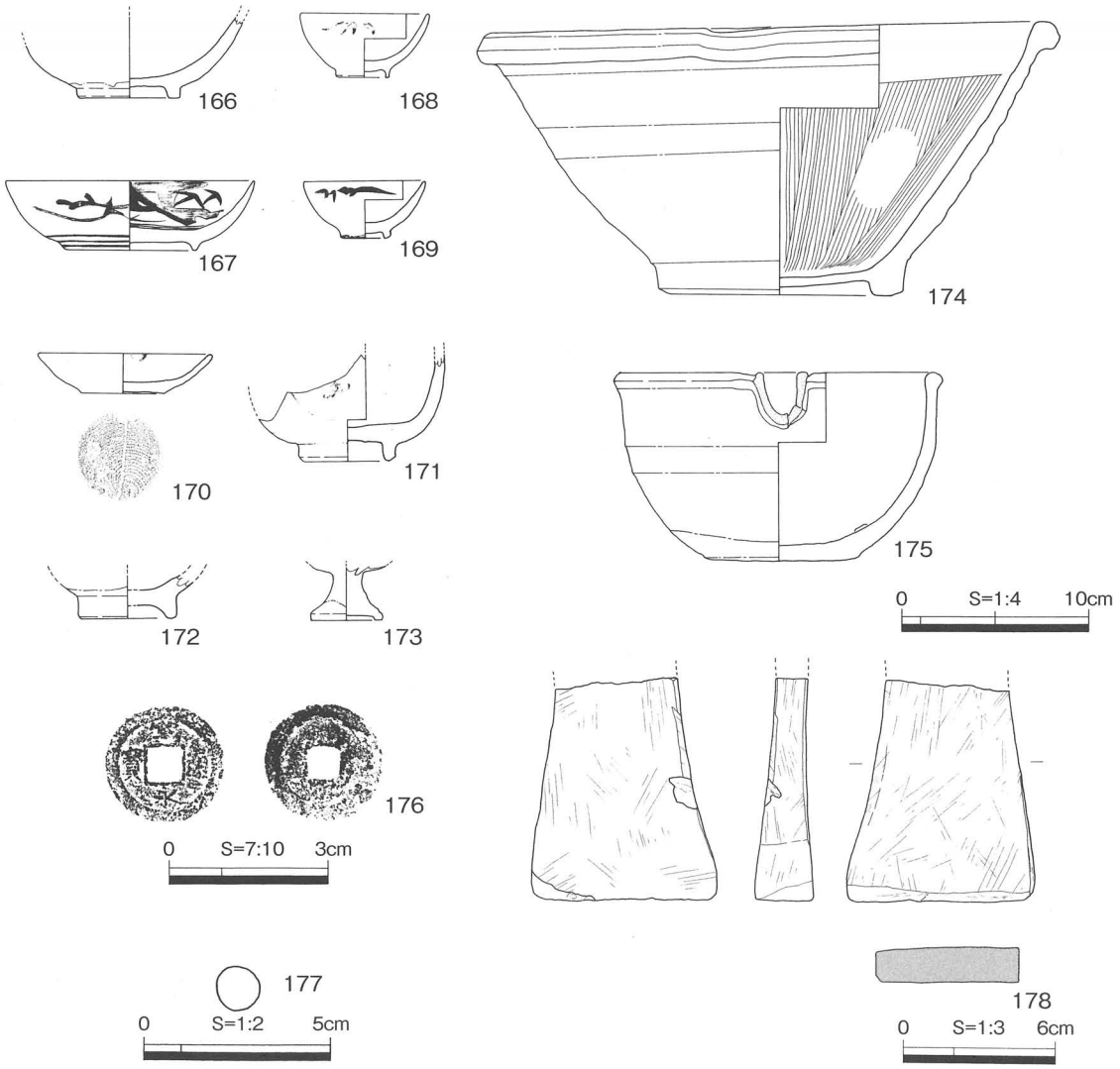
出土遺物・時期（第53図）　166～169・174～178は11層出土遺物である。166は陶器製平碗で、内外面共に緑青色釉を施すが、高台部分には掛かっていない。見込み部分に文字のようなものが見えるが不明確である。近代以降の布志名焼と思われる。167は染付けの磁器製皿で、見込み部分に花弁、内外面に笹の模様が描かれている。高台端部に目砂が見られる。168・169は染付けの磁器製小碗



第52図　溝状遺構　土層断面図

で、内外面に笹の模様が描かれている。高台端部には目砂が見られ、168の方がやや大振りである。174は陶器製の摺鉢で、内面に摺目（１単位18本）、内外面に釉薬が施されている。口縁端部は玉縁状を呈し、内面に重ね焼きと思われる痕跡が残る。175は陶器製の片口鉢で、緑青色の釉薬が施され口縁端部は玉縁状を呈する。見込み部分には重ね焼きのための胎土目が５つ残っており、布志名焼と思われる。176は寛永通宝（古寛永）、177は直径1.2cmの火縄銃（三匁筒）玉である。178は玄武岩の砥石で片方は破損している。４側面に多方向の使用痕が見られ、やや弓なり状になっている。170～173は11層より上層埋土及び周辺からの出土遺物である。170は土師質土器の皿で、底部に回転糸切り痕が見られる。口縁部に油煙痕が２ヶ所見られることから、灯明皿として使用されたものと思われる。171は陶器製丸碗で、全体に貫入が見られ、高台端部に目砂が見られる。172は磁器製の仏飯器の脚部と思われる。

この溝状遺構は11層から出土した遺物に近代のものが含まれていることから、近代もしくはそれよりやや古い時期に掘られ、埋まったものと思われる。



第53図　溝状遺構　出土遺物

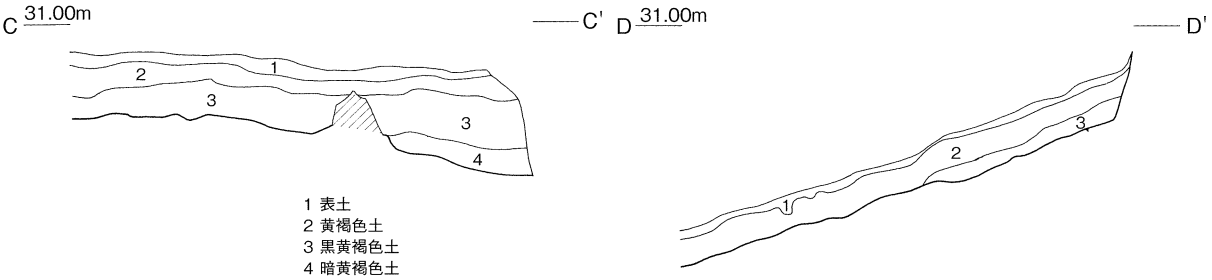
2．自然流水路の調査

位置・形態　谷部西側斜面上部に源を持ち、流域各所の湧水や雨水の作用によって作られた自然流水路１は、時代ごとに形・深さを変えて、A遺跡のほぼ中央部を地形の傾斜に従い西から東に流下している。自然流水路２は流水路１よりも西南上部斜面に源を発し、約15m下って流水路１に合流する流れである。これらは北斜面・南斜面の遺構を削り、遺物を包含して谷底を埋め尽くしていた。以下上流から下流へ向けて記述を進める。

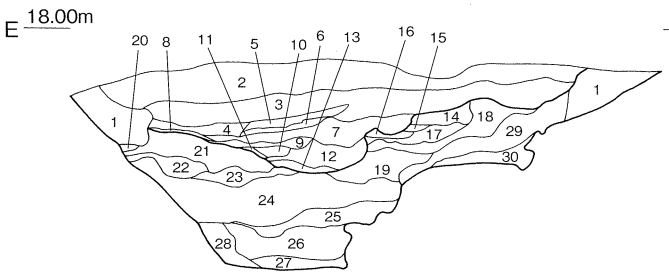
自然流水路２南側緩斜面（第18図）

規模　自然流水路２は幅１～2.5m、深さ0.5～1.5cm、長さ15m余りのものである。その南～南西側緩斜面のうち開発にかかる範囲も調査を行った。

堆積土層と遺物出土状況（第54上図）　南側緩斜面の堆積層は第１層表土、２層黄褐色土、３層黒黄褐色土、４層暗黄褐色土の順に堆積し、３層と４層に遺物を包含していた。３層の堆積状況は北西側に厚く、南東部には見られなかった。この緩斜面上３層では弥生時代前期末～中期初頭の壺や甕180・183～185が出土したが、調査範囲内に同時期の遺構は見当たらなかった。同層の堆積の厚い南西側上部に、遺構の存在する可能性が高いものと考えられる。流水路内はこの３層と黒褐色土層が大部分を占めており、やや下流から同時期の壺181が出土している。４層は流水路の肩近くから流水路内下部に堆積した礫を多量に含む層である。出土遺物は３層に比べて少量で、179の石鏃、土器で形のわかるものは182の甕がある。



自然流水路2　南側緩斜面



自然流水路1

1 カクラン土
2 橙灰褐色土Ⅰ(橙色微粒、炭含む)
3 茶灰褐色土(橙色微粒、炭含む)2より灰色土多
4 3に灰色土多
5 3に橙色微粒多量に含む
6 暗灰色砂質土Ⅰ(橙色微粒少々含む)
7 暗灰色土Ⅰ(橙色微粒少々含む)(炭含む)
8 橙灰色土(橙色微粒多量含む)
9 暗灰色砂質土Ⅱ(橙色中粒含む)
10 暗灰色砂土Ⅲ(橙色白色小粒含む)
11 暗灰色砂質土Ⅳ(橙色小粒含む)
12 黒灰色砂質土Ⅰ(炭含む)
13 黒灰色砂質土Ⅱ(橙、青色微粒含む)(炭多量含む)
14 暗橙灰褐色土(橙色微粒多く含む)
15 7よりやや暗
16 黄橙灰色土(黄橙微粒含む)(炭含む)
17 暗灰色土Ⅱ(橙色微粒少々含む)
18 橙灰褐色土Ⅱ(橙色中～大粒多く含む)
19 黒灰色土(橙色小～中粒含む)
20 黄褐色粘質土
21 暗茶灰褐色土(橙色微粒多く含む)(炭含む)
22 黒灰色砂質土Ⅲ(橙色微粒含む)
23 青灰粘質土
24 黒青灰粘質土Ⅰ(橙色小粒含む)(炭含む)
25 黒青灰粘質土Ⅱ(明青灰色土ブロック含む)
26 黒灰粘質土(明青灰色土ブロック含む)
27 青灰色土、黄橙色土混合土
28 灰色粘質土(黄橙色ブロック含む)
29 黒灰褐色土(橙色微～小粒含む)
30 淡灰色粘質土(黄橙色小～中粒ブロック多量含む)
31 淡明黄橙色土(地山)
32 淡明青色土(地山)
33 明黄橙色土(地山)

0　S=1:80　2m

第54図　自然流水路２南側緩斜面・自然流水路１　土層断面図

出土遺物（第55・56図）　179は黒曜石製の凹基式石鏃で先端部と基部の片側を欠損している。180は頸部に１条の突帯を、181は胴部に２条の突帯をめぐらす壺である。182は頸部以下に櫛描平行線文と三角形の刺突文を施す甕、183は口縁部がわずかに外反し、184は口縁端部が肥厚して上に平坦面を持ち、胴部に刺突文をめぐらす甕である。185は口縁部で明確に外反し、肥厚気味である。これらはいずれもⅠ－４～Ⅱ－Ⅰ様式のものである。

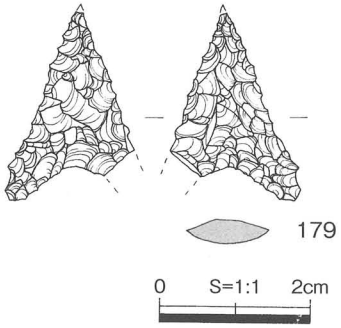
自然流水路１（第18図）

規模　自然流水路１は全長70m余り、深さは谷中央部のE－E'ラインで約２mあり、断面形状はV字に近い逆台形状を呈する。堆積土中には多量の遺物を包含しており、土器片、石製品を合わせてコンテナ約170箱が出土している。

堆積土層と遺物出土状況（第54下図）　E－E'ラインから下流側５mの範囲で土層堆積状況を精査し、土層ごとに遺物の取り上げを行った結果、このE－E'ライン付近での流水路１は大きく３時期に分けられ、その形状・レベルを変化させ流れていたことが確認できた。最初の流れは地山を削って流れた跡であり、この堆積土の中・下層（24～28層）からは古墳時代前期～中期の土器が限定して出土している。この最古期の流れは、古墳時代中期までその形状・レベルで存在していたものと推測される。次に大別される流れは、古墳時代前期～中期の土器を包含する堆積層の24層を基盤とする流れである。断面形は幅広の逆台形状を呈し、その堆積層である17～19層、21～23層からは古墳時代後期～平安時代前期頃の遺物が出土している。この次の流路は、これらの堆積層の中央部をえぐるように流れたものである。この流路の堆積土下層（12・13層）からは平安時代後期の土師質土器が多く出土しており、最古期流路より１m底面が上がり、幅も狭くなっていたことがわかる。なお、上層堆積土中の出土遺物には、平安時代後期以降のものは見られなかった。

12・13層出土遺物（第57図）　189は退化した二重口縁の甕で古墳時代中期のもの、190・192・194は単純口縁の甕で古墳時代後期以降のもの、191は丸底壺、193は小型の土師器甕である。195～200は土師質土器である。195～198は高台付坏で高台は「ハ」の字状に高く伸び、体部は内湾する。199は無高台の坏、200は無高台の坏である。これらの土師質土器は平安時代後期（11～12世紀）のものと考えられる。201は長さ3.15cm、最大径1.35cmの土錘である。

17～19層・21～23層出土遺物（第57図）　202は須恵器壺の口縁部で端部を大きく引き上げるもの、203は須恵器高坏で２方向透かしを持つもの、204は須恵器平瓶で胴部最大径に突帯をめぐらし、手持ちヘラ削りの把手を貼付する。205は須恵器直口壺、206は土師器高坏で坏部は内湾し、脚部に３方向の円形透かし孔を持つもの、207は土師器の丸底壺で外面ハケ目、内面ヘラ削りで調整されるもの、208は須恵器の坏身で、底部に回転ヘラ削りを施す出雲Ⅳ期のものである。遺物の時期は202・204が９～10世紀頃、203・205・207・208が６世紀後半～７世紀前半と考えられる。



第55図　自然流水路２南側緩斜面出土石器

24～28層出土遺物（第58・59図）　209～212・214・215・217・218は二重口縁の甕で、これらのうち217・218は二重口縁の退化した古墳時代中期のもの、それ以外は前期のものである。213は頸部に突帯をめぐらし、二重口縁部が大きく外反する壺、216は

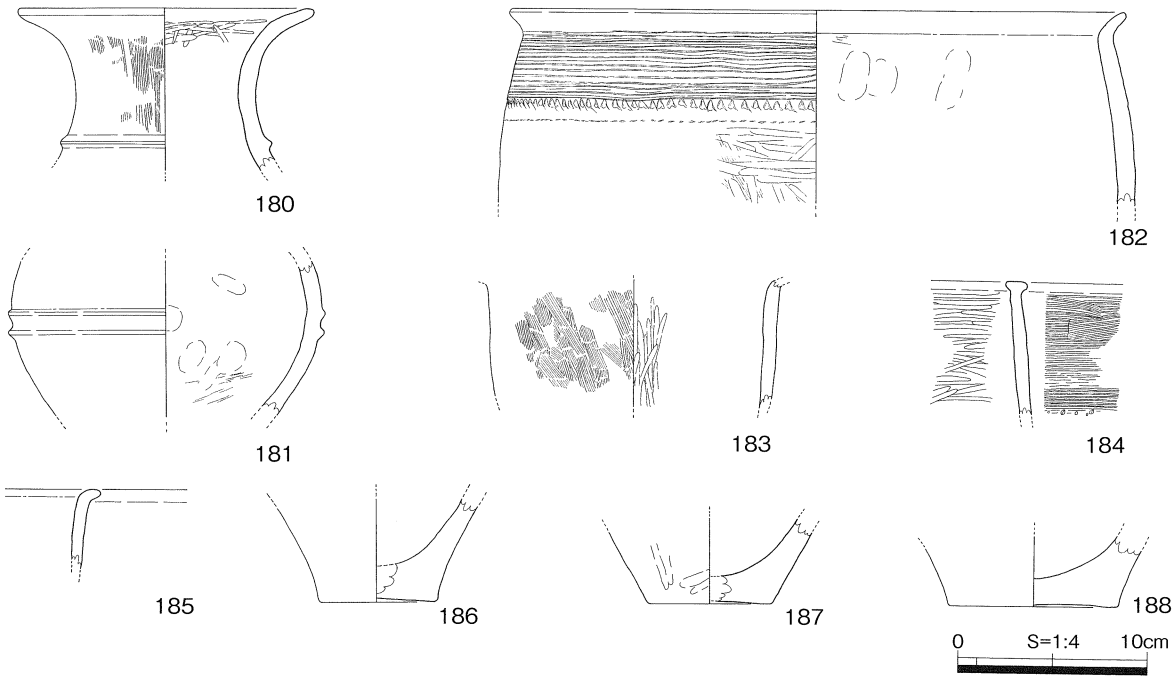
大きく張る肩部に羽状文をめぐらす壺で、いずれも古墳時代前期のものである。219は口縁部外面に若干のアクセントを持つ甕、220は「く」の字に屈曲する口頸部を持ち、口縁端部を肥厚させる甕、221・222は小型甕、223・224は小型丸底壺で、これらはすべて古墳時代中期のものである。225～229は土師器高坏で、225以外は須恵器の出雲Ⅰ期に併行する古墳時代中期後葉のものである。230は土師器の坏、231は手捏ねの小型坏で、赤色顔料が塗布されている。232は器台であるが筒部の段がなく、受部と台部が「く」の字状に連続して繋がるものである。233・234は鼓形器台、235～237は高坏脚部、238は甑、239は把手付坏で突帯２条と波状文を施す初期須恵器である。240は土製支脚、241は耳環で銅環に金の薄板を巻いたものと思われ、ごく一部に金が残っている。242は滑石に近い石材で作られた3.4×3.1cm、厚み４mm大の有孔円盤である。

谷底部出土遺物（第60～67図）　自然流水路下流部の堆積層から出土した遺物は、弥生土器・土師器・土製品・須恵器・土師質土器・石器・玉作関係遺物（瑪瑙製遺物・碧玉製遺物・水晶製遺物・玉砥石）などがあるが、土層ごとの記述は煩雑になるため、遺物の種別ごとに報告するものとする。

弥生土器（第60図）　243は谷底東端の最下層で出土した甕で、口縁端部は上下に拡張し外面に凹線文と刻み目、頸部に指頭圧痕文帯、肩～胴部最大径付近に３段の刺突文を施す中期後葉の甕である。244は口縁部が緩く外反し、端部に刻み目を施す前期末～中期初頭頃の甕、245～248は３mm前後大の大粒砂粒を含む底部片である。

土師器・土製品（第61図～第67図）

壺　249～254は二重口縁の壺である。頸部の長いもの、頸部が締まり肩部の張るものを壺とした。口頸部の形態は変化に富んでいる。口縁部については、大きく広がる249、直立気味の250、口縁端部に斜めの面を持つ251、口縁部内面に段を持たずに伸び、端部の折れ曲がる252などがあり、頸部については、円筒状に長い249・251、頸部がよく締まり肩部の張る250・252～254などがある。



第56図　自然流水路２南側緩斜面　出土土器

250・254の肩部には羽状文が施され、254にはさらに竹管文も施されている。いずれも古墳時代前期のものと思われる。

甕　255～262は二重口縁の甕である。口縁部は外傾して比較的高く伸びるもので、端部に平坦面を持ち、複合部は突出する。いずれも古墳時代前期に属する。263～285は単純口縁の甕である。263～267は「く」の字状の口頸部を持ち、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が内側に傾く面をなすもので、布留中段階、古墳時代前期のものと考えられる。268～273・277も口頸部が「く」の字状を呈するが、口縁部は外傾して伸びるもので端部は尖り気味か丸く終わる。肩部はよく張り、胴部は球形を呈する。274～276は甕の肩～胴部に線刻を施すものである。276は抽象的な文様のパターンの繰り返しが想像できるが、他のものは何を表現しているか不明である。278～280も口頸部が「く」の字状を呈するものの、肩の張りが若干弱くなるものである。以上268～280は古墳時代中期に属するものと思われる。

281～284は口縁部が外反して伸び胴部の張りが少ないもの、285は口縁部がわずかに外反し胴部の全く張らないもの、286は口縁部が直立するもので、いずれも古墳時代後期以降のものである。

直口壺・小型丸底壺　287は丸底壺、288～292は直口壺、293は内外面に赤色顔料を塗布する把手付の壺、294は頸部に1条の突帯をめぐらす小型壺である。295～304は小型丸底壺で、底部に対して口縁部が小さく、外方に伸びる古墳時代中期のものである。

鼓形器台　305～309は鼓形器台で、筒部は縮約し受部内面はヘラミガキ、台部内面にはヘラ削りが施されている。

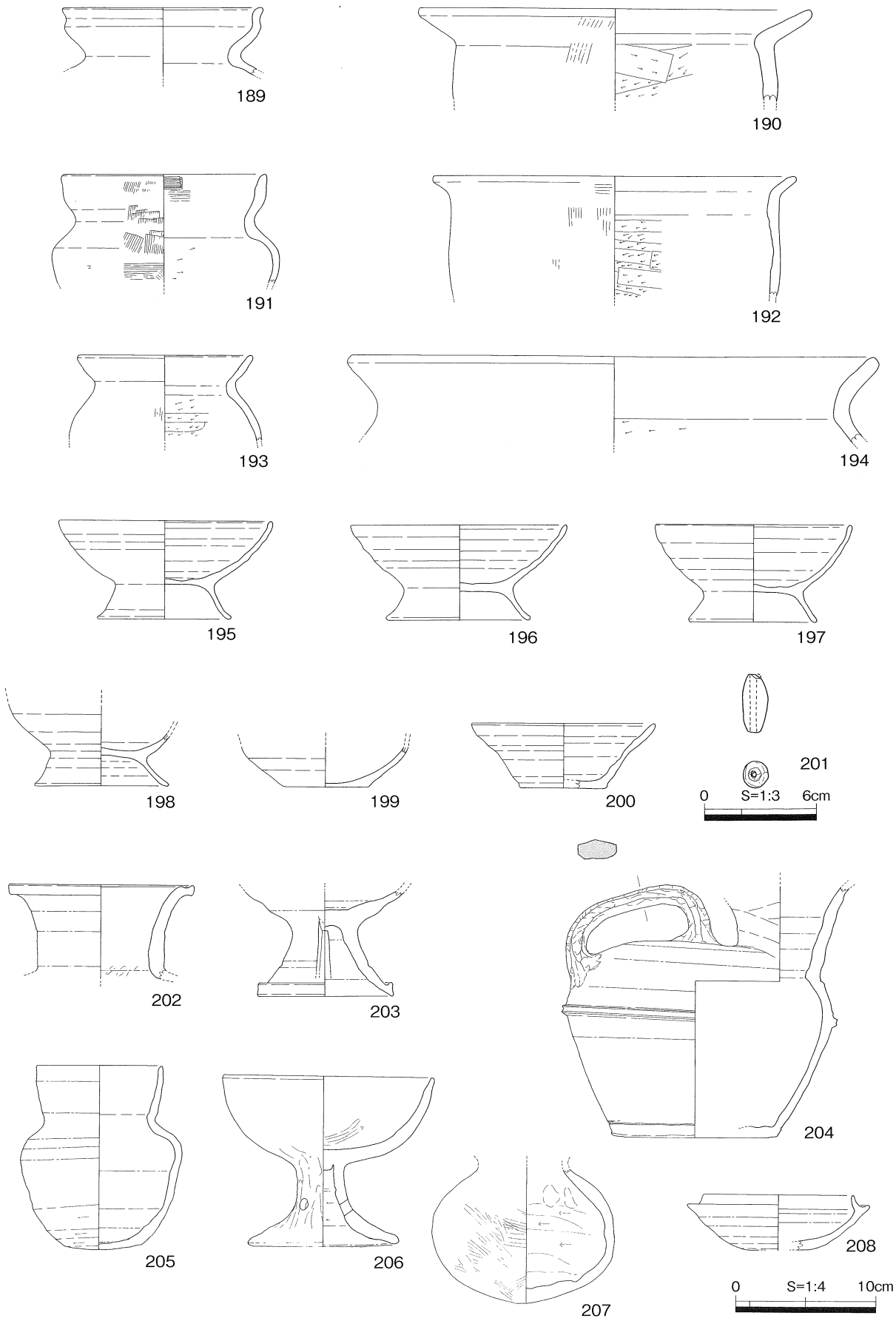
低脚坏　310～315は低脚坏で、坏部を欠損するものが多いが、脚部の形態から大きく開く坏部を持つ古墳時代前期のものと考えられる。

瑕形土器　316は土師質の瑕形のもので、最大径より上に円孔を持つ。円孔の周りには穿孔以前に作った平坦面が観察でき、胴部の外面にはヘラミガキとナデが施されている。口縁部は欠損しており形態不明である。須恵器の瑕を模倣したものと思われる。

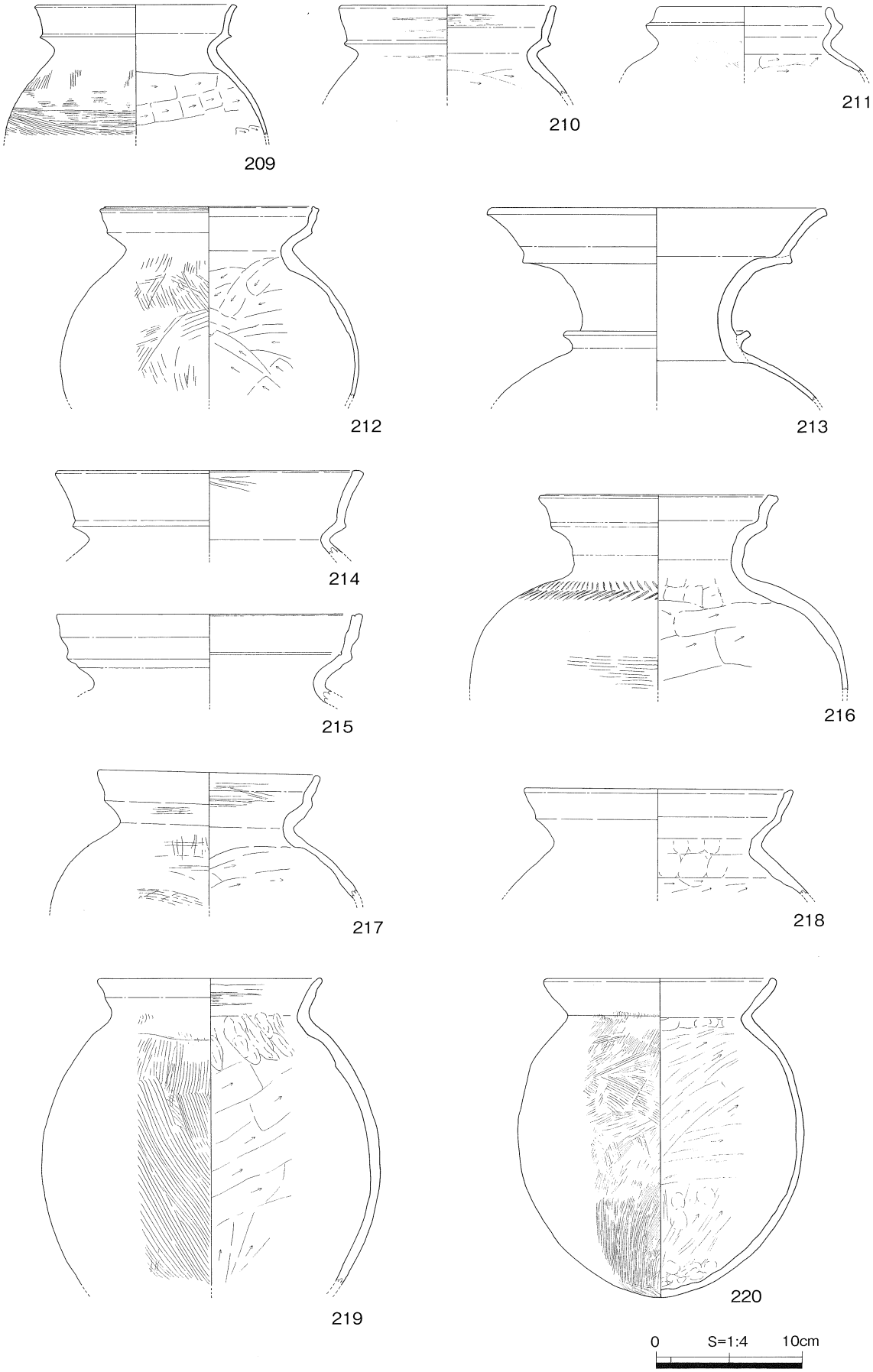
高坏　317～336は高坏で、このうち317～324は口縁部と体部の境に段を持つもの、325～331は口縁～体部が緩やかに繋がるもの、332・333・336は半球形の坏部を持つものである。

甑・竈・土製支脚　337～340は甑で、口縁部が外反して伸びるものが多く、口縁部は横ナデ、外面は縦ハケ、内面はヘラ削りが施される。341は竈、342・343は土製支脚である。

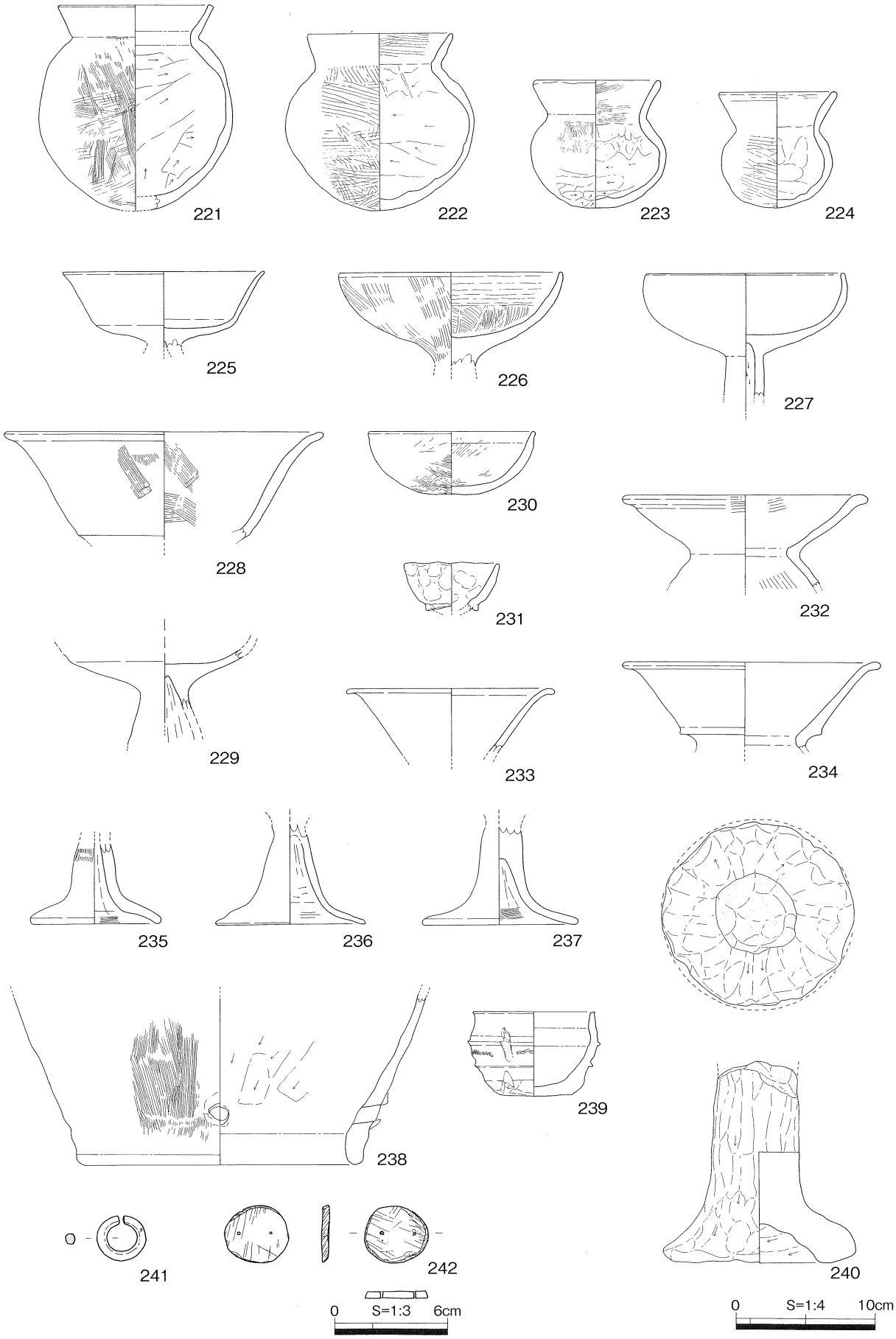
その他　344・345は紡錘車で、344の上面には星形文様が線刻されている。346は紡錘形の土錘である。347は小形の高坏の坏部で、348は縄文土器片である。



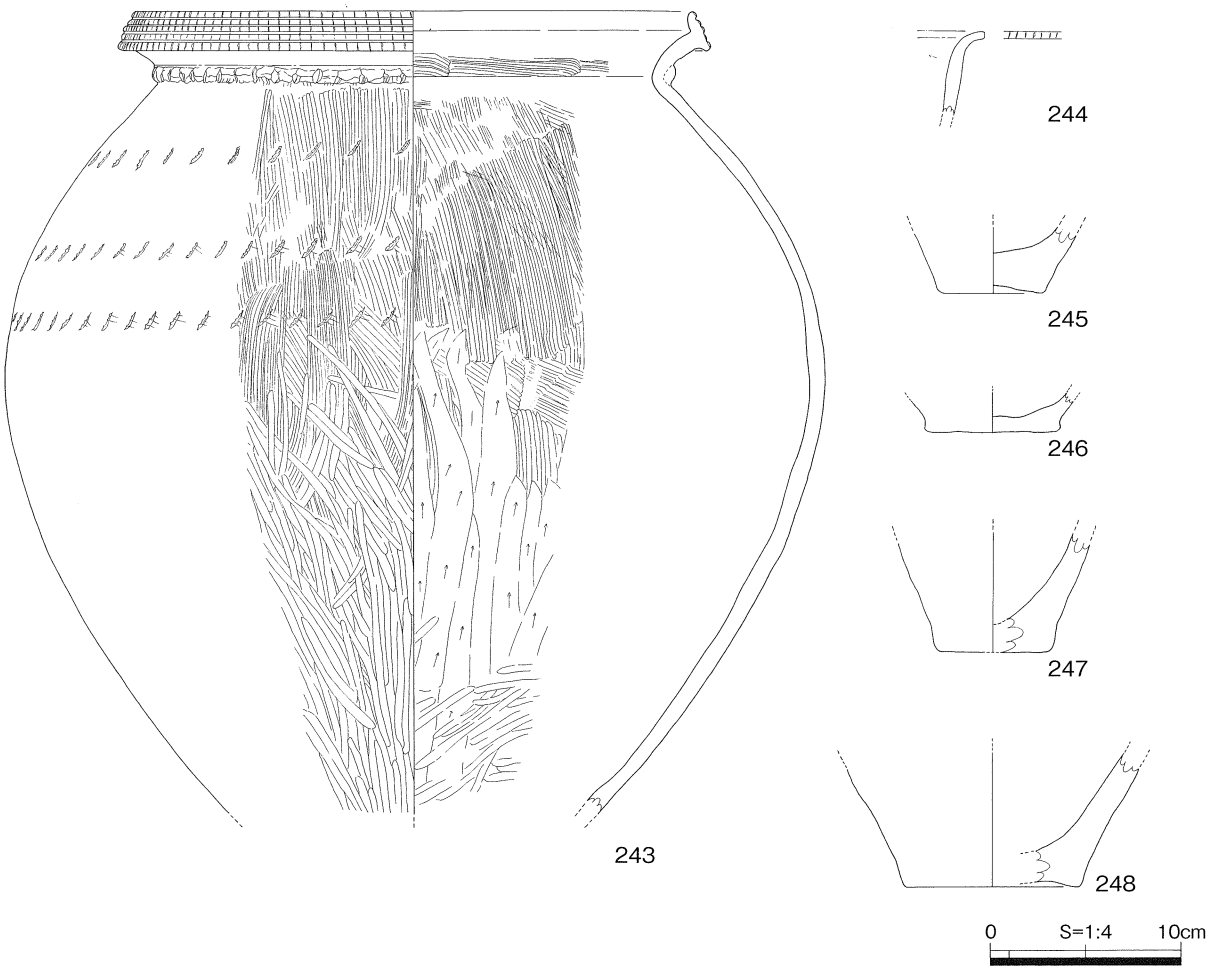
第57図　自然流水路１（12～23層）　出土土器



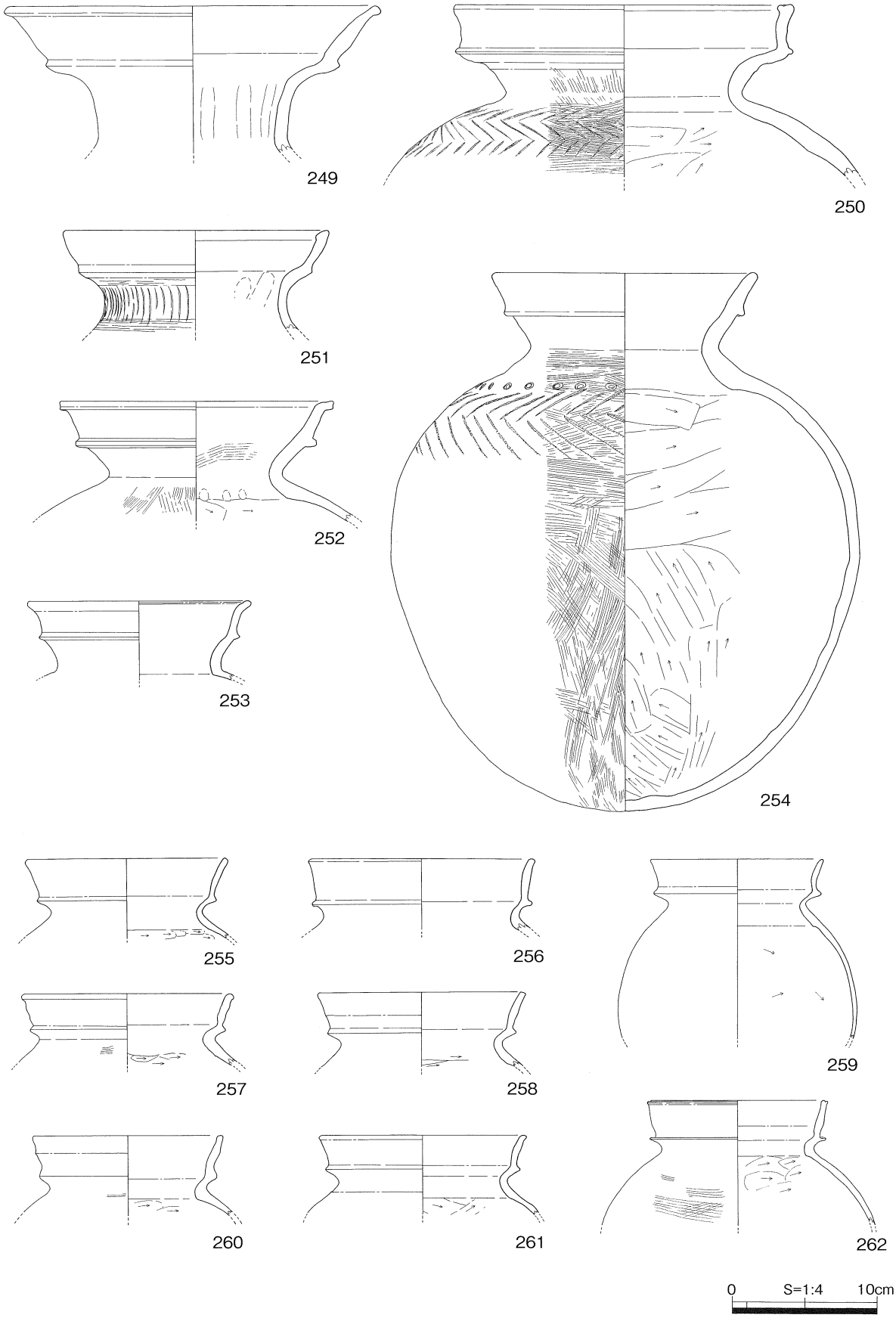
第58図　自然流水路１（24～28層）　出土土器（１）



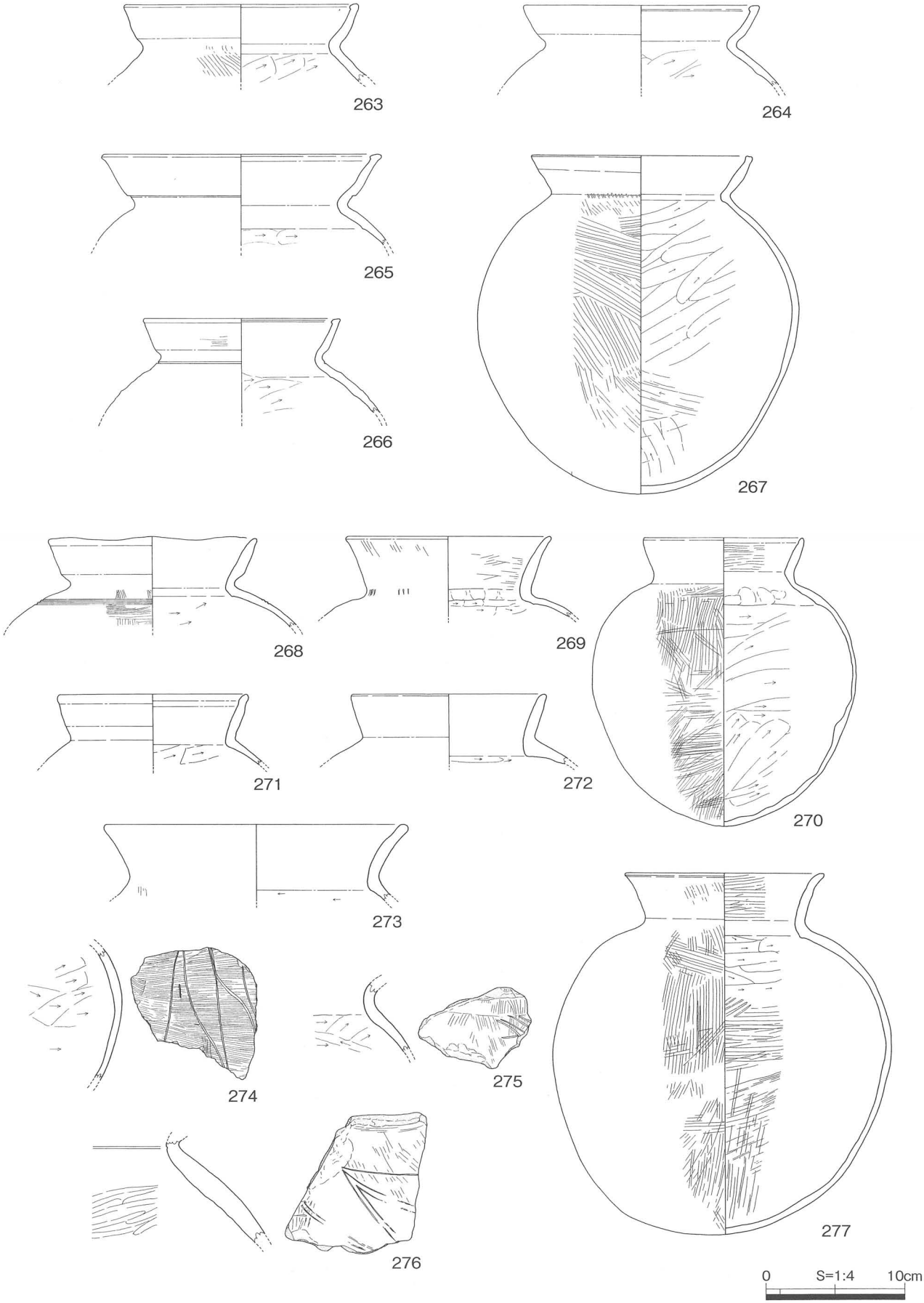
第59図　自然流水路１（24～28層）　出土遺物（２）



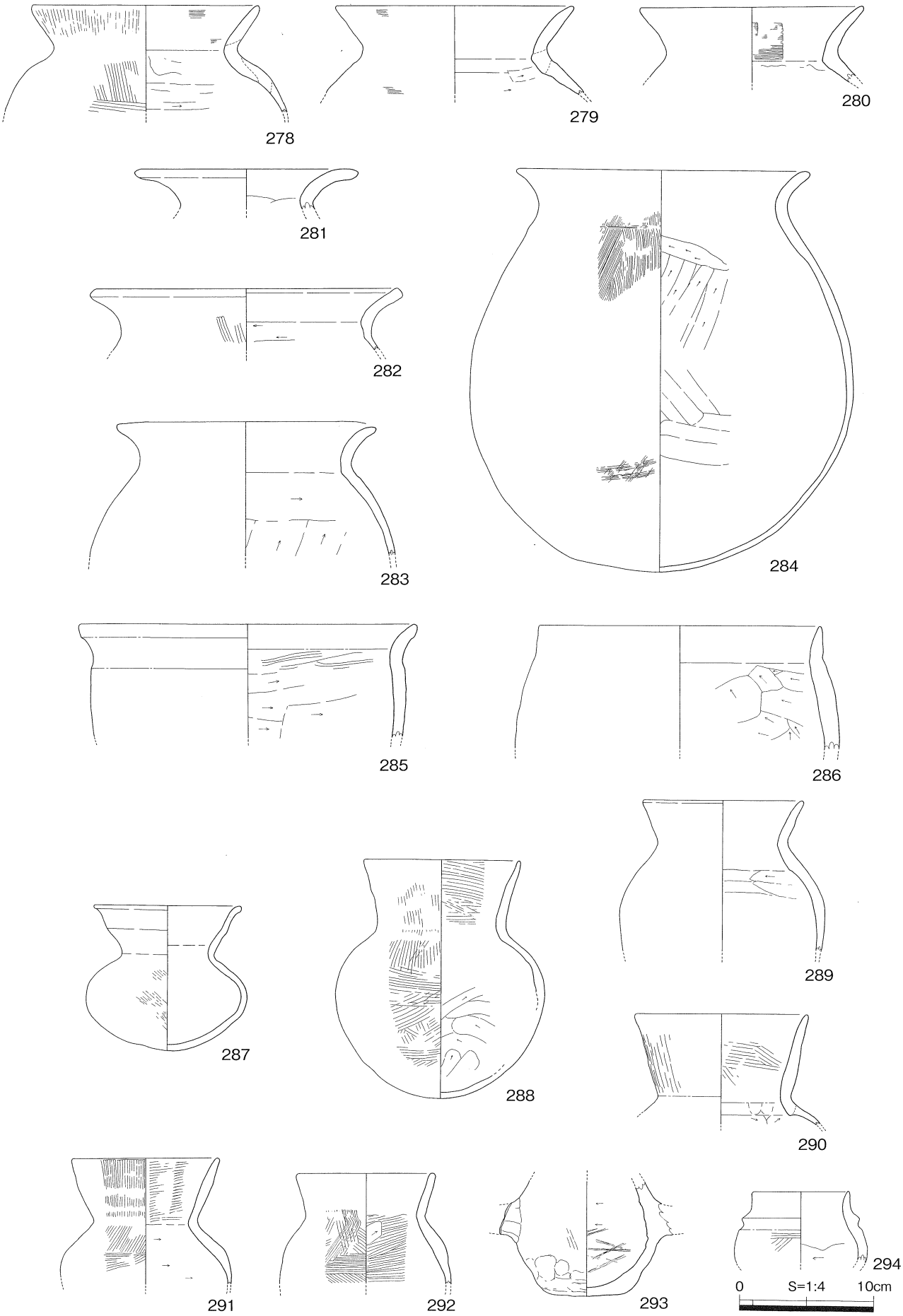
第60図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（１）



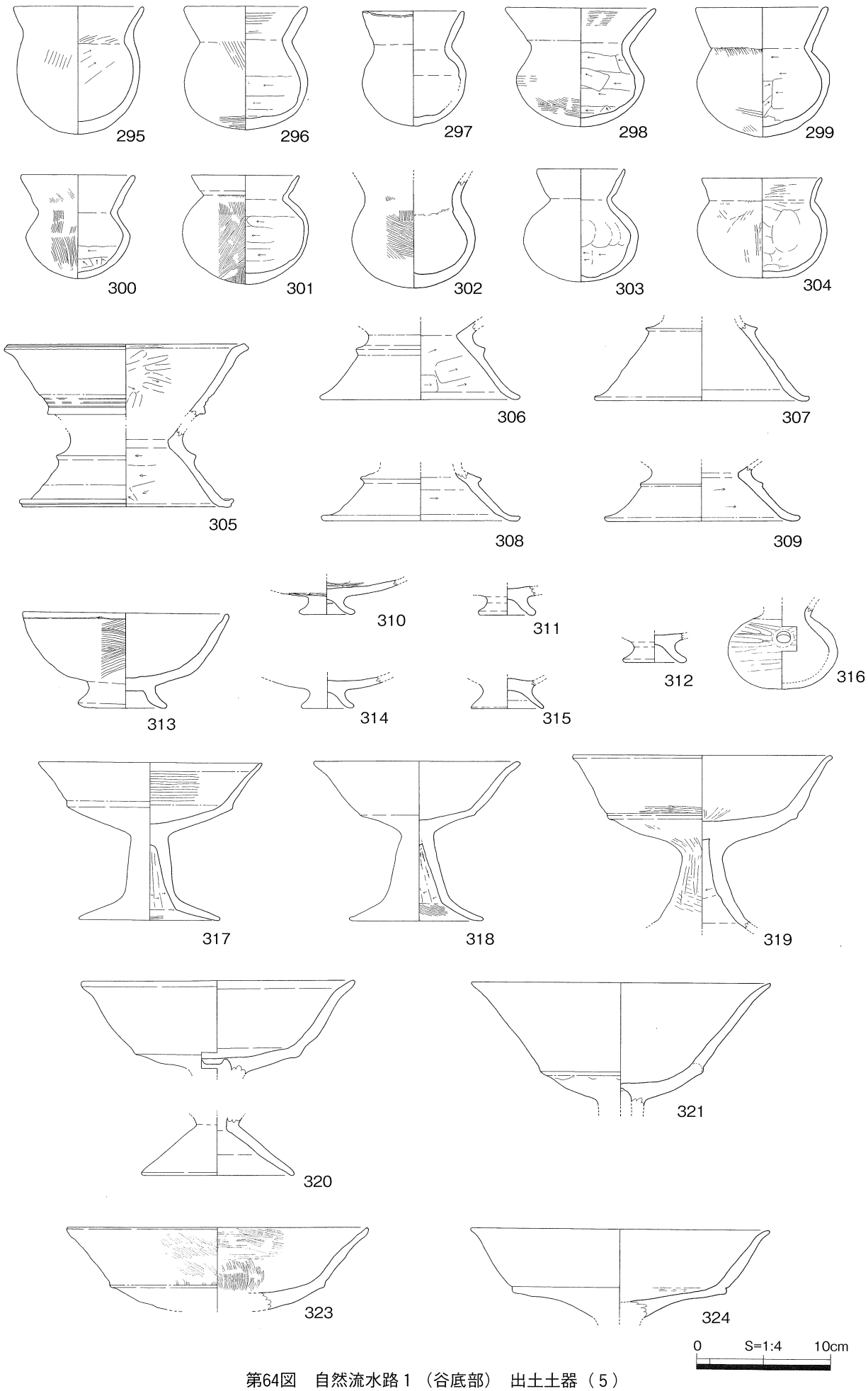
第61図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（２）



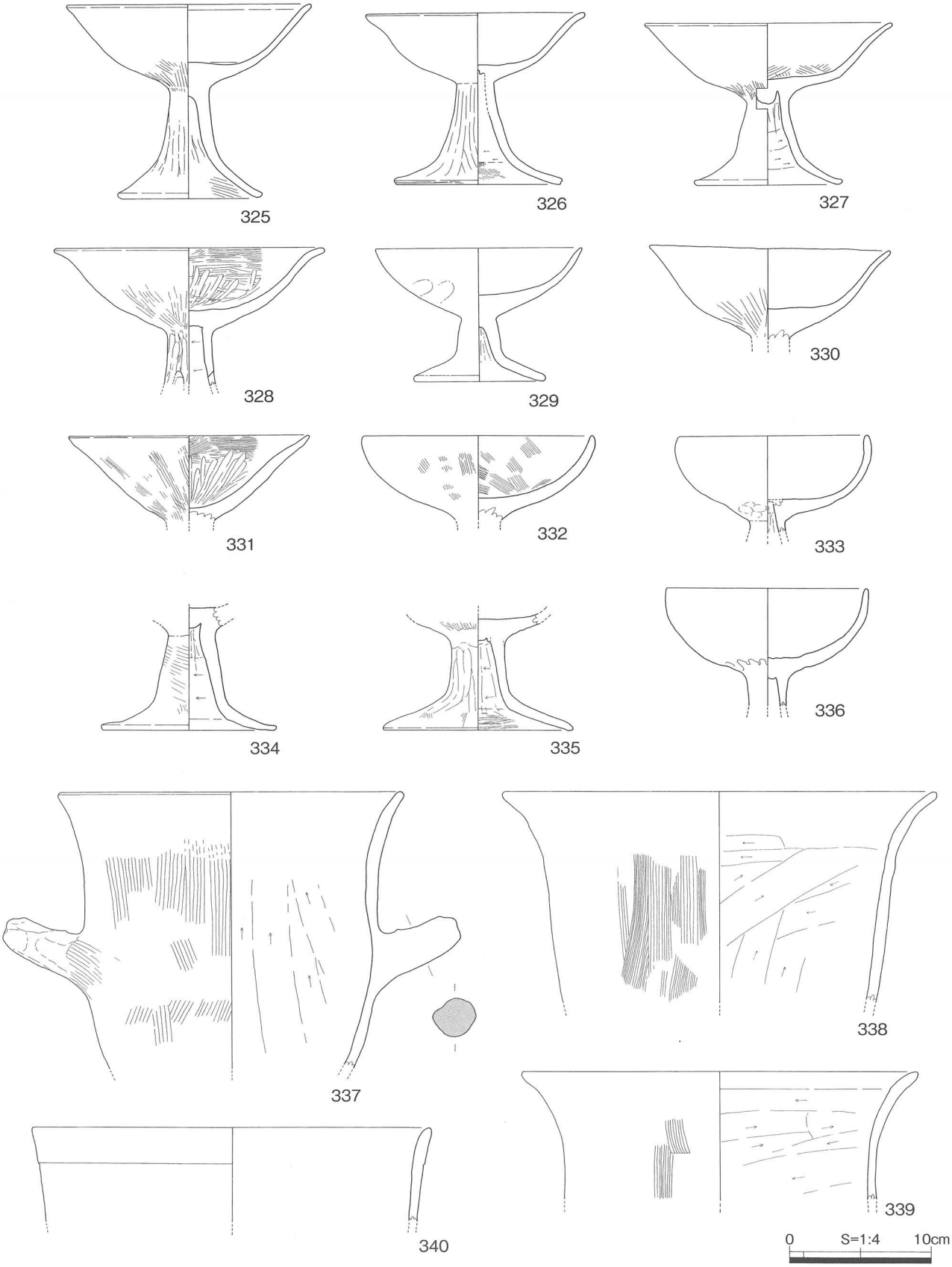
第62図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（３）



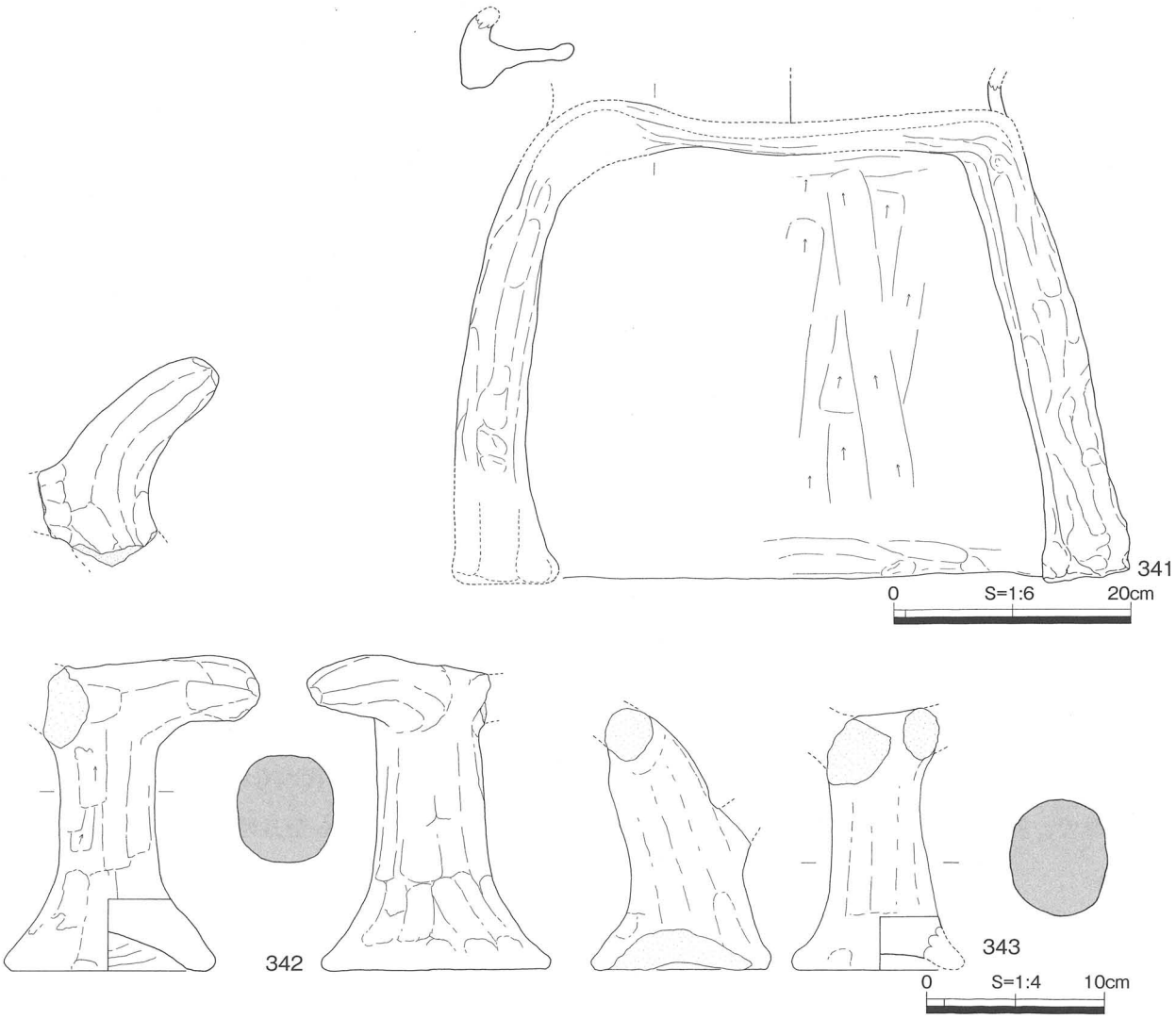
第63図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（４）



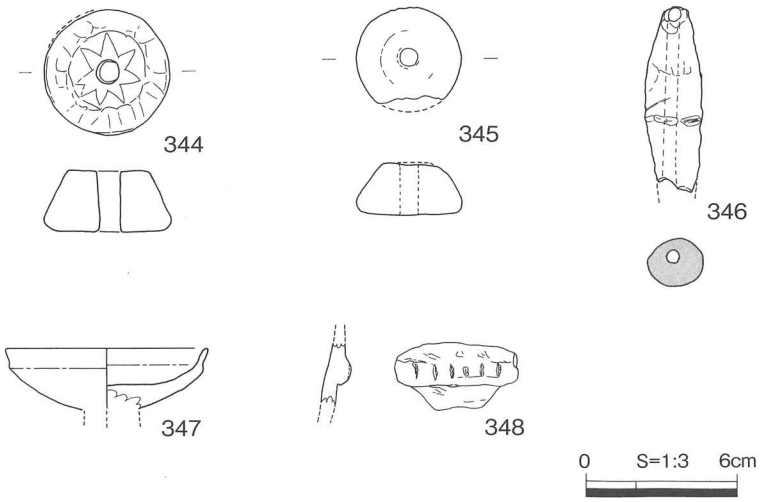
第64図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（５）



第65図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（６）



第66図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（７）



第67図　自然流水路１（谷底部）　出土土製品（８）

須恵器（第68図～第71図）

坏蓋　349～352は肩部に沈線１～２条を入れ天井部をヘラ削りするもの、353・355～357は口縁部が内湾するもの、354は肩部に沈線１条を入れ、天井部は回転ヘラ切り後ナデを施す。355・356は天井部回転ヘラ切り後ナデを施すが、356は櫛状工具によるものである。349～357は古墳時代後期のものである（出雲Ⅳ～Ⅴ期）。358は蓋として図化したが、上に開いた器種の可能性もある。

坏身　359～370はいずれも口縁部の立ち上がりは内傾して伸びる。底部に回転ヘラ削りを施すもの359～362・364～366・370とナデを施すもの363・367～369があり、それぞれ古墳時代後期の出雲Ⅳ～Ⅴ期にあたる。

高坏　371～379はすべて無蓋高坏であり、380のみ長脚高坏である。371は口縁部が直立して体部との境に段を持ち、脚部も段を持ってその３方に円孔を開けるもので、初期須恵器と思われる。371以外の低脚高坏坏部の形態は様々であるが、透かし孔に切り込み状のものは見られず、出雲Ⅳ～Ⅴ期の内に入り、古墳時代後期のものと思われる。

歴史時代の蓋坏類・皿　381・382は蓋で、381は口縁部が下垂するもの、382は輪状つまみのものである。383は高台付壺の底部、384は高台付坏で静止糸切り後高台を貼り付けるもの、386～389は無高台坏で、切り離しは386が回転ヘラ切り、387が回転糸切りによるものである。以上はほぼ奈良時代のものであろう。390は口縁部が外傾して伸びる無高台坏、391～393は口縁部が外傾して伸び、底部端に低い高台を貼り付ける高台付坏である。以上390～393は平安時代のものである。394～397は皿で、394は底部回転糸切りで無高台のもの、395は高台付でいずれも奈良時代のものと思われる。

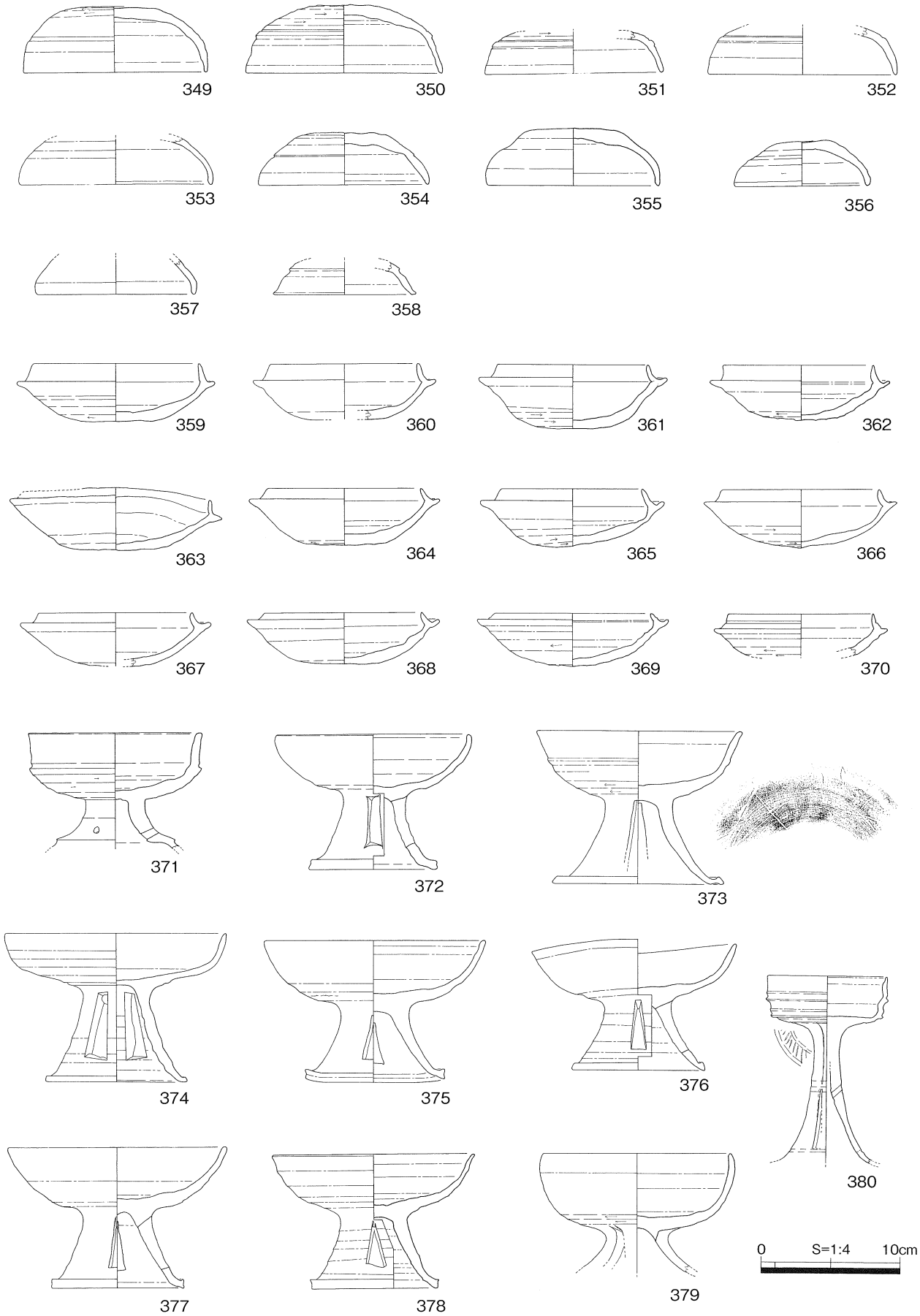
瑕　398は扁球形の体部を持ち、頸部と胴部中央に櫛描波状文を施し、底部は叩き成形の後ナデを施すものである。399は頸部に１条、円形透かし孔付近に２条の沈線をめぐらすもの、400は樽形瑕の胴部で、沈線と波状文が施され、側部の内外面はナデ仕上げである。SI－14出土の119と同一個体になるものと考えられる。401はやや扁平な胴部に太目の口頸部を付けるもので、胴部最大径の上下には長方形の透かし孔を連子窓状に切り込んでいる。胴部が二重構造の二重瑕になるものと思われるが、胴部内側の破片は確認できていない。398・400・401は古墳時代中期、399は古墳時代後期のものである。

坩　402は口縁部が外反し、胴部は丸みのあるもので、底部の凹凸が著しい。

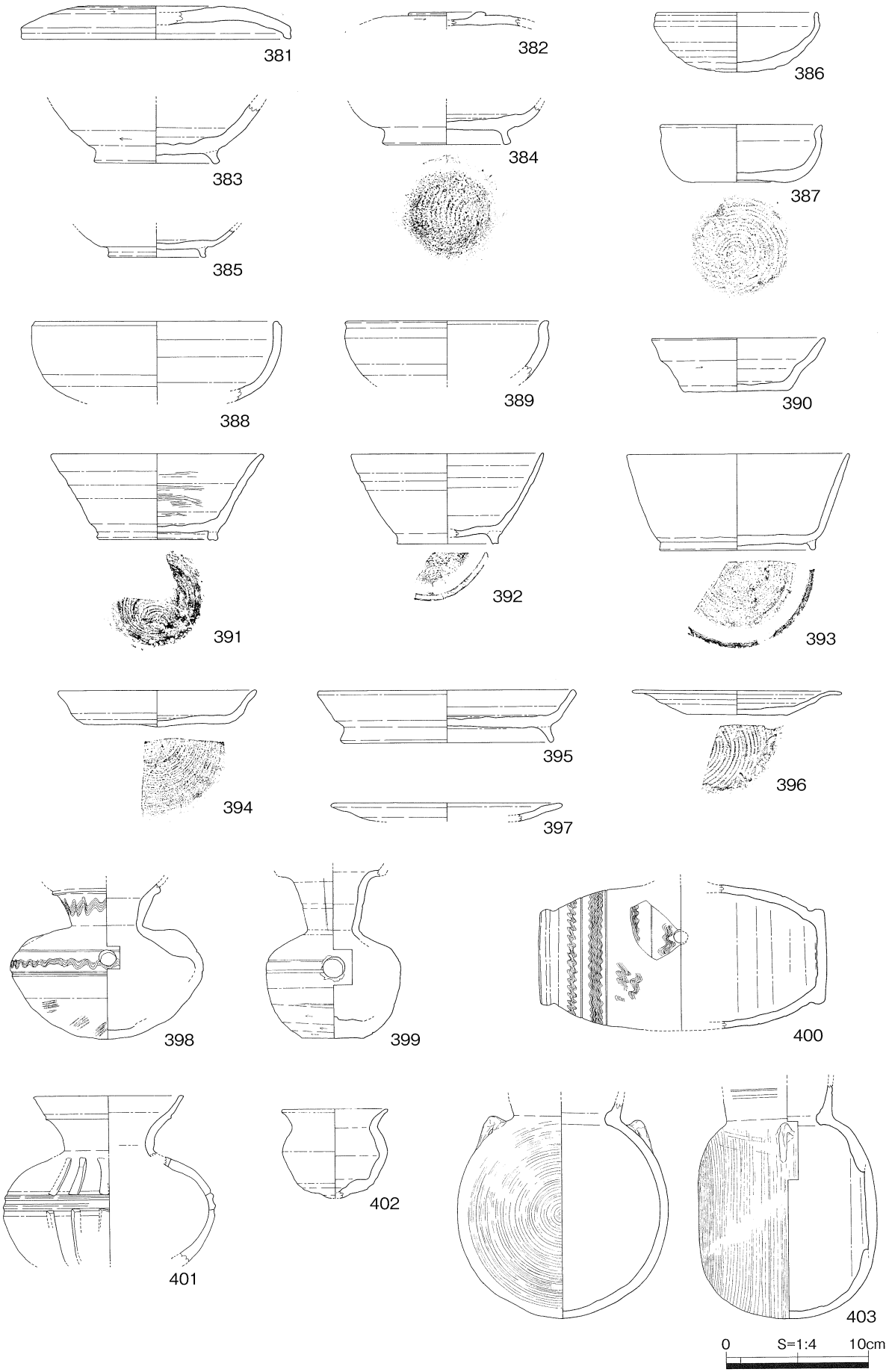
提瓶　403は口縁部が欠損、胴部側面は背面と正面が対称的な膨らみを有し、把手は環状であるがひしゃげて環の孔が小さくなっている。古墳時代後期のものである。

平瓶　404・405は扁球形の体部上面の偏った位置に孔を開け口頸部を付すもので、405には肩部に小さく扁平な粘土粒を付ける。407は体部上面に「コ」の字形の把手が付くと思われるもの、408は胴部最大径に突帯を貼り付け、底部はやや上げ底の平底になるもので、これらは奈良・平安期のものである。

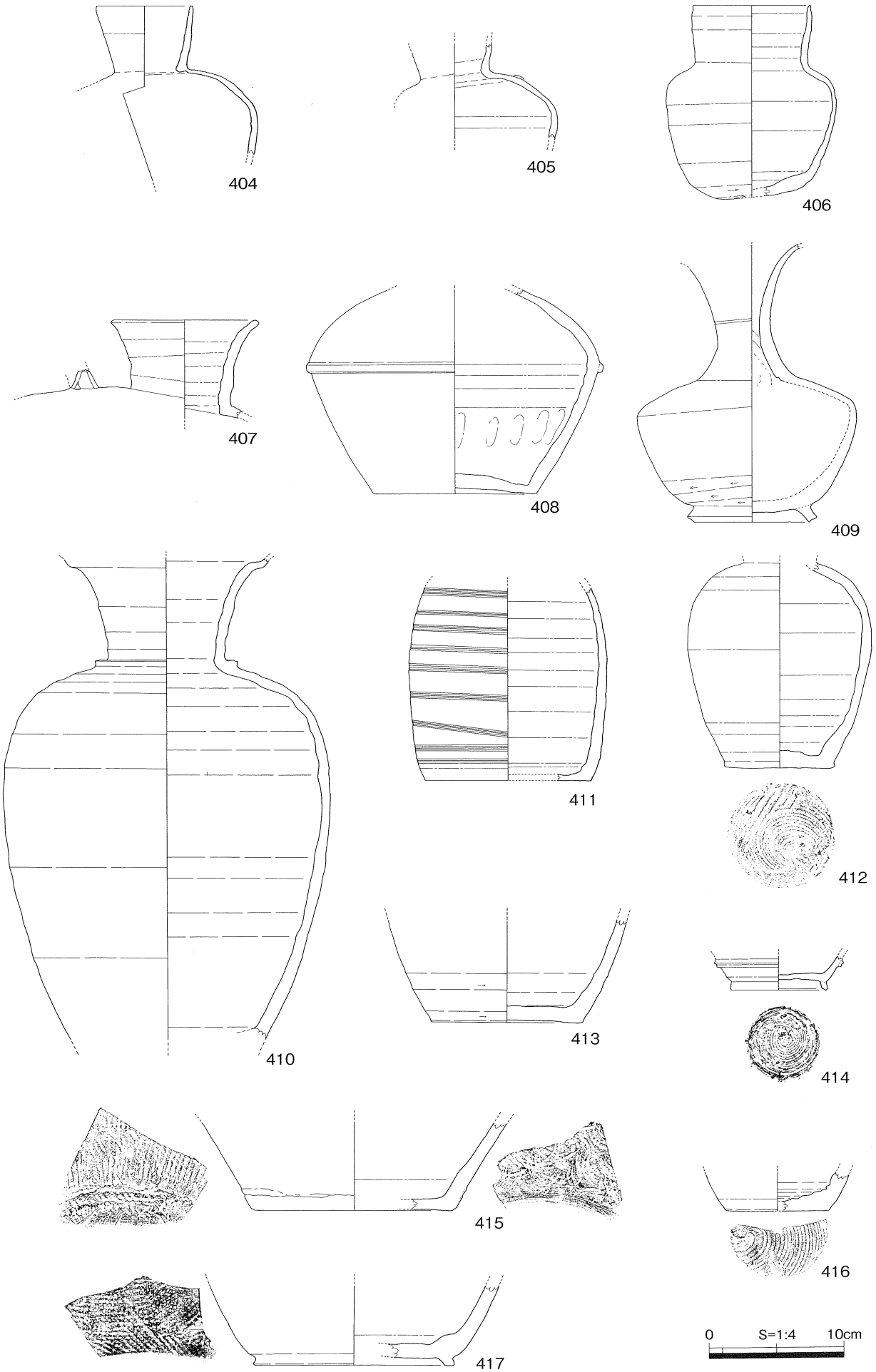
壺　409は長頸壺で、頸部は外反して伸び肩部の張るもので、底部に高台を貼り付ける。８世紀前後のものである。410は頸部に突帯を貼り付けるもの、411はなで肩、ずん胴、平底のもので、胴部には回転カキ目が施される。412は肩部が丸みを持ち、底部には回転糸切り痕が見られる。413・415～417は各種の壺底部と考えられるもので、その形態から奈良・平安期のものであろう。



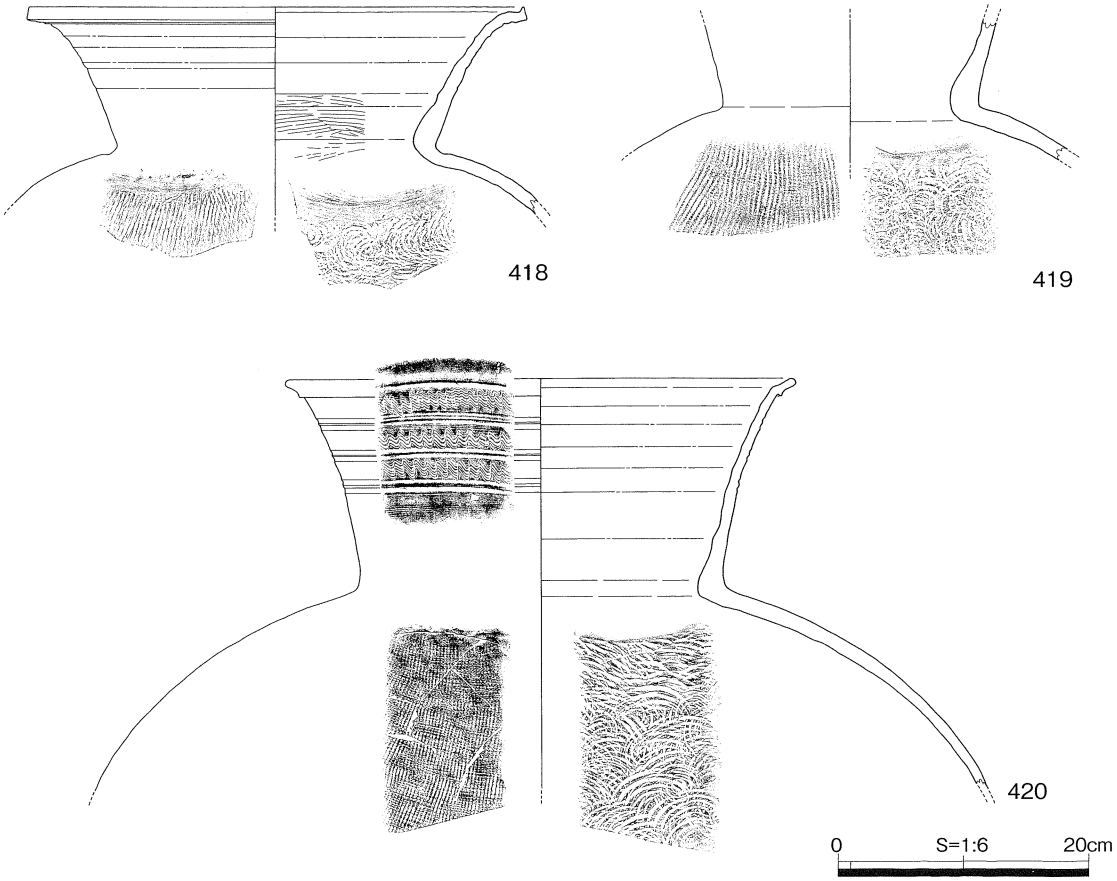
第68図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（９）



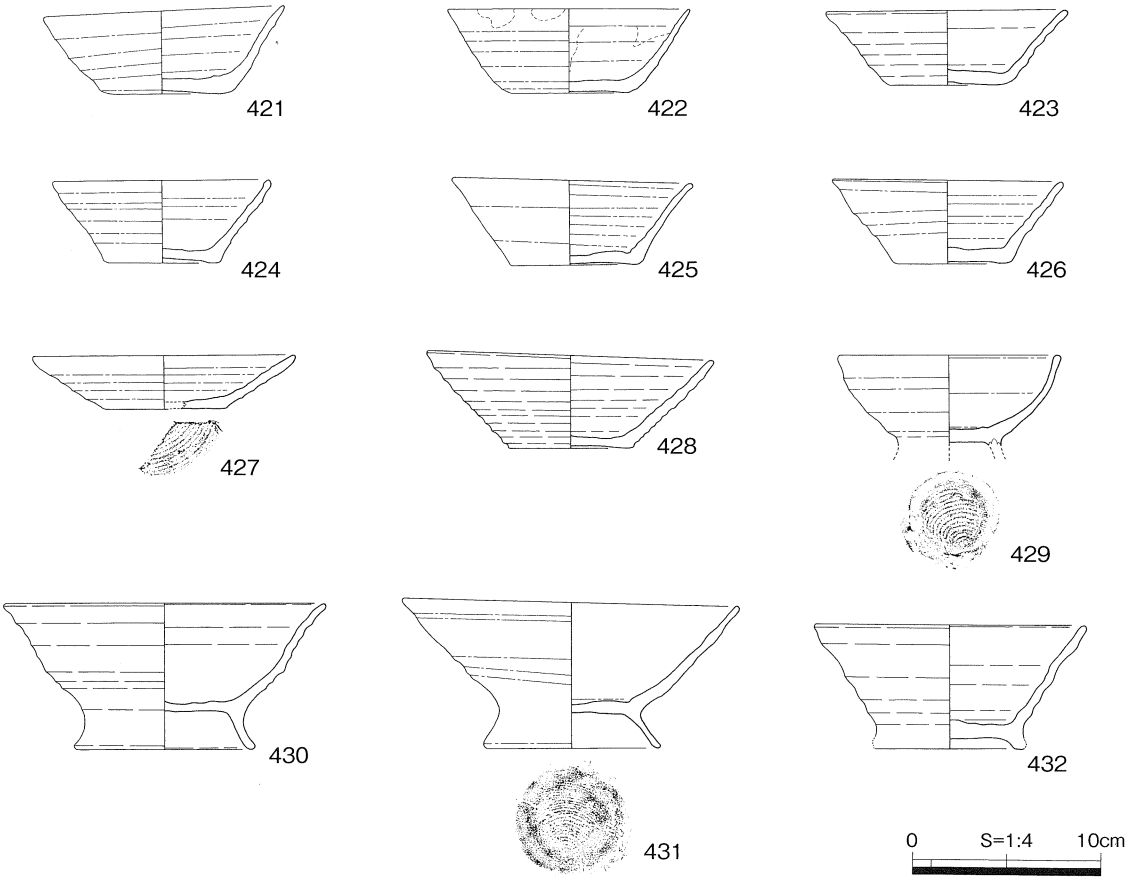
第69図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（10）



第70図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（11）



第71図　自然流水路１（谷底部）出土土器（12）



第72図　自然流水路１（谷底部）　出土土器（13）

第73図　自然流水路１（谷底部）　出土石器（１）

突帯付底部片　414は体部下半に突帯を貼り付ける高台付のもので、見込み部分に多方向ナデが施されることから、坏の可能性が高いものである。

長頸甕　418は口頸部外面に回転を利用した凹凸が見られるものの、突帯や沈線をなすまでには至っていない。頸部内面下半には板目によるナデが見られる。口縁部は強く外反し、端部は上方に引き上げられる。これら口頸部の特徴から平安時代のものと思われる。420は口頸部外面に沈線文と波状文を施すもので、古墳時代後期頃のものと思われる。

土師質土器（第72図）

無高台坏　421～428は口縁部が外傾して伸びるもので、器壁は凹凸が著しく、底部にはすべて回転糸切りが見られる。

高台付坏　429は体部が内湾しつつ伸びる椀状のもの、430・431は「ハ」の字状に踏ん張る高い高台を付けるもので、体部～口縁部が内湾後外反する430、若干の丸みをもって伸びる431がある。432は低めの高台を付けるもので、口縁部は直線的に伸びる。

石器（第73・74図）

433は安山岩、434は塩基性岩の蛤刃石斧、435は流紋岩の石斧である。436は凝灰岩の砥石で3面に使用痕がある。437は珪化木の砥石で1側面が砥面になっている。438は凝灰岩の砥石で懸垂用のものと思われる穿孔がある。439は凹石で、径2～3cmの窪みが数ヶ所見られる。440は黒曜石製の凹基式石鏃で基部の抉りは浅い。表裏に第1次剥離面を残し、側部と基部に押圧剥離が行われている。441は黒曜石の石鏃未製品である。

鉄器（第75図）

442は幅3.5cm、厚さ9mmの板状鉄斧と思われるもので、基部と刃部の先端を欠損している。

玉作関係遺物（第76～89図）

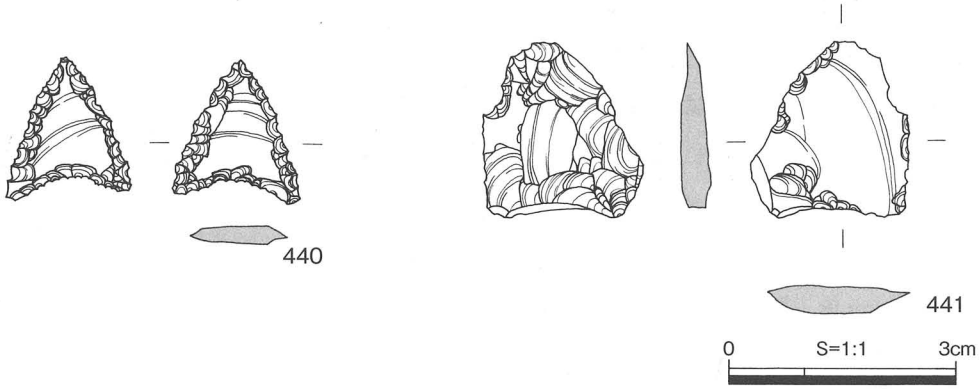
玉の原材として瑪瑙・碧玉・水晶の3種類を使用している。瑪瑙から勾玉を、碧玉から管玉・勾玉・平玉を、水晶から勾玉・平玉を作っていたようである。玉砥石は結晶片岩を使用している。

遺物の分類基準は福富Ⅰ遺跡[3]の成果に習い、「原材（原石）」「石核」「素材剥片」「調整剥片」「一次研磨工程品」「穿孔工程品」「仕上げ工程品」とした[4]。

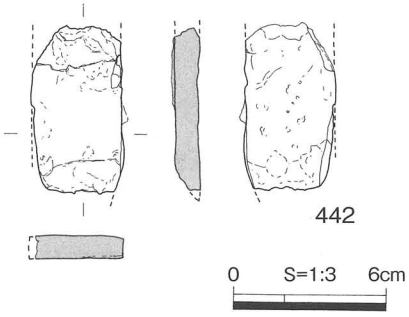
瑪瑙製遺物（第76・77図）　勾玉未製品、剥片、原石がある。443～446は勾玉の調整剥片である。443は正面に自然面を残しつつ2次調整が行われ、裏面は全体的に2次調整が行われている。右側面の調整はほとんど行われていないが、左側面は2次調整が施され、曲線を形成していることから背部になるであろう。444は両側面に自然面を残すが、正面、裏面、及び左側面の上下に2次調整が施されており、左側面を背部として意識していると思われる。445は正面、裏面、両側面とも2次調整が見られるが、自然面も多く残った状態である。左側面は自然面のカーブを生かし、上下にのみ調整を加えて背部を作出しようとしたものか。446は正面と両側面に2次調整を施すものの、正面の一部と裏面全面に自然面を残すものである。2次調整の状況から左側面が背部、右側面が腹部になるものと思われる。

447～450は勾玉の素材剥片、451・452は石核、453・454は剥片、455は原石である。

碧玉製遺物（第78～84図）　管玉未製品、勾玉未製品、平玉未製品、石核、原石がある。456～459は管玉の角柱状加工品で、側面や端面に調整剥離が施されたもののうち、研磨直前の未製品であ



第74図　自然流水路１（谷底部）　出土石器（２）



第75図　自然流水路１（谷底部）
出土鉄製品

る。456は１側面が自然面で、残りの側面と両端面は調整剥離が施され、直方体状を呈する。

457は３側面が大きな剥離のままで、１側面と両端面に細かい剥離が施されている。458は１側面が自然面のままで、残りの側面は大きな剥離の一部と両端面に小剥離を施すものである。459は角柱状加工品の割れたもので、一部に研磨痕が残る。

460～465は管玉の素材剥片である。形状は板状又は直方体状を呈するもの460・463～465と、断面三角形で背面に稜線を持つもの461・462がある。

466・467は勾玉穿孔仕上げ品である。各面に大小の剥離痕を残すものの、すべての面に研磨痕が見られる。穿孔は片面穿孔で、孔径の小さい裏面側は皿状に窪んでいる。全面に研磨が施され若干の稜線を残すものの、完成品に近いものである。穿孔は裏面側から行われた片面穿孔で、正面側の孔径が小さく皿状に窪んでいる。

468は勾玉の１次研磨品で、研磨の途中欠損したものと思われ、大小の剥離を残している。

469～471・473は勾玉調整剥片完了品である。すべて「C」の字形を呈している。469の正面及び腹部側面は大きな剥離で効率的に作り出しているが、裏面は大きな剥離の縁辺に比較的小さな剥離を施し、背部側面下半と上端面には小さな調整剥離を施している。470は正面・背部・腹部に小さな調整剥離が施されるが、裏面は主要剥離面のままである。471は裏面と背部を細かく調整剥離するもので、正面と腹部は大きな剥離のままである。473は全面に調整剥離を施すが、裏面の剥離痕は比較的大きい。

472・474～483は勾玉の調整剥片である。全面に２次調整を施すものの完了には至っていないもの478、正面・裏面・背部側面に２次調整を施すが、腹部の調整がない474・475・477、あまり進んでいないもの472・476・479、調整剥離初期のもの480～483がある。

484～488は勾玉の素材剥片である。484は表裏に自然面を残し、薄い板状原石から剥離されたもの、486は礫状原石から剥ぎ取られたものである。485・488は主要剥離面を残し、断面三角形を呈する。

489～495は平玉調整剥片である。いずれも調整剥離をほぼ完了し研磨直前の状態にあると思われ

る。大きさは２種あり、約１cm大のもの489・491・493・494と、1.8cm前後のもの490・492・495がある。489～491は上下面に大きな剥離が見られ、板状に作った後側面に上下から調整剥離を施して円形に整えている。492・495は上面に礫状の自然面を残して山なりに調整し、もう片面は大きな剥離の周縁を若干調整して平坦にし、側面を細かく調整剥離して円形にしている。

496～499は平玉の素材剥片である。496は平面が2.5cm大の六角形、断面は厚み1.5cmの三角状を呈するもので、比較的大きな剥離面で構成される。497は１cm大、厚さ５mmの薄い板状のものである。498は２cm角、厚さ１cmの方形版状を呈する。499は２cm角、厚みが片側1.3cm、もう片側が三角状を呈する。いずれも調整剥離は行われていない。

500～502は石核である。500は直方体状のもの、501は断面ひし形で、比較的大きな剥離面を持つもの、502は板状のものである。

503は原石で５×６×３cm大の直方体状を呈し、１面は自然面を薄く剥ぎ取っているが、３面に大きな剥離痕を残すものである。

504は管玉か勾玉かの素材剥片であるが、特定できない。

水晶製遺物（第85～88図）

505～507は平玉の敲打整形品である。505は敲打が各面に施され、直径1.7cmの正円形を呈する。上下面の一部には調整剥離痕も見られる。506は敲打の途中で一部欠損したかと思われる薄い部分がある。507は径1.3cmの多角形を呈するもので、調整剥離後敲打初期のものである。

508～510は平玉の素材剥片である。いずれも平面形は方形に近いが、断面三角状のもの508・510と直方体状のもの509がある。

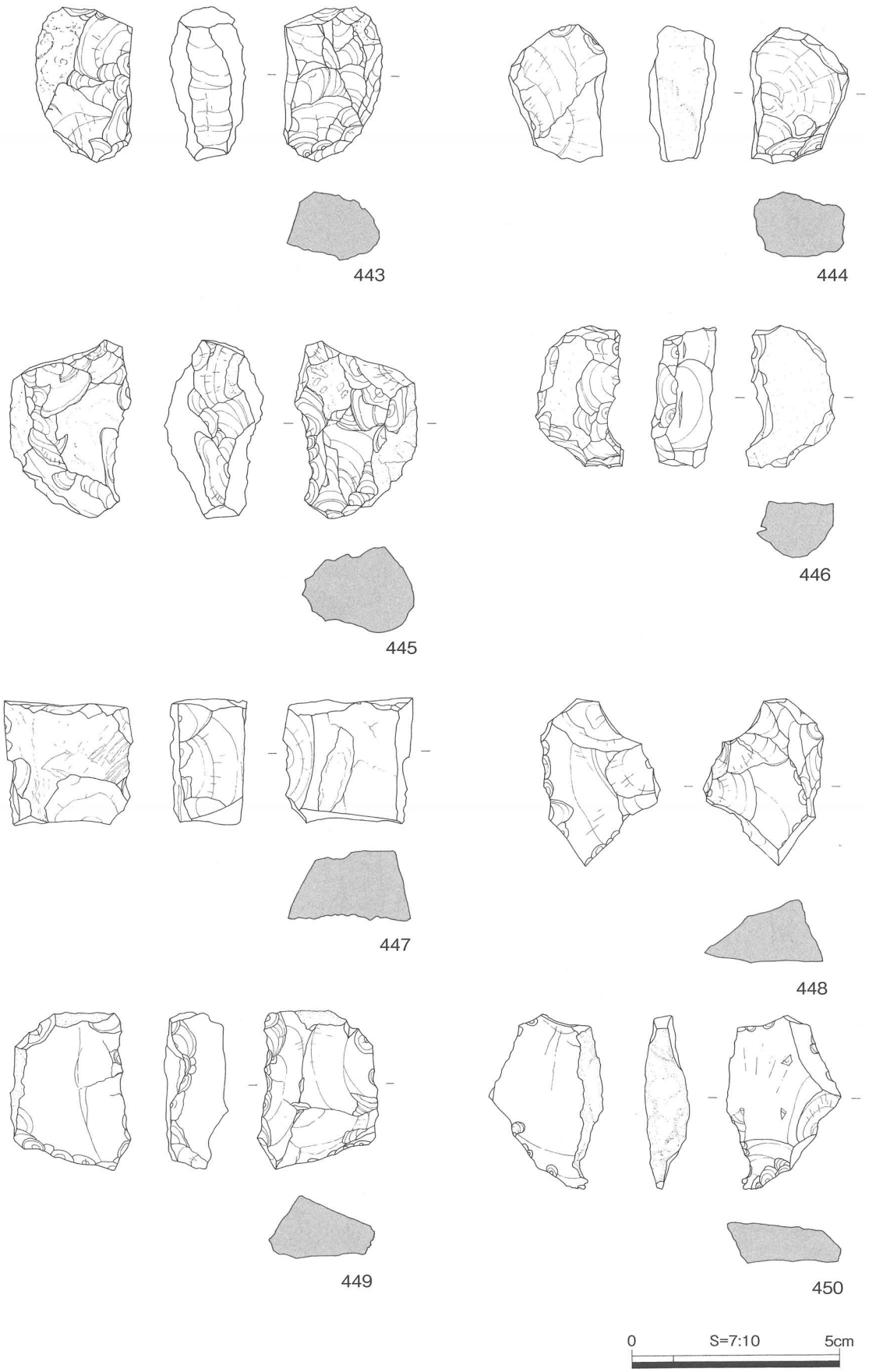
511は勾玉の調整剥片である。正面と背部である左側面には調整剥離を施すが、裏面の一部と右側面は結晶面を残している。

512は勾玉の素材剥片である。平面三角形の板状のものである。調整剥離は施されていない。

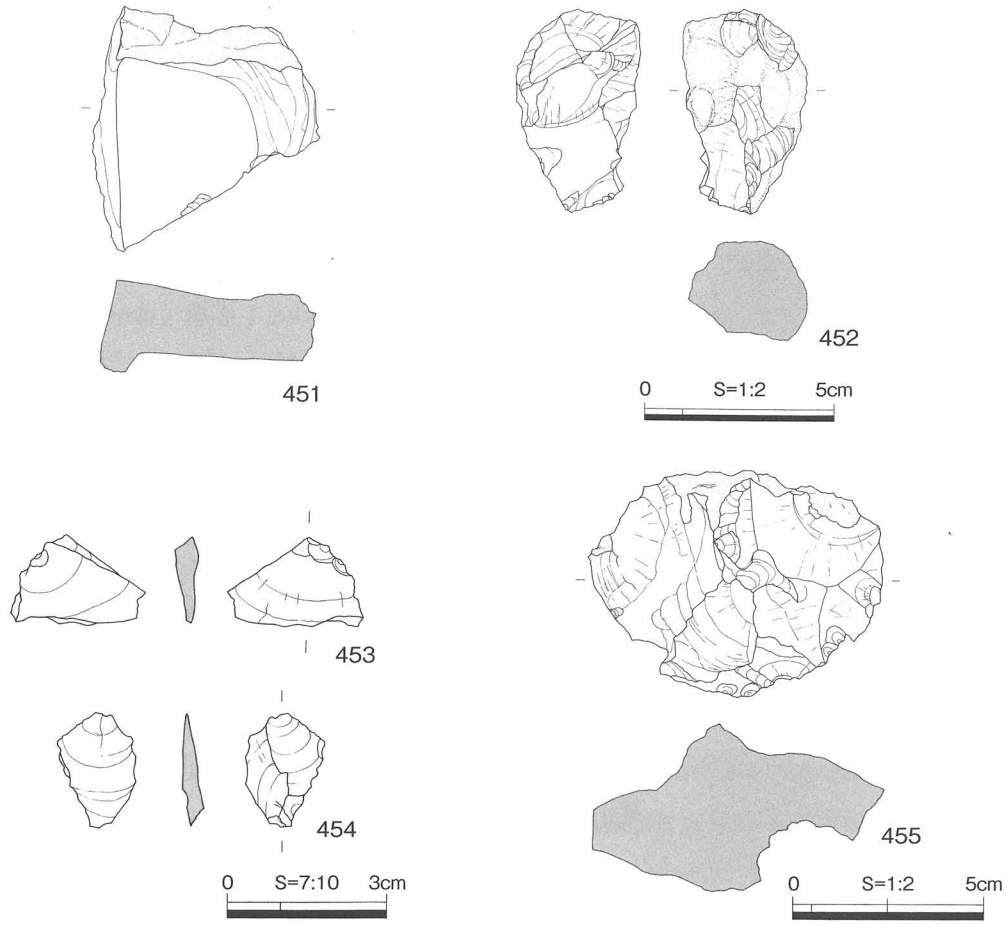
513・514は石核である。514は結晶面と自然面を薄く剥ぎ取っている。515・516は原石、517は叩き石である。

玉砥石（第89図）

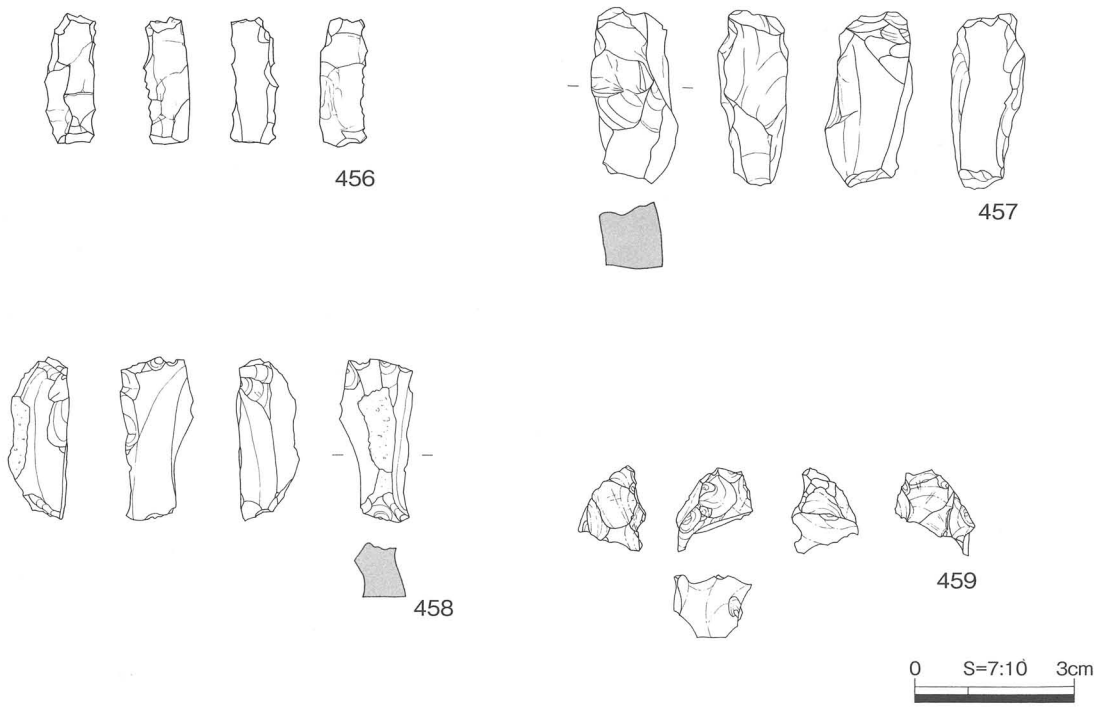
518～530はすべて結晶片岩製のものである。内磨砥石としての用途はすべての個体に見られる。519は側縁に両面から連続して剥離を行い、側縁の厚みを減じた後使用している。また表裏面とも平滑な個体がほとんどで、平砥石としても使用されたものであろう。表裏平滑な個体の中には518・521・525のように筋状に浅い溝が見られるものがあり、あるいは筋砥石としての機能も持っていたかもしれない。



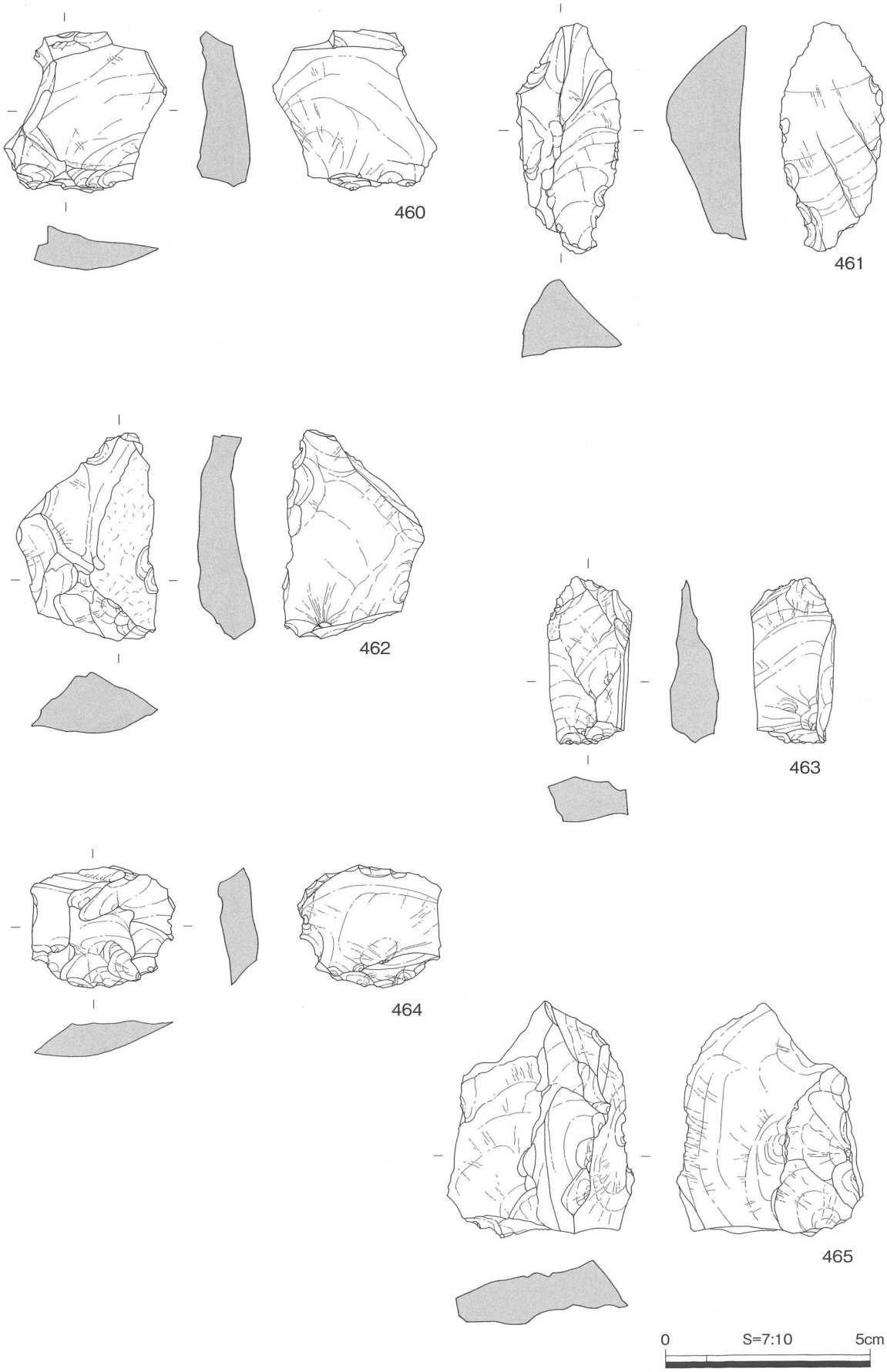
第76図　自然流水路１（谷底部）　出土瑪瑙製勾玉未製品



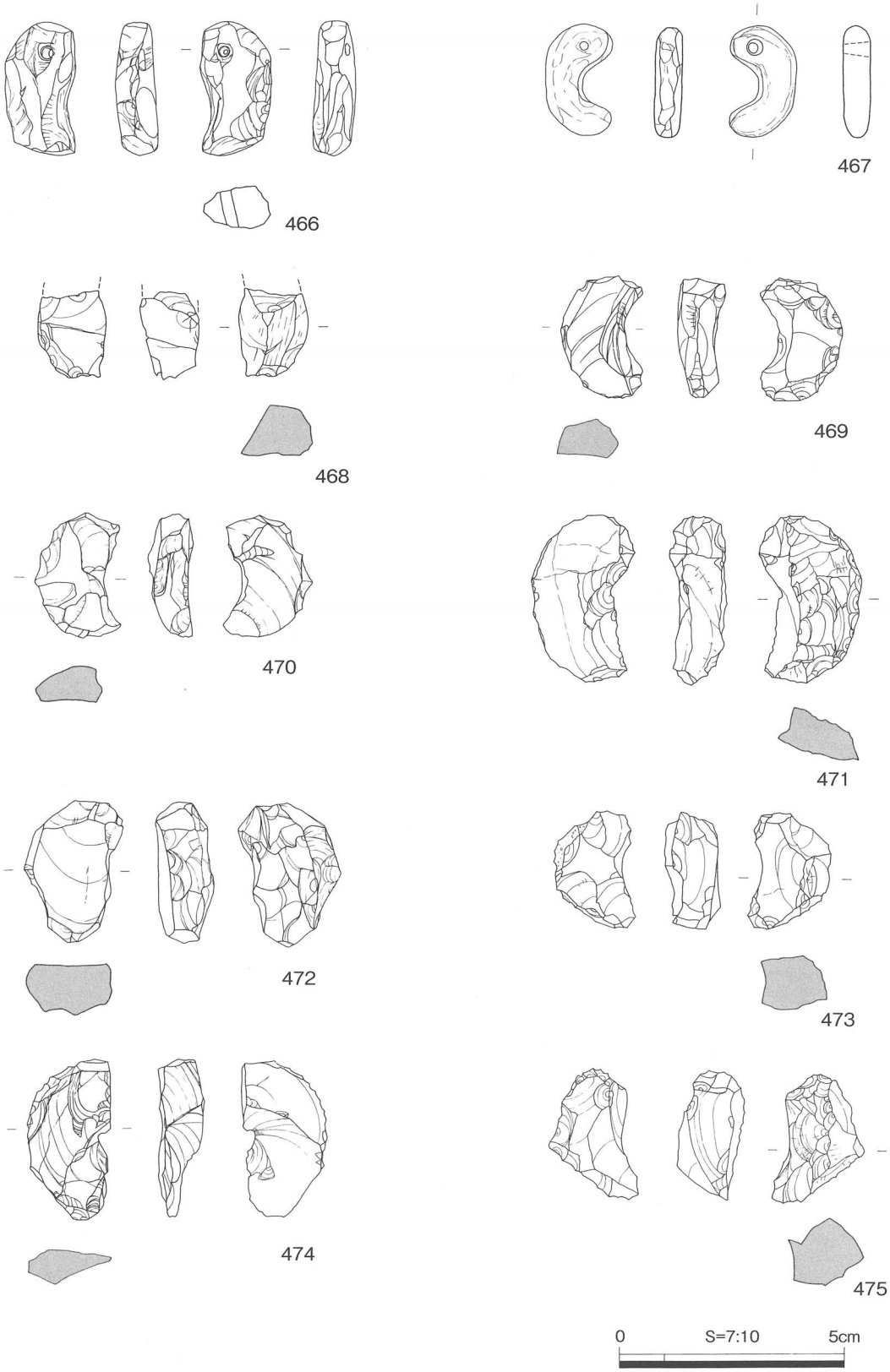
第77図　自然流水路１（谷底部）　出土瑪瑙製石核・剥片・原石



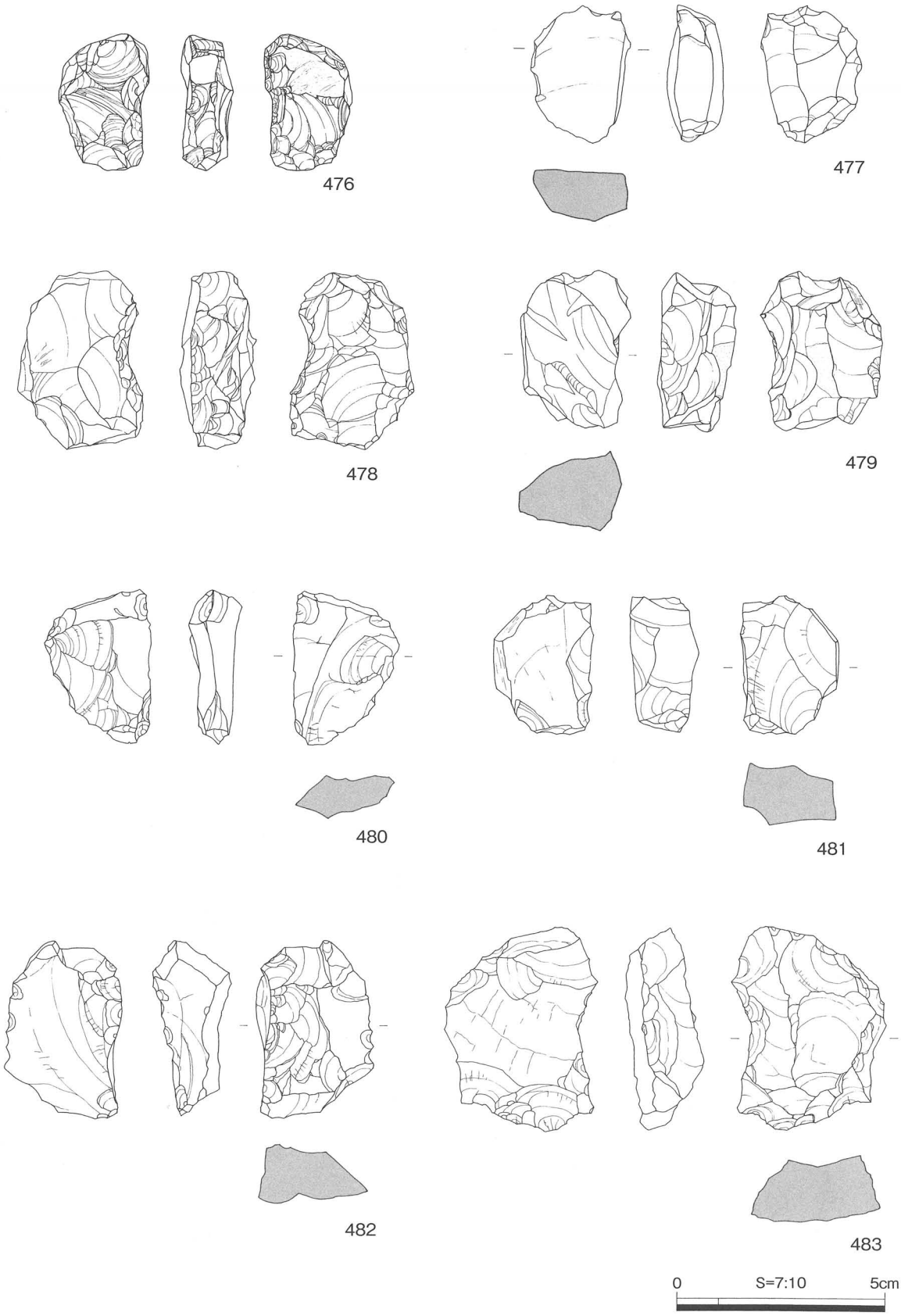
第78図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製管玉未製品（１）



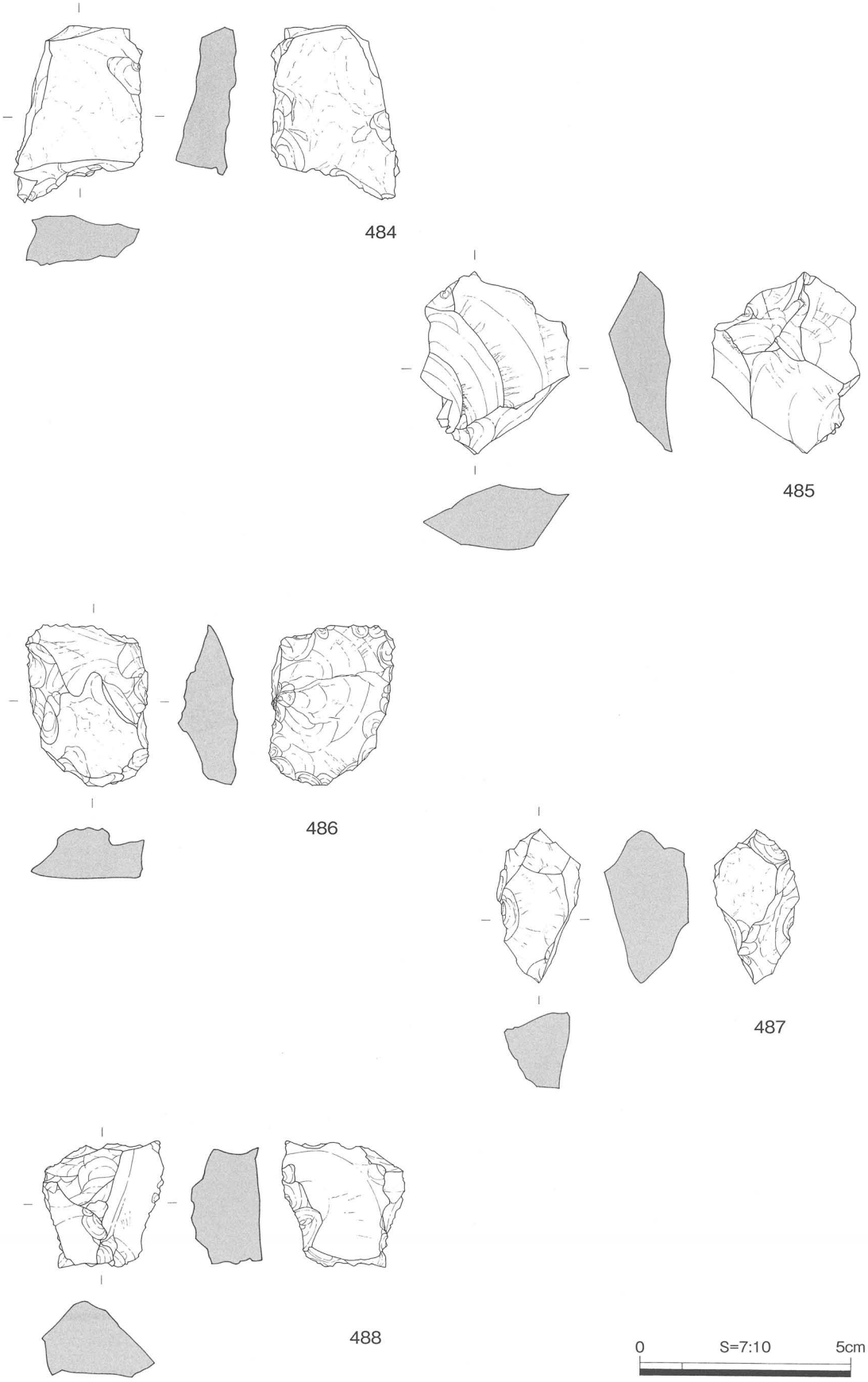
第79図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製管玉未製品（２）



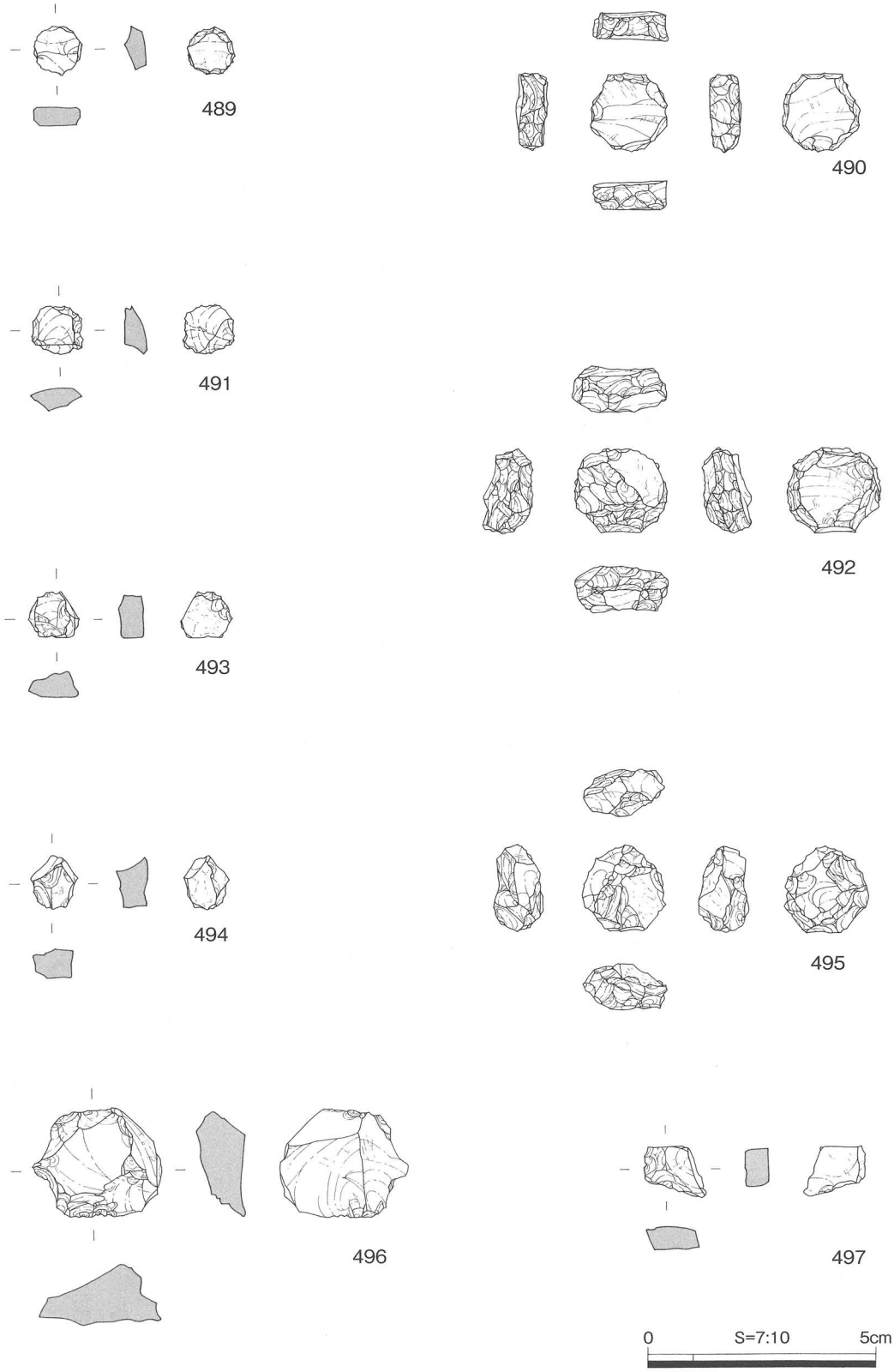
第80図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製勾玉未製品（１）



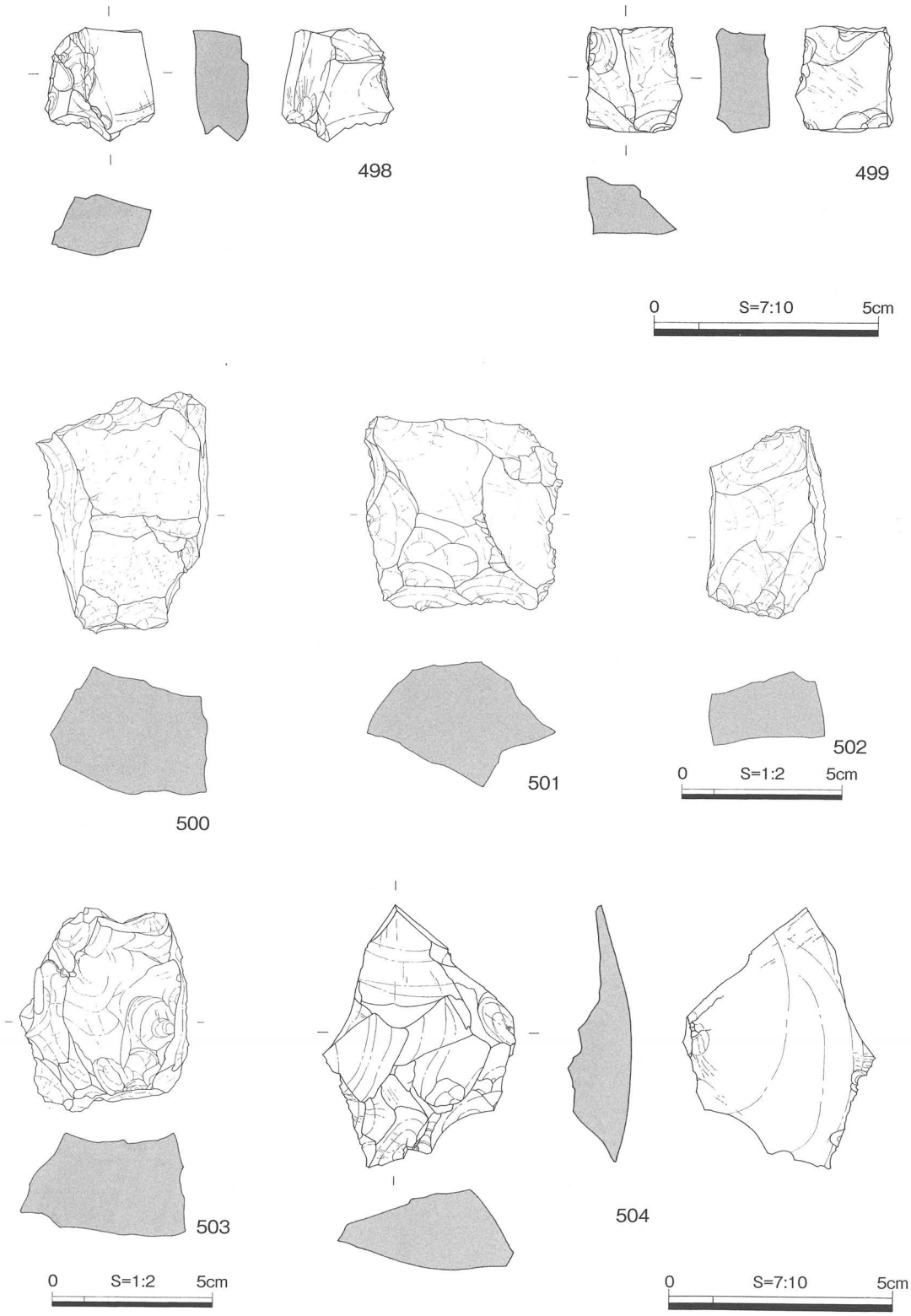
第81図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製勾玉未製品（２）



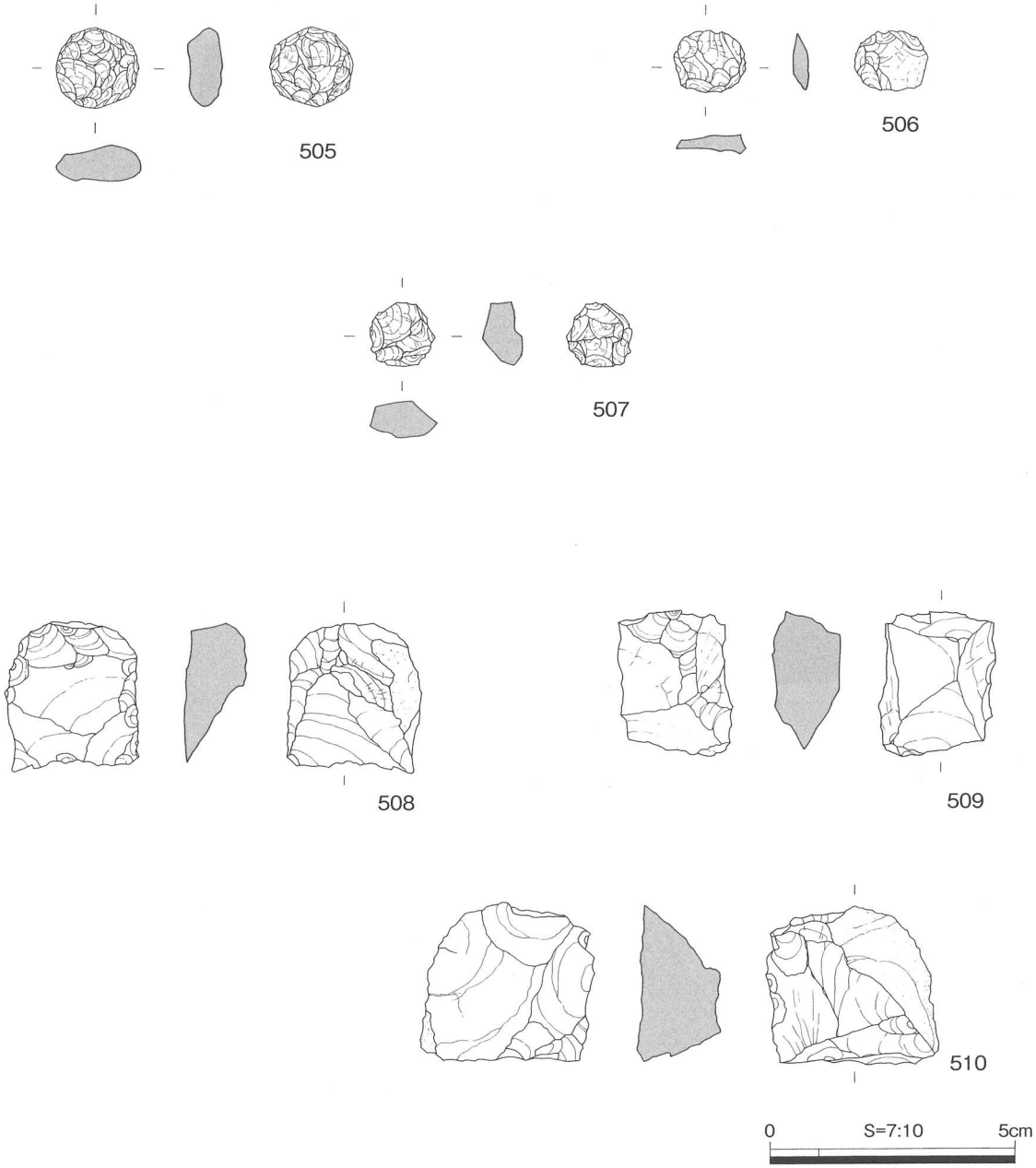
第82図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製勾玉未製品（３）



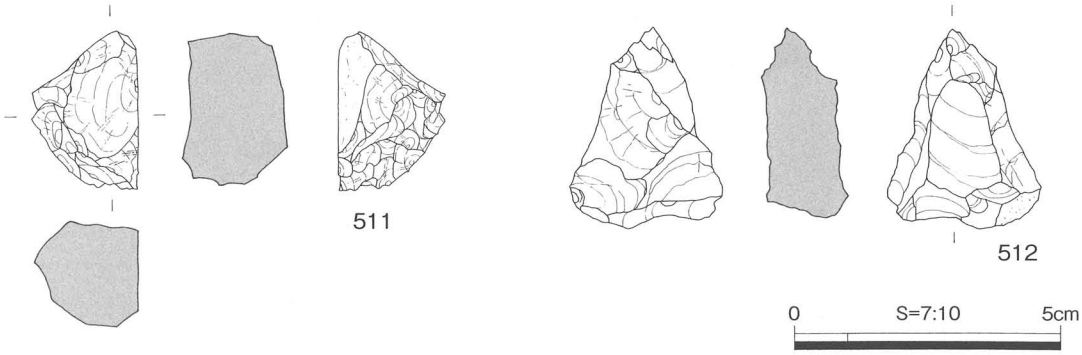
第83図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製平玉未製品



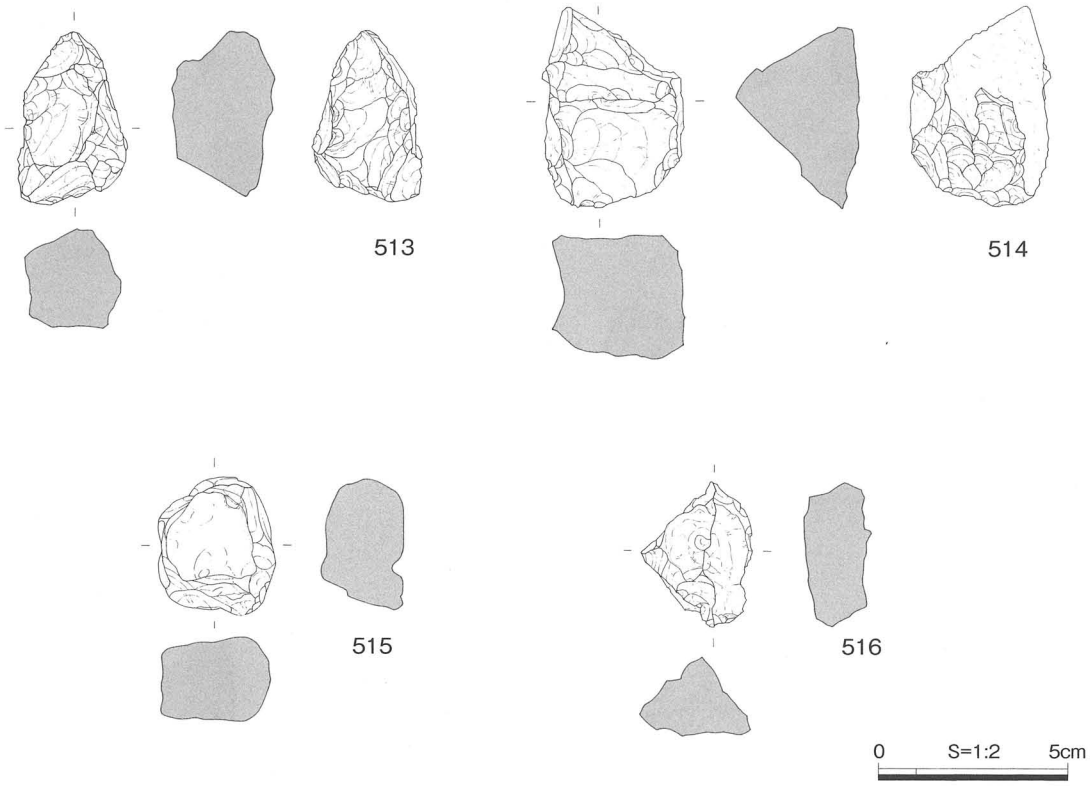
第84図　自然流水路１（谷底部）　出土碧玉製平玉未製品・原石



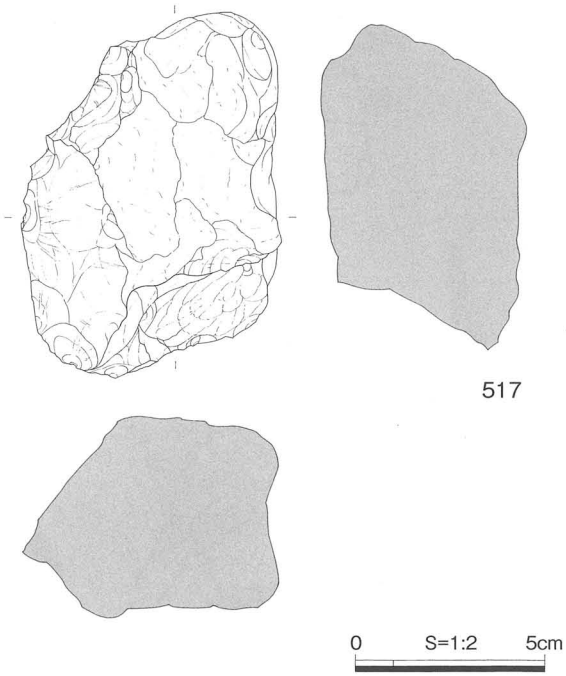
第85図　自然流水路１（谷底部）　出土水晶製平玉未製品



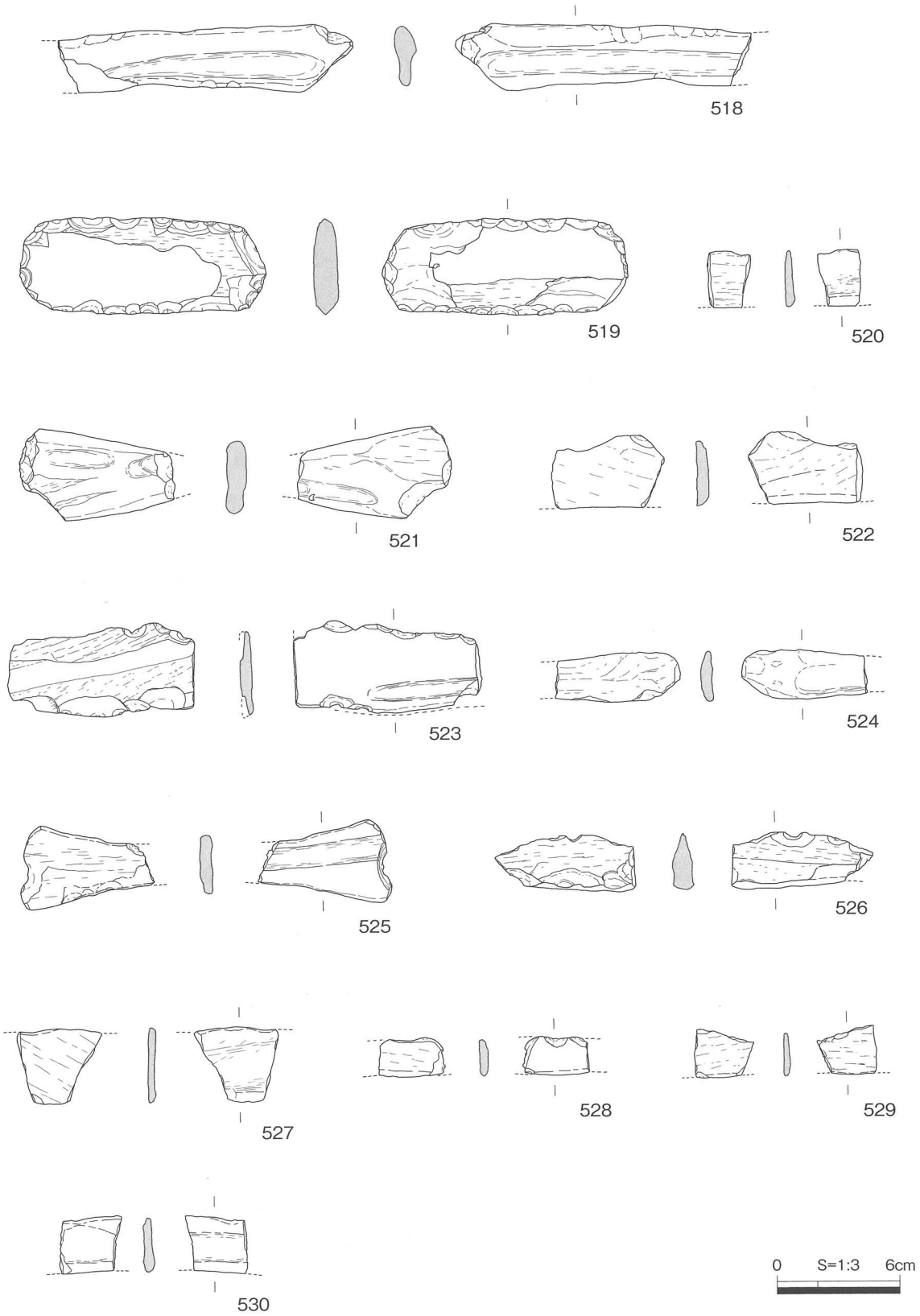
第86図　自然流水路１（谷底部）　出土水晶製勾玉未製品



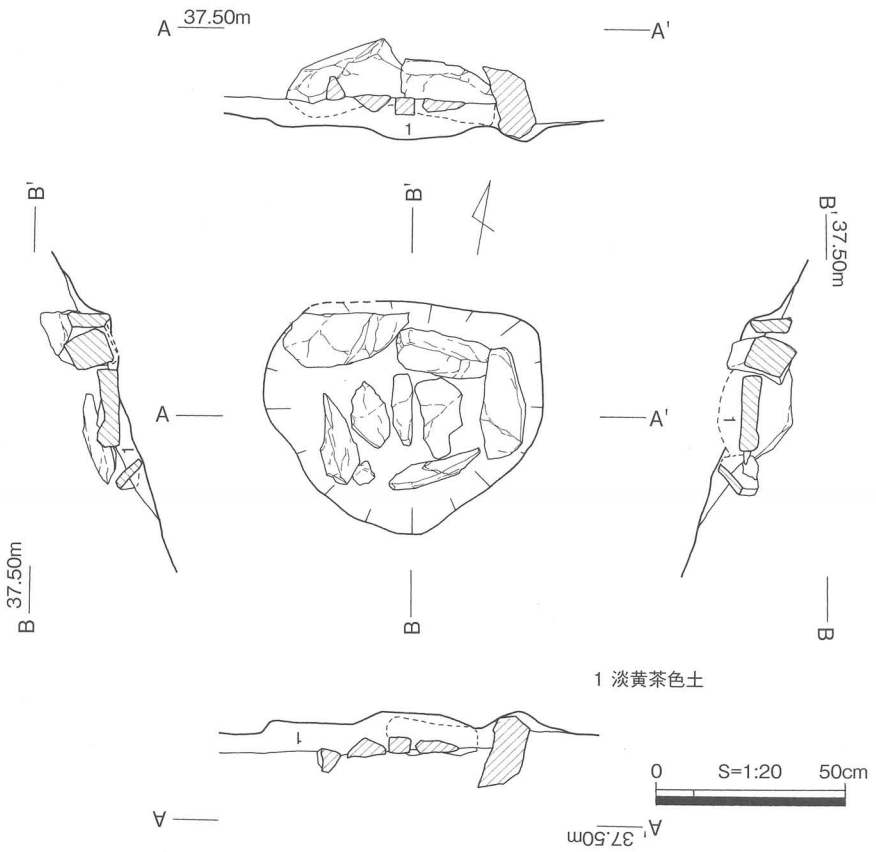
第87図　自然流水路１（谷底部）　出土水晶製石核・原石



第88図　自然流水路１（谷底部）　出土水晶製叩き石



第89図　自然流水路１（谷底部）　出土玉砥石



第90図　石棺墓　平面図・土層断面図

3．北側尾根上の遺構

石棺墓（第90図）

谷部の北側に東西に伸びる尾根の頂部からやや南に下った標高37.3mの斜面で見つかった小規模な石棺墓である。発見時には石材が既に露出していたため、盛土の状況等は不明であり、掘り方も非常にわかりにくいものであった。石棺は25～35cm大の側石３個と小口石１個、20～25cm大の床石４個が残存していた。そのうち北側側石２個と東側小口石、床石３個は原位置を保っており、南側側石と西端の床石は若干動かされたものと見られる。西側小口石と南側側石１個はなくなっていたが、築成当時の状況を復元すると石棺の内法は55×25cm程度だと考えられる。石棺墓構築の手順は、山側の地山を75cm幅、現状で10cmの深さにカットし、北側の側石と両小口石の下の地山を若干掘り窪めつつ据え、それらの石の周りと石棺内及び谷側斜面を同一の土で埋めて、南側の側石と床石を置いたものと推察される。遺物は石棺内からも周辺からも出土しておらず時期は不明である。また石棺の周辺一帯を広く精査したが、他に遺構はなく、これ１基だけが単独で作られたようである。

4．小　　結

A遺跡で検出した遺構は、古墳時代中期の竪穴住居跡１棟（SI－14）、古墳時代後期の掘立柱建物跡７棟（SB－38・40・41・45～48・53）・土器溜まり２ヶ所、古墳時代後期以降の溝状遺構１条（SD－02）、奈良・平安時代の掘立柱建物跡４棟（SB－49～51・56）、近世の溝状遺構１条、弥生時代前期末～中期後葉・古墳～平安時代の遺物を包含する自然流路跡２条、時期不明の掘立柱建物跡５棟（SB－39・42～44・52）、溝状遺構２条（SD－03・04）、石棺墓１ヶ所であった（建替えた掘立柱建物跡はこの数に入れていない）。

このうち、出土遺物からの時期特定が出来得なかったSB－39はSB－38と新旧関係が認められ、これより古い遺構であることが分かっている。周囲の遺物・遺構の時期状況を合わせ考察すると、古墳時代後期頃の遺構としても差し支えないものと思われる。また、SB－44・52は出土遺物である土器細片が須恵器と土師器に限定されることから、古墳時代以降の遺構であることは違いないものである。SD－03・04については、玉作工房跡でもある竪穴住居跡SI－14の東側に隣接し、同様の加工段に存在していることから、玉作工房跡SI－14に関連する遺構であった可能性も考えておく必要があろうものである。なお、現時点ではこれらSD－03・04はSI－14と同様、古墳時代中期頃の遺構と考えておく。玉作工房跡SI－14では、住居内に土坑３穴を確認しており（SK01～03）、玉作り関わる水溜の土坑であったと考えられる。中でも碧玉・瑪瑙チップの多量検出の事実から、南西の壁体溝付近に位置するSK01がその主たる機能を有していたものと思われる。このような玉作りに関連する土坑は松江市乃木福富町の大角山遺跡[5]でも確認されており、玉作りを行うために重要な役割をもった施設であったと推測し得る。また、A遺跡の谷部にあたる場所に存在する自然流水路からは、多量の土器と石器が出土している。石器においては、その大半が玉作りの未製品・残剥片で内磨砥石として使用された玉砥石も見られる。このような玉作り類遺物の出土は、玉作りの過程を知る上で貴重な資料を提供でき得ようものである。その他、北側尾根の頂部から少し下った斜面上に位置する石棺墓は、立地する場所が尾根頂部ではなく斜面上であることから、特異な埋葬形態とのイメージも抱かせるものである。他にこれと類似する単葬で斜面上に造られた小型墓壙は安来市の門生黒谷Ⅲ遺跡[6]でも確認されている。このような形態（埋葬地形態）の墓壙は、何を背景として造られたのか、今後、それを明確にし得よう類似する墓壙の検出に期待し、これからの検討課題としておきたい。

註

（1）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第11集』1994.3　島根考古学会

（2）松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌　第８集』1991　島根考古学会

（3）「福富Ⅰ遺跡」『福富Ⅰ遺跡　屋形１号墳』1997.3　島根県教育委員会

（4）分類選別の多くは米田克彦氏に分類して頂いた。

（5）『大角山遺跡発掘調査報告書』1998　島根県教育委員会

（6）「門生黒谷Ⅲ遺跡」『門生黒谷Ⅰ遺跡　門生黒谷Ⅱ遺跡　門生黒谷Ⅲ遺跡』1998.3　島根県教育委員会

参考文献

・松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』1992　木耳社

・米田克彦「島根県安来市大原遺跡における玉生産」『古代文化研究　第10号』2002　島根県古代文化センター

・「出雲地方における玉髄製石器の研究－恩田清氏採集資料と島根県出土の玉髄・瑪瑙製石器－」『島根県古代文化センター調査研究報告書20』2004.3　島根県古代文化センター

・「古代出雲における玉作の研究Ⅰ－中国地方の玉作関連遺跡集成－」『島根県古代文化センター調査研究報告書22』2004.3　島根県古代文化センター

第４章　W区の調査

W区は、弥生環壕遺跡から南西へ派生する丘陵の西側斜面裾に位置し、斜面が急激に平坦面へと変化する地形を成しているところである。地形測量により、近年まで畑として使用されていたと推測される。土層層位は表土下に10cm程度の黄褐色土、その下に黒黄褐色土、黒褐色土が堆積する。なお、黒褐色土は調査区南西側斜面のSB－59から加工段３周辺にかけて堆積し、SB－60・SK－05周辺には見られなかったことから、地山面のやや窪んだところに溜まった土層と考えられる。

SB－57・58・59・60・加工段３・SK－05（第91図）

SB－57　黒黄褐色土面を加工した平坦面状に作られた建物跡である。南側のトレンチを掘削した際には溝を検出していることから、壁体溝を伴う建物跡と推測される。なお、この遺構に伴う柱穴は検出できていない。

出土遺物（第92図）　遺構面上１層である黄褐色土からは、古墳時代後期の須恵器の高坏片535、坏身片534、明治以降と思われる陶器の碗、瓦が混在して出土している。このことによりSB－57は近世の畑作時等に攪乱を受けているものと考えられる。

SB－58　SB－59の埋土である黒褐色土を遺構面の基盤とする建物跡である。溝は57の溝と併行する形で南西方向に延びており、幅80cm、深さ20cmを測る。柱穴は確認していないが、調査区外である南西側に存在する可能性も考えられる。

出土遺物（第92図）　遺物は遺構面上１層の黒黄褐色土から、古墳時代後期の須恵器の坏蓋・壺片、他に陶器片、黒曜石が出土している。531・533は坏蓋である。531は口径14.2cmを測り肩部に稜をめぐらせ、天井部外面に回転ヘラ削りが見られる。533は口径13.4cmを測る。532は胴部が張り出す須恵器の壺と思われる。

SB－59　地山を遺構面基盤とした建物跡で、壁体の一部を検出している。壁体の最大高は25cmを測り、遺構に伴う柱穴は確認していない。なおSB－59の北から北西側斜面で柱穴を５穴検出したが、この建物跡に伴うものかどうかは不明である。

遺物は埋土である黒褐色土中より、土師器、古墳時代後期の須恵器の甕片・壺片・蓋坏類片が出土している。

加工段４　SB－57～59と60との間の斜面において検出したテラス状の加工段である。この加工段は黒褐色土面から地山までをカットし、平坦な面を作り出している。壁体の最大高は60cmを測る。

埋土中からの遺物は出土していないが、周辺の堆積土からは土師器、須恵器の高坏片・甕片が出土している。

SB－60（第93図）　W区の北西側平坦面において検出した建物跡で、地山面に作られている。西側は流失しているため建物の規模は不明であるが、現状で桁行１間（1.8m）×梁間１間（1.7m）を測る。ピットは上端径30cm、深さ20～30cmを測り、壁体溝は５cm程度と浅いものである。

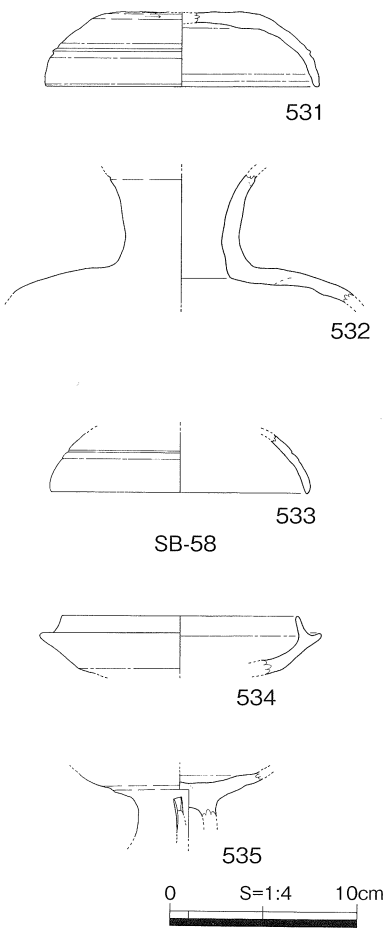
出土遺物（第94図）　埋土中から土師器片、須恵器片、中世亀山焼系統の鉢片、明治以降の陶器、瓦が出土している。536～538は須恵器で、536は口径10cmを測る坏身、537・538は高坏である。539は底部にわずかに回転糸切り痕を残す土師質土器の坏である。540は亀山焼系統の土器で鉢と思

※赤は地山面に作られた遺構を示す。

第91図　W区　遺構分布図

われる。口縁部は直線的に外傾し、端部は下方に拡張している。器面調整は内面に横ハケ目、外面に縦ハケ目を行う。541・542は陶器である。

SK－05（第93図）　SB－60の南西側で検出した土坑である。上端径78×78cm、深さ30cm、断面形は摺鉢状を呈する。埋土は明黄褐色土と黒褐色土の混合土で、埋土中から遺物は出土していない。

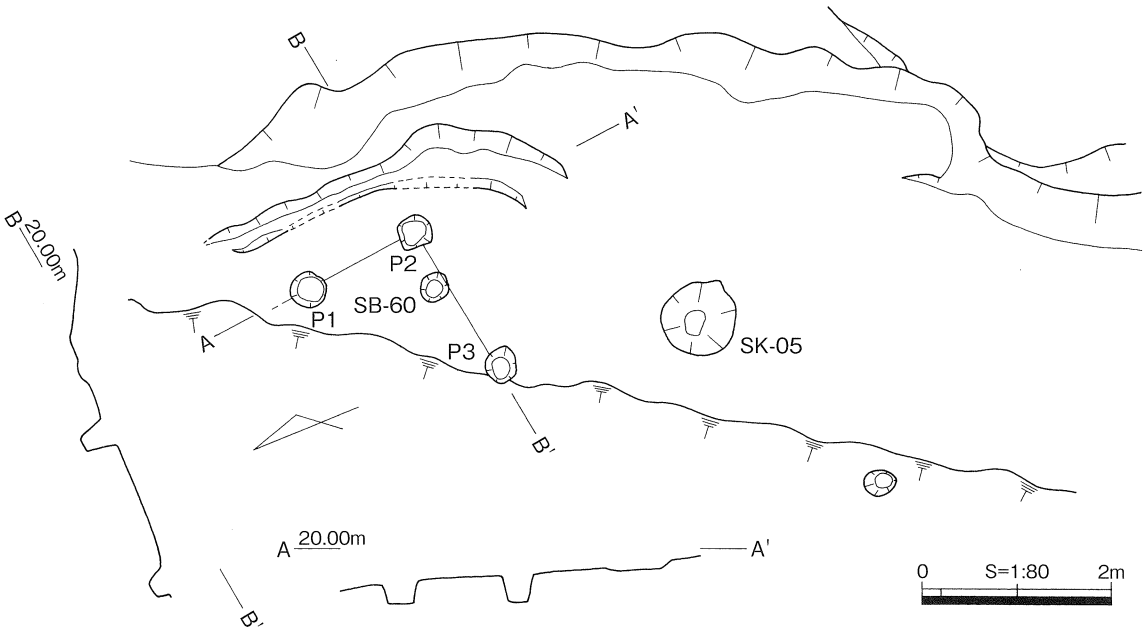


第92図　SB－57・58　出土土器

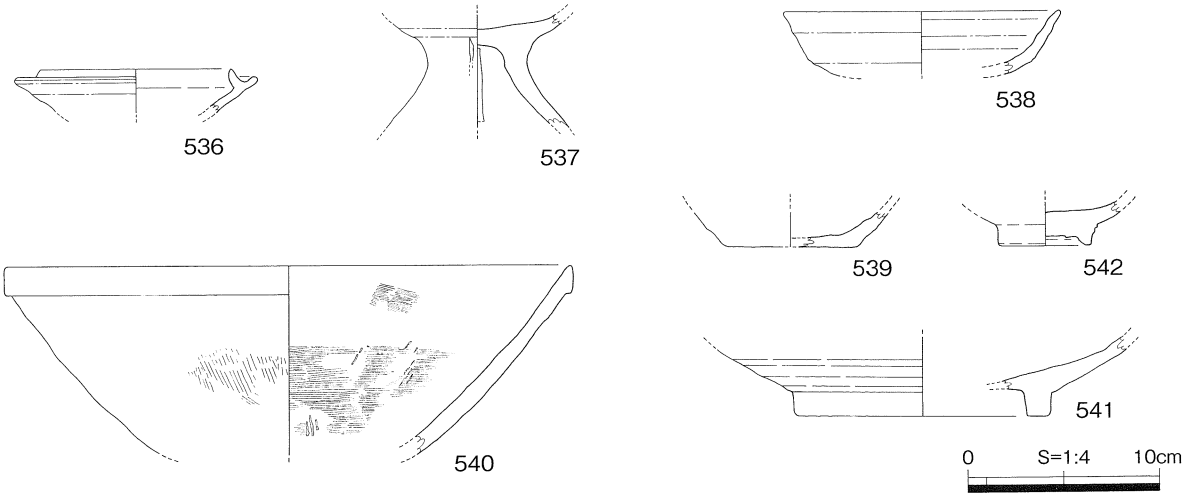
小結

SB－57は、遺構面上に表土層（一部木の根による攪乱層）と薄い黄褐色土層（古墳時代後期の須恵器と明治以降と思われる陶器が入り混じって出土）が堆積しているものである。このような遺構面上の埋土状況を考えると、57は近世の畑使用時に加工されたものとも考えられる。しかし、SB－58がこの57の段（溝）に沿う形で存在していることなどから、現時点では建物跡である可能性を考えておきたい。またSB－60・SK－05を検出した平坦面においては、その平坦面状・堆積状態から近代（近世？）の削平を受けているように推測され、遺構は検出できたものの時期特定は不可能と言わざるを得ない状況である。

W区では掘建柱跡４棟、加工段１所、土坑１基を検出した。調査範囲が限られていたためSB－57・58・59は遺構の一部しか調査できなかったことから、その詳細・全容は不明である。しかし、弥生環壕遺跡の南西側にも遺構が存在するということがわかったことは、田和山遺跡群の遺構や時



第93図　SB－60　平面図・断面図



第94図　SB－60　出土土器

代ごとの人々の動きを考えるにあたって有意義な資料となり得るものである。

第５章　まとめ

本遺跡（A・B遺跡・W区）では弥生時代～近代までの遺構・遺物を検出することができた。以下、各時代の遺構等の検討と遺跡の様相を述べ、まとめとしたい。

弥生時代

弥生時代の明確な遺構は確認していないが、B遺跡の谷底部の包含層からⅠ－４～Ⅳ－１様式[1]、A遺跡の自然流水路２南側緩斜面からⅠ－４～Ⅱ－１様式、A遺跡の自然流水路１の堆積土最下層からⅠ－４～Ⅱ－１様式・Ⅳ－１様式の弥生土器の出土が見られる。

B遺跡の谷底部出土土器は、その北西側斜面上方に位置する田和山遺跡の環壕等から転落してきたものと思われ、B遺跡谷部付近には弥生期の遺構は存在していなかったものと考えられる。また、A遺跡の自然流水路２南側緩斜面出土土器については、これら土器を包含する層が厚く堆積する調査範囲外の南西側上部に当期の遺構が存在する可能性が考えられる。その他、同谷部のA遺跡自然流水路１の堆積土最下層出土土器は、A遺跡内に同期の遺構が存在していた可能性を示唆させるものである。

弥生時代前期末～中期初頭（Ⅰ－４～Ⅱ－１様式）の遺構は、北西に位置する田和山遺跡で環壕等が確認されているが、住居跡等の居住関連の遺構は検出されていない。前述のA遺跡谷部で出土した当該期の土器は、A遺跡内に住居跡等が存在していた可能性も示唆させようものであり、田和山遺跡の初現期の様相を明らかにするうえで、貴重な資料となり得えよう。

古墳時代中期

古墳時代中期の遺構は、B遺跡のSB－33・35・36・加工段２、A遺跡のSI－14、その可能性があるものとして、B遺跡のSB－32、A遺跡のSB－52・SD－03・04があげられる。

B遺跡のSB－32・33・35・36・加工段２は、谷部の斜面を切削して作った平坦面上に建てられた掘立柱建物跡と思われるものである。これら遺構はいずれにおいても、梁間・桁行ともに検出できたものはなく、建物跡として断定させるには根拠にやや乏しい感もあるが、類似する当地、当該期の遺構の報告等により、掘立柱建物跡と考えておく。なお、これら遺構はB遺跡の谷部においての初現の遺構となり、この時期より人々がこの谷に生活の場をもったということを提示している。

A遺跡の谷部においては、SI－14・SB－52・SD－03・04が自然流水路１下方の南側に作られている。これら遺構は、同一平坦面に存在し玉作工房の竪穴住居跡であるSI－14を真中にして、西に掘立柱建物跡SB－52、東に溝SD－03・04を配置する形をとっている。このような遺構立地状況から、SB－52、SD－03・04は玉作工房跡SI－14に関連する施設であったとも考えられる。また、この玉作工房跡SI－14の床面及び、その北側下方の自然流水路堆積土からは、数多くの瑪瑙・碧玉・水晶製の勾玉・管玉・丸玉等の未製品・石核・原石が出土しており、この地で多くの玉製品が生産された様子が窺われるものである。田和山遺跡群周辺には、福富Ⅰ遺跡[2]、大角山遺跡[3]などの玉作り遺跡が知られている。また、本遺跡の南西約３kmには瑪瑙・碧玉の産地として有名な玉湯町の花仙山が聳えている。このように玉作りの原石獲得が容易な立地にあることが本遺跡内に玉作り工房跡を作った要因の一つであろうと考えられる。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、B遺跡の加工段３、A遺跡のSB－38・41・45・46・47・48・53・土器溜まり１・２、W区のSB－58・59で、その可能性があるものとしては、B遺跡のSB－37、A遺跡のSB－39・40・42・43・54・SD－02があげられる。

B遺跡の加工段３は、柱穴は見つかっていないがSB－37と同様、居住に関わる遺構と推測する。

A遺跡のSB－39は、SB－38と新旧関係が認められるもので、SB－38と建替えた古段階の建物であった可能性も考えておきたい。その他、SB－40とSB－41とSD－02、SB－47とSB－48、SB－53とSB－54、W区のSB－58　とSB－59もそれぞれ新旧関係が見られることから、当該期にほぼ元位置での建替えが行われたものと推測できようものである。また、出土遺物がなく、存在時期が不確定なSB－42・43もSB－40・41、SD－02と同レベルに隣接していることから、当該期遺構の可能性が高いものと考えられる。

なお、A遺跡の石棺墓は、単葬で斜面上に造られた小型墓壙との特異な形態をもつもので、類似するものに安来市の門生黒谷Ⅲ遺跡[4]で検出された墓壙があることを先述のA遺跡小結の項で述べた。この門生黒谷Ⅲ遺跡の墓壙は古墳時代後期に属すものと推されている。これらのことからA遺跡の石棺墓は、比較によるあくまでも推測的なものであるが、これに近い時期のものと現時点では考えておきたい。

奈良～平安（中世）時代

奈良～平安時代の遺構は、B遺跡のSB－31・SD－01、A遺跡のSB－50・51・56、その可能性があるものとしては、A遺跡のSB－49があげられる。その他、中世まで下ると考えられるものにB遺跡のSB－34、A遺跡のSB－55がある。

B遺跡のSB－34は、斜面を切削して作った広大な平坦面に数回の建替えが行われたもので、このような建物に付随する広範囲な大土木は、本遺跡内の当該期以前には見られないものである。

なお、A遺跡のSB－49とSB－50、SB－55－１とSB－55－１は、新旧関係が認められるもので当該期にほぼ元位置での建替えが行われたものと推測できる。

近代・その他

近代の遺構としては、A遺跡の溝状遺構があげられ、その他、出土土器が細片であったことや撹乱のため時期判断が困難であった遺構として、A遺跡のSB－44・西側ピット列・SK－02・03、W区のSB－57・60・加工段４が検出されている。

A・B遺跡の様相とまとめ

B遺跡で検出された遺構は、古墳時代中期の掘立柱建物跡４棟（SB－32・33・35・36）と段状遺構１ヶ所（加工段２）、古墳時代後期の掘立柱建物跡１棟（SB－37）と段状遺構１ヶ所（加工段３）、平安時代後期の掘立柱建物跡１棟（SB－31）と溝状遺構１条（SD－01）、中世初期の掘立柱建物跡１棟（SB－34）であった[5]。

このB遺跡谷部においては、遺構の集中する時期が古墳時代中期と平安時代後期～中世初期であることがみてとれる。古墳時代後期の遺構も２ヶ所において検出されていることから、古墳時代中期から一応継続して集落が営まれているわけだが、B遺跡の谷部においては、特にこの２時期に好

んで住まわれた（建物が作られた）ことが分かる。

建物の立地に関しては、半擂鉢状の斜面を切削して作られるといった状況が時期差なく認められ、平地を避けるように建物が作られている。このような遺構配置状況は、松江市法吉町の久米B遺跡[6]等、他の多くの遺跡で同様の様子が窺われており、水田等の生産に関わる用地を平地に確保するため、谷部斜面等に住居を作ったという従来の仮説にも一応あてはまろうものである。

B遺跡東側の平地には、先年まで水田が作られていた。遺構が存在した当時もこのような水田が広がっていたとすれば、このB遺跡谷部は集落を作るに最適な場所であったことに疑いはないものである。

A遺跡で検出された遺構は、弥生時代前期末～中期後葉・古墳時代～平安時代の遺物を含む自然流水路跡２条（自然流水路跡１・２）、古墳時代中期の玉作り工房跡１棟（SI－14）と掘立柱建物跡１棟（SB－52）と溝状遺構２条（SD－03・04）、古墳時代後期の掘立柱建物跡12棟（SB－38～43・45～48・53・54）と溝状遺構１条（SD－02）と土器集中箇所２ヶ所（土器溜まり１・２）と墓壙１ヶ所（石棺墓）、奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡４棟（SB－49・50・51・56）、平安時代～中世の掘立柱建物跡１棟（SB－55）、近代の溝状遺構１条（溝状遺構）、時期不明の掘立柱建物跡１棟（SB－44）と柱列１（西側ピット列）と土坑２穴（SK－02・03）であった[5]。

A遺跡の谷部においては、斜面上部の湧き水から流れる自然流水路が中央に流れ、その東側と西側の斜面に住居が作られるといった状況が見られる。

A遺跡の集落の存在を示す遺構の変遷は、まず、古墳時代中期に自然流水路の南側の斜面で玉作り工房跡１棟と掘立柱建物跡１棟と溝状遺構２条が作られ、瑪瑙・碧玉を主とした玉製作が行われていた様子が窺われる。この時期の遺構は自然流水路に近隣するこの場所のみである。古墳時代後期になると、この遺構は使用されなくなり、南・北側両斜面に加工段状の掘立柱建物跡が多数（12棟）と小型の石棺墓が現れる。これら掘立柱建物跡が住居等の機能を有するものとすれば、当該期が本遺跡に集落が営まれた最盛期と思われる。その後、奈良～平安時代・中世になると遺構数は減少し、掘立柱建物跡が５棟程度となっている。

以上からA遺跡遺構の変遷を考察すると、古墳時代中期・奈良～平安時代・中世の遺構数は少なく、古墳時代後期の遺構は突出して多い傾向が見られる。これは先述のB遺跡の遺構変遷からすると正反対の現象となっている。このことから主たる住居域は、古墳時代中期→B遺跡、古墳時代後期→A遺跡、奈良～平安時代・中世→B遺跡とそれぞれ時代ごとにA遺跡谷部・B遺跡谷部と移動していたものと考えられる。この住居域の移動は何によるものなのか理由は漠然としないが、主たる住居域を変えるといった背景には何か大きな要因があったものとも推測される。

最後に、弥生時代前期末～中期後葉・古墳時代～中世・近世と多くの遺構・遺物が見つかった本A・B遺跡・W区と田和山遺跡を含めた田和山遺跡群内において、弥生時代後期（Ｖ様式）の土器のみが出土しないことに触れておく。田和山遺跡群の平面的な広さと総出土遺物数からして、この時期の土器が１片も出土しないというのは特殊な状況である。これらの状況からは、田和山遺跡が弥生中期後葉に廃絶してから古墳時代に入るまで、それまで居たすべての人々が住居域を遠くへと移動させた、もしくは、この地に寄り付かなかった等の異例な状況を考えるしかないものである。

当地山陰においても、弥生時代後期の集落は標高が高い場所へ移動するとの見解が聞かれる。仮

にそのような時代的特徴を背景にしての住居域移動の結果ならば、田和山遺跡群だけの特異性を示すものではなくなる。このことを解するには、他の多くの遺跡との比較検討が必要不可欠なものである。今後、より多くの弥生後期の集落が調査、発見され、その立地的要素も入れた総合的な議論が成されることに期待し、この点は今後の検討課題としておきたい。

註

（1）松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』1992　木耳社

（2）「福富Ⅰ遺跡」『福富Ⅰ遺跡　屋形1号墳』1997.3　島根県教育委員会

（3）『大角山遺跡発掘調査報告書』1998　島根県教育委員会

（4）「門生黒谷Ⅲ遺跡」『門生黒谷Ⅰ遺跡　門生黒谷Ⅱ遺跡　門生黒谷Ⅲ遺跡』1998.3　島根県教育委員会
※門生黒谷Ⅲ遺跡は棺材に須恵器が使われており、石棺が用いられた本墓壙と棺材は相違する。

（5）その時期の可能性があるものも含む。また、明らかに近時期の建替えであると思われるものは棟数に入れていない。

（6）「久米B遺跡」『久米遺跡群発掘調査報告書』2000.3　松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団

遺物観察表

遺物観察表（土器）

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高	寸法(cm) 口径	形態・文様の特徴	調整	色調	備考
1	土師器 甕	B遺跡 SB-31 SK-01	32.8		口縁部は強く外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:橙褐色 内面:橙色	外面:炭化物付着
2	土師器 甕	B遺跡 SB-32 暗褐色土			口縁部片 退化した二重口縁	外面:ナデ 内面:風化	肌色	
3	土師器 甕	B遺跡 SB-32 暗褐色土			口縁部片 口縁部は外反	ナデ	淡橙色	
4	土師器 甕	B遺跡 SB-33 壁体溝上	16.0		「く」の字状の単純口縁 口縁端部は先細る	外面:風化 内面:ナデ、ヘラ削り	橙灰色	
5	土師器 坏	B遺跡 SB-33	15.9	5.0	やや深い形状を呈する 口縁端部はわずかに外反	外面:ナデ 内面:ハケ目、指頭圧痕	赤橙色	
6	土師器 坏	B遺跡 SB-33	11.2	5.0	半球状を呈する	風化	黄灰色	
7	土師器 高坏	B遺跡 SB-33 床面	19.2		坏部は有段	風化	淡橙褐色	
8	土師器 高坏	B遺跡 SB-33	底径 8.7		坏部は有段	風化	赤褐色～橙褐色	
9	土師器 高坏	B遺跡 SB-33			坏部は有段	外面:ヘラミガキ 内面:しぼり痕、ナデ	橙色	
10	須恵器 坏	B遺跡 SB-33 上層	底径 8.0		底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	暗灰色	
11	須恵器 坏	B遺跡 SB-33 上層	底径 9.0		底部:回転糸切り	回転ナデ、ナデ	暗灰色	
12	土師器 甕	B遺跡 加工段2 壁体溝上	13.7		退化した二重口縁 口縁部は直立気味	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	外面:茶色 内面:淡茶	外面:スス付着
13	土師器 甕	B遺跡 加工段2 焼土付近	16.4		退化した二重口縁 口縁部は直立気味	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	褐灰色	
14	土師器 小型丸底壺	B遺跡 加工段2 焼土付近	6.4		口縁部はわずかに外反	外面:風化 内面:ナデ、ヘラ削り	にぶい橙黄色	
15	土師器 高坏	B遺跡 加工段2 壁体溝上			坏部は有段 円盤充填	外面:風化、ハケ目 内面:ハケ目後ナデ	桃色 淡黄褐色	
16	土師器 高坏脚部	B遺跡 加工段2 焼土付近	底径 10.2		脚部のみ残存	外面:ヘラミガキ 内面:しぼり痕、ヘラ削り	黄白色～淡橙色	
17	土師質土器 高台付坏	B遺跡 SD-01			高台部欠損	風化	外面:淡肌色 内面:黒灰色	
18	土師質土器 高台付坏	B遺跡 SD-01	底径 5.6		高台部は低く直立	風化	淡褐色	
19	土師質土器 坏	B遺跡 SD-01	底径 5.2		底部:回転糸切り	風化	淡桃褐色	
20	土師質土器 高台付坏	B遺跡 SD-01			高台端部欠損	風化	肌色	
21	土師質土器 高台付坏	B遺跡 SD-01	底径 6.0		底部:回転糸切り	風化	淡桃色	
22	土師器 高坏	B遺跡 SB-35 平坦面上	13.8		坏部は深く内湾	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、風化	橙色	
23	土師質土器 高台付坏	B遺跡 SB-34-1 P5付近	底径 9.2		「ハ」の字状に開く高台	外面:風化 内面:回転?ナデ	淡橙褐色	
24	土師器 甕	B遺跡 SB-36	17.4		痕跡的な二重口縁	風化、剥離	外面:淡褐色 断面:淡褐色	
25	土師器 高坏	B遺跡 SB-36 壁体溝内側	17.0		坏部は有段	外面:ヘラミガキ 内面:粗いヘラミガキ	橙褐色	
26	土師器 甕	B遺跡 SB-37 2層	19.2		単純口縁 口縁部は緩く外傾	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	暗褐色	外面:スス付着
27	土師器 甕	B遺跡 SB-37 加工段周辺	18.8		単純口縁 口縁部は強く外傾	外面:雑なナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:淡暗褐色 内面:淡褐色	
28	須恵器 坏身	B遺跡 加工段3 溝	10.8	3.7	立ち上がりは高く内傾 坏部は浅い	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
29	須恵器 坏身	B遺跡 加工段3 溝	11.6	3.6	立ち上がりは高く内傾 坏部は浅い	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	内外面:灰色 断面:紫灰色	
30	土師器 把手	B遺跡 加工段3			甑の把手	ナデ	淡褐色	
31	土師器 甑	B遺跡 加工段3 平坦面上	24.6		口縁部は緩やかに外反 把手は残存せず	外面:ハケ目、ナデ 内面:ヘラ削り	外面:褐色 内面:橙褐色	
32	弥生土器 壺	B遺跡 谷底東端			口縁部は湾曲して外反 頸部:ヘラ描直線文7条	外面:ナデ 内面:風化	黄褐色～黄灰色	Ⅰ-4様式
33	弥生土器 壺	B遺跡 谷底東端			頸部小片 頸部:ヘラ描直線文4条	内面:ヘラミガキ	淡橙褐色	Ⅰ-4様式
34	弥生土器 壷	B遺跡 谷底東端	28.9		口縁端部:凹線文・円形浮文・刻み目 頸部:突帯文5条以上	やや風化	淡茶褐色	1mm以下の砂粒含
35	弥生土器 壺	B遺跡 谷底東端	24.4		口縁端部:凹線文・粘土紐貼付 頸部:突帯文4条	外面:ナデ 内面:風化	黄白色～乳白色	
36	弥生土器 壺	B遺跡 谷底東端	44.0		口縁端部上面:に斜線文・円形浮文	外面:ハケ目 内面:ヘラミガキ	灰色がかった肌色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高	寸法(cm) 口径	形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
37	弥生土器 底部	B遺跡 谷底東端 褐色土	底径 10.0			外面:ヘラミガキ 内面:ハケ目、ナデ	灰乳色	微砂粒多
38	弥生土器 底部	B遺跡 谷底東端 水穴	底径 8.0			外面:ヘラミガキ 内面:ナデか	乳灰色～暗灰色	微砂粒含
39	弥生土器 底部	B遺跡 谷底東端 褐色土	底径 5.4		上げ底	ヘラミガキ	外面:橙褐色 内面:黒褐色	白色微砂粒含
40	弥生土器 底部	B遺跡 谷底東端	底径 9.4			外面:ヘラミガキ 内面:ハケ目、ナデ	外面:橙褐色 内面:淡黄褐色	大粒砂粒含
41	土師器 甕	B遺跡 谷底中央 延長部	18.8		退化した二重口縁	内面:ヘラ削り	黄白色	
42	土師器 甕	B遺跡 谷底西側 延長部 暗褐色土	15.8		退化した二重口縁	内面:ヘラ削り	黄白色	
43	土師器 甕	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	17.0		退化した二重口縁	風化	褐色～灰色	
44	土師器 甕	B遺跡 谷底西側 延長部	14.4		単純口縁 口縁部は緩やかに外反	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡茶色	
45	土師器 高坏	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	16.2		坏部は有段	外面:ナデ 内面:ヘラミガキ	淡褐灰色	
46	土師器 高坏脚部	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	底径 9.8			外面:ヘラミガキか 内面:ヘラ削り	黄橙色	
47	土師器 高坏脚部	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	底径 10.4			内面:ヘラ削り	肌色～淡橙色	
48	土師器 甑	B遺跡 谷底東端～ 中央 延長部	底径 10.4		底面は中空 底端部近くに円孔	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	肌色	
49	土師器 小型丸底壺	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	6.2		口縁部はわずかに外反	風化	外面:明褐～淡灰色 内面:明褐色	
50	土師器 手捏ね土器	B遺跡 谷底中央 延長部 暗褐色土	7.2	3.3	小型 坏状を呈する 厚手	風化	内外面:淡褐色 断面:淡灰色	
51	土師器 竈	B遺跡 谷底中央 延長部 暗褐色土			基底部片	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	橙褐色	
52	土師器 竈	B遺跡 谷底西側 延長部 暗褐色土			焚口左側の基底部片	外面:ハケ目 内面:ナデ	橙褐色	
53	須恵器 坏蓋	B遺跡 谷底東端 暗褐色土	14.2	4.1	肩部:沈線2条 天井部:回転ヘラ切り	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	暗灰色	
54	須恵器 坏蓋	B遺跡 谷底東端 延長部 暗褐色土	13.6	4.5	肩部:沈線2条	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色～灰白色	
55	須恵器 坏蓋	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	12.6	3.9	肩部:沈線1条による段	内外面:回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	暗青灰色	
56	須恵器 蓋	B遺跡 西斜面 暗褐色土	16.6		口縁端部は下垂 断面三角形状を呈する	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	灰色	
57	須恵器 坏身	B遺跡 褐色土	10.4	4.2	立ち上がりは高く内傾	内外面:回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
58	須恵器 坏身	B遺跡 SB-34下 水穴	11.8		立ち上がりはやや高く内傾	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
59	須恵器 坏	B遺跡 谷底西側 延長部	12.0	3.7	内湾し、口縁部はくびれる 底部:回転糸切り	内外面:回転ナデ 内底面:静止ナデ	灰緑色	
60	須恵器 坏	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	底径 5.8		底部:回転糸切り	風化	淡褐色	
61	須恵器 坏	B遺跡 谷底中央 暗褐色土	12.0	4.2	口縁端部は緩やかに外反	回転ナデ	灰色	
62	須恵器 坏	B遺跡 西斜面 褐色土	14.0		口縁端部は緩やかに外反	回転ナデ	灰色	
63	須恵器 皿	B遺跡 西斜面 暗褐色土	15.4	3.0	底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	黄灰褐色	
64	須恵器 坏	B遺跡 谷底東端 褐色土	底径 6.7		底部:回転糸切り	回転ナデ	明橙色	
65	須恵器 高台付皿	B遺跡 西斜面 暗褐色土	21.3		底部:回転糸切り後高台貼付	内外面:回転ナデ 内底面:静止ナデ	灰色	
66	須恵器 高台付皿	B遺跡 西斜面 暗褐色土	17.0	2.6	底部:回転糸切り後高台貼付	回転ナデ	黄灰褐色	
78	土師器 甑	A遺跡 SB-38-1 床面	29.5	26.5	口縁部は緩やかに外反 胴部:把手1対 底部:円孔2対	外面:ハケ目後ナデ 内面:ヘラ削り後ナデ	黄白茶色	
79	土師器 甕	A遺跡 SD-02	25.0		単純口縁 口縁部は強く外傾	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:明褐色 内面:黒褐色	
80	土師器 甕	A遺跡 SB-40-1	23.8		単純口縁 口縁部は大きく外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡褐色	外面:スス付着
81	土師器 甕	A遺跡 SB-40-1	19.4		単純口縁 口縁部は緩やかに外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り		
82	土師器 甕	A遺跡 SB-40-1	30.1		単純口縁 口縁部はやや外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	
83	須恵器 坏蓋	A遺跡 SB-45 P8付近			肩部:沈線1条による段 口縁端部はわずかに内傾	回転ナデ	内外面:灰色 断面:紫灰色	
84	須恵器 坏身	A遺跡 SB-45 P8付近	12.1		立ち上がりは低く内傾 坏部は張らず	回転ナデ	淡灰色	
85	須恵器 壺	A遺跡 SB-45 19層			肩～胴部はよく張り出す 口縁端部内面:浅い沈線	回転ナデ	内外面:灰色 内面:淡紫灰色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調　　整	色　調	備　考
			器高	口径				
86	土師器 甕	A遺跡 SB-45 P1付近			なで肩 肩上部:沈線1条	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡褐色	
87	須恵器 坏蓋	A遺跡 SB-46(SK-01)	12.8	4.4	肩部:沈線2条 底部:回転ヘラ切り	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
88	須恵器 坏蓋	A遺跡 SB-48 暗褐色土	12.4		肩部:沈線1条による段 口縁部は垂直に下りる	回転ナデ	灰色	
89	須恵器 坏身	A遺跡 SB-48 暗褐色土	11.2		立ち上がりは比較的低く内傾 坏部はやや内湾気味	内外面:回転ナデ 内底面:静止ナデ	外面:黒灰色 内面:灰色	
90	須恵器 坏身	A遺跡 SB-48 P13	10.6		立ち上がりは低く内傾 坏部は丸みを帯びる	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	外面:灰色 内面:淡灰色	
91	須恵器 坏蓋	A遺跡 SB-47 P2	12.7		肩部:わずかな段	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	内外面:灰色 断面:淡灰色	
92	土師器 甕	A遺跡 SB-47	18.6		単純口縁 口縁部は緩やかに外反	風化	白褐色	
94	土師器 甕	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	17.0		「く」の字状の単純口縁 口縁端部に平坦面を持つ	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	乳橙色	
95	土師器 甕	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	27.0		単純口縁 胴部は張らず	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙白色	
96	土師器 甕	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	18.0		「く」の字状の単純口縁 口縁部はわずかに外反	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙色	
97	土師器 甕	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	24.8		単純口縁 口縁部は緩やかに外反	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙色	
98	土師器 小型丸底壺	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	10.8		「く」の字状の単純口縁 口縁部は長く内湾気味	外面:ハケ目、風化 内面:ヘラ削り、風化	乳橙色	
99	土師器 甕	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	33.6		口縁部は強く外傾 胴部は張らず	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙色	口縁部外面:スス付着
100	土師器 高坏脚部	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	底径 11.3		脚部のみ残存 円盤充填	外面:ナデ、風化? 内面:ナデ?、ヘラ削り	橙茶色	
101	土師器 高坏脚部	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	底径 14.2		「ハ」の字状に開く脚部 外面中程:突帯状の段	ナデ	淡橙茶色	
102	土師器 甑	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	23.4		口縁部は緩く外反 胴部:把手1対	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙茶色	
103	土師器 土製支脚	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面		18.4			内外面:淡褐～淡灰色 断面:淡黒色	
104	須恵器 長脚高坏	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	8.2		坏部のみ残存 外面:沈線3条	回転ナデ	淡灰色	
105	須恵器 坏身	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	13.2		立ち上がりは低く内傾	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	外面:灰色 内面:紫灰色	
106	須恵器 坏身	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	10.8		立ち上がりは低くほぼ垂直	回転ナデ	灰色	
107	須恵器 坏身	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	12.3		立ち上がりは低くほぼ垂直	回転ナデ	灰色	
108	須恵器 坏身	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	11.1		立ち上がりはやや肥厚し内傾	回転ナデ	淡青灰色	
109	須恵器 坏	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	11.4	4.2	底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内底面:多方向ナデ	口縁部:黒灰色 その他:白灰色	
110	須恵器 高台付皿	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	底径 11.0		底部:内側に高台貼付	ナデ	灰色	
111	土師質土器 坏	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	13.6	4.8	底部:回転糸切り	回転ナデ	橙褐色～赤褐色	
112	須恵器 壺	A遺跡 北側斜面 焼土坑付近～下側斜面	底径 5.0		胴～底部残存 底部外面:ヘラ記号	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
114	須恵器 坏蓋	A遺跡 SI-14 SK-01東隣ピット	12.8		肩部:沈線2条による段 口縁端部内面:段	回転ナデ	灰色	
115	土師器 甕	A遺跡 SI-14 床面覆土	15.4		退化した二重口縁 口縁部は短く外傾	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡茶橙色	
116	土師器 高坏	A遺跡 SI-14 床面覆土	推定 13.0		坏部は張らず直線的	風化		
117	土師器 高坏	A遺跡 SI-14 床面覆土			円盤充填	外面:ハケ目、ナデ 内面:ハケ目、ヘラ削り	黒灰色	
118	須恵器 甕	A遺跡 SI-14 床面覆土			肩部片	内面:円弧押当具痕	灰色	外面:自然釉
119	須恵器 瓶	A遺跡 SI-14 床面覆土	頸部径 3.6		頸部片 804樽形瓶と同一個体か	回転ナデ	表面:暗青灰色 断面:セピア色	
120	土師器 甕	A遺跡 SI-14 SK-02	16.4		退化した二重口縁 口縁端部は明確に外反	風化	淡肌色	
121	土師器 甕	A遺跡 SI-14 SK-03	14.2		退化した二重口縁 口縁部は短くわずかに内湾	摩滅	淡桃褐色	
122	土師器 甕	A遺跡 SI-14 SK-03	15.0		痕跡的な二重口縁 口縁部は肥厚し「く」の字状	ナデ、風化	白褐色	
123	土師器 甕	A遺跡 SI-14 SK-03	15.0		痕跡的な二重口縁 口縁部は肥厚し「く」の字状	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡褐色	
124	土師器 小型丸底壺	A遺跡 SI-14 SK-03	4.4	6.5	口縁部は直口気味 胴部は扁球形状を呈する	摩滅	淡灰褐色	
125	土師器 高坏脚部	A遺跡 SI-14 SK-03			脚部のみ残存	外面:ヘラミガキ 内面:しぼり痕	淡黄橙色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
			器高	口径				
126	土師器 小型丸底壺	A遺跡 SI-14 工作用ピット(SK-01)	6.1	7.3	口縁部は肥厚し緩く外反	ナデ	淡橙灰色	
127	土師器 小型丸底壺	A遺跡 SI-14 西南部床面 溝	8.6	7.0	口縁部は広く端部は先細る	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	淡肌～黒灰色	
128	土師器 高坏脚部	A遺跡 SI-14 西南部床面 溝	底径 10.0		厚手 端部は先細り尖る	外面:風化 内面:ヘラ削り	灰褐色	
129	土師器 壺	A遺跡 SI-14 床面覆土	11.4		口縁端部は丸くおさめる	ナデ	白橙色	
130	土師器 甕	A遺跡 SI-14 床面覆土	14.4		痕跡的な二重口縁 口縁端部は先細り尖る	外面:風化 内面:ヘラ削り、風化	白橙色	
140	土師器 壺	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	15.2		二重口縁 口縁部は大きく外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:淡褐～黒色 内面:淡褐色	
141	土師器 壺	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	16.8		二重口縁 口縁部は緩く外反	外面:風化 内面:ナデ、絞り痕	表面:淡褐～淡黒色 断面:淡灰～濁褐色	外面:スス付着
142	土師器 甕	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	21.6		二重口縁 口縁端部に平坦面を持つ	外面:ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	茶褐色	
143	土師器 甕	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	17.4		二重口縁 口縁端部はわずかに肥厚	表皮剥離	黄橙色	
144	土師器 甕	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	17.6		「く」の字状の単純口縁 口縁端部に内傾面を持つ	風化	外面:黄灰色 内面:黒灰色	
145	土師器 高坏	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	15.6		円盤充填 中心に刺突痕 坏部は深く直線的	風化	明褐色	
146	土師器 高坏	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	15.2		円盤充填、中心に刺突痕 坏部は深く直線的	風化	橙褐色	
147	土師器 高坏脚部	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	底径 11.8		脚部のみ残存	風化	にぶい黄橙色	
148	土師器 低脚坏	A遺跡 南側斜面 土器溜り1	13.4		脚端部欠損 坏部は浅い	風化	橙黄色	
149	須恵器 坏蓋	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	13.0	4.5	肩部:段 内湾気味の形状を呈する	外面:風化 内面:回転ナデ	外面:淡褐色 内面:淡灰色	
150	須恵器 坏蓋	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	12.2	3.6	天井部:回転ヘラ切り後ナデ	外面:ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	青灰色	
151	須恵器 坏身	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	10.4	4.3	立ち上がりは低く内傾 坏部は深い	内外面:回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色～灰白色	
152	須恵器 坏身	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	11.0	3.5	立ち上がりは低く内傾	回転ナデ、ナデ	灰色～灰白色	
153	須恵器 高坏	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	底径 10.6		2方向長方形透かし	内外面:回転ナデ 坏部内底面:静止ナデ	淡灰色	
154	須恵器 高坏	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	底径 11.8		2方向2段透かし		灰色	
155	土師器 土製支脚	A遺跡 南側斜面 土器溜り2		18.3		風化	淡褐色	
156	土師器 丸底鉢	A遺跡 南側斜面 土器溜り2	13.0	10.1	口縁部はわずかに外反	風化	橙色を帯びた黄灰色	
157	須恵器 把手	A遺跡 南側斜面 土器溜り2			差込式 差込部に別粘土で塗りつける	指押さえ、ナデ	灰色	
158	須恵器 坏蓋	A遺跡 南側斜面 SB-53	12.8		丸みを帯びる形状を呈する	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	白灰色	
159	須恵器 高坏	A遺跡 南側斜面 SB-53	15.2		坏部のみ残存	回転ナデ	乳黄灰色	
160	須恵器 高坏	A遺跡 南側斜面 SB-53 上層	8.7	8.95	坏部外面:沈線3条 円形透かし1孔	回転ナデ	内外面:灰色 断面:淡灰色	
161	陶器 碗	A遺跡 南側斜面 SB-53	12.2		口縁部は直立			布志名焼 深緑色の釉
164	須恵器 坏蓋	A遺跡 南側斜面 SB-56	13.0		口縁端部は内傾	回転ナデ	灰色	
165	土師器 甕	A遺跡 南側斜面 SB-56	22.0		単純口縁 口縁部は肥厚し外傾	風化	黒褐色	
166	陶器 平碗	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	底径 5.4		高台部のみ無釉		緑青色	布志名焼 緑青色の釉
167	磁器 皿	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	13.2	3.7	染付け 見込み:花弁 内外面:笹模様			高台端部に目砂が見られる
168	磁器 碗	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	6.7	3.4	染付け 内外面:笹模様			高台端部に目砂が見られる
169	磁器 碗	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	6.3	3.05	染付け 内外面:笹模様			高台端部に目砂が見られる
170	土師質土器 灯明皿	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層より上層	9.25	2.1	底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:風化	淡橙褐色	口縁端部内面:油煙付着
171	陶器 丸碗	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層より上層			染付け 全体に貫入が入る唐草文			高台端部に目砂が見られる
172	磁器 仏飯器脚部	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層より上層	底径 2.8		高台部のみ無釉		乳灰黄色	乳灰黄色の釉
173	陶器 碗脚部	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層より上層	底径 3.7		染付け			
174	陶器 摺鉢	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	30.5	14.3	口縁端部は玉縁状を呈する	内面:摺目	茶褐色	全面:施釉

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高	寸法(cm) 口径	形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
175	陶器 片口鉢	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	16.6	10.0	口縁端部は玉縁状を呈する 5個の胎土目		緑青色	布志名焼 緑青色の釉
180	弥生土器 壺	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 3層	15.4		口縁部は大きく外反 頸部:突帯文1条	外面:ハケ目、ナデ 内面:ヘラミガキ	淡橙褐色	
181	弥生土器 壺	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 3層	胴部最大径 16.6		胴部は丸みを帯びる 最大径:突帯文2条	外面:ナデ 内面:ハケ目後ナデ	茶色	
182	弥生土器 甕	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 4層	31.8		口縁部は短く外傾 頸部以下:櫛描直線文・三角形刺突文	外面:ハケ目後ヘラミガキ 内面:ナデ	淡灰茶色	Ⅱ-1様式
183	弥生土器 甕	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 3層			口縁部は直立	外面:ハケ目 内面:ヘラミガキ	淡橙褐色	Ⅰ-4～Ⅱ-1様式
184	弥生土器 甕	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 3層			口縁端部上面に平坦面を持つ 胴部:刺突文	外面:ハケ目 内面:ヘラミガキ	外面:淡褐色 内面:淡暗褐色	
185	弥生土器 甕	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 3層			口縁端部は明確に外反	風化	淡褐色	
186	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面	底径 6.3			風化	外面:橙褐色 内面:白褐色	1～2mmの砂粒含
187	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面	底径 6.4			外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:風化	外面:白褐色 内面:淡褐色	1～2mmの砂粒含
188	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面	底径 9.0			風化	淡褐色	1～2mmの砂粒含
189	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	14.2		退化した二重口縁 口縁部は短く端部は外傾	外面:ハケ目後ナデ	明黄褐色	
190	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	28.0		単純口縁 口縁部は強く外傾	外面:ハケ目後ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	橙白色	
191	土師器 丸底壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	14.3		口縁部は肥厚	外面:ハケ目後ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	暗灰色	
192	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	25.9		単純口縁 口縁部は短く外傾	外面:ハケ目後ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	暗黄褐色	外面:スス付着
193	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	12.2		「く」の字状の単純口縁	外面:ハケ目後ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	黄灰色	
194	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	37.8		単純口縁 口縁部は緩やかに外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙色	
195	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	15.3	7.2	「ハ」の字状に高く開く高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡橙色	
196	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	15.6	6.9	「ハ」の字状に高く開く高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡橙色	
197	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	14.0	7.05	「ハ」の字状に高く開く高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡橙色	
198	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	底径 9.8		「ハ」の字状に高く開く高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	明赤褐色	
199	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	底径 6.1		無高台	ナデ	灰黄色	
200	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	13.4	4.7	底部:回転糸切り	回転ナデ	明褐色	
202	須恵器 壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	13.0		口縁端部は大きく外反	回転ナデ	灰色	
203	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	底径 8.4		2方向長方形透かし	回転ナデ	灰色	
204	須恵器 平瓶	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	底径 11.8		手持ちヘラ削りの把手付 胴部最大径:突帯貼付	回転ナデ	灰色	
205	須恵器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	8.8	13.1	口縁端部はわずかに内湾	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
206	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	14.7	10.7	坏部は内湾 円盤充填 3方向円形透かし	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ、ヘラ削り	淡茶色	
207	土師器 丸底壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	胴部最大径 12.9		扁球体状を呈する	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	淡橙～灰茶色	外面:赤色顔料塗布
208	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 E-E' 17～19・21～23層	10.6		立ち上がりは低く内傾	内外面:回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
209	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	14.0		二重口縁 口縁部はやや外反気味	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡褐色	
210	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	14.5		二重口縁	外面:ハケ目、風化 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙灰色	
211	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	11.7		二重口縁 口縁部は強く内傾	外面:ハケ目		
212	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	14.2		二重口縁 口縁部は短い	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡茶色	外面:スス付着
213	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	23.4		二重口縁 大きく外反 頸部:突帯	風化	白橙色	
214	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	20.8		二重口縁 口縁端部に平坦面を持つ	内外面:ナデ 内面:ハケ目	白橙色	
215	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	20.8		二重口縁 口縁部に稜が見られる	ナデ	白橙色	
216	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	16.2		二重口縁 短く肥厚 肩部:羽状文	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	灰白茶色	
217	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	14.7		退化した二重口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、ヘラ削り	橙色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調　　整	色　　調	備　　考
			器高	口径				
218	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	18.6		退化した二重口縁 口縁部は外傾	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙白色	
219	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	15.2		「く」の字状の単純口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙茶色	外面下半:スス多量付着
220	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	15.4	23.0	「く」の字状の単純口縁	外面:ナデ、粗いハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙色	外面:スス付着
221	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	11.0		「く」の字状の単純口縁	外面:ハケ目、ナデ 内面:ヘラ削り	灰茶色	外面:スス付着
222	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	10.1	12.7	「く」の字状の単純口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、ヘラ削り	淡茶色	胴部:黒斑・スス付着
223	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	8.7	9.2	口頸部はやや長く直線的	ハケ目、ヘラ削り	外面:灰白茶～淡橙色 内面:淡褐色	
224	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	8.1	7.3	口頸部はやや長く外反気味	外面:ハケ目 内面:ナデ	淡茶色	
225	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	14.4		坏部は有段 口縁端部は緩く外反	ナデ	明褐色	
226	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	16.0		坏部は内湾 内面に暗文	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目	明褐色	
227	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	14.4		坏部は明確に内湾 半球状を呈する	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	淡橙色	
228	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	22.9		坏部は有段	ハケ目、ナデ	淡橙色	
229	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層				外面:ナデ 脚内面:ヘラ削り後ナデ		
230	土師器 坏	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	11.6	4.5	内湾気味 半球状を呈する	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目後ナデ	淡灰褐色	
231	土師器 て捏ね土器	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	6.6		底付近に粘土紐貼付	指頭圧痕	淡橙色	赤色顔料塗布
232	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	17.8		筒部が「く」の字状を呈する 受部端部は肥厚し外反	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ハケ目	黄白色	
233	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	15.2			ナデ	明褐色	
234	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	18.7			ナデ	橙白色	
235	土師器 高坏脚部	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	底径 9.5		脚部のみ残存	外面:ハケ目、ナデ 内面:ハケ目、ナデ	明黄灰色	
236	土師器 高坏脚部	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	底径 11.0		脚部のみ残存	外面:ナデ 内面:ハケ目	黄白色	
237	土師器 高坏脚部	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	底径 11.3		脚部のみ残存	外面:ナデ 内面:ハケ目		
238	土師器 甑	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	底径 19.2		底端部から4cm付近に円孔	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	表面:黄白茶色 断面:黒灰色	
239	須恵器 把手付埦	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	8.6	6.1	把手は剥離、平底 胴部:突帯2条・波状文	外面:回転ナデ、ヘラ削り 内面:回転ナデ	青緑灰色	
240	土師器 土製支脚	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	底径 13.8		上部欠損	ヘラ削り	明褐色	
243	弥生土器 甕	A遺跡 自然流水路1 谷底東端 最下層	29.2		口縁部:凹線文・刻み目 肩部:刺突文3条	内外面:ハケ目、ヘラミガキ 内面:ヘラ削り	黄茶～淡灰茶色	
244	弥生土器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区北側 黒灰色土中			口縁部は緩く外反 口縁端部:刻み目	風化	白橙色	
245	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土	底径 5.1		やや上げ底	風化	黄茶橙色	3～4mm前後の砂粒
246	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路1 5区 黒灰色土	底径 7.0			外面:ナデ、風化 内面:風化	白橙色	2～3mmの砂粒を含
247	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路1	底径 5.6			風化	乳灰橙色	
248	弥生土器 底部	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土	15.2			風化	淡橙色	3mm以下の砂粒含
249	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	25.4		二重口縁 大きく開く 端部はわずかに外折れ	風化	乳灰褐色	
250	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区	23.2		二重口縁 直立する 肩部:羽状文	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙色	
251	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	18.6		二重口縁 口縁部は肥厚し端部内面に斜めの面を持つ	外面:ナデ 内面:ナデ、指頭圧痕	外面:淡黄褐色 口縁内面:黒褐色	
252	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色粘質土	19.2		突出部は突帯状 口縁端部は外折れ	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、ヘラ削り	黒褐色	
253	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	15.6		二重口縁 口縁端部は強く外反	外面:ナデ、風化 内面:ナデ、ヘラ削り	淡褐色	
254	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	18.0	37.6	二重口縁 肩部:円形竹管文・羽状文	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	橙白色	
255	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	14.0		二重口縁 口頸部は緩く外反気味	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡橙茶色	
256	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 暗灰色砂質土	15.6		二重口縁 直立気味	ナデ	明褐色	
257	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区	14.4		二重口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	乳白肌色	外面:スス付着

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高	寸法(cm) 口径	形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
258	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区	14.2		二重口縁	ナデ	濃橙色	
259	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 北側 黒灰色土	11.8		二重口縁	外面:風化 内面:ヘラ削り	白橙色	
260	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	13.0		二重口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	
261	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	14.4		二重口縁	外面:ナデ、風化 内面:ナデ、ヘラ削り	淡黒褐色	
262	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区	12.1		二重口縁	外面:ナデ、ハケ目、風化 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	外面:スス付着
263	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	16.6		「く」の字状の単純口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡白橙色	
264	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 1区 黒青灰色粘質土	16.8		「く」の字状の単純口縁	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	
265	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 2区	19.9		「く」の字状の単純口縁 端部は内傾する面を持つ	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	灰白色	
266	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	14.0		「く」の字状の単純口縁 端部は内傾する面を持つ	外面:ハケ目、風化 内面:ナデ、ヘラ削り	乳白橙色	
267	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	16.0	25.2	「く」の字状の単純口縁	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	外面:黄土色 内面:淡茶色	肩部以下:炭化物付着
268	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 2区	14.8		単純口縁 口縁端部は尖る	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	乳黄橙色	
269	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	14.8		単純口縁 口縁端部は先細る	外面:ハケ目後ナデ 内面:ハケ目、ヘラ削り	淡橙白色	
270	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	13.4	21.0	単純口縁 口縁端部は先細る	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、ヘラ削り	淡灰橙色	外面:炭化物 多量付着
271	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	13.8		単純口縁	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	外面:淡褐色 内面:淡褐～淡黒色	
272	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	13.8		単純口縁	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	黄白茶色	
273	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰褐色土	22.0		単純口縁 口縁端部はわずかに外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡黄白色	
274	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土			胴部片 胴部:線刻	外面:ハケ目上に線刻 内面:ヘラ削り	外面:スス付着による黒色 内面:茶色	外面:スス付着
275	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土			頸～肩部片 胴部:線刻	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	淡茶色	
276	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土			肩部片 胴部:線刻	外面:ハケ目、ナデ 内面:ヘラナデ	表面:橙灰白色 断面:白灰色	
277	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	14.6	27.0	単純口縁 口縁端部はわずかに外反	外面:粗いハケ目 内面:粗いハケ目、ヘラ削り		胴部:スス付着
278	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 緑灰色砂質土	17.0		「く」の字状の単純口縁	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	
279	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	17.8		「く」の字状の単純口縁 口縁端部は尖る	外面:ハケ目後ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:白橙色 内面:白橙色	
280	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	16.6		「く」の字状の単純口縁	外面:風化 内面:ハケ目、ナデ	外面:白褐色 内面:白褐～白橙色	
281	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	24.6		単純口縁 口縁部は強く外反	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	黄土色	
282	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区	22.4		単純口縁 口縁部は大きく外反	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	
283	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	19.3		単純口縁 口縁部は緩やかに外反	外面:風化 内面:ヘラ削り	淡褐色	
284	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	22.2	30.5	単純口縁 なで肩・丸底 口縁部は緩やかに外反	外面:ハケ目後ナデ 内面:ヘラ削り	外面:淡茶白色 内面:淡茶白色	胴部下半:スス付着
285	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色土(シルト?)	25.0		単純口縁 口縁部は外傾	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:黒灰～淡褐色 内面:渇色	外面:スス付着
286	土師器 甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	21.2		口縁部は直立気味 端部は先細る	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	明褐色	
287	土師器 丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	11.0	12.1	口頸部に稜を持つ 胴部は大きく張る	外面:わずかにハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	淡茶～淡橙色 内面に黒変有り	
288	土師器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	11.6	18.3	口縁端部は先細り尖る 胴部は球状を呈する	外面:ハケ目後ナデ 内面:横ハケ目		底部外面:スス付着
289	土師器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰黄色土	12.0		口頸部やや短い	外面:風化 内面:ヘラ削り	淡橙色	
290	土師器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	13.0		口頸部のみ残存 口縁端部は先細る	外面:ハケ目後ナデ 内面:ハケ目、ヘラ削り	淡橙白色	
291	土師器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	10.8		外傾して開く 口縁端部は先細る	外面:ハケ目、ナデ 内面:ハケ目、ヘラ削り	黄灰色	
292	土師器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	10.0		口頸部はやや短い	ハケ目	乳褐色	胴部下半:黒色炭化物付着
293	土師器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	底径 6.0		把手付	外面:ナデ、ハケ目 内面:ヘラ削り	淡褐色	赤色顔料塗布
294	土師器 小型壺	A遺跡 自然流水路1 黒灰色土	7.0		頸部:突帯1条	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	白橙色	
295	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	9.8	9.5		外面:ハケ目、ナデ 内面:ヘラ削り後ナデ	灰褐～黒褐色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高	寸法(cm) 口径	形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
296	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	9.0	9.2		外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、ヘラ削り	灰褐色	
297	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	7.6	8.7		ナデ?	外面:淡褐～淡茶、黒斑あり	
298	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	11.2	8.9	口縁部は大きく外反	外面:ハケ目後ナデ	淡黄灰色	
299	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土	9.7	9.7		外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:褐～黒色 内面:灰褐～褐色	
300	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	8.6	7.7		外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ	淡褐～黒褐色	胴～底部:炭化物付着
301	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	8.0	8.1		外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ	淡橙色	
302	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土				外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ	淡黄橙褐色	肩部外面・内底面:炭化物付着
303	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	6.4	8.4	頸部はやや小さい	外面:風化 内面:指頭圧痕、ヘラ削り	浅黄橙色	
304	土師器 小型丸底壺	A遺跡 自然流水路1 3区	8.8	7.5	底部はやや平ら	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、指頭圧痕	外面:淡褐橙色 内面:黄白茶色	外面:スス付着
305	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 2、3区	器受部 18.2	底径 15.4		外面:ナデ 内面:ヘラミガキ、ヘラ削り	橙白色	
306	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	底径 15.0		下台部のみ残存	外面:ナデ、風化 内面:ヘラ削り	淡橙褐色	
307	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 2区	底径 16.0		下台部のみ残存	ナデ、風化	淡褐灰色	
308	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 2区	底径 14.7		下台部のみ残存	ナデ、風化	外面:淡橙色 内面:灰白茶色	
309	土師器 鼓形器台	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	底径 14.6		下台部のみ残存	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	表面:淡茶色 断面:灰色	
310	土師器 低脚坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	底径 2.2		脚部のみ残存	外面:ミガキ 内面:ナデ、ミガキ	淡褐色	
311	土師器 低脚坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	底径 4.4		脚部のみ残存		白褐色	
312	土師器 低脚坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	底径 4.8		脚部のみ残存	やや風化	白褐色	
313	土師器 低脚坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	15.4	7.1	坏部は深い　形を呈する 椀	外面:ハケ目 内面:ナデ	明茶褐色	
314	土師器 低脚坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	底径 3.9			風化 脚内面:ナデ	外面:橙褐色 内断面:淡褐色	
315	土師器 低脚坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	底径 5.2		脚部のみ残存	風化	淡茶色	
316	土師器 甕形土器	A遺跡 自然流水路1 東側谷底部	胴部 最大径 8.1		最大径より上に円孔 胴部のみ残存	外面:ナデ、ミガキ 内面:ナデか?	内外面:黒灰色 断面:淡灰色	
317	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	16.6	11.75	坏部は有段	外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:ハケ目、ヘラ削り	淡明赤褐色	
318	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土	15.3	11.9	坏部は有段	風化 脚内面:絞り、ハケ目	橙褐色	
319	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色粘質土	19.0		坏部は有段	外面:ハケ目、ミガキ? 内面:ハケ目、ヘラ削り		
320	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	20.8		坏部は有段 脚部は「ハ」の字状に開く	風化	白茶色　坏半分 こげ茶～淡橙色	
321	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐～暗灰色土	22.2		坏部は有段で深い	風化	白橙色	
323	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 1区 南側 黒灰色土	22.2		坏部は有段	ハケ目後ナデ	表面:橙茶色 断面:灰色	
324	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	22.2		坏部は有段	ナデ	淡橙～淡橙白色	
325	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	17.7	14.0	口縁～坏部緩やかに繋がる	外面:ハケ目、ミガキ 内面:ハケ目、絞り痕	白淡黄褐色	
326	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	15.2	12.3	口縁～坏部緩やかに繋がる	脚外面:ヘラミガキ 脚内面:ヘラ削り、ハケ目	淡茶	
327	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	17.9	11.7	口縁～坏部緩やかに繋がる	坏内外面:ハケ目 脚内面:ヘラ削り	薄黄褐色	
328	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	18.6		口縁～坏部緩やかに繋がる	外面:ハケ目、ミガキ 内面:ハケ目、ミガキ、ヘラ削り	白橙色	
329	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 1区	14.6	9.4	口縁～坏部緩やかに繋がる	外面:ナデ、指頭圧痕 内面:ナデ、絞り痕	淡橙白色	
330	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	17.0		口縁～坏部緩やかに繋がる	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ	明褐色	
331	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	16.8		坏部は直線的に開く	外面:ナデ、ハケ目 内面:ハケ目、ミガキ	外面:黄白色 内面:淡橙茶色	
332	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色粘質土	16.1		坏部は深く半球状を呈する	ハケ目	赤橙～乳白色	
333	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	13.0		坏部は深く内湾	風化	橙色	
334	土師器 高坏脚部	A遺跡 自然流水路1 東端谷部	底径 12.1			外面:ハケ目、ナデ 脚内面:ナデ、ヘラ削り	淡赤色	
335	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	底径 13.2			外面:ハケ目、ミガキ 脚内面:ヘラ削り、ハケ目	表面:橙白色 断面:灰色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
			器高	口径				
336	土師器 高坏	A遺跡 自然流水路1 1区 黒青灰色粘質土	14.2		坏部は深く内湾	風化	白赤橙～淡赤橙色	
337	土師器 甑	A遺跡 自然流水路1 3区	24.4		口縁部は緩く外反 胴部:把手	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	淡褐色	
338	土師器 甑	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	30.8		口縁部は緩やかに外反	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	明褐灰～鈍橙色	
339	土師器 甑	A遺跡 自然流水路1 3区 北側 黒青灰色土	28.0		口縁部は緩やかに外反	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ヘラ削り	内外面:淡褐色 断面:淡灰色	
340	土師器 甑	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色土	28.2		口縁部は直立気味	外面:ナデ 内面:風化	明茶褐色	
341	土師器 竈	A遺跡 自然流水路1 3区 中央 灰褐色土			口縁部・焚口上部を欠損	外面:ハケ目、ヘラ削り 内面:ヘラ削り、ナデ		
342	土師器 土製支脚	A遺跡 自然流水路1 3区 北側 黒青灰色土	底径 12.8		アーム1本と突起欠損	外面:工具でナデつけ 脚内面:ヘラ削り	淡褐～淡赤褐～淡灰色	
343	土師器 土製支脚	A遺跡 自然流水路1 3区 中段 灰褐色土	底径 10.8		アームと突起すべて欠損	ナデつけ、風化	淡橙褐～淡褐色 断面一部淡灰色	
349	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 1区	13.0	4.7	肩部:沈線1条	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰白色	
350	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 3区	13.8	4.9	肩部:沈線2条による段	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	外面:灰色 内面:灰白色	
351	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 3区 中央 灰褐色土	12.5		肩部:沈線2条による段	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
352	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 4区	13.4		肩部:沈線2条による段	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
353	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 暗青灰色砂質土	13.8		口縁部はわずかに内湾	回転ナデ	灰色	
354	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 3区 黄灰色土	12.3	3.7	肩部:沈線1条による段 底部:回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰色	
355	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	12.4	4.1	口縁部はわずかに内湾 底部:回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	灰色	
356	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1	9.7	3.4	口縁部はわずかに内湾 底部:回転ヘラ切り後ナデ	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	青灰色	
357	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 1区	11.4		口縁部は稜を持ち屈曲気味	回転ナデ	灰色	
358	須恵器 坏蓋	A遺跡 自然流水路1 3区 黄灰色土	10.2		肩部:段	回転ナデ	灰色	
359	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土	12.0	4.2	立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
360	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	10.6		立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色 外面底部:黒灰色	
361	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 4区	10.9	4.6	立ち上がりはやや低く内傾	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
362	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	10.2	3.95	立ち上がりは内傾するが垂直気味	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	外面:灰色 内面:乳灰色	
363	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	11.2～ 13.3	4.5	立ち上がりはやや低く内傾 器形に大きな歪み	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	灰色	
364	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	11.0	4.1	立ち上がりは強く内傾し低い	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
365	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 3区 北側 黒灰色土	10.1	4.15	立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	青灰色	
366	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 谷底遺物包含層	11.3	4.2	立ち上がりはやや低く内傾	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
367	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	11.2		立ち上がりはわずかに内傾し外反気味	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	外面:黒灰色 内面:青灰色	
368	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 重機立会中 表土下60cm	11.35	3.7	立ち上がりは低く内傾 底部:回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ、ナデ	外面:淡灰色 内面:淡青灰色	
369	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1	11.2	3.8	立ち上がりは低く内傾	回転ナデ	暗灰色	
370	須恵器 坏身	A遺跡 自然流水路1 3区 中央 灰褐色土	10.4		立ち上がりは内傾し垂直に近い	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	外面:灰色 内面:淡灰色	
371	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	12.7		口縁部は直立 3方向円形透かし孔	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り		
372	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土	14.4	9.95	坏部は内湾気味 長方形透かし孔	回転ナデ	灰褐色	
373	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	14.7	10.75	坏部:低い突帯1条 2方向台形透かし	回転ナデ	外面:灰色 内断面:淡灰色	
374	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 暗青灰色砂質土	15.6	10.7	坏部は浅い 2方向台形透かし	回転ナデ、ナデ	灰色	
375	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	15.85	10.25	2方向三角形透かし	回転ナデ	灰色	
376	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 土器溜 灰褐色土	14.6	9.95	坏部は浅い 2方向台形透かし	回転ナデ	暗灰色	
377	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	15.6	10.2	2方向三角形透かし	回転ナデ	灰色	
378	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	14.6	9.8	口縁端部はわずかに外反 2方向三角形透かし	回転ナデ	灰色	
379	須恵器 高坏	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	13.4		坏部は大きく内湾 3方向透かし	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	黒灰色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高	寸法(cm) 口径	形態・文様の特徴	調整	色調	備考
380	須恵器 長脚高坏	A遺跡 自然流水路1 3区 中央 灰褐色土	8.5		坏部屈曲 外面:突帯2条 2段3方向透かし	回転ナデ	黒灰色	
381	須恵器 蓋	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	19.0		口縁端部は下垂 底部:回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰褐色	
382	須恵器 蓋	A遺跡 自然流水路1 E区 黒灰色土	つまみ径 5.4		輪状つまみ	回転ナデ	灰色	
383	須恵器 高台付壺	A遺跡 自然流水路1 黒灰色土	底径 8.8		高台付の底部	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰紫色	
384	須恵器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	底径 9.0		底部:静止糸切り後高台貼付	回転ナデ	灰色 外面僅かに自然釉	
385	須恵器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 2区 北側 茶褐色土	底径 6.8		高台は低く底部端に付く 薄手	回転ナデ	灰白色	
386	須恵器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	11.2	4.2	口縁端部は内傾 底部:回転ヘラ切り	外面:ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	灰色	
387	須恵器 坏	A遺跡 自然流水路1 谷底遺物包含層	11.2	4.1	口縁端部はくびれる 底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	灰色	
388	須恵器 坏	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部	17.2		深く内湾 端部はわずかに内湾	外面:回転ナデ 内面:回転・静止ナデ	灰色	
389	須恵器 坏	A遺跡 自然流水路1 2区	14.0		口縁端部は肥厚しくびれる	回転ナデ	外面:黒灰色 内面:黒紫	
390	須恵器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	12.3	3.85	底部:回転糸切り	回転ナデ 内底面:静止ナデ	淡灰色	
391	須恵器 高台付坏	A遺跡 谷部 3区 北側 黒青灰色土	14.6	6.1	高台は底部端に付く 底部:回転糸切り	回転ナデ	外面:黒色 内面:灰白色	
392	須恵器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土	13.4	6.4	高台は底部端に付く 底部:回転糸切り	回転ナデ	灰色	
393	須恵器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土	15.7	6.8	高台は底部端に付く 底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	灰色	
394	須恵器 皿	A遺跡 自然流水路1 2区 北側 黒褐色土	13.8	2.6	口縁部は緩く外傾 底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ後ナデ	灰褐～茶色	
395	須恵器 高台付皿	A遺跡 自然流水路1 1区	17.8	3.7	口縁部は直線的に外反 高台は高く底部端近くに付く	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ後ナデ	灰色	
396	須恵器 皿	A遺跡 自然流水路1 2区 北側 茶褐色土	14.8	1.7	浅い皿 口縁部は水平気味	回転ナデ 底部:回転糸切り	青灰色	
397	須恵器 皿	A遺跡 自然流水路1 3区	15.7		浅い皿 口縁部は水平気味	回転ナデ	灰色	
398	須恵器 瓶	A遺跡 自然流水路1 1区	胴部最大径 13.6		扁球状を呈する 頸・胴部:波状文	底外面:タタキ後ナデ	黒灰色	
399	須恵器 瓶	A遺跡 自然流水路1 黒灰色土	底径 4.4	胴部径 9.4	胴部:凹線文2条 底部は平ら	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	灰色	
400	須恵器 樽形瓶	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色シルト	胴部側面径 6.6		胴部:沈線・波状文 挿図番号158と同一個体か	内面:回転ナデ 底部内外面:ナデ	表面:暗青灰色 断面:セピア色	
401	須恵器 二重瓶	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	10.6		口縁～頸部と胴部外側のみ残存 最大径の上下に長方形透かし孔	回転ナデ	灰～黒灰色	口縁部:自然釉
402	須恵器 坩	A遺跡 自然流水路1 3区	7.2	5.3	底部は凹凸顕著 胴部は丸みを持つ	回転ナデ	灰色、外面やや濃 肩、内面:緑色の自然釉	
403	須恵器 提瓶	A遺跡 自然流水路1 暗青灰色砂質土	胴部最大径 14.9		口縁部欠損 環状の把手、環の孔は小さい	外面:カキ目、ナデ 内面:ナデ	肩部、口縁内面は 自然釉により灰白色	
404	須恵器 平瓶	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色土	7.0		直立する単純な筒状口縁部	回転ナデ	灰色	
405	須恵器 平瓶	A遺跡 自然流水路1 3区			把手は痕跡化したボタン状の粘土を貼付	回転ナデ	外面:青灰色 内面:灰色	
406	須恵器 直口壺	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土	8.6	14.4	薄手	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り後ナデ	表面:黒灰色 断面:紫灰色	
407	須恵器 平瓶	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	10.6		外反する単純な筒状口縁部 把手の痕跡	口縁内外面:回転ナデ	灰色	
408	須恵器 平瓶	A遺跡 自然流水路1 3区 東端谷底部	底径 12.0		挿図番号319と同型 胴部に 胴部:突帯1条	回転ナデ	外面:灰～暗灰色 内面:灰褐～赤褐色	
409	須恵器 長頸壺	A遺跡 自然流水路1 1区 黒褐色土	底径 8.4		高台付 肩～胴部は屈曲 頸部:沈線1条	回転ナデ	青灰色	
410	須恵器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土			頸部:突帯1条	回転ナデ	外面:灰～黒灰色 内面:灰色	
411	須恵器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	底径 12.2		なで肩・ずん胴 平底	外面:回転カキ目	灰色	
412	須恵器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	底径 8.0		平底 底部:回転糸切り	外面:回転ナデ 内面:ロクロ目顕著	灰色 肩～胴部の 一部に緑色自然釉	
413	須恵器 壺	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土	底径 11.2		平底	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	外面:灰色 内面:白灰色	
414	須恵器 底部	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	底径 6.9		底部端に高台貼付 体部下半に貼付突帯	外面:回転ナデ 内面:多方向ナデ	灰青色	
415	須恵器 底部	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰褐色土	底径 14.6		平底	外面:粗い平行タタキ 内面:ナデ	灰色	
416	須恵器 底部	A遺跡 自然流水路1 2区 茶褐色土	底径 7.4		平底	回転ナデ 内面:ロクロ目顕著	外面:灰黒色、一部自然釉 内面:淡灰色	
417	須恵器 底部	A遺跡 自然流水路1	20.8	底径 14.6	低い高台付	外面:タタキ 内面:ナデ	灰色	
418	須恵器 長頸甕	A遺跡 自然流水路1 1区	39.4		口縁端部付近強く外反	回転ナデ、タタキ	表面:青灰色 断面:灰褐～紫灰色	

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
			器高	口径				
419	須恵器 長頸甕	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土				外面:平行タタキ 内面:押当具痕	外面:鈍い灰紫色 内面:灰～青灰色	
420	須恵器 長頸甕	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	38.6		口頸部:沈線文・波状文	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、タタキ	表面:灰黒～青灰色 断面:紫灰色	
421	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	12.8	4.3	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	灰褐色	
422	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	12.8	4.5	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡橙褐～黄褐色	
423	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	12.8	3.95	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	暗褐色	
424	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	11.6	4.4	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	灰褐色	
425	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	12.7	4.4	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	
426	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	12.2	4.4	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	
427	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	14.0	2.8	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	淡橙茶色	
428	土師質土器 坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	15.4	5.2	無高台 底部:回転糸切り	回転ナデ	暗褐色	
429	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	11.6		体部はわずかに内湾 底部:回転糸切り後高台貼付	回転ナデ	淡肌色	
430	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	17.0	7.75	「ハ」の字状に高く開く高台 底部:回転糸切り後貼付	回転ナデ	茶褐色	
431	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 3区	17.6		「ハ」の字状に高く開く高台 底部:回転糸切り後貼付	回転ナデ	淡橙白色	
432	土師質土器 高台付坏	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	14.6	6.7	低い高台を貼付	回転ナデ	外面:暗褐色 内面:暗灰褐色	
531	須恵器 坏蓋	W区 SB-58 黒黄褐色土	14.2	3.9	肩部:沈線2条による段	回転ナデ 底部:回転ヘラ削り	表面:灰色 断面:淡灰茶色	
532	須恵器 壺	W区 SB-58 黒黄褐色土			頸～肩部のみ残存 肩部が大きく張る	回転ナデ	内外面:灰色 断面:灰～褐色	
533	須恵器 坏蓋	W区 SB-58 黒黄褐色土	13.4		肩部:沈線1条	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ後ナデ	灰褐色	
534	須恵器 坏身	W区 SB-57 黄褐色土	12.6		立ち上がりは低く内傾	回転ナデ	灰色	
535	須恵器 高坏	W区 SB-57 黄褐色土			台形透かし	回転ナデ	灰色	
536	須恵器 坏身	W区 SB-60	10.0		立ち上がりは低く内傾 坏部は張らず	回転ナデ	灰色	
537	須恵器 高坏	W区 SB-60			2方向台形透かし	回転ナデ	淡灰色	
538	須恵器 高坏	W区 SB-60	14.4		口縁部のみ残存	回転ナデ	黄灰色	
539	土師質土器 坏	W区 SB-60	底径 6.8		底部:回転糸切り	回転ナデ	外面:灰橙色 内面:黄橙色	
540	須恵器 鉢	W区 SB-60	29.9		中世須恵器か 軟質	外面:一部ハケ目 内面:ハケ目	外面:淡橙褐色、内面:淡灰褐色、断面:暗灰色	亀山焼系統
541	陶器 鉢	W区 SB-60	底径 13.6		見込み:砂目止め	削り	外断面:淡褐色 内面:淡橙褐色	
542	陶器 碗	W区 SB-60	底径 4.7		高台端部～内面無釉			黄色の釉
543	須恵器 高台付坏	A遺跡 SB-50			坏部はごくわずかに残存	回転ナデ	外面:暗灰色 内面:灰色	
544	須恵器 壺	A遺跡 SB-51			肩部はごくわずかに残存	回転ナデ	外面:淡灰色 内面:灰色	
545	土師質土器 坏	A遺跡 南側斜面 SB-55-2	底径 3.8		底部:回転糸切り	風化気味	薄橙色	

遺物観察表（土製品）

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調　整	色　調	備　考
			器高	口径				
67	分銅形 土製品	B遺跡 谷底東端			縁部に刺突列点文 小型		褐色	
201	土錘	A遺跡 自然流水路1 E-E' 12・13層	最大幅 1.35	長さ 3.15			茶色	
344	紡錘車	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土	幅 3.0～5.0	2.4	断面台形、上面に不規則な星形文様線刻	ヘラ状工具による	黄茶色	
345	紡錘車	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰褐色土	幅 2.3～4.3	2.1	断面台形		淡橙白色	
346	土錘	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土	最大幅 2.2	残存長 7.1	紡錘形	風化		

石器観察表（玉作関係品）

挿図番号	石材	種類	工　程	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土地・備考
77	瑪瑙	勾玉未製品	調整剥片	3.3	2.9	1.5	11.72	B遺跡 谷底中央 暗褐色土
131	ガラス	小玉		0.5	0.45	0.35	0.11	A遺跡 SI-14 床面覆土 ※青色
132	水晶か石英	丸玉		0.8	0.8	0.6	0.65	A遺跡 SI-14 床面覆土
133	滑石	臼玉		0.45	0.45	0.1	0.04	A遺跡 SI-14 SK-02
134	滑石	臼玉		0.45	0.45	0.5	0.01	A遺跡 SI-14 SK-02
135	碧玉	管玉未製品	1次研磨品	3.45	0.6	0.75	2.79	A遺跡 SI-14 床面覆土
136	瑪瑙	勾玉未製品	1次研磨品	2.3	1.3	0.8	4.57	A遺跡 SI-14 床面覆土
137	碧玉	勾玉未製品	素材剥片	4.4	3.0	2.0	23.35	A遺跡 SI-14 床面覆土
138	瑪瑙	剥片		1.5	1.4	0.5	0.77	A遺跡 SI-14 床面覆土
443	瑪瑙	勾玉未製品	調整剥片	3.7	2.3	1.8	20.74	A遺跡 自然流水路1
444	瑪瑙	勾玉未製品	調整剥片	3.3	2.3	1.6	17.20	A遺跡 自然流水路1 4区 南側斜面上 No.4
445	瑪瑙	勾玉未製品	調整剥片	4.3	2.9	2.3	29.70	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 杭付近南側 灰褐色土
446	瑪瑙	勾玉未製品	調整剥片	3.4	2.0	1.3	12.87	A遺跡 自然流水路1
447	瑪瑙	勾玉未製品	素材剥片	2.6	1.8	0.9	5.53	A遺跡 自然流水路1
448	瑪瑙	勾玉未製品	素材剥片	3.95	2.6	2.0	23.95	A遺跡 自然流水路1 2･3区
449	瑪瑙	勾玉未製品	素材剥片	4.7	2.9	1.7	32.47	A遺跡 自然流水路1 2区
450	瑪瑙	勾玉未製品	素材剥片	2.8	2.0	1.2	8.44	A遺跡 自然流水路1 遺物包含層
451	瑪瑙	石核		6.5	6.0	2.4	96.69	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 暗灰色粘質土(緑ブロック)
452	瑪瑙	石核		5.4	3.2	2.5	46.91	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土(緑ブロック)
453	瑪瑙	剥片		2.5	1.6	0.45	1.65	A遺跡 自然流水路1 1区 26･28層
454	瑪瑙	剥片		2.15	1.5	0.3	3.04	A遺跡 自然流水路1 2区
455	瑪瑙	原石		7.8	6.1	4.4	181.49	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色シルト
456	碧玉	管玉未製品	角柱状加工品	2.45	0.95	0.9	2.54	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土(緑灰ブロック)
457	碧玉	管玉未製品	角柱状加工品	3.3	1.6	1.1～1.2	7.64	A遺跡 自然流水路1 3区 段の下 黄灰色土
458	碧玉	管玉未製品	角柱状加工品	3.0	1.4	1.0	5.32	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土
459	碧玉	管玉未製品	角柱状加工品	1.65	1.5	1.2	2.08	A遺跡 自然流水路1 東西トレンチ壁崩落層 ※欠損品
460	碧玉	管玉未製品	素材剥片	4.0	3.9	1.1	17.01	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部
461	碧玉	管玉未製品	素材剥片	5.6	2.55	1.95	21.50	A遺跡 自然流水路1 3区
462	碧玉	管玉未製品	素材剥片	5.1	3.45	1.5	24.83	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土 2層
463	碧玉	管玉未製品	素材剥片	4.05	2.1	1.1	9.99	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色土
464	碧玉	管玉未製品	素材剥片	3.5	3.0	0.9	9.95	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 東西トレンチ暗(青)灰色土
465	碧玉	管玉未製品	素材剥片	5.8	4.6	1.6	37.23	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土(緑ブロック)
466	碧玉	勾玉未製品	穿孔仕上げ品	2.9	1.5	0.9	5.89	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土(緑ブロック)
467	碧玉	勾玉未製品	穿孔仕上げ品	2.5	1.5	0.6	3.20	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土(緑灰ブロック)
468	碧玉	勾玉未製品	1次研磨品	(2.0)	1.6	1.1	4.02	A遺跡 自然流水路1 1区 12層
469	碧玉	勾玉未製品	調整剥片完了品	2.7	1.4	0.8	5.45	A遺跡 自然流水路1 3区 黄灰色土

挿図番号	石材	種類	工　程	寸法(cm)			重量(g)	出　土　地　・　備　考
				長さ	幅	厚さ		
470	碧玉	勾玉未製品	調整剥片完了品	2.7	1.5	0.7	4.98	A遺跡 自然流水路1 3区 黄灰色土
471	碧玉	勾玉未製品	調整剥片完了品	3.7	2.0	1.3	10.18	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐～黄灰褐色土
472	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.2	2.3	1.2	10.08	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐～黄灰色土
473	碧玉	勾玉未製品	調整剥片完了品	2.6	1.8	1.2	6.66	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 灰褐色土上面 土器溜
474	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.5	1.8	0.9	6.40	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土(緑ブロック)
475	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	2.9	1.45	1.3	8.14	A遺跡 自然流水路1 3区 サブトレ西 灰黄色土
476	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.3	2.0	1.1	11.31	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土(緑ブロック)
477	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.3	2.2	1.3	12.07	A遺跡 自然流水路1 3区 サブトレ 灰色シルト(緑ブロック)
478	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	4.1	2.7	1.6	28.18	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土(緑ブロック) ※上部欠損
479	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.8	2.6	1.7	21.48	A遺跡 自然流水路1 3区 サブトレ西 灰色粘質土(緑ブロック) ※一部欠損
480	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.7	2.5	1.15	10.19	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部 ※初期段階
481	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	3.3	2.3	1.5	16.99	A遺跡 自然流水路1 1区 25･26層 ※初期段階
482	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	4.3	2.8	1.9	19.00	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土(緑黄ブロック) ※初期段階
483	碧玉	勾玉未製品	調整剥片	4.9	3.7	1.6	35.57	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部 ※初期段階
484	碧玉	勾玉未製品	素材剥片	4.2	3.05	1.2	17.69	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 東西トレンチ 灰褐色土
485	碧玉	勾玉未製品	素材剥片	4.3	3.5	1.6	18.42	A遺跡 自然流水路1 3区 サブトレ内 暗灰色粘質土(緑ブロック)
486	碧玉	勾玉未製品	素材剥片	3.8	2.9	1.2	15.57	A遺跡 自然流水路1 1区 4～7･14～18層
487	碧玉	勾玉未製品	素材剥片	3.7	2.0	1.8	14.39	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土
488	碧玉	勾玉未製品	素材剥片	3.0	2.9	1.8	16.68	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 褐色土(炭含) (黄ブロック)
489	碧玉	小形平玉未製品	調整剥片	1.05	1.05	0.4	0.64	A遺跡 自然流水路1 1区 17･18層 ※研磨直前
490	碧玉	平玉未製品	調整剥片	1.7	1.7	0.7	2.87	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土 ※研磨直前
491	碧玉	小形平玉未製品	調整剥片	1.05	1.1	0.5	0.67	A遺跡 自然流水路1 排土中 ※研磨直前
492	碧玉	平玉未製品	調整剥片	1.8	2.05	1.05	5.31	A遺跡 自然流水路1 1区 4～7･14～18層 ※研磨直前
493	碧玉	小形平玉未製品	調整剥片	1.1	1.0	0.55	0.79	A遺跡 自然流水路1 3区 褐色土 ※研磨直前
494	碧玉	小形平玉未製品	調整剥片	1.15	1.05	0.65	0.86	A遺跡 自然流水路1 排土中 ※研磨直前
495	碧玉	平玉未製品	調整剥片	1.9	1.85	1.0	4.15	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土(緑灰ブロック) ※研磨直前
496	碧玉	平玉未製品	素材剥片	2.8	2.4	1.3	8.05	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 褐色土(炭含) (黄ブロック)
497	碧玉	小形平玉未製品	素材剥片	1.35	1.1	0.5	0.79	A遺跡 自然流水路1 1区 24･25･26層
498	碧玉	平玉未製品	素材剥片	2.5	2.45	1.35	9.50	A遺跡 自然流水路1 1区 24層
499	碧玉	平玉未製品	素材剥片	2.35	2.15	1.3	9.06	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土(緑黄ブロック)
500	碧玉	石核		7.5	5.3	4.0	212.01	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土(緑ブロック)
501	碧玉	石核		6.2	6.1	3.9	152.12	A遺跡 自然流水路1 1区 25･26層
502	碧玉	石核		6.05	3.75	2.3	58.05	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質～暗灰色粘質土(緑ブロック)
503	碧玉	原石		6.4	5.3	3.25	137.27	A遺跡 自然流水路1 1区 南側黒灰色土
504	碧玉	管玉か勾玉の未製品	素材剥片	5.9	4.35	1.8	29.71	A遺跡 自然流水路1 3区 南側斜面表土下
505	水晶	平玉未製品	敲打整形	1.7	1.65	0.75	3.01	A遺跡 自然流水路1 1区 4～7･14～18層
506	水晶	平玉未製品	敲打整形	1.45	1.25	0.4	0.78	A遺跡 自然流水路1 1区
507	水晶	平玉未製品	敲打整形	1.3	1.3	0.75	1.59	A遺跡 自然流水路1 排土中

挿図番号	石材	種類	工　程	寸法(cm)			重量(g)	出　土　地　・　備　考
				長さ	幅	厚さ		
508	水晶	平玉未製品	素材剥片	3.1	2.7	1.3	12.64	A遺跡 自然流水路1 3区 北側小平坦面下付近 ※素材剥片の可能性が高い
509	水晶	平玉未製品	素材剥片	2.9	2.3	1.4	12.02	A遺跡 自然流水路1 1区 ※素材剥片の可能性が高い
510	水晶	平玉未製品	素材剥片	3.5	3.25	1.6	20.08	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部 ※素材剥片の可能性が高い
511	水晶	勾玉未製品	調整剥片	3.0	2.0	2.0	16.03	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土
512	水晶	勾玉未製品	素材剥片	3.8	2.9	1.5	15.85	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土
513	水晶	石核		4.55	2.9	2.55	39.38	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土
514	水晶	石核		5.3	3.7	3.3	66.99	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色粘質土(緑灰ブロック)
515	水晶	原石		3.7	3.1	2.23	37.53	A遺跡 自然流水路1 1区 24･25層
516	水晶	原石		3.85	2.9	2.1	19.98	A遺跡 自然流水路1 1区 12層
517	水晶	叩き石		9.6	6.8	5.35	403.60	A遺跡 自然流水路1 排土中
518	結晶片岩		玉砥石	(14.5)	3.0	1.0	71.35	A遺跡 自然流水路1 1区 24、25層
519	結晶片岩		玉砥石	12.1	5.7	1.2	116.12	A遺跡 自然流水路1 ※2面使用(側面使っていない)
520	結晶片岩		玉砥石	(2.8)	(2.2)	0.5	4.71	A遺跡 自然流水路1 谷底 遺物包含層
521	結晶片岩		玉砥石	(7.6)	4.5	1.0	46.50	A遺跡 自然流水路1 東端谷底部
522	結晶片岩		玉砥石	(5.5)	3.5	0.6	20.30	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 サブトレ内 灰褐色土
523	結晶片岩		玉砥石	(10.2)	(4.3)	0.6	42.38	A遺跡 自然流水路1 谷底(地山上面)遺物包含層
524	結晶片岩		玉砥石	(6.0)	2.4	0.6	13.11	A遺跡 自然流水路1 3区 サブトレ 灰色砂質土(緑ブロック)
525	結晶片岩		玉砥石	(6.6)	4.1	0.65	21.42	A遺跡 自然流水路1 3区 暗灰色砂質土(緑灰ブロック)
526	結晶片岩		玉砥石	(7.0)	2.7	1.0	26.67	A遺跡 自然流水路1 1区 黒灰色粘質土
527	結晶片岩		玉砥石	(4.1)	(3.7)	(0.35)	7.73	A遺跡 自然流水路1 南側斜面 東西トレンチ 暗灰色粘質土(緑ブロック)最下層
528	結晶片岩		玉砥石	(3.2)	1.9	0.4	4.63	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色粘質土(緑黄ブロック)
529	結晶片岩		玉砥石	(2.9)	(2.4)	0.3	3.85	A遺跡 自然流水路1 1区
530	結晶片岩		玉砥石	(3.0)	2.8	0.55	7.14	A遺跡 自然流水路1 3区 灰褐色土

石器観察表（石器）

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考
69	打製石斧（石鍬）	B遺跡 谷底中央 延長部 暗褐色土	(16.9)	(10.6)	2.7	467.59	頁岩	刃部を欠損
70	磨石	B遺跡 谷底中央 延長部 暗褐色土	(9.0)	(8.4)	4.2	434.51	花崗岩	
139	叩き石	A遺跡 SI-14 床面覆土	12.7	7.9	5.8	860	火山岩（安山岩か）	
163	砥石	A遺跡 南側斜面 SB-55-2	7.9	3.8	(2.4)	104.26	珪化木	
178	砥石	A遺跡 東側斜面 溝状遺構 11層	(8.9)	7.4	2.3	191.40	玄武岩	片方欠損 やや弓なり状を呈する
242	有孔円盤	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	3.4	3.1	0.4	7.05	凝灰岩（若干変質）（滑石に近い）	
433	蛤刃石斧	A遺跡 自然流水路1	(8.4)	4.8	2.7	124.02	安山岩（頁岩か?）	
434	蛤刃石斧	A遺跡 自然流水路1 灰色砂質土（緑黄ブロック）	(6.9)	5.1	1.8	107.82	塩基性岩	
435	石斧（石鍬か）	A遺跡 自然流水路1	15.1	6.4	2.7	349	流紋岩	刃部研磨
436	砥石	A遺跡 自然流水路1 3区 土器溜	(7.35)	(3.5)	(2.4)	56.13	凝灰岩	上下・裏面欠損
437	砥石	A遺跡 自然流水路1 2区 北側 廃土下1層 茶褐色土	11.9	5.95	3.3	386.25	珪化木	
438	砥石	A遺跡 自然流水路1	7.1	3.5	2.9	63.18	凝灰岩	穿孔あり
439	凹石	A遺跡 自然流水路1	(10.7)	(8.3)	9.0	1230	デイサイト～安山岩	

石器観察表（石鏃）

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土地・備考
71	黒曜石	凹基Ⅱ式	(1.7)	(2.0)	0.4	0.96	B遺跡 遺構外 谷底東端 暗褐色土
72	黒曜石	凹其Ⅱ式	(2.3)	(1.7)	0.3	0.82	B遺跡 遺構外 排土
73	黒曜石	凹基Ⅱ式	(1.75)	1.55	0.3	0.76	B遺跡 遺構外 谷底東端 トレンチ内 表土上
74	安山岩	凸基式	(2.05)	0.9	0.3	0.56	B遺跡 遺構外 谷底東端 褐色土（暗褐色土）
75	安山岩	平基式	(2.6)	(1.9)	4.5	1.17	B遺跡 遺構外 T-1 排土 ※金山産（原材産地分析済）
76	黒曜石	未製品	3.6	2.9	1.15	11.11	B遺跡 遺構外 T-1 表土面下70cm ※久見産（原材産地分析済）
179	黒曜石	凹基式	(2.5)	(1.7)	0.35	0.86	A遺跡 自然流水路2 南側緩斜面 4層
440	黒曜石	凹基式	1.9	1.65	0.22	0.66	A遺跡 自然流水路1 3区 サブトレ西 灰色粘質土（緑ブロック）
441	黒曜石	未製品	2.3	2.1	0.4	2.12	A遺跡 自然流水路1 3区 褐色土

金属製品観察表

挿図番号	器種	出土位置	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
68	古銭 寛永通宝（新寛永）	B遺跡 西斜面 南拡張部 表土中	(直径) 22.6		0.8	1.42	
93	柳葉式鉄鏃	A遺跡 北側斜面	8.1	1.6	0.5	11.60	茎部欠損
113	耳環	A遺跡 北側斜面 焼土付近～下側斜面	2.8	(2.3)	0.55～0.75	9.09	青銅製 銀箔の剥離痕
162	竿秤	A遺跡 南側斜面 SB-53 上層	7.0	3.0	0～0.4	6.55	
176	古銭 寛永通宝（古寛永）	A遺跡 溝状遺構 11層	(直径) 22.6		1.1	1.34	
177	火縄銃の玉（三匁筒）	A遺跡 溝状遺構 11層	1.2			9.39	直径:1.2cm
241	耳環	A遺跡 自然流水路1 E-E' 24～28層	2.6	2.4	0.5～0.65	11.75	青銅製 1mm四方の金箔残存
442	板状鉄斧	A遺跡 自然流水路1 3区 灰色砂質土	(6.4)	(3.5)	0.9	78.51	基部・刃部の先端欠損

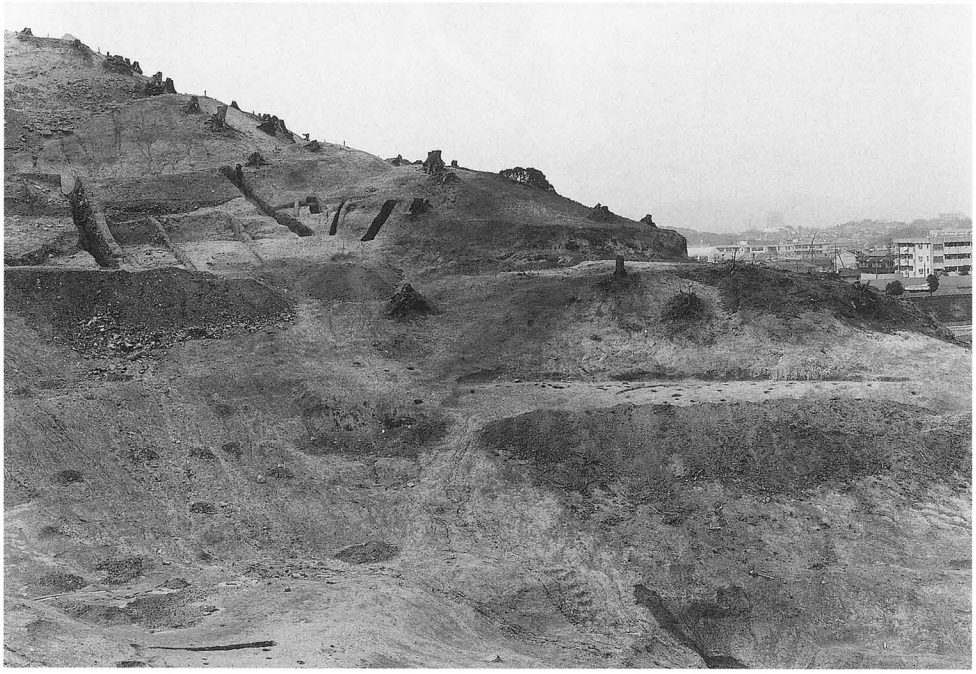
図　　版

田和山遺跡群全景（南東上空より）

A・B遺跡調査前全景（遠景・東より）

図版 2

B遺跡　調査前　北西側斜面



北側斜面　調査後

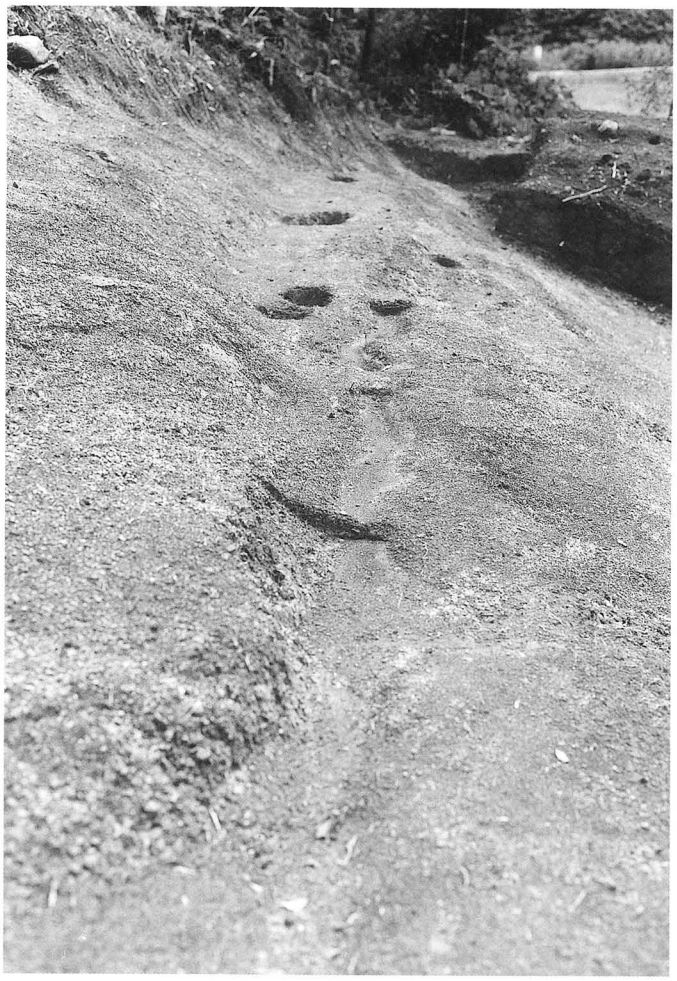
南側斜面　調査後

SB－31（南より）

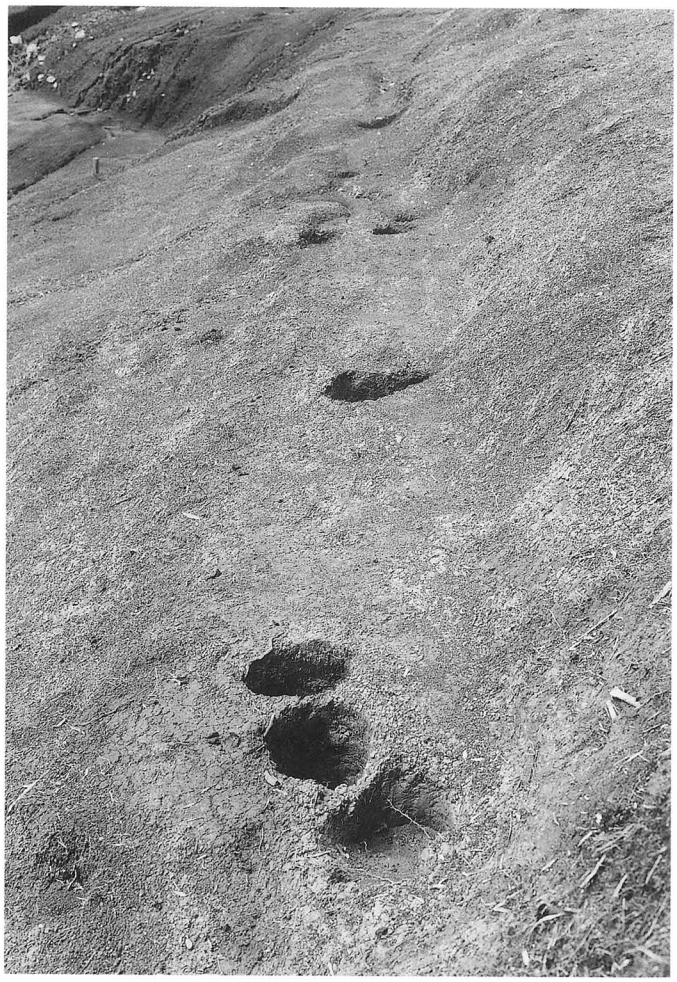
SB－32（北より）

SB－33（南西より）

図版 4

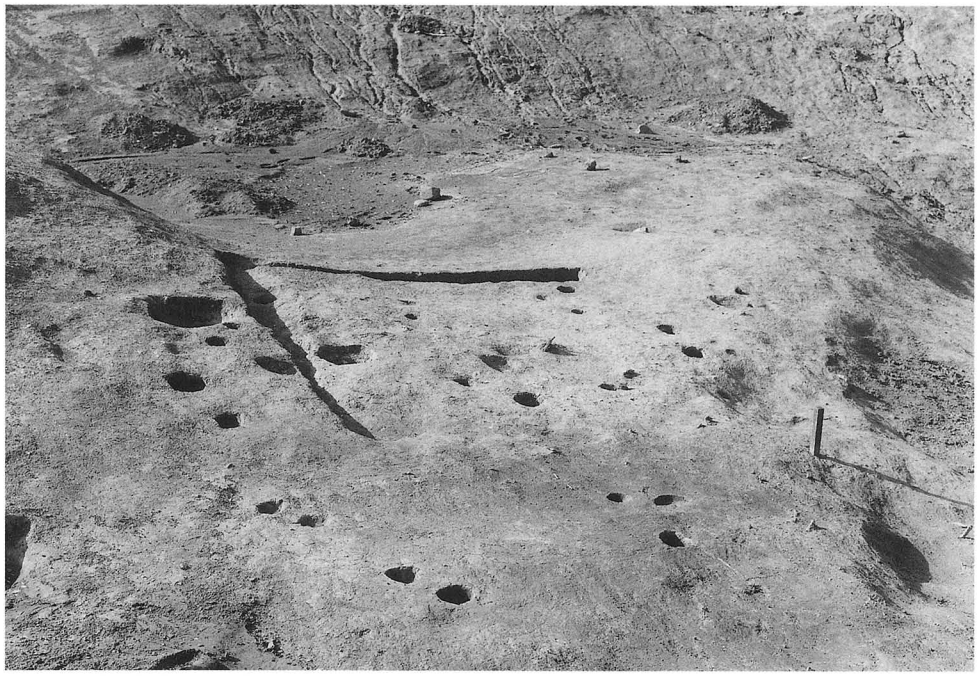


SD－01（南西より）



SB－35（東より）

SB－34（西より）



SB－36（東より）

SB－37（北西より）

加工段 3（東より）